語り継ぐ１７

～「未」経験を言い訳にしない
「未」来への語り継ぎ～

兵庫県立舞子高等学校
環境防災科３年

題　名	名　前	頁
被災と未災のはざまで	青　木　翔　佑	1 ～
自分らしい防災のあり方	有　賀　芽　依	5 ～
命をつなぐ	石　野　　遥	9 ～
被災者から未災者へ。未災者から未災者へ。	磯　野　朋　花	13 ～
「今」を生きる	岩　根　太　陽	17 ～
私の「使命」	戎　居　弥友子	21 ～
これからを生きるひとへ	大　澤　太　希	25 ～
未来に繋ぐ	片　山　優　斗	29 ～
後世への語り継ぎ	河　合　朱　登	33 ～
繋げる	桑　田　瑞　葵	37 ～
私たちが今できること	河　野　凌　也	41 ～
私たちの使命	古賀野　琢　翔	45 ～
つなぐ	小　林　和　陽	49 ～
I want to protect my country	坂　本　　迅	53 ～
語り継ぐ。	坂　山　優　斗	57 ～
かたりつなぐ	澤　田　幸　志	61 ～
私たちの課題	高　橋　綾　香	65 ～
被害の大小ではない	竹　中　歩　香	69 ～
未来を守るために	竹　野　克　海	73 ～
あの日を未来へ	竹　山　美　羽	77 ～
“震災未経験者”が語り継ぐ	田　中　颯　馬	81 ～
あの日限りを防ぐ語り継ぎ	出　井　和　翔	85 ～
「きっかけ」が繋いでくれたこと	戸　澤　幸　咲	89 ～
未災者から未災者へ語り継ぐ	長　友　和　希	93 ～
語り継ぐ	名　取　彩　乃	97 ～
「 繋ぐ 」	西　村　大　空	101 ～
「かたりつぐ」	元　　みるう	105 ～
Ne m’oubliez pas	平　井　志　歩	109 ～
教訓から学ぶこと	平　井　涼　賀	113 ～
被災地と向き合う	藤　井　大　地	117 ～
記憶	藤　澤　　倖	121 ～
風化の意味	前　川　大　樹	125 ～
過去の人々の想いを未来へつなげる	前　林　亮　香	129 ～
未来に語り継ぐ	松　岡　紗　輝	133 ～
未来のあなたのために	松　原　陽　向	137 ～
「過去」と「未来」を繋ぐ	宮　本　莉　沙	141 ～
語り継ぐ	山　川　小次郎	145 ～
備えを大切に　～防災・減災のためにできること～	吉　川　哲　矢	149 ～

被災と未災のはざまで

青木　翔佑

１　はじめに

私は阪神・淡路大震災が発生した７年後に神戸で生まれた。つまり震災を経験していない。また、父の仕事の関係で私は５歳まで神戸には居らず、震災当時両親は長崎に居た為、震災の話を聞く機会もなかった。私が震災を知るきっかけになったのは小学２年生の夏休みに人と防災未来センターを訪れた時のこと。1.17 シアターや震災当時の写真や映像を視て、とても大きな衝撃を受けた。さらにその数か月後に発生した東日本大震災の影響もあり、私は災害に興味を持つようになった。震災当時神戸に住んでいた祖父母や伯母にも震災の話を何度も聞こうとしたが、「うちはそんなに被害が大きくなかったから」と遠慮して今まで詳しく話してくれず、今回の「語り継ぐ」を機にようやく詳しく話を聞くことができた。幸い祖父母と伯母は自宅が倒壊した、身近な人を失ったなどの大きな被害にはあってなかった。しかし、その話には語り継がなければならない確かな“教訓”と“おもい”があった。さらに今回、震災当時神戸に居なかった母にも話を聞くことにした。被災地の視点だけではなく、被災地に家族がいる未災地の視点から“不安”や“恐怖”も語り継ぐべきだと考えたからだ。この語り継ぐを読んでくれた震災を経験していない・知らない貴方が、阪神・淡路大震災やこれからの防災・減災のことを少しでも考えてもらえるのであれば、幸いである。

２　阪神・淡路大震災概要

災害名　阪神・淡路大震災
地震名　平成７年兵庫県南部地震
発生日時　1995 年（平成７年）１月 17 日午前５時 46 分 51.8 秒
震源　淡路島北部明石海峡（東経 135 度　北緯 34 度）
震源の深さ　16 ㎞
マグニチュード　7.3
最大震度　7
死者　6434 人　行方不明者　３人　負傷者　43729 人
家屋全壊　104906 棟　半壊　144274 棟　全焼 7036 棟
被害総額　９兆 9268 億円

六甲・淡路島断層帯で発生した横ずれ型の内陸地震。この地震では淡路島に長さ 10 ㎞の野島断層が出現し、右横ずれ最大 2.1m、南東側上がり 1.4mのずれが生じた。地震の揺れを感じた範囲は九州から関東にまで及び、淡路島の一部、神戸、芦屋、西宮、宝塚にかけての地域で最大震度７（家屋倒壊率 30％以上）を観測。直接死の主な死因は家屋の倒壊や家具の転倒・転落による圧死で建物の一階で寝ていた高齢者や安く耐震性の低い下宿に住んでいた大学生の犠牲が多かった。昭和 30 年以前の建物での倒壊が多く、昭和 50 年以降での被害が少なかったことから、全ての建物が 1981 年の新耐震基準法に適合して造られていたら直接死の死者は 200 人～500 人程であったと言われている。また、地震に強いとされていた RC 造の建物では中層ビルで中間階が押しつぶされる被害（パンケーキクラッシュ）が目立った。直接死以外にも病院や避難所、仮設住宅で亡くなる震災関連死や建物の倒壊が顕著であった。

東灘区・灘区・長田区・須磨区を中心に火災が多く発生。出火の原因の一部は電気の復旧による通電による家電のショート・電気ストーブ・熱帯魚のヒーター等による通電火災であったといわれる。

電気・ガス・水道・電話などのライフラインも大きな被害を受け、全面復旧に一番早い電気が６日、一番遅いガスは約４か月かかった。

交通は、新幹線・JR 東海道線・阪急・阪神・神戸新交通・神戸高速・神戸市営地下鉄などが寸断。新幹線や私鉄の高架や高速道路の落下が多く特に阪神高速湾岸線では深江入口付近で 635mにわたって横倒しになり、日本の高架は大丈夫だという安全神話が崩壊した。神戸港では液状化現象による被害が発生した。

また、復興の段階ではハード優先で行われた復興政策により、元々顕在していた地域コミュニティが分断されたことによる孤独死などの復興災害が発生した。この地震を機に、地震防災対策特別措置法や被災者生活再建支援法の制定・施行、政府に地震調査研究推進本部や警察に広域緊急援助隊などの発

足、また救命トリアージの誕生やボランティアが広まった。

＜日本の地震地図決定版　気象庁兵庫県南部地震調査報告　ほか＞

３　阪神・淡路大震災体験談

（１）伯母

「ぐるーん、ぐるーんって、ベッドごと揺らされている感じ。すごく長く感じた。」

震災当時、須磨区の妙法寺で祖父・祖母と３人で住んでいた伯母は横に回されるような激しい揺れで目が覚めた。揺れがおさまり部屋から出ると廊下の防火扉が閉まっており、揺れの激しさを物語っていた。幸い、防火扉はすぐ開き、特に壊れたりした物もなく全員無事だった。しかし電気・水道などのライフラインは全てストップ。「仕事に行かないといけない」と父親は大阪の仕事場へ向かおうとしたが、地下鉄が止まっており断念した。外が明るくなってきて、ふと窓の外を見ると南側の山と山の間の向こうから不気味な黒い煙が上がっていた。最初は何なのか分からなかったがそのあとすぐに電気が復旧して、テレビをつけた時にその正体を知った。長田・須磨の沿岸の火災の黒煙であった。その後食糧品や水をスーパーに買いに行ったものの全て売り切れていた。水が無いのが一番困った。飲み水もそうだしトイレ用の水が無いのも困った。しばらくマンションの水槽の水や近所の湧水を貰ってしのいだ。夜になっても横になって寝ることができなかった。余震が怖く、夜は普段着と靴下で毛布に包まって座り、いつでも逃げられるようにして寝ようとしたが恐怖で寝られなかった。発災から２～３日経って、父親が勤めている銀行の大阪にある社宅に避難させてもらうことになり、トランクルームのドアが閉まらないほどの荷物をセダンに乗せて神戸から脱出した。ところどころ不通の道路もあったため、山道を超えて大阪まで脱出した。その山道は普段は車の通らないような道幅ギリギリの道であったうえ、運転していた父親は元々運転が得意ではなかった為、とても怖かった。

恐怖の山越えを乗り切って大阪に着いて驚いた。大阪の人々は皆普通に生活をしていた。みんな何事もなかったように普通に生活を営んでいた。神戸は水すら無いあんな孤立状態なのに…。大阪に避難してからは、平日は仕事に行き、週末は家の様子を見に神戸に戻る生活をしていた。当時職場は大阪で、ピアノ教室の講師として働き始めて１年も経ってない頃だった。週末、電車が復旧していけるところまで行き、そこからは代替のバスが運行していたが、２～３時間ほど待たなくてはならず、地下鉄に乗れる三宮までまだ壊れたままの瓦礫の街を歩いていった。そんな生活が３～４か月程続き、電車が完全に復旧してから神戸にもどった。震災を振り返ると自分たちは本当に運がよかったと思う。沿岸の地域の方々のように自宅が倒壊することもなかったし、大阪に避難できた為、避難所でしんどい思いをすることもなかった。職場は大阪にあり、仕事ができなくなることもなかった。職場の方々のほとんどは大阪などの被災地以外のところに住んでいた。ただ営業課に被災された方が１人おり、その方は自宅が倒壊し数千万円のローンだけが残ったことを知ったときは、本当に自分たちはまだましだったと思った。母が長崎から春休みを利用して帰ってきたときは姉妹水入らずでバッティングセンターに遊びに行ったり、家族全員で初めてのカラオケに行ける程の余裕もあった。本当に自分達は運が良かった。

この震災を経て、「人間いつどうなってもおかしくない」と初めて感じた。普通に会っていた人と突然会えなくなる、今ある物は当然なものではない。その時その時を大事に生きないといけないと思った。この思いから、今も人と別れるときは仲たがいした状態で別れないように意識している。

（２）祖父母

当時祖父は朝５時に起き、６時には大阪にある職場の銀行に向かう生活をしていた。吹田の社宅から引っ越してきてまだ１年も経っておらず、神戸での生活に慣れてきたころだった。その日もいつものように祖母と出社の用意をしていた。祖母がハンカチを祖父に渡そうとしたその時。「ドーン！」突然、物凄い揺れに襲われた。２人は互いの腕をつかみ合い、祖母はもう片方の腕でタンスをつかみ、激しい揺れで転ばないように耐えた。高さがなく、ずっしりと重いタンスであった為、あの激しい揺れでもビクともしなかった。タンスの上に飾っていたアイヌの木彫りの人形が祖父の腕に落ちてきたが幸い軽いものであった為、怪我はなかった。揺れがおさまった後も、何が何だか解らずしばらく呆然としていた。別室で伯母が寝ていることを思い出し、安否を確認しようと廊下に出ると防火扉が閉まっていた。防火扉を開けると部屋から「おかーさーん」とのっそり伯母が出てきた。伯母が寝ていた部屋の壁紙が斜めにビリビリに破れていた他、結婚祝いで友人から貰った花瓶が割れる被害が出た。だが幸いにも食器棚にストッパーを施していて食器類が落ちたり壊れたりすることはなかった上、テレビ等の電化製品や家具が倒れたりすることもなく、被害は壁紙と花瓶、それと祖父の腕に突撃してきたアイヌの木彫りの人形だけだった。しかし、同じ棟のマンションの上の階に住んでいたご近所の方は、テレビが吹っ飛んだりピアノが移

動するなど上の階に行くほど被害が大きかった。祖父はこの日、絶対に出席しないといけない重要な会議があり、祖母と伯母の反対を押し切って職場へ向おうと家を飛び出した。「こんな薄情者とはこれ以上一緒にはいられない！」祖母はこの時密かに離婚を決意した。しかし、地下鉄が完全に止まってしまっており、祖父は最寄り駅まで行った所で引き返して帰って来た為、幸い離婚の危機は免れた。祖父は帰る途中にマンションの敷地内にある公衆電話を使って職場に連絡した。家の固定電話はつながらなかったが、公衆電話はつなぐことができた。

祖父が帰ってきてから食べられるうちに食べておこうと朝食をとった。当時は真冬の１月、寒さで体力を奪われると考えたからだ。６時半～７時頃、明るくなってきてベランダに出てみると、灰が降っていた。南側の山と山の間の向こうを見ると不気味な黒い煙が上がっていた。すぐ後に電気が復旧し、テレビをつけるとその正体が長田・須磨の沿岸の火災の黒煙であることがわかった。祖父母は怖くなり、そのあとガスが点くかどうか確認することもできなかった。祖父は職場に行かなくてよくなったものの、会議にどうしても必要な書類を持っていた。その書類だけでも大阪に送れないかと考えた祖父は明石の支店まで行き、そこから FAX で大阪の本店まで書類を送ってもらうことにした。車で３人一緒に明石の支店まで向かったが途中何度も余震に襲われた。揺れとともに「ゴーッ」という地鳴りが聞こえてきて、それが本当に怖かった。港から船に乗せてもらって大阪に行けないかと途中で明石港に向かったが、港も被災していて船を出してもらうことは出来なかった。明石の支店から無事 FAX で書類を送ることができ、家に帰ると、水も食料もないことに気が付き、買い物に出かけた。当時、仮設の店舗で営業していた近くのコープに行くと物凄い数のお客さんが殺到していた。ごった返しの状態だったので取り敢えず水と少しの食料を買って家に戻り、落ち着いたところを見計らって備蓄用のものを買いに再びコープに向かうと全て売り切れてしまっていた。仕方なく、名谷のダイエーまで歩いて買い物に行ったが、行く途中にも何度も余震に襲われ、本当に命懸けの買い物だった。ダイエーでも物は少ししか買えなかったうえ、水がなくとても困った。給水車が来ることはほとんど無かったが、幸い近くに湧水があり、そこで水を分けてもらった。とにかく３人で行動することを常に心掛けて、夜は和室に３人で固まって寝た。寝ているときにも余震と地鳴りが容赦なく襲ってきて、とても怖かった。昼間は水や物を命懸けで探し回り、夜は余震に怯えながら寝る。そんな生活が２～３日程続いた後、祖父が勤めている銀行の大阪にある社宅に避難させて貰うことになった。炊飯器や布団等の身の回りのものをトランクルームに詰め込んで、当時飼っていたオカメインコのダイスケを籠ごと抱えて車に乗り、大阪へ向かった。三条道路を通り、山道を超え、普段は有料の新神戸の道路を無料で通してもらい、７～８時間かけて神戸を脱出した。

大阪吹田の社宅に避難してすぐ、同じ社宅の人がこたつを貸してくれた。「うちには２つあるから使ってください。」とても有難かった。その他にも祖父の大阪住んでいる同僚が大量にタオルを貸してくれたり、避難してすぐの頃は冷蔵庫が無かった為、近くのスーパーの魚鮮コーナーで冷蔵用の氷を貰おうと店員さんに声をかけて経緯を話すと「どうぞ、どうぞ！」と大量の氷を提供してくれた。ものだけでは無く、「大変やったなぁ」と知らないが声をかけてくれたりもした。祖父の義兄弟である“大津のおじさん”は滋賀から車で駆けつけ、小型の冷蔵庫を貸してくれた。祖母の友達は洗濯機を貸してくれた。色んな人が本当に親切にしてくれた。「日本人って、優しいなぁ…」心からそう思った。祖父、伯母共に職場が大阪だった為、平日は大阪で仕事をして、週末は家の状態を確認する為に神戸に戻る生活を、交通が復旧する２～３か月の間続けた。週末、電車が復旧していけるところまで行き、そこからは代替のバスが運行していたが、２～３時間ほど待たなくてはならず、地下鉄に乗れる三宮までまだ壊れたままの瓦礫の街を歩いていった。歩いていくと途中避難所で炊き出しの列に並び、豚汁をもらったこともあった。今、あの時のことを思い出すともう遠い昔の様に感じる。当時のことは忘れていることのほうが多い。あの震災の直後は地震に対して少し敏感になっていたが、今は災害に対する意識は大分薄れてしまった。毎年、1.17 の日になると震災当時の記憶に反省させられる。災害時にどうすればいいのか学ばなければ、常に備えをしておかなければとは思うものの、歳もとってしまい動けずにいる。今祖父母が住んでいるマンションには約 90 世帯の住民が住んでいるが交流は少ない。若い人たちがもっと防災の意識をもって、何をしなければならないのか高齢者と一緒に今回の新型コロナウイルスの事も含めて防災について話し合い、活動してもらいたい。

（３）母

「街が青かった。」

当時長崎の大学に通っていた母は震災当日、大学の友人からの電話で目が覚めた。「神戸の方、大変なことになってるけど、実家大丈夫？」テレビをつけるとそこには神戸の惨状が写っていた。「え？」自分の目を疑った。すぐに実家に何度も電話をかけるが繋がらない。しばらく家で震災のニュースを視てい

ると、電話がかかってきた。父親からであった。全員無事と解り、取り敢えず大学に向かった。大学に行くと関西出身の人の中には来ていない人もちらほらいた。震災の話をする人はいなかった。身内を亡くしている人がいるかもしれないと考えると怖くて話題にするのは誰もが気がひけた。家の固定電話より公衆電話の方が繋がり易く、そこから電話をかけていた。繋がり易いとはいえ、それでも５回に１回繋がるかどうか。１回繋がってその次にまた繋がるまでに時間がかかった。取り敢えず安否は確認できたものの、刻一刻と状況がかわる被災地のニュースを視ると、今まさに火災や余震に巻き込まれたりしているのではないか、という恐怖でいっぱいだった。震災当日は一日中テレビをつけていた。しかし実家は私が大学に入学してから神戸に引っ越したため、神戸の土地勘がなく、ニュースで「長田で火災が…」といった報道を聞いても神戸のどの辺りのことなのか解らなかったし、情報も少なく、震災当日は不安で一杯だった。翌日からは情報も入るようになり、電話も繋がるようになってきていた。すると震災は次第に他人事になっていった。大学が被災地に家族が住んでいる学生に学費免除を行っていたが、神戸に引っ越した事を届けていなかったため、学費免除を受けられなかった。春休みを利用して帰ろうとしたが、新幹線が使えず仕方なく飛行機で帰った。伊丹空港に着陸するときに外を見ると、街が青かった。屋根にかけてあるブルーシートの色だった。実家まで空港から本来なら電車で帰れたのだが、まだ復旧していない箇所も多く、電車やバスを乗り継いでいつもより時間がかかった。そんな交通状況だったため、家族の通勤のため大阪にある父親の会社の社宅に平日は避難して、週末家に戻る生活だった。もともと大阪に住んでいたので、知り合いや親戚が生活に必要な物資を持ってきてくれて、ありがたかった。

４　話を聞いて

話を聞いた際、４人とも最初は口を揃えて「震災のことは本当にもう全然覚えてないけど…いいのかな」と言っていたが、いざ話始めるとあれもこれもと話が止まらなくなる程の思いが印象に残った。今回、新型コロナウイルスの影響によって伯母と祖父母は電話で話を聞いたのだが、出来れば対面で話を聞きたかったと強く思った。前述したように、私は今まで祖父母や伯母、両親から阪神・淡路大震災の被災体験について聞いたことが無く、今回の話を聞いて初めて知ったことも多かった。大した被害もなかったと聞いていたこともあってか、予想以上に壮絶な話が多くとても衝撃をうけた。３年前に急逝した父にも震災の時の話を聞きたかったと強く思った。この４人の話には“教訓”と“問い”が潜んでいた。「非常時の水の大切さ」「隣合った被災地と未災地とのギャップ」「被災地に家族を残してまで仕事に行く必要があったか」「遠く離れた未災地での“恐怖・不安”そして“他人事化”」「人はいつどうなってもおかしくない」「人の温かさ・やさしさ」‥‥。きりがない程の多くの“教訓”と“問い”を孕んでいる。これらの教訓を掬い取り、伝え、防災・減災に活かしていくことが私たちの使命だと改めて強く思わされた。

５　災害多発時代を生きる貴方に…

我々は災害多発時代といっても差支えのない時代に生きている。阪神・淡路大震災以降日本は、新潟中越・新潟中越沖地震、熊本地震、北海道胆振東部地震など多くの内陸型地震に見舞われ、10 年前には観測史上最大の海溝型地震である東日本大震災も発生し、多くの犠牲者が出た。地震に限ったことではなく、地球温暖化などの影響によって気象災害が激化し、西日本豪雨や令和元年台風 19 号、令和２年７月豪雨など様々な災害が発生し、減少傾向にあった風水害での犠牲者の数はここ数年増加傾向にある。さらに今後、南海トラフ巨大地震や首都直下型地震をはじめ、大阪や福岡、根室沖など全国で地震の発生するリスクが高い状態にある。また前述したように、地球温暖化等によって気象災害は今後も激化するだろう。ハザードの激化だけではなく、災害のリスクが高い大阪や東京などへの人口・経済の過密や高齢化社会、人と人とのつながりの弱体化など災害を深刻化させる我々の社会の脆弱性も多く顕在している。災害は“他人事”ではなく“我がこと”として一人一人がとらえなくてはならないフェーズに既に我々はいるのである。阪神・淡路大震災をはじめ、災害は多くの“教訓”と“問い”を遺していった。それらを我々一人一人が“我がこと”として受け止め、考えて、行動することで今後の災害の被害は大きく変えることが出来る。少し綺麗ごとかもしれないが、私はそう信じている。この“語り継ぐ”を読んでくれた貴方が阪神・淡路大震災の“教訓”と“問い”を受け止め、考え、行動することを願い、ここで筆を置くこととする。

自分らしい防災のあり方

有賀　芽依

１　はじめに

1995 年、阪神・淡路大震災発生。私はあの震災から８年後に生まれた。直接自分が被害を受けたわけではない。いま神戸に住む人のおよそ半数近くが震災を経験していないという。少しずつ、でも着実に進む風化を防ぐために、私たちがあとに伝えていく必要がある。

私たちは未災者だ。これからどこかで被災者になる可能性は高い。どうやって対策を練るべきか考えなければならない。そこで私は、阪神・淡路大震災を経験した父から当時の様子を聞いた。

２　阪神・淡路大震災の概要

災害名：阪神・淡路大震災
地震名：平成７年兵庫県南部地震
発生日時：1995 年１月 17 日５時 46 分
震源地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分)、深さ 16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
人的被害：死者 6,434 名
　　行方不明者３名
　　負傷者 43,792 名
物的被害：住家の全壊・半壊・一部損害　計 639,686 棟
　　（うち、全壊 104,906 棟、186,175 世帯
　　非住家被害　42,496 棟

内閣府防災情報ページ　阪神・淡路大震災教訓情報資料集・
阪神・淡路大震災について（確定報）平成 18 年５月 19 日消防庁より引用

阪神・淡路大震災発生後、全国から多くのボランティアが被災地に集まった。多いときで１日２万人が活動し、被災者を支援するボランティア団体やＮＰＯ法人が多く生まれるきっかけとなった。このことから、阪神・淡路大震災が発生した 1995 年は「ボランティア元年」と呼ばれる。

（神戸新聞ＮＥＸＴ）

３　父の話

（１）地震発生

父は当時、垂水区に住んでおり、自宅の２階にある自室で眠っているときに被災した。激しい揺れと音で目を覚ました。揺れのなか、机の上に置いてあったブラウン管のパソコンモニターが頭の近くに飛んできた。びっくりした。キャスターのついた椅子がコロコロと動いていた。これまでには経験したことのない異常事態に頭が真っ白になった。揺れが収まったあと、急いで家族の様子を確認しに１階へ降りた。

（２）地震発生直後

父の母（以下、祖母）の様子を確認しに行った。祖母の近くに大きなタンスが倒れかかっていたが、祖母自身の上には何も落下物はなく、怪我はなかった。外に出ると、近所の人たちも外に出てきていた。自分の家を含めた近所一帯の家の瓦は落ちて割れていて、あたりは埃が舞ってぼやけており、咳が出た。何が起こったのか把握するため、情報を仕入れようとテレビをつけようとしても電気はすでに止まっており、電源はつかなかった。ガスはプロパンガスのため影響はなかった。水道はまだ大丈夫だったので瓦とともに屋根から落ちてきた辺りの埃や砂を片付けようと水を流して掃除をしたが、水もじきに止まってしまい、掃除は途中までとなった。その後、車のエンジンをかけ、中についているテレビから情報収集をした。そのとき報道で目にしたのが、阪神高速道路が倒れているあの場面だったという。これまで高速道路は丈夫で絶対に倒れないと思っていたため背筋が凍った。とんでもないことが起こっている。

（３）当日のその後の動き

父は、とりあえずそのまま会社に行こうとしていた。自転車でいつも通勤に利用している駅まで移動

したが、ダイヤは止まっていた。地震の揺れによって線路が曲がって運行できなくなってしまっていたからだ。会社に電話で通勤できない旨を説明し、出勤するなとの指示を受けたため、その後は自宅待機となった。

４　話を聞いて

小学校の防災学習の機会に一度だけ聞いたことのある父の話をより詳しく教えてくれた。揺れの時の様子は知っていたが、ライフラインについて聞いたのは初めてで、父の具体的な当時の状況を想像することができた。

電気がすぐに止まったと話していて感じたのが、今私たちが住んでいる家がオール電化であることだ。当時の父の家はガスを使用していたが、今の家では電気が止まってしまうと料理で火を使うことはできないし、お風呂に入ることもできない。しかし私の家庭では電気が復旧するまでのあいだを補えるような備えを何も準備していない。現在、問題となっている新型コロナウイルスのような感染症が大流行し、自宅避難を余儀なくしなければならなくなることも想定に入れ、家の中の備えをしなければならないと考える。父の経験を聞くことで、現状の私たちの家庭の防災対策に対する課題に気付くことができ、有意義であったと感じる。また、大変な思いをした経験について話してくれた父に感謝する。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私がこの学科を知ったのは中学２年生のトライやるウィークでお世話になった垂水警察署の方のお話がきっかけだ。当時、警察官になりたかった私はどのような学科のある高校で学べばよいかわからず、高校選びに迷っていた。トライやるウィークの担当の警察官の方に質問したところ、紹介された案のひとつに環境防災科がはいっていた。その警察官の方のお話のなかで様々な経験ができること、本物の警察官の講義が受けられることを聞き、興味を惹かれ入学することを決意した。

また、オープンハイスクールに参加しているとき、トライやるウィークで一緒だった他校の友人と偶然出会ったこともきっかけだ。志望学科が同じでお互いに頑張ろうと励ましあえる関係を見つけたことで入学しようという決意がより固くなった。

（２）環境防災科での学び

中学校までの防災学習を特に熱心に学んでいたわけではなかった私は、漠然と災害が来るかもしれないことへの恐怖感を持っていただけだった。対策はほとんど何もしていなかったし、ましてや自分の地域のハザードマップなんて一度も目にしたことがなかった。しかし、１年生の「災害と人間」で様々な職業の方の被災時のお話を聞いているうちに恐怖感だけでなく現状の自分の取り組みに危機感を持つようになった。自分の防災に対する姿勢をあらためるきっかけとなった。

２年生からは、より専門的な語句や知識、遺族の方のお話を聞いたり、非常用持ち出し袋の作成をしたりしたことで、現状の自分の対策への課題点を見つけ、具体的に備えを進めることができた。学ぶことで知識を増やすことも重要だが、実際に自分の命を守るための備えをして、実践する手前までを準備することができた「学び」が私のなかで一番大きいと感じる。

３年生では、この卒業研究や夢と防災の発表の製作をするにあたり、自分の考えを整理する機会となった。これから将来語り継ぐにあたって、より深い防災の知識を得るため、ますます学んでいきたいと感じる。

６　夢の変化とボランティア

警察官志望として２年生の途中まで重点を置いて学んできたが、私がいま就きたいのは子ども教育の分野の職業である。まるっきり別の職種に目標が変わったのは、あるボランティアがきっかけだ。

私は、南あわじ市の小学校への出前授業ボランティアに積極的に参加していた。もともと子どもと関わることは好きだったが、特に夢にするほどでもなかった。そんなときに、児童に私たちが環境防災科で学んでいることをよりわかりやすく伝えようと授業内容を工夫して、みんなに伝えたいことが伝わったときの達成感を味わった。これまで子ども教育に対する関心はあったものの、明確にその方面への職業に就きたいと思ってはいなかった。その後、地域の児童館へのボランティアにも２度参加させていただき、就きたい職業がはっきりと変わった。これまで目指してきた職業と興味が出た職業へのギャップに戸惑ったが、本当にやりたいことをよく考え、進路を変更することにした。

夢を変えるきっかけとなった南あわじ市の出前授業ボランティア、地域の児童館へのボランティアと

いう経験とそれぞれの素敵な児童の皆さんに感謝したい。

７　私の将来と防災

先ほど挙げたとおり、私は子ども教育の分野に就きたい。現時点で具体的には保育士になりたいと考えている。防災の伝え方についてだが、保育所に通う子どもたちの対象の年齢は０歳から満６歳である。そんな小さな子たちに対して、災害の知識について「語り継ぐ」ことはとても難しい。そこで私は災害の知識や教訓を教えたりするのではなく、防災の考え方に触れてもらえるような伝え方をしたいと思う。幼少期の経験はその後の人格形成に大きな影響を及ぼす。そこで、幼少期から防災を身近に感じてもらうことで、将来大人になったとき、少しでも防災に興味を持ってくれる人を増やしたい。興味を持ってくれる人が増えれば、災害対策をしっかり行う人が増え、災害時の被害が少なくなる可能性が高くなるはずだ。

具体的には、子どもの興味を引くようなもので伝えることが効果的と考える。私の考えている伝え方は、自分で絵本を作成したり体を動かしたりしながら、防災を伝えることだ。「防災ダック」がよい例だ。ボランティアや普段の授業で培った知識をもとに、子どもたちの感覚に訴えて防災を楽しいと感じてもらえたらと思う。

また、防災を伝える対象は子どもたちだけでない。子どもたちの保護者や地域の方も対象だと感じる。保育所内で保護者の方と保育士が直接お話をする機会は限られている。その限られた日常会話をする機会を使い、防災についてお話していきたい。また、子どもと保護者の方が家庭で防災に関する話題をお話できるように働きかけたい。家庭での防災に対する関心を向上させる機会も保育士には与えられている。

地域の方もそうだ。例に私の通っていた保育所を挙げる。私が通っていた保育所では、近所の老人ホームとのかかわりを大切にしていた。老人ホームに赴き、子ども・保育士・お年寄りの方がみんな仲良くおしゃべりをする。そのときにおしゃべりの一環として災害の備えについて一緒に話せたら素敵だと思う。みんなが防災について考える機会をつくることも大切だ。

知識、教訓、と大々的に話し合いを設けることも必要だが、私は日常の会話のなかに防災を溶けこませるお手伝いができたらよいと思う。

８　学んだこと

日本は災害大国だ。地形の特色から、地震は起こるし、津波が発生することもある。火山も噴火する。台風もよく直撃するため、土砂災害も、河川の氾濫も高潮もなんでも起こる。災害を引き起こす自然現象を「誘因」、社会にある脆弱性を「素因」という。それらをハード・ソフトの面から、また法整備などから対策をしていく。これは、私が環境防災科で災害についての知識として蓄えたものだ。

出前授業、避難訓練、東北訪問、語り部さんたちのお話、それらを通して考えたことや意見として人に発表できるようにまでなったのは、私が環境防災科で防災の経験として蓄えたものだ。知識として学んだことは、遠い将来忘れてしまうことがあるかもしれない。でも、経験や気付きとして入ってきたものは忘れることなくいつまでも記憶の中に残るはずだ。それは自分の一生の財産であるし、大切にしておくべきもの、語り継いでいくべきものである。講義などでせっかく私たちにご自身の経験を伝えてくださった方々のためにも語り継ぐことが大切だと感じた。

さて、今日では様々な地域で異常気象や災害が数えきれないほど多く発生している。加え、新型コロナウイルスの大流行の混乱で大変なことになっている。近々大きな地震が来るとも予測されている。このような環境下で、自分の命を守るための備えをしていなくてよいのだろうか。正しく学び、正しく恐れ、正しく備えよう。そんなとき、過去の事例を知ることが大切だ。そのためにも未災者ではあるが、私たち防災を学ぶ機会を得た者が伝えなければいけない。防災は一生学んでいかなければならない学問だ。私らしい防災のあり方を見つけていきたいと思う。

９　最後に

いま私が住んでいる地域は比較的若い世帯が多く、ほかの地域から移住してきた人も多いことから、防災に対する意識も低めである。コミュニティ内の関係も希薄だ。地域内での防災訓練を行っていると聞いたこともない。多くの方が亡くなり、怪我をし、生活が不自由になった阪神・淡路大震災の記憶が風化されていきつつある。震災当時をよく覚えている人が防災対策をしようと訴えかけてもすすんで協力しようとする人は少ないのではないだろうか。

「正しく学び、正しく恐れ、正しく備える」。これは以前講義にいらっしゃった、兵庫県立大学の室崎教授のお言葉だ。私はこの言葉を聞いたとき、現代のコミュニティにはこれが欠けていると感じた。若い世代の防災の対する意識が低いとよく耳にする。そんな若い世代の防災意識を高めるためには、同じく若い世代から防災を率先するリーダーを出すことが必要だと感じる。環境防災科で人より防災について学んだ私たちにはそれができると思う。学んだ知識・経験を人に伝えられるよう機会を探して積極的に話していこうと考えた。

命をつなぐ

石野　遥

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分。阪神・淡路大震災が発生した。私は大きな災害を経験したことがない。小中学生の頃から防災教育は受けていたが、どこか他人事として捉えていた。しかし、環境防災科に入り、被災体験を聞いたり、ボランティア活動に参加したりすることで、すべてを自分や家族などの大切な人に置き換えて考えるようになった。今、災害や防災、減災を他人事として考えている人や、震災を知らない人のために、私は語り継ぎたい。

２　阪神・淡路大震災当時の話

私は震災当時の様子を知るため、家族と友人の母にお話を聞いた。

（１）父の話

父は当時、高校３年生だった。神戸市からは電車で２時間ほどかかる場所に住んでおり、大きな被害を受けたわけではなかった。

揺れは震度３程だった。高校は臨時休校になった。普段、神戸方面から通っている生徒もおり、心配した。阪神高速道路が倒れている映像を見たとき、かなりの衝撃を受けた。初めて事の重大さに気が付き、それまではそこまで大きな被害が出ているとは思ってもいなかった。ただ、今ほど情報が伝わるのが早くはなかった当時、テレビで流れている映像や情報にはタイムラグがあったように思うと話していた。また、どんどん広がっていく火災の様子をテレビで見ていた時には、「なぜ消火活動が全然できていないのだろう」と感じ、今思えば当時の自分は無知だったと話す。

アルバイト先のガソリンスタンドでも震災の影響を感じた。販売していたポリ容器がすぐに売り切れた。ガソリンスタンドに入ってくる車はさまざまで、自分の車に積めるだけの燃料を積み、「どこまで行けるかわからんけど、じっとしていられへんから」と言って神戸へ支援に向かう人もいた。当時の父は、高校生ながらにも、それぞれが何とかしたいという思いを持ち、それぞれにできる支援をしようとしている社会の動きを感じたという。

あのような大きな地震が起こっても、被災地から離れたところにいる人は他人事としてしか捉えていなかったのではないかと父は言っていた。今は南海トラフ巨大地震などの被害想定もあり、備える意識が高まってきているかもしれない。しかし、当時はまだ、次は自分の身に起こるかもしれないという危機感も感じず、ただただ、大変なことが起こっているということを認識していただけだったと話していた。

（２）友人の母の話

私の中学生の頃の友人の母親のＳさんが、震災当時神戸市に住んでおり、お話を聞くことができた。

Ｓさんは、地震発生時は２段ベッドの上で寝ていた。遠くの方からゴーッという音が近づいてきて、激しい揺れが続いた。明るくなって部屋を見ると、Ｓさんの頭に頑丈な洋服掛けが倒れかけていた。Ｓさんの母親の頭の近くにはテレビが落ちていた。２人ともけがはなかったが、もう少し頭の位置がずれていたらと思うと怖くなった。

当時、Ｓさんの母親は店を経営していた。その店の様子を見に行こうと歩いていると、町の家の多くは潰れてしまっていた。店は潰れずに建っていたが、数時間後に商店街から火が出てしまい、アーケード伝いに次々と燃え広がり、店も焼けてしまった。残念なことに火を消すための水はなく、母親と２人、毛布にくるまって店が焼けていくのを見ていた。

この日、お腹が空いていると気が付いたのは夕方近くになったときだった。食べるものがなかったため、近所の方がくれた冷凍のパンを焼いて食べた。近所の方が車で食べ物の買い出しに行ってくれたが、道路は渋滞で動けず、やっとお店に着いても、ほとんど品物はなかったそうだ。

不思議なことに、Ｓさんの住んでいた久保町は地震後も電気を使うことができた。しかし、家の照明のほとんどが上からぶら下げるタイプのものだったため、全て落ちて壊れ、使えなかった。隣の家に避難させてもらい、暖かく過ごすことができた。

食事は、徐々に支給されるパンやお弁当、炊き出しなどできちんと取れるようになった。しかし、水は毎日もらいに行かなければならなかった。ガスも水道も使えるようになったのは地震からだいぶ経ってからで、お風呂に入れたのは地震から３～４日後だった。

Ｓさんの住むまちは区画整理が行われ、高いマンションやたくさんのお店ができた。しかし、人が減っ

てしまい、震災前の活気はなくなり閉まったままの店舗も多くなった。
Ｓさんの家族は全員けがもなく無事で、住む家もあったのは幸せな事だった。しかし、お店のお客様や知り合いが亡くなられている。よくかわいがってもらっていた近所のお兄さんは、先行きが不安だったのか自殺してしまった。Ｓさんの兄は消防士で、何日も災害現場に行き、帰ってきてから寝ているときにはひどくうなされていた。助けたくても助けられなかった人、いろんな状態をたくさん見てきたのだろう。
明日、何が起こるか誰にもわからない。１日１日を大切に過ごしたいし、みなさんにもそうやって過ごしてほしいと、Ｓさんは語った。

３　話を聞いて感じたこと

まず思ったのは、同じ兵庫県に住んでいても感じたことや経験したことが全く違うということだ。
当時高校３年生だったという父は、今の私と同じ年齢であり、自分と重ねて考えることもできた。もし今自分のいる場所で災害が発生したらどうするか、また父のように、自分の居場所とは離れた場所で災害が発生したら、何を思い、どんな行動を取るだろうかと考えるようになった。父から聞いた話は、被災体験ではなく、被災地の外から何を感じたか、何を経験したか、何を学んだのかということだった。テレビの映像などから情報を得て衝撃を受け、何が起こっているのかを知り、アルバイトをしながら社会の動きを感じた。被災した、とは言わないけれど、１人の高校生としてそういった経験は忘れられないのではないかと思う。
Ｓさんの話を聞いて私は涙が止まらなかった。私は神戸市には住んでおらず、防災教育は小中学校で受けてきたものの、どこか他人事で、身近な人から詳しい当時の様子を聞いたこともほとんどなかった。友人の母から話を聞くことで、「私の身近な人の中にこんな経験をした人がいるなんて…」と、衝撃を受けた。
目の前でお店が焼けていくこと、親しくしていた人が亡くなってしまったこと、消防士であるお兄さんがうなされていたこと、想像するだけで耐えられない。どれだけ悲しく辛く悔しく理不尽さを感じただろう。震災で直接亡くならなくても、先行きが不安で自ら命を断ってしまう人もいたと知り、災害は将来の夢や希望までも奪っていってしまうと思った。また、助けたくても助けられなかった人を見てきたのではないかということを聞いた時には、私の将来の夢である警察官として働く時のことを想像した。人の役に立ちたい、悲しみを感じる人を減らしたい、命を救いたい、という思いで現場に行ったとしても、思い通りに行かず役目を果たせなかったと感じることが有りうるのだと思うと、自分には何ができるのだろうと考えてしまう。それでも、救える命を確実に救うのだという気持ちで、警察官として働きたいという思いが強くなった。話をしてくださったときには、きっとあの日からの体験を思い出して悲しく辛い気持ちが込み上げてきていたのではないかと思う。それでも語ってくださったことに感謝の気持ちでいっぱいだ。そして、１日１日を大切に過ごしていきたい。

４　環境防災科に入って

（１） 東北訪問

私は１年生と２年生の夏休みに、東北訪問に参加した。神戸を出発してバスで約 14 時間、宮城県東松島市のあおい地区を訪問した。バス内研修もあり、他校の防災ジュニアリーダーの生徒と関わることが多く、コミュニケーションを取ることの大切さにも気づくことができた。人の意見を聞くことで、自分では考えつかなかったことを取り入れることができ、視野が広がっていくことを実感した。研修では大川小学校を訪問し、そこに通っていた娘さんを震災によって亡くされた佐藤さんよりお話を聞いた。私は、「大川小学校は特別な場所ではなく、誰かの母校であり、通っている小学校であり、友達や先生と会える場所であり学びの場所であった。救えた命、救いたかった命、でも救えなかった命があった場所だ」ということを聞いた。そのとき私は「多くの子どもたちの命が失われた場所だ」という表面的なことしか理解できていなかったと気が付いた。また、震災当時小学生や中学生だった方からお話を聞くこともできた。年齢が近いということもあり、印象深かった。語り部さんがお話の途中でフラッシュバックを起こしてしまう様子を見た時、何が起こっているのか理解できていない自分がいた。それだけ辛く怖い思いをしたことを私たちに伝えようとしていたのだと思い、学んだことを伝えていこうと思った。
宿泊させていただいた、あおい地区の方々との交流の機会もあった。焼きそば作りや流しそうめんをしながらたくさん話をした。「神戸から来てくれて嬉しい」と言われたときは「来ることに意味があるのだ」と思えた。そう言っていただけたことで、「ずっと東北とかかわりを持ち続けたい」と思った。それだけ、

東北の方々の心は温かかった。
東北訪問を通じて、亡くなられた方々の命が無駄にならないような生き方をしたいと思った。それと同時に、人々の温かさや、つながりと出会いの大切さを学んだ。

（２）ボランティア活動

私はこの３年間でたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。どのボランティア活動においても、「させていただく」という謙虚な気持ちを忘れず、行う側も受け入れる側も気持ちの良い関わりができるよう、相手の気持ちを考えることが大切だと学んだ。そのためには、参加させていただくボランティアについて調べたり、準備を行ったり、活動後には反省すべき点を明確にしておくことも重要であると感じた。１回だけ参加して終わりではなく、継続的に参加することで相手との信頼関係も深まり、その後の活動の幅も広がるのではないかと思った。また、チャンスはいくらでもあるわけではないため、自分から掴みにいかないといけないと思った。部活動や勉強で日々忙しい中、全てのボランティア活動やジュニアリーダーの活動に参加できるわけではない。そのため、チャンスが巡ってきたときに確実に学びの場を自分で掴んでいかないと、環境防災科という学科にいる意味が薄れてしまうと思った。せっかく恵まれた環境の中にいられるのだからそれを無駄にせず自分の力にしていくために動くべきだと思うようになった。また、ボランティア活動の中で「ありがとう。また来てね」など感謝の言葉をいただいたり、「頑張ってね」と励ましの言葉をかけていただいたりした。嬉しい気持ちでいっぱいになり、またボランティア活動に参加しようと思い、その中での人とのつながりを大事にしたいと感じた。

（３）３年間で得たこと

環境防災科では、大切なのは学力だけではないと実感した。人との関わり方、物事に対する姿勢や考え方、信頼関係、臨機応変に動ける力、生きていく力をつけられる場所だと思う。学力はとても大切だが、机に向かって勉強しているだけでは学べないことが、環境防災科の専門科目やボランティア活動、消防学校の体験入校、校外学習などを通して学べると思う。

そして、私は夢を持つことができた。高校に入学するまでは「人の役に立ちたい」という思いはあったものの、自分が何をしたいのかを考えていなかった。しかし、外部講師の方のお話や授業の中でさまざまな人の働きを知ることで、視野も広がり、どんな人になっていきたいかと考えられるようになった。高校生活を通して、ほとんどの人が将来何をしたいかを考えていたということに、私も良い影響を受け、目標に向かって頑張ることができたのだと思う。

５　夢と防災

（１）　将来の夢

私の将来の夢は警察官として働くことである。きっかけは、１年生の頃の「災害と人間」の授業で警察官の方から講義を受けたことである。その後興味を持って兵庫県警について調べると、阪神・淡路大震災当時の活動の様子や教訓を新人の警察官に語り継ぐという活動があることを知った。もともと、人の役に立てる仕事がしたいという思いがあった私は、環境防災科で学んだことを生かし、防災を広めていくことができる警察官になりたいと思うようになった。また、日々の授業を通して、命の大切さに改めて気が付いた。高校に入ってから、災害や事件、事故などで命を落とした人がいるというニュースを見ると、悲しみや怒りをより強く感じるようになった。そうしたことから、辛い思いをする人を減らしたい、人を救いたいという思いを持つようになり、目指すようになった。そして、今までお世話になってきた人たちに恩返しをしたい。

（２）　防災の広め方

私が警察官になった際は、地域に密着した活動をしたいと考えている。地域住民とのコミュニケーションを欠かさないことはもちろん、小中学校に出向いて防災を伝えたり、地域の防災訓練に参加したりしたい。地域住民と顔見知りの関係になっておくことで、災害時の救助活動や安否確認がしやすくなったり、地域の防災力が向上したりすると考える。また、小中学校で防災教育をすると、子どもたちが家に帰ってからそのことについて話をし、家族みんなに防災の意識が広がっていくと思う。同じように、地域の防災訓練に参加することで小さな子どもからお年寄りの方、障がいのある方にも広めていくことができると思う。実際に地域の防災訓練のボランティアに参加したときのことを覚えている。私は新聞スリッパの作り方を教えるブースを担当しており、聴覚障がいのある方と一緒に作成した。障がいのある方は災害弱者という言われ方をするが、自分で自分の命を守ろうという気持ちがあることに変わりはないと、そのとき感じた。また、小学校で防災の出前授業をしたこともある。言葉はわかりやすく簡単か、間違ったことを教えていないか、興味を持ってもらえる内容かなど、たくさんのことを考えて計画、実施を

した。このような経験を活かし、誰もが防災をすることを当たり前に思い、日常に防災があるという環境を作り出せるようにしていきたいと思っている。

また、災害発生時には、女性警察官の特徴である威圧感の少なさを生かして、避難者に寄り添い、相談に応じ不安を軽減させていきたい。普段から住民とコミュニケーションを取っていれば、お互いに声を掛け合いやすくなり、災害時にはそれが強みとなると考える。災害時の不安を少しでも軽減できるような働きをしたい。

６　最後に

私は、この「語り継ぐ」を執筆するにあたって、普段はしていなかった話を家族としたり、自分自身を振り返ったりすることができた。そして、語り継ぐことの大切さを実感した。同じ兵庫県に住んでいても、神戸や淡路から離れた場所に住んでいる人は 1995 年１月 17 日に大きな地震が起こったという表面的なことしか理解していないだろう。私も環境防災科に入るまではその程度の理解だった。そう考えると、もっと神戸や淡路から離れた場所に住んでいる人や他の都道府県の人にとって、１月 17 日は何でもない日かもしれない。その地域に住んでいる人や防災をしようという気持ちがある人がどんどん広めていかなければ、過去の災害はそのうち忘れ去られてしまうと思う。そうならないために、私たちのように防災を学び、過去の災害から得た教訓を次に生かそうとしている人が伝えていかなければならないのだと思った。ただ単に、「防災は大切だ」「非常用持ち出し袋を準備しよう」「家族で話し合っておこう」と呼びかけるだけであれば、防災を勉強していなくてもできると思う。だから、なぜ防災をするのか、なぜ家族で話し合っておくことが大切なのかを伝えていかないといけない。私が考える防災をする理由は、「自分と自分の大切な人を守るため」だ。震災で自分の命と家族や友人、親戚、近所の人など、失いたくない人たちを失わないように、防災を広めていきたい。

また、新型コロナウイルスの影響でいつもの生活ができなくなったことを経験したことから、災害と感染症は無関係ではないと思うようになった。あるはずだった部活動の最後の試合が中止になったり、学校生活が始まらなかったり、行事がなくなったり、自由に遊びに行くことができなくなったり、たくさんの人の命が失われたり、今までには想像もしていなかった生活になった。当たり前だと思っていたことが当たり前でなくなっていくとはこういったことなのだと実感した。そして、新型コロナウイルスは災害だと言えると思った。悲しい思いをした人がたくさんいて、やりたいこともできず、日々の生活も苦しくなった人がいる。自然災害のように家が倒れたり浸水被害に遭ったりしなくても、人々の心には傷ができたと思う。このような情勢だからこそ、災害と感染症について考え、新たな視点を持つことができた。

この３年間で学んだこと、感じたこと、人に伝えたいと思ったことを、今後、社会に出てからの生き方に反映させ、広い視野を持った、頼られるような人になっていきたい。そして、常に周りの人への感謝の気持ちを持って行動していこうと思う。

被災者から未災者へ。未災者から未災者へ。

磯野　朋花

１　はじめに

今から 26 年前の 1995 年１月 17 日午前５時 46 分に阪神・淡路大震災は発生した。私たちの住む神戸のまちは甚大な被害を受けた。当時、私たちはまだ生まれていない。あの震災を経験していない。これからも私たちのような世代は増え続け、風化し忘れられてしまう。だからこそ、この３年間で学んだことを語り継いでいかなければならない。被災者から未災者へ。未災者から未災者へ。つながりを止めてはならない。

２　阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震
発生日時：1995 年１月 17 日５時 46 分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16km
規模：マグニチュード 7.3
死者：6434 名
行方不明者：３名
負傷者：43792 名
水道断水：約 130 万戸（ピーク時）
ガス供給停止：約 86 万戸（ピーク時）
停電：約 260 万戸（ピーク時）
電話不通：30 万回線超（ピーク時）

「阪神・淡路大震災の概要－内閣府防災」

３　大叔父の話

私は当時神戸市役所に勤めていた大叔父から話を聞いた。

（１）震災当時

大叔父は名谷駅の近くに住んでいた。震災当時は食器棚が倒れ、片付けで１日が終わった。

大叔父は当時、神戸市役所港湾局で電気職を専門に働いており、震災翌日からは港の被害状況の確認、建物の電気設備の調査、関係会社からの電気復旧の依頼を受けて電力会社への復旧の申請業務などを行っていた。六甲アイランド、ポートアイランドの埋め立て地は全て液状化現象が起きていたと聞いた。

（２）自宅の様子

台所の食器棚が倒れ、はめ込みガラスが割れ、発災当時早朝で真っ暗だったため割れたガラスで足を怪我した家族もいた。給水車から水をもらいにポリタンクやバケツを持って、近くの小学校や中学校まで並びに行った。お風呂の浴槽に水を溜めておくことも大切だった。

私の母の実家は農家だった。大叔父は偶然震災前に帰省しており、その時、お米やお正月についた餅、実家で採れた野菜など持ち帰っていたので当分の間は食料に困ることはなかった。しかし、近所のお店はほとんど開いておらず、たまにコンビニやスーパーなどのお店が開いているのを見つけては入店するもの、食料品は全くなかった。2020 年の夏ごろまで、新型コロナウィルスの影響でマスクやアルコールが店頭に十分に無い状況と同じだと言っていた。震災後しばらくしてからは、休日に職場の中で行ける人が三木市などの被害の少なかったところへ遠出をして買い出しをしていた。

（３）通勤

震災後、１か月ほどは自転車で２号線を通って１時間ほどかけて通勤していた。最初の頃は一面焼け野原だった。道には瓦礫が散乱しており、まともに走れる状況ではなかった。初日、釘を踏んで途中でパンクしたため、通勤時のリュックには、帰るまでの余裕があるときにすぐ修理ができるようにパンク修理キットを入れるようにしていた。一度出勤したら、２～３日帰ることができないためカップ麺を２～３個持っていくのも忘れないようにしていた。みんな職場のイスにダンボールを敷いて、新聞紙をかぶって２～３日寝泊まりしていた。

（４）応急仮設住宅

震災から約１年３か月後、応急仮設住宅の担当になった。市内全域の応急仮設住宅の「排水が悪い」「結露をどうにかして」などの不具合の連絡が来たら確認しに行き、住宅メーカーに修理の依頼などをする技術担当になった。住宅だけにはとどまらず住宅近くの崖が崩れると連絡があれば、防護壁を作ることもあった。応急仮設住宅は市の財産ではなく、民間の企業（住宅メーカー）が提供しており、修理については住宅メーカーと相談しながら作業を進めていた。

（５）生かされていると思う教訓

・仮設住宅の寿命が３年から５年に伸びたこと
・日本国内で発生した災害に見舞金を出していること
・ノウハウを持っている人材を派遣するようになったこと

（６）今できること

今できることとして、自分の住んでいる地域の危険区域のマップやハザードマップを頭に入れて、いざという時のために、避難場所、避難所、家族での集合場所決める。そして、昔の地図と現在の地図を見比べて、現在本当に安全な場所はどこなのかを知っておくことが大事だと教わった。

４　お話を聞いて

今回大叔父から初めて阪神・淡路大震災のことについて聞いて、知らないことばかりで正直驚くことばかりだった。一番衝撃を受けたのは「もし在職中に同じような規模の地震が来たら辞めようと思っていた。」という言葉だ。阪神・淡路大震災が発生した当時は、神戸には地震は来ないと言われていたため地震の対策や他の災害に対する防災対策が、今ほどきちんとされていなかった。そのような中で、市役所の職員として働くのは想像ができないほど大変であったと思う。しかし、辞めようと思っていたぐらいしんどかったと聞いたとき、どれほど大変であったのか想像することができないほどだった。それほど、震災は人にもまちにもダメージを与えるのだと改めて気付かされた。また、大叔父の家族は「電話は本当に必要な人のために」とできるだけ使わないようにしていたと聞き、災害が起きている中でも人の温かい心は存在するのだということを知りとても胸が熱くなった。また、市役所職員だった大叔父からとてもいいことを聞いた。それはリスト作成のポイントだ。避難所運営を行う際はリストを作成しなければならない。そのリストには、[名前、生年月日、性別、家族構成、何に困っているのか、大人と子ども別々で必要なものは何か] このような項目を入れると、そのあとの動きがスムーズに進みやすくなると聞いた。もし新型コロナウィルスが流行している期間に、阪神・淡路大震災や東日本大震災のような大きな地震が発生した場合、避難所に行くと集団感染を防止するために重要である密閉・密集・密接の３密になり感染を避けることは難しくなる。ソーシャルディスタンスを含め、もし今災害が起きたら何が必要なのかもっと深く考えたり、家族と話し合ったりすることが大切なのだということに気付いた。また、私たちが日々学んでいることの大切さを改めて知ることができた。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私は中学３年生の頃、将来の夢も無く、行きたい高校も特に無かった。幸いなことに、それなりの成績はあったので進学先の選択肢は多かった。各校のオープンハイスクールにも積極的に参加したが２学期になっても行きたい高校が見つからなかった。しかし、将来何がしたいかと考えたときにどんな形であっても人の役に立つ仕事がしたいと強く思った。小学生の頃から、震災学習を受けてきたがその授業の度に体調が悪くなるほど、その手の話はとても苦手であった。そのような私がこの学科を目指した理由は、先にも述べたとおり、将来自分が働くとき人の役に立つ仕事がしたいということと、実は母も被災者であったということが大きく関係している。

（２）ボランティア活動

私は、この３年間でたくさんのボランティア活動に参加させていただいた。ボランティア活動に参加させていただいたことで、人とつながることの大切さ、様々な考え方を知る楽しさ、そして防災をすることの大切さを知り、人として大きく成長することができた。

どの活動も、環境防災科に入っていなければできなかったことである。

・募金活動
・地域の防災訓練、夏祭り
・全国ジュニアリーダー育成合宿

・東北訪問
・新潟県糸魚川訪問
・岡山県真備町訪問

（３）伝えたいこと

「率先して行動できる人になってほしい」ということだ。普段の生活の中で学生であれば教師が、社会人であれば上司が必ずいる。教師や上司は私たちに指示を出してくれる。しかし、災害時は自分１人で考え、判断して避難しなければならない。これは災害時だけではない。普段の生活の中で、目の前に困っているお年寄りの方や小さな子どもがいれば誰よりも早く手を差し伸べてほしい。普段から率先して行動ができていればどんなことが起きても実行に移すことができる。また、教師や上司は、いつでも正しいわけではないということを知ってほしい。教師や上司だって１人の人間であり、間違えることだってある。非常時ならなおさらだ。そして、そんな時こそ間違えることを恐れず自分の直感を信じて「自分の命は自分で守る」ために率先して行動できる人になってほしい。

６　将来の夢

私の将来の夢は診療放射線技師になることだ。診療放射線技師とは、レントゲンやMRI、CT、超音波検査などを行う専門の医療従事者のことだ。

今まで自分が医療従事者になろうとは全く考えていなかった。普段関わる医療従事者といえば小児科や眼科、整形外科などにいる医師や看護師だった。しかし、高校２年生の時に靭帯を損傷していつも行っている整形外科に行ったが、良くならなかったので紹介状をいただいて大きな病院で調べることになった。その時MRIを撮ることになり、そこでやってもらったことが、診察をする医師とは違ってレントゲンやMRI、CTを撮る専門の職業の方がいるのだということを初めて知った。その時は「こんな職業あるんやー。すごいなー。」と思うだけだった。しかし、祖父が病気になったことをきっかけによく病院に行くようになり、医療に携わる方の仕事を見ているうちに医療関係の仕事に少し興味が湧くようになった。もとから将来は人の役に立つ仕事がしたいと思っていた。診療放射線技師はたった１枚のレントゲンを撮ることで体の異常を見つけ、間接的ではあるが人の命を救うことができる。また、放射線治療を医師から任された場合は、実際に命を救うことができる。医師や看護師という職業よりも、医療には必要不可欠で縁の下の力持ちのような診療放射線技師という職業にとても魅力を感じ、その進路に進もうと考えている。

私の最大の目標は「DMAT」という災害医療派遣チームに入ることだ。DMATとは災害発生後48時間以内に現場へ急行し、災害医療のトレーニングを受けたスペシャリストたちが、最前線で災害医療に当たる医療チームのことだ。私はDMATに入り、災害現場へいち早く駆け付け災害が原因で亡くなる方をできる限り少なくしたい。災害医療では、チーム内で自分の役割を理解して動くことが何よりも大切だと考える。レントゲンやMRIを撮る装置は電気がないと動かすことができない。つまり、ライフラインがままならない環境である災害現場では放射線技師としての役割は無いに等しい。電気が通っているところであれば装置を使ってそれぞれの患者さんにあった検査をし、正確な診断をすることや、その検査結果をもとに最善の処置をすることが可能になる。しかし、先ほども書いたように災害現場でライフライン特に電気が通っていることはめったに無い。そのような中で、診療放射線技師に何ができるのか。それは、会話のできる軽症者の対応だ。医師や看護師は重傷者の対応に追われるため軽症者の対応は、医師や看護師以外のサポート役の調整員に求められる。日頃から培っている医療知識と経験は、災害医療現場では大きな能力となり、医師・看護師のサポート役として発揮することができる。だから私は、進歩し続ける医療の中で、災害医療現場で冷静な判断や行動ができるよう普段から勉強することを怠らず、日々の検査などでより高い技術を身につけて行き、１人でも多くの命を救うために全力を尽くしたいと思う。

７　最後に

今回、この「語り継ぐ」を書くことで、新たに知ることや、今までの学んできたことの復習、そしてこれから自分のしたいことが少しははっきりしてきたと思う。環境防災科に入学してから、何度も「なんでこの学科に入ろうと思ったのか、何がしたいのか」と分からなくなり、自分に問いかけても答えは出ず、ただ学校に行っているだけと感じるときも多かった。防災を学んでいても、自分にできることは限られている。「意味がない。普通科に行けばよかった。」と思うことも何度もあった。しかし、この「語り継ぐ」を書いていて、防災はどのような場面でも役に立つし、自分たちの学んできたことは決し

て無駄ではなく、どこでも、どのような形でも防災は広めることができると分かってきた。今後 30 年以内に確実に南海トラフ巨大地震や都市直下型地震が発生すると予測されている。過去の災害の教訓を生かさなければ１人でも多く生き残ることは不可能である。そのため、この「語り継ぐ」を通して冒頭でも書いたように「被災者から未災者へ。未災者から未災者へ。」語り継ぐことが大切だと知ってほしい。そして、知るだけではなく積極的に実行してほしいと思う。そのために、まずは私からこの「語り継ぐ」もその１つだが、日常会話の中に混ぜて話していきたいと思う。先のことはまだまだ分からないが、誰かの役立てる人間に必ずなりたいと思う。

「今」を生きる

岩根　太陽

１　はじめに

環境防災科という学科にいながらも、災害を経験された方々に比べれば、私は「災害」というものを詳しく語ることはできない。ましてや地震がどんなものなのか、どんな影響を自分にもたらすのか、経験したことのない私には鮮明にはわからない。阪神・淡路大震災から 26 年が経った。経験していなくても、自分なりの考えと、この学科で学んだことを訴えることはできる。伝え続けることはできる。両親から聞いた話や私が環境防災科で経験した話をもとに、語り継いでいく。

２　阪神・淡路大震災

発生日時	1995 年（平成７年） １月 17 日午前５時 46 分
震源地	淡路島北部
震源の深さ	16 ㎞
規模	マグニチュード 7.3
震度	７
死者	6434 名
住家被害	全壊　104,906 棟
	半壊　144,274 棟

（出典　内閣府防災）

３　両親の話

（１）父の話

当時の父は、社会人２年目であり、垂水区に在住していた。地震が起こった午前５時 46 分、自宅の２階で眠っていた父は尋常ではない揺れと棚からスピーカーが目の前に落ちてきたことに「地震が起こっている」と確信した。30 秒ほど揺れが続き、あたりでは柱がミシミシと割れる音が聞こえていた。部屋から飛び出し、家族の安否確認を行った。家族の無事を確認したのち、１階に降りた。玄関の小物が壊れ、水が漏れる音が聞こえていたが、家の中も外もそこまでひどい状況ではなかった。駅の状況を見に行くと、線路が波打っていた。父は、「ただ事ではない」、そう感じた。家に戻り、ふと窓を見ると、灰になった紙が空を舞っているのを見て、どこかで火事が起こっていると思った。しばらくするとテレビがつき、長田が大火事になっていることを知った。長田には、祖父が勤めている店があった。父は、店の様子を見に原付を走らせた。長田へ向かうにつれ、山が崩れ車線が土砂で埋まっていたり、マンションが傾いているのを見たりして、ますます背筋が凍った。鷹取駅の南側で大火事とともに、パジャマ姿で毛布を巻いて座り込んでいる人々を、父は今でも鮮明に覚えている。警察や消防に呼び止められながらもようやくたどり着き店を見つけると、店はすでに全壊であった。その夜は靴や服などを枕元に置いて寝るようにした。海の方向から「ゴー」というような音が聞こえ、余震が来るのがわかった。震災発生から数日後、大阪の会社へ向かうこととなった。4 時間かけて通勤した。それから大阪にワンルームマンションを借り、神戸の災害復旧の仕事をした。阪神・淡路大震災を経験して父は、助け合いの大切さを実感した。災害時、人はどうしても生きるために自分勝手になる。そのような状況でも、配給される水や食料を譲り合ったり、自宅の風呂場を貸しあったりする人の温かさが本当に大切だと感じた。

（２）父の話を聞いて

震災を経験した父の話には、とても重いものがあった。私が当たり前のように暮らしている今の神戸からは、考えられないほど悲惨な出来事であったのだと感じた。思い入れのある自分のお店が丸つぶれになってしまった祖父の気持ちや、ご友人やご家族を亡くされた方々の気持ちを考えると、すぐに立ち直れるようなことではないと感じた。そのような中で必要になるのはやはり、思いやりだ。大切な人や物を亡くせば、人は誰でも気が荒くなったり、生きる気力を無くしたりしてしまう。震災がきっかけで、子どもに虐待を繰り返したり、アルコール依存症になってしまったりして、人生を踏み外してしまう人もいる。そのような絶望の中でも協力し合い、助け合う力を人間は持っている。それは父の話から大いに学んだ。人を救えるのは人だけである。町が潰れ、たくさんの方々が犠牲になり、「もう生きていけない」と感じても、それでも誰かのために動こうとすることが、一番大切なのだとこの話から学んだ。そのため自分も、どんなことがあっても自分のために何かをするだけではなく、誰かのために貢献できる人間に

なりたいと感じた。

（３）母の話

当時の母は、専門学校に通う学生であった。父と出会う前で、祖父母と伯父の４人家族で奈良に在住していた。地震が発生した５時 46 分、奈良でも揺れが起こったため、修学旅行の出発日であり１階にて準備をしていた伯父と祖母は急いでテーブルの下に隠れた。２階で寝ていた母と祖父は、揺れが起こり飛び起きた。伯父は、修学旅行に行くため集合場所に向かおうとするも、電車が動いていないため、修学旅行先に向かうだけでその日は終わってしまった。母は学校へ行くことはできず、その日は地震のニュースをずっと見ていた。テレビには、倒壊している高速道路、１階が丸つぶれになっている建物、避難所でパニックになっている人々の映像を見て、驚くとともに、「神戸が大変なことになっているなあ」と、他人事にしていた。どうしようもないため、自分が動くことはなかった。そのような母が、神戸で震災を経験した父と出会い、震災の話をたくさん聞き、阪神・淡路大震災の悲惨さを知った。

（４）母の話を聞いて

今まで神戸にいる視点での震災の話を聞くことが多かったため、母の話はとても新鮮であった。母の話の中で、「他人事と思ってしまった」と聞いて、2011 年に起こった東日本大震災をテレビで見ていた自分を思い出した。自分もあの時、ただひたすらに傍観することしかできなかった。この話から、自分に直接関係ないかもしれないことに向き合うことの大切さを学んだ。母は、今自分の住んでいないところで災害が起こったら、何か自分ができることを探したいと言っていた。これは、ただテレビを眺めることしかできなかった過去の自分がいるからだと感じる。そのため自分も、誰かのために、なにかのために、ただ見るのではなく行動に移すことのできる人間になりたいと思う。

４　将来の夢

私は将来、小学校教員になりたいと考えている。きっかけは２つある。１つ目は、私が小学生の時の先生方に強い憧れを持ち、理想の大人像であったからだ。教科書通りにただ授業を進めるのではなく様々な工夫をして楽しい授業を行ってくれたことや、いつも優しくするのではなく時に厳しく叱ることにより、人間的な面でも私を成長させてくれた。２つ目は、運動会や音楽会などの学校行事や毎日校庭で遊んでいたことなどを鮮明に覚えており、今度はそこに教師として子どもたちと思い出を共有したいからだ。自分を大いに成長させてくれた小学校という場で、憧れであった教師という立場で、懸命に仕事をし、その中で自分もさらなる成長をしたい。

小学校教員と防災の繋がりとして、防災教育がある。私が教員になれたその時でさえ、自らが大きな災害を経験しているとは限らない。しかし、私は環境防災科で多くの防災の知識を学んだ。例えば、地震が起こった際に守るべき場所は頭部だけではなく胸部も守らなければならないことや、東日本大震災で多くの小学生が命を落としてしまったことなど、災害を経験していなくても伝えられることはたくさんある。防災教育では、災害の恐ろしさをただ伝えるのではなく、災害が起こることによって人々にどのような影響をもたらすのか、どのようなことが必要になってくるのかなども教えていきたい。未来ある子供たちの命を失わせないためにも少しでも質の高い防災教育を行いたい。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科を目指したきっかけは、オープンハイスクールや進路説明会で在校生の方々が、優しく、わかりやすく、防災とは何なのかを教えてくれたことだ。私は小学生のころから自分の意見を他人に伝えることが好きであり、環境防災科なら自分をもっと成長させてくれると感じたからだ。

（２）入学して

環境防災科に入り、嬉しい反面不安な面もあった。「災害と人間」という授業で、入学して早々に自分の夢について発表する機会があった。そこには、自分よりもはるかに話し方や意見の伝え方がうまく、自分の夢ややりたいことに向けて努力しようとしている人ばかりであった。私はこの時、この仲間となら３年間頑張れると確信した。

１年生では、様々な外部講師の方々に講義を行っていただいた。水道局や、自衛隊、電力会社など多くの視点からその職業と防災の繋がりについて教えていただいた。被災から、復旧・復興を目指すには、たくさんの方々の助けが必要なことを学んだ。年を越した１月 17 日には、「ひょうご安全の日の集い」に環境防災科の１年生として参加させていただいた。自分が生まれ育った町「神戸」で起こった阪神・淡路大震災で亡くなった方々、大切な人を亡くした方々がいるということ、これからもっと大きな災害が起こ

るかもしれないということを踏まえ、風化させてはならないと感じた。
２年生では、「Active 防災」や「社会環境と防災」など、より防災の知識を深めるための授業が増えた。そこで、被災された方々には心のケアを必要とする人が多くいらっしゃることや災害がトラウマになり、今でも苦しんでおられる方がいることを知った。人の気持ちを完全に読み取ることはできないが、人の気持ちに寄り添うことをやめてはならないと感じた。また、人と人とのつながりが復興の基礎となることも学んだ。災害によって人の命や財産が壊されても、地域や家族の絆を再度深めることが復興の土台となることを知った。
３年生では「夢と防災」を通して、自分が将来取り組みたいこと、今できることについて真剣に向き合った。自分の夢を発表という形で言葉に表すことで、以前より自分の将来の夢を明確にすることができた。自分が本当にやりたいことを考え、他者に分かりやすいように伝える、これから社会を生きていくうえで必要な技術を学ぶことができた。

（３）東北訪問

１年生の夏に東北訪問に参加した。その中で多くの子どもたちが犠牲になった大川小学校を訪れた。その校庭に、校舎に、元気な子どもたちが過ごしていたと思うと、私はなによりも児童の命を優先することが大切だと感じた。自分の無力感や、亡くなられた子どもたちの悲しい気持ちが、やるせなさを醸し出す校舎の姿から感じた。また、多賀城高校の生徒に案内してもらい町歩きを行った。町の至るところに、津波の到達点が看板で記されていた。その看板を見るたびに、津波の恐怖を知った。東北訪問で最も印象に残っていることは、石巻西高校の元校長である齋藤幸男先生の講義を受けたことだ。齋藤先生は、「人は生かされて生きている」とおっしゃっていた。この言葉を聞いた時、衝撃を受けた。今まで私が成長できていたのは、自分が努力したからだと思っていたが、この言葉を聞いて考えが変わった。人は１人では決して生きてはいけない。ずっと誰かに生かされている。そう思うようになってから、自分に関わってくれる全ての人に心から感謝することができるようになった。反対に、自分も誰かを生かす重大な役割を担っていると思うと、むやみに他人を傷つけたり、突き放したりすることは決してやってはいけないことだと感じた。今、私が生かされていることは、決して当たり前のことではない。これからつらいことやしんどいことは絶対にやってくるが、ネガティブなことで頭がいっぱいになる前に、災害によって生きたくても生きることが許されなかった人がいるということ、常にだれかに生かされているということを思い出したい。改めて命の大切さに気づかされた３泊４日であった。

６　新型コロナウイルス

2020 年３月頃から、日本で新型コロナウイルスの感染が拡大しだした。２年生としての学校生活も終わり、いよいよ受験生というプレッシャーを感じながら春休みを迎えた。春休みには、部活動のリーグ戦に向け、日々厳しい練習に取り組んでいた。しかし、感染拡大は収まらず、新学期の始まりが遅れ、部活動のリーグ戦と総体が中止となった。知らせを聞いた時、何も考えることができなくなった。挑むことすらできなかったことに、だれに対して怒りをぶつけてよいのかわからなかった。ただただ自分の無力感を感じた。今まで積み重ねてきた練習や、目標への志は、すべて無駄なことであったとも思えた。この新型コロナウイルスから、多くのことを学んだ。それは、当たり前に部活動や学校行事、授業が受けられていた日常の大切さや、様々な情報に耳を傾け正しい判断をすることがいかに難しいことだということだ。このような事態になるまで自分は、学校に行くことや部活動をすることは当たり前にできていると思っていた。そのため当たり前の学校生活をしている中で、本気で頑張れていない部分が多々あった。それは、「明日がある」と当たり前のように思っていたからだ。この事態から、いつもと変わらぬ日常が必ず明日にやってくるとは限らないことを知った。それはこのようなウイルスだけではなく、事故や災害でもいえる。特に地震は、何の前触れもなく人々を襲う。東日本大震災では、卒業式を目の前にしていた学生たちの命を容赦なく奪っていった。彼らも、当たり前の「明日」に胸を躍らせていただろう。そう考えてみると、今の状況は災害といえる。このような時代の中でも、本当に必要なものがある。
本当に必要なのは、人と人との助け合いだ。マスク１枚を譲り合ったり、毎日働く医療従業者の方々にエールを送ったり、悲しいニュースの一方で心が温まるようなニュースも多く見聞きした。世界中が困っている時こそ、世界中で助け合うことの大切さを学んだ。私は、「非日常」になってから初めて「日常」の大切さを知った。当たり前に部活動が行えていたことや、距離を気にせず人と接していた時間はかけがえのない時間であったことを知った。そして、以前からすれば「非日常」であるマスクをしながらの生活や、常に人と距離を取らなければいけないことが、「日常」へと移り変わりつつある。何をもってこの状況を乗り越えたといえるのか。何をもってして、この時代に順応していると言えるのか、それがわかる

時まで、今を全力で生きるしかない。起こってしまったことは変えられないが、新型コロナウイルスによって得たことを今後の人生に生かしていきたい。

７　最後に

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、様々なことを知り、学んだ。今ではきれいな夜景が見え、活気あふれる街並みが揃う神戸の町で考えつかないような悲劇が襲ったことを父から教わった。父の阪神淡路大震災の体験談を聞いて、私は重苦しい雰囲気を感じた。それほどありえないようなことが起こり、たくさんの方が亡くなったのだと思うと、決して風化させてはならないことだと改めて感じた。父も含め、震災の悲劇を乗り越えようと前を向く神戸の人々や町の姿に、「自分も頑張ろう」と勇気をもらった。母の話を聞き、人のためには、ただ傍観するだけではいけないことを学んだ。よく自分には関係ないことを「他人事」と捉えてしまう自分であったため、とても刺激を与えられた。

環境防災科では、様々なことを学んだ。防災の知識だけでなく、人と人とのつながりの大切さや、災害によって引き起こされる人間の心理なども学んだ。また、東北訪問では、自分は常に「誰かに生かされている」ことを東日本大震災の経験談からたくさんの方々に教えていただいた。たくさんの人の命や財産が失われた町を歩き、多くの人々の犠牲があり今を生きることができていることを実感した。だからこそ今自分の隣にいる人から大切にしていこうと思えた。

私は将来、小学校教員として防災教育という形で防災を広めたい。自分が環境防災科で学んだ知識や思いを子どもたちに伝えていきたい。教師は児童の命を絶対に失ってはならない。だからこそ、災害が起こった時に自分が率先して誘導し、避難させることのできる頼れる存在となりたい。頼れる存在というのは、災害時に限らず地域の中で、家族の中で、自分の置かれているすべての環境で信頼されることだ。そのためにも、自分のことばかり考えず、他人を思いやることのできる人間になりたい。

最後に、私が一番伝えたいのは、「今」の大切さだ。今自分が勉強のできる環境にあり、ご飯を食べて、安心して眠りにつける状況は当たり前ではない。普段の日常が明日に来るとは限らない。自分が想像する「明日」には、自分のやってきたことがすべて無駄になったり、大切な人を失ったりする明日かもしれない。自分の命を落とすこともあるかもしれない。そうならないために、「今」を全力で生き抜きたいと思うし、これを読んでくださったすべての方々に伝えたい。

私の「使命」

戎居　弥友子

１　はじめに

1995 年１月 17 日に発生した阪神・淡路大震災から約 26 年が経過する。震災では多くの犠牲者や、負傷者、行方不明者が出た。私自身は震災を経験はしていない。しかし、神戸で生まれ、育ち、環境防災科へ入学し、多くの震災について学んできた。風化が進まないように。亡くなった人の命・被災体験を無駄にしないために、そして、今後同じ被害をさないために何かしたい。そのために、私は家族や周りの協力を得て「語り継ぐ」を執筆していこうと思う。

２　阪神・淡路大震災の概要

発生年月日：1995 年（平成７年）１月 17 日午前５時 46 分ごろ
名称：兵庫県南部地震
震源地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ：16 ㎞
規模：マグニチュード 7.3　最大震度：７
死者：6434 人　負傷者：43,792 人　行方不明者：３人
主な死因：窒息死・圧死（高齢者に被害が被害が集中）
住宅被害：639,689 棟　焼損棟数：7574 棟
被害総額：９兆 9268 億円

（引用：神戸新聞 NEXT　より）

３　母の話

（１）　地震発生から避難所に行くまで

当たり前だったことがすべて一瞬にして失われた。母は当時、兵庫区の２階建て一軒家で被災を経験した。突き上げられるような大きな揺れで目が覚めた。揺れ始めた時は何が起こったのか分らず、揺れに身を任せることしかできなかった。数 10 秒の揺れがとても長い揺れに感じたらしい。しばらくしてから「大変なことが起きている」と理解することができた。横で一緒に寝ていた弟（叔父）を見ると、落ちてきたテレビに頭をぶつけ流血している。弟のことを気にかけながら襖を開けようとするがびくともしない。地震で襖が歪んだようだ。少しすると兄（叔父）が１階から２階に上がってきて何とか襖を開けることができた。そして出た後に父（祖父）がタンスの下敷きになっているので一緒に助けようとしたが、暗くて何も見えないので母（祖母）がろうそくを持って明かりをつけ始めた。その時母（祖母）が父（祖父）を助けることに夢中になりすぎたため、母（祖母）の髪の毛が燃え、パニックになってしまい母は家を飛び出してしまった。「今思えば突然飛び出し、建物からの落下物があったとしたら怪我をしていたかもしれないので、危険な行動だったなと思っている」と言っていた。パジャマ１枚で飛び出したため兄がジャンパーを持ってきてくれた。

それから家族や親戚と共に近くの小学校へ避難した。校舎が開いていないので運動場で待機した。まちは大変な状況にも関わらず、サイレンの音が何１つ聞こえない。西の空、長田方面の空は赤黒く、運動場で待機している間も怖く、不気味だったそうだ。それからどのくらいが経ったかは分からないが、校舎が開き教室に避難した。

（２）　避難所生活

避難所では食べ物がなく、寒さもひどかったため、母（祖母）が家から毛布を持ってきてくれたり、缶詰や残っていたご飯も持ってきてくれたりしたためそれを食べたりして凌いだ。少しして食料が配られるようになったが最初のうちは乾パンばかりであった。それからしばらくすると、パンやおにぎりも配られるようになった。食べ物は子どもや高齢者など弱者の立場の人に優先的に配られていた。衛生面はとても悪くお風呂には入れず、トイレはプールの水で流していたが、水が間に合わなくなってしまい、便があふれていて最悪な状況だった。

余震は多く、ヘリコプターの音が長時間鳴っており、緊張で浅い眠りにしかつけず、親戚や家族と寄り添い寝ていた。また、電話等も通じないため友人や先生、遠くの親戚と安否確認ができない状況で公衆電話は行列ができていた。治安も悪くなっていた。例えば、女の子が襲われる、空き家やスーパーなどに泥

棒が入る、家のストーブや灯油が盗まれるという最悪な状況であった。家族の中での母の役割は井戸の水で洗濯をすることだった。生きることに必死で、毎日が大変だった。

そのような中、感動で涙を流し、人のやさしさに触れる機会が４つあったと母は言う。

１つ目は甲南高校で担任だった先生が母の家周辺の避難所をめぐり、安否確認をしに来てくれたことだ。クラスで母のみが安否確認をできておらず、避難所を巡っている途中「あかんかもしれん」と先生は思っていたが、見つけた際に泣きながら「生きてくれていてよかった」と言ってくれたことだ。電車も道路も崩壊しているにもかかわらず、車で何時間もかけて苦労してきてくれたのだなと感謝したという。

２つ目は仲の良かった友達がお風呂に連れて行ってくれたことだ。震災から１か月が経過し、蛇口から水が出ているのを見てとても感動をしたらしい。久々のお風呂だったので、頭は全然泡が立たずびっくりしたそうだ。１か月間お風呂が入れなかったため、当たり前にしていたことができなくなり、当たり前の日常を過ごすことができる有難さを身に占めて感じたそうだ。

３つ目は遠い親戚が来てくれたことだ。母の家は全壊も半壊もしておらず何とか無事だったが、壊れている部分を修理しに来てくれた時に、「バイクだからそんなに持ってこれなかったけれど」と言って食べ物を持ってきてくれ、人の温かさを感じたという。

４つ目は高校の同級生がお弁当を作ってくれたことだ。高校と家の距離は離れていたため、そこまで被害が大きくない友達が多かったそうだ。そのため被害が多かった母にお弁当を作ってきてくれた。避難所生活していると食べられないようなとても美味しいお弁当で、食べるのがもったいなく感じたと言っていた。

（３） 少しずつ戻りつつある復旧と、戻らない日常

しばらくすると、自衛隊が給水車や、炊き出し、ご飯、お風呂を用意してくれた。地域では助け合いの精神が芽生え、洗濯する場所を確保させてもらったり、灯油を分け合ってたりしていた。ライフラインは電気→水道→ガスの順番で復旧したそうだ。ガスが復旧するのには多大な時間がかかったそうだ。

そこからしばらくすると、少しずつ日常が戻ってきた。１か月後には学校に通うことができた。

しかし、１か月経ってもお風呂に毎日は入れなかったので、臭くないかとても気になった。そして、父（祖夫）は目が悪く、健常者よりも音や人に敏感でストレスを多く感じていた。そのため、家が無事だったので家で過ごし、食事のたびに避難所に食べに行っていた。

（４） 現在の母

母はしばらく震災の話ができなかった。中学生くらいになり、自分から話を聞くまでは詳しく話をしたことがなかった。その理由は今でも思い出すことが嫌だからしい。また、いま執筆した話はごく一部で、１日１日生きるのに精一杯なこともあったり、嫌な思い出を忘れてしまっていることもあったりで思い出せない部分もある。

また、私が幼少期の頃であったが母と一緒に地震体験車の「ゆれるん」に乗った時に阪神・淡路大震災のことを思い出したらしく、怖がっていたのを覚えている。今でも少しのきっかけで度々思い出すことがあるそうだ。

４　話を聞いて思ったこと

私はまず、このような怖い体験をして、思い出すこと嫌な母からたくさんの経験を聞けたことに感謝している。そして、怖い体験を思い出しながら伝えてくれた母のためにも阪神・淡路大震災のことを語り継いでいきたい。地震当時の家がまだ残っているため話を聞いて当時のことを想像することができた。

学校の先生が探してくれたこと、友達がお弁当を作ってくれたこと、親戚がバイクで神戸に来てくれたこと。私は震災は悪い部分だけでなく、人の温かさを感じられる機会でもあったと考えた。

当時は、現代のように携帯電話が普及していなかったため、先生や親戚、友達と安否確認を取るのが困難だったと思う。母親自身も親戚も、先生も、友達もみんな心配だっただろうと思った。

今まで、阪神・淡路大震災の話を防災合宿や、授業の中で多く聞いてきたが、一番身近な母から聞いた話はとても印象的だった。私は母から聞いた話を絶対に忘れず、教訓を生かし、これから生きていきたい。

５　環境防災科

（１） きっかけ

私が、環境防災科に入ったきっかけは兄の影響である。私が中学生の時に兄は環境防災科に進学し、環境防災科の活動を聞いていた。入学して早々、熊本地震のボランティア活動に参加しており、そこから環

境防災科への興味が湧き始めた。また、環境防災科では震災当時の話を講師の方から聞くという授業もあるが、長田まち歩きや、六甲山フィールドワーク、被災地ボランティアなど実際に被災地に訪れることができることに魅力を感じた。その後、オープンハイスクールや入試説明会に行き案内してくれた在校生がやさしく案内してくれ、生徒が主体で行事を作り上げていると感じ、この学校であればたくさんのことを学び成長できると思い志望した。

（２） 入学してから

私は３年間環境防災科を通しさまざまな人から災害についての授業を受け、ボランティアに参加してきた。この３年間は私の人生の中で一番濃かったと言っても過言ではない。

入学してから授業の中ではライフライン関係や消防士、地震によってご子息を亡くされた方などから話を伺うことができた。校外の活動としては長田まち歩き、六甲山フィールドワークを行い、また被災地訪問では東日本大震災で大きな被害をもたらした宮城県や、西日本豪雨で水害を受けた岡山県を訪問した。

この濃い内容の中でも最も印象深いのは東北訪問である。

（３） 東北訪問

東北訪問には私は２年連続参加させていただいた。バスで 14 時間かけて神戸から宮城県のあおい地区へ行く。あおい地区とは舞子高校が毎年お世話になっている地域だ。私はあおい地区の人たちが温かく大好きで故郷に帰った感覚になり、落ち着くことができる。そのあおい地区に到着するのは夜の 22 時くらいだ。あたりは暗かったが、見渡すと道路は広く、建物も等間隔できれいに建っており、整備されていた。東日本大震災から７年経過しており、もう復旧したのかと私はそのときは思っていた。しかし、大川小学校の訪問では復旧の言葉とは程遠いものだった。体育館が完全になくなり、校舎も壁や柱のみで今まで見たこともない光景だった。大川小学校周辺では建物はほとんどなく、沿岸部の方向には大きなトラックがたくさん行き来していた。沿岸部はまだ復旧が進んでおらず、手のまわっていない状況だと現地の方が言っていた。その光景を見てまだまだ支援が必要だと考えた。

また、大川小学校には一度でもいいから訪れてほしい。現地に行くからこそ感じられるものもあり、自然の怖さを目の当たりにすることができる。大川小学校は現地の人も、「未来を拓く場所」と言っていた。だから、これから起こると言われている南海トラフが同じ被害をもたらさないように、訪れたことのない人と大川小学校に出向き、私が東北で学んだことを生かして、語り手として伝えていきたい。

そしてあおい地区で出会った人たちとの出会いはとても大きかった。みんな優しく、私たちが訪問したときは「おかえり」と言ってくれ、帰るときは「いってらっしゃい」と言ってくれるのだ。そして、震災当時の話を聞かせてくださったり、学校の話をしたり、日常の会話をしたりしてとても幸せな気分になった。

私はこれから環境防災科を卒業し、防災合宿としての参加はできないが、旅行に行って現地の物を買ったり、食べたりするのも支援になると考えている。復旧・復興の少しでも力になれるように東北に旅行に行きたい。また、あおい地区での出会いを無駄にすることなく、これからも関係を持てるように訪れたいと考える。

６　将来の夢

私の将来の夢は消防士になって、神戸市民を守ることだ。小学校低学年の頃からこの夢を抱き始めた。きっかけはよく消防署や消防学校に訪れていたからだ。出動指令がかかるとすぐに用意をして、助けを求める人を救いに行く姿に憧れを抱き、かっこいいと思っていた。私もこのような消防士になりたいと思い、目指し始めたのだ。私が消防士になる上で大切にしたいことは３つある。

１つ目は神戸市、社会を良い方向へ変えていくことだ。阪神・淡路大震災からは 25 年以上が経過するが、風化させないように復興に力を入れていきたい。復興には終わりがないと考える。したがって、神戸市の脆弱な点などを発見し、次起こるといわれている南海トラフ巨大地震では、少しでも死者や被害が減るような方向へと導きたい。そして、生まれ育った神戸市で恩返しができることは大変うれしいので、自分が任された仕事には情熱を持ち続けたい。

２つ目はコミュニケーション力、聞く力と伝える力を発揮することだ。ミーティング等で仲間の意見を聞き、自分の意見も主張することが大事だと考える。課題があれば、その解決策を導き出せるように的確に説明をしながらコミュニケーションをとりたい。そして、市民に寄り添えるような人材になりたい。また、現場では命が直接的にかかっているので、司令官の指示をしっかり聞き、行動しなくてはならない。特に現場では騒音が大きく、声が通りづらい状況なので聞く力を大切にしないといけないと考える。

３つ目は神戸市民の命と身体、財産を守る立場ということを忘れずに、使命感、責任感を持って努めることだ。私はこれがとても重要だと考える。どんなに辛く、苦しい状況であっても、神戸市民を守る立場であることを忘れず、これらの意識をもって働きたい。

もし、消防士になれたのならばこの３つを大切にして業務に努めたい。

７　最後に

私はこれから生きてく上で自然災害と共存しなければならないと考える。そのため自然災害と共に生きていかなければならない。近年、災害が多発している中で、人間と災害はうまく付き合っていかなければならない。うまく付き合うためには、災害のことを学び、教訓を伝えていく必要がある。そのために私はたくさんの人に伝えていく必要がある。伝えていくと口で言うこと簡単だが、本当に伝えていくことは難しいと考える。私は消防士として地域のイベントに参加する際に、市民にわかりやすく防災について伝えたり、実際に起こった被災者の方の話を語り継いだりしていきたい。そうすることで、未来で少しでも自然災害の被害を少なくすることに繋がり、過去の災害によって命をなくした人の死を無駄にしないようにしたい。また、正しい情報を伝えなければ、誤った情報によって命を落としてしまうこともあるので、正しい情報を伝えられるようにしっかりこれからも防災を学んでいきたい。信頼される消防士になるためには、専門的な正確な知識が必要だと私は考える。そして、大切な人を亡くして悲しむ人が少しでも減らせるように努めたい。

８　追記

私は小学生の低学年から、神戸市消防局で働くのが夢であったと上記で述べた。しかし、この追記を行っている 12 月現在、神戸市で消防士として働くという夢が叶った。この夢を叶えることができたのは、勉強がしやすい環境を作り、トレーニングに付き合ってくれ応援してくれた母や、共に学び意識を高めあった仲間のお陰である。消防士になってから出会う仲間も、今まで支えてくれた仲間も、皆大切にしたい。そして、大好きな神戸市で過去の災害からの教訓も生かして、市民の命や財産を守りたい。

これからを生きるひとへ

大澤　太希

１　はじめに

1995 年 1 月 17 日、私たちが住む神戸を阪神・淡路大震災が襲った。死者 6,434 人、639,686 棟の建物に被害が生じる未曽有の大災害で、当時では戦後最も多い死者・行方不明者を出した。2021 年の今年で震災から 26 年を迎え、神戸に住む市民の中にも「震災を知らない世代」が増加してきた。その中で「震災を知らない世代」があの日何があったのか、人々は何を思ったのかを知らなければならないと思う。そしてあの災害からどのような教訓を得てどのように生かすのかが重要である。

私は父、母の震災当時の話、そして多くの被災地へ災害派遣に赴いてきた自衛隊の阪神・淡路大震災当時の災害派遣活動について語り継ごうと思う。

２　阪神・淡路大震災

（１）阪神・淡路大震災の概要

発 生 時 刻：平成 7 年（1995 年）1 月 17 日 05 時 46 分
震　源　地：淡路島北部　北緯 34 度 36 分東経 135 度 02 分
震源の深さ：16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
震　　度：最大震度 7
被 害 状 況：死者 6,434 人
　　負傷者 43,792 名
　　行方不明者 3 名
　　全壊 104,906 棟
　　半壊 144,274 棟
　　全半焼 7,132 棟

（国土交通省　気象庁ホームページより）

（２）父の話

父は当時、神戸市西区に住んでいた。

ゴーと言う大きな音が近づいてきて、ドンッという音と共に下から突き上げられる感覚がした。初めての事に最初は地震だとは気づかなかった。母（私の祖母）の悲鳴が聞こえた。揺れが収まり父（私の祖父）が、「テレビをつけろ」と言ってテレビをつけたがすぐに停電が発生した。ガスはプロパンガスで、水道は当時、神戸市の市営水道が通っておらず、地域が所有する水道を使用していた為、電気は止まっているが、その他のライフラインが止まることは無かった。その日は学校に通学し教室で待機していた。西区に在住していた先生以外は、出勤していなかった。用務員の方に「今日は学校も休校になるやろうから帰る用意をして待っとけ」と言われた。しばらくして担任の先生に今日から休校であると伝えられたそうだ。その日のうちに電気も復旧した。買い物は三木まで行って行った。余震が起きる前は、ゴーという音が遠くから近づいてきて、下から突然突き上げられた。その後、ゴーと言う音が遠ざかっていった感覚を父は今でも忘れられないといった。

父は、「同じ被災地でありながらテレビの向こう側の感覚がした。被災した感じはあまりしなかった」と最後に語った。

（３）母の話

母も当時、神戸市西区に住んでいた。

当日の朝「ドンッ」という音の後に大きく下から突き上げられる揺れが襲った。飼っていた愛犬はがくがくと震えていた。揺れが収まると、近所の方が様子を見に来てくれた。家の中は食器が散乱し、仏壇が倒れていた。避難はせずに家の後片付けをしていた。長田に住んでいた祖父（私の曾祖父　以下祖父）の安否を確認するため、母（私の祖母）と長田へ向かった。地下鉄は西神～板宿間は運転が再開されていたので板宿までは地下鉄で、そこからは歩いて向かった。無事に祖父と避難所で再会することができ安心した。時々、余震を感じることがあり、夜に電気を消して寝るのが怖かったらしい。学校は 1 週間ほどで再開された。西神中央は当時、宅地開発の為に空き地が多くあり仮設住宅の建設が進んでいた。家の近くの公園のグラウンドも広く、そこにも仮設住宅が建設された。またそれに伴って転校生が毎週のように

やってきた。
母は最後に「同じ神戸市内でも西区は比較的早くに日常に戻れたのではないか。」と語った。

（４）自衛隊の活動

自衛隊は、兵庫県知事からの要請を受け以下の活動を実施した。災害派遣要請を受ける前から駐屯地近辺の自治体である西宮市や伊丹市では近傍派遣で部隊が出動していた。兵庫県知事からの災害派遣要請が遅かったことや、道路渋滞に巻き込まれて事により初動対応が遅れてしまった。震災以前は自治体との連携が足りず多くの問題が発生した。それらの苦い教訓を基に大きく方針が転換され、自衛隊と地方自治体の連携が盛んになった。また多くの国民が災害時の自衛隊の活動などに対して関心を寄せるようになるきっかけとなった。

・活動実績（1 月 17 日～４月 27 日　101 日間）

人命救助	生存者	157 人
	遺体収容	1,221 人
給水支援		32,092ｔ
給食支援		577,273 食
入浴支援		515,459 人
医療支援		20,918 人
輸送支援（航空機）		990ｔ
輸送支援（車両）		85,00ｔ
倒壊家屋処理		25,999 戸
ゴミ処理		2,106ｔ

・派遣勢力（延べ数）

	陸上自衛隊	海上自衛隊	航空自衛隊
人員	約 1,699,000 人	約 640,000 人	約 13,000 人
航空機	約 7,000 機	約 700 機	約 350 機
車両	約 353,000 両	―	―
艦艇	―	約 700 隻	―

・陸上自衛隊の活動状況

期区分	第１期（３日程度）	第２期（約２か月）	第３期（約１か月）
期間	１/17～19	１/20～３/16	３/17～４/27
活動区分	人命救助	生活支援等	復旧支援
活動内容	○人員の捜索・救助	○給食支援　○給水支援 ○入浴支援　○医療支援 ○輸送支援　等	○倒壊家屋の処理支援
部隊編成	近畿・四国の所在部隊	日本全国の所在部隊	近畿・四国の所在部隊 全国の施設（建設）部隊
派遣人員	延べ約 25,000 人	延べ約 958,000 人 １日最大 18,758 名（２/８）	延べ約 657,000 人

（防衛省・自衛隊・兵庫県地方協力本部の提供資料より作成）

（５）話を聞いて

・両親の話を聞いて

両親の話を聞き、同じ被災した神戸でも地域が違えば被害はもちろんの事、感じることも違うのだと感じた。私は阪神・淡路大震災を経験していない。しかし母や父は揺れを経験したものの、震災により自分の生活に何か影響したことは時にはないと語った。私の両親のように、揺れは感じたが生活に変化はなかったと感じている人は少なくはないと思う。そして神戸市では徐々に震災を知らない世代が増えている。だからこそ私たち「震災を知らない世代」はより一層、阪神・淡路大震災について知る、聞く、考える、ことをしていく必要があるとかと感じた。

・自衛隊の話を聞いて

自衛隊の話を聞き、阪神・淡路大震災の活動では自治体との平素からの連携が取れておらず、初動対応が遅れてしまったという経験から、現在は自治体との連携により重きが向けられていると感じた。当時の自衛隊は災害派遣のための資機材があまりなく苦労したことを聞き、この近年で自衛隊の任務内容が

大きく変わったのだと感じた。また資料を読んでいくと自衛隊の災害派遣の活動は人命救助やがれきの撤去のみならず入浴支援など多岐に渡っていると改めて感じた。人命救助やがれきの撤去などは警察や消防も行っているが、入浴支援や炊き出しなどは自衛隊だからこそできる事だ。これらは平時の演習や訓練の賜物である。この震災の教訓が新潟中越地震や東日本大震災など多くの災害に生かされた。また震災を機に、国民の多くが自衛隊の活動に興味を持ったと考える。

３　環境防災科

（１）きっかけ

私が小学校２年生の時に東日本大震災が発生した。テレビでは連日、被災地の映像や情報が流れていた。そこで自衛隊が活動している姿を見て自衛官になろうと決めた。中学３年時に、陸上自衛隊少年高等工科学校という自衛官を目指せる教育機関を見つけたが、進学を諦めた。そのような中、中学に当時環境防災科３年の先輩がやってきた。そこで話していただいた内容の中に「人の役に立てる」という言葉があった。当時、担任であり所属していた剣道部の顧問でもあった先生に相談すると、強くすすめられ、入学をしたいと強く考えるようになった。

（２）入学して

私が入学して一番感じたことは、平時から地域と密に連携していく必要があるという事である。私は２年生から、地域の防災福祉コミュニティとのボランティア活動に参加している。参加しようと思ったきっかけは１年生の夏の東北訪問と、秋の糸魚川訪問にある。２つの訪問を通して、地域の結びつきが強い地域では、被害が少ないという事を知った。地域の中の繋がりだけでなく地域と学校、地域と行政などが結びつくことが復興に向かっていく時に被災する前よりもより良い地域になるのではないかと感じた。そして授業を受けていく中で感じていたものが自分の中で確信へと変わった。そして、２年生から防災福祉コミュニティとの地域ボランティアのリーダーとして活動を始めた。地域の災害おたすけガイド制作に関わらせていただくことができ、地域の方たちが自分たちの地域のために意見を出し合い、時には高校生である僕たちに意見を聞いてくださったことが印象に残っている。活動を通して地域の方々に舞子生が頼りにされていると感じた。地域の防災訓練の際は、内容の企画や運営も任せてもらい、地域の方々に身近なものでできる防災についてお話させていただいた。このような活動を通して、平時から地域の様々な活動の拠点となる学校が、地域と密に関わっていく事が必要であると思う。

（３）これから

残りの学校生活は新型コロナウィルスの影響で先行きが見えないが現状がある。2020 年の 7 月には熊本県や長野県、岐阜県を中心に豪雨災害が襲った。環境防災科に所属しながら、なにもできない現状にうずうずしている。しかし現地に行くことのみがボランティア活動ではないと私は考える。だからこそ情報を集め、自分の地域でも同じような災害が起こるかもしれないと危機感を感じ、災害に備えることを家族や友人などに広める必要があると考える。

４　夢と防災

（１）　将来の夢

私の将来の夢は海上自衛官だ。中学生の時は陸上自衛官を志していたが高校生活を通して、海上自衛官に変化した。この夢を抱いた理由は３つある。１つは小学２年生の時に発生した東日本大震災だ。被災地で活動する自衛官を見て、自分も人の為に働ける人になりたいと憧れを持つようになった。２つ目は高校１年生の時に、自衛隊の広報官の方に海上自衛隊阪神基地を見学させていただいた事が挙げられる。そのとき海上自衛官とお話する機会があった。その艦長が「どの自衛隊よりも世界を見ることが出来る」と言われ、自分が知らない世界をこの目で見てみたいと感じたからだ。３つ目は生まれ育った神戸にある。小学生の時に社会の授業で、神戸は開国で開かれた５港の１つで神戸から様々な異国の文化が日本に広まった伝統ある港だと教えてもらった。家族でハーバーランドに行った際も、必ず海を見に行かせてもらった。その事から地元神戸への愛郷心や海への憧れが強くなっていた。そしてこの憧れの海を守りたいと思い海上自衛官を志した。

（２）　防災とのつながり

自衛隊は災害が発生した場合、要請を受け被災地に災害派遣される。その中で問題になっているのが自衛隊内の建物の老朽化である。東日本大震災の際の例を出そう。東日本大震災で被災した自衛隊基地に航空自衛隊東松島基地がある。大津波警報が発令され基地内にいた人は２階以上に避難するように命令された。しかし 2003 年に発生した地震でひびなどが入った建物もあった。ひびが入った建物は予算が

下りずに放置されていることがある。これらの建物に退避した隊員は建物が倒壊する危険性があるとして、1 度退避した建物から別の建物に退避をせざる負えない事例があった。この事例にある通り、自衛隊の建物は耐震化が進められていない現状がある。中には旧帝国軍時代に建築された施設がそのまま使われているほか、災害で１度損傷しても使用している場合がある。その理由は、年々削減されてゆく予算が大きく関わっている。予算が削減され隊内の防災対策に手が回りにくくなっている。もし次に襲う災害で自衛隊施設が倒壊したら、初動対応に必ず影響するだろう。初動対応が遅れれば救える命にも影響が出るだろう。だからこそ入隊したら建物の耐震化の為に意見を重ねていきたいと思う。

５　さいごに

私たちが住む神戸は震災があったことを感じさせないほど、復興を遂げているように見える。しかし少し違う視点から目を向けると、未だに様々な問題が浮かび上がる。災害公営住宅の問題や、市民のなかでも私たちのような震災を知らない世代が増えているなど様々だ。私たち高校生が解決の為にできる事には限りがある。だからこそ高校生など私たちと同年代の若者ができる、「被災体験がある人の話を聞く」、「その体験を次の世代に繋げていく」、この活動こそが今私が１番できる事なのではないかと思う。私たちが執筆している「語り継ぐ」が今まで以上に、意味を持ってくるのではないかと思う。そしてこの問題は、阪神・淡路大震災のみならず日本や世界で起こるすべての災害で問題になってくるだろう。私たちはまずは、災害について調べる、聞くことを行い、それを次の世代へ繋いでいく橋渡し役として活動する必要があると思う。

近年、予想していなかった災害が数多く発生している。7 月には熊本県、長野県で豪雨災害が発生し、多くの方が亡くなった。さらに新型コロナウィルスの影響で避難所内でのクラスター感染も危惧されている。また 30 年以内に 70%～80%で南海トラフ巨大地震が起こるとされている。私たちが働きだす頃には、今までよりも規模の大きい災害が起こるかもしれない。あらゆる事態を想定し今できることで最善を尽くすことが重要であると感じる。

私たちはこれからの災害多発時代を生きて行くために、知識をつけ実践する行動力を身につける必要がある。私はその知識や実践する行動力を身に着けるために活動していく使命があると思う。その使命の為に私は残り少ない学校生活で学んできたことをしっかりと自分の物にする。そしてその知識は自分の中で留めるのではなくアウトプットをしっかりと行っていきたいと思う。

未来に繋ぐ

片山　優斗

１　はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。2021 年で震災から 26 年目を迎えるが、私のように震災を経験していない若い世代はこれからも増加し、防災への意識も薄れていくだろう。6434 人もの多く尊い命を奪った震災を決して忘れてはいけない。二度と同じことが繰り返されないように、当時の教訓を活かし震災を知らない人から震災を知らない人へ語り継ぐ。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

名称　　：兵庫県南部地震
日時　　：平成７年（1995 年）１月 17 日５時 46 分 52 秒
震源地　：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ：16 ㎞
規模　　：マグニチュード 7.3
死者数　：6434 名
行方不明者：３名
負傷者　：43,792 名
主な死因　：圧迫死
住家全壊　：104,906 棟
住家半壊　：144,274 棟
一部損壊　：390,506 棟
全焼　　：7,036 棟
被害総額　：約 10 兆円規模
避難者数　：316,678 人

［内閣府　防災情報のページ］より

（２）祖母の話

祖母は当時垂水区に住んでいた。１月 17 日の朝、地震が発生するまで寝ていた。突然、下から突き上げられる感じがして起き上がろうとしたが起き上がることが出来なかった。揺れが収まるまでとても長く感じた。揺れが収まり起床し、部屋を見回して母の部屋に向かった。食器などが床に散乱し、足の踏み場がなかった。外に出ると、近所の方も外に出てきており、大きな怪我などはしていない様子だった。時間が経つにつれて明るくなり周りが見えてきた。地震による被害をテレビで見るまでわからなかったが、テレビに映し出された長田区などと比べると垂水区は被害が少なかった。多くのボランティアの方に支援してもらい、人の優しさを感じた。

（３）母の話

母も当時垂水区に住んでいた、１月 17 日、母は風邪を引いていて寝込んでいたが、急に「ドンっ」と強い下からの揺れに驚き起きた。揺れは相当長く感じた。何が起こったか分からず布団に隠れ、揺れが収まり布団から顔を出すと目の前にタンスが倒れていて、台所では食器棚が倒れて割れた食器が散乱していた。近所の方が外に出ていたので、母も祖母と一緒に外に出たが何回も余震が来て、その度に恐怖を感じた。電気が早く復旧しテレビで、地震の規模などを確認した。刻一刻と、地震の被害が映し出されていた。どのチャンネルに切り替えても光景は同じだった。日を重ねるごとに死者・行方不明者の数は増えていった。改めて家具の固定や備蓄の大切さを知り、今を生きられていることに感謝している。

（４）祖母と母の話を聞いて

私は外部講師の方から震災時の話はたくさん聞いてきたが、今まで祖母と母から震災体験を聞く機会がなかったので初めて知ることがとても多かった。祖母と母が詳しく当時のことを私に話してくれたから神戸の被災状況や被災者の混乱などを想像できた。母も言っていたが、実際に震災などを経験しないと、防災の大切さがわからない。

今後 30 年以内に 70%以上の確率で起こると言われている南海トラフ巨大地震では、兵庫県南部地震

の時に起こらなかった津波が起こる可能性が高く、より多くの方が亡くなるかも知れない。祖母と母からの話を聞き学んだことをアウトプットして市民に防災への関心を持ってもらい、1人でも多くの方の命を守りたい。

３　環境防災科

（１） きっかけ

中学３年生の時の担任の先生から教えていただき、環境防災科の存在を初めて知った。防災について全く知識がなかったが、消防学校体験入校やボランティア活動も行っていて、とても内容の濃い３年間を過ごせると感じた。さらに、消防学校体験入校で将来の夢である救急救命士に近づくことができると思った。

（２） 今

環境防災科に入学し、外部講師の方からのお話を伺い、ボランティア活動に参加して、ボランティア活動を行う上で大切なことや活動の仕方などを学んだ。１年生の夏に東北訪問に参加した。参加した理由は、単純に被災地の現状を知りたかったからだ。過密なスケジュールで大変だったが１日１日の内容がとても濃かった。いま私たちが送っている当たり前の日常が、被災者の方々にとっては当たり前ではない日常で、毎日感謝して生きなければならない「命の大切さ」を学んだ。今後必ず起こると言われている、南海トラフ巨大地震では１人でも多くの命を守りたい。そのために、環境防災科で学んだことを市民の方々にアウトプットしていかなければならない。地域の防災訓練に参加したり小中学校に防災の授業を行ったりして正しい防災方法を身につけてもらうために、防災・減災について今も勉強をしている。

（３） ボランティア活動

私は、これまでに様々な地域のボランティアに参加した。まずマリンピア神戸で 2016 年４月 16 日に発生した熊本地震の被災地支援募金活動を行った。空の箱がボランティアの終わる頃には重くなっていた。多くの方が募金をしてくれて人の温かさなどを実感した。神戸市立塩屋北小学校では、防災授業を行った。小学生に防災について教えるのは、とても難しかったが１か月前から小学生に防災について理解してもらえるように、わかりやすい例えや言葉を使って防災を教えることを心がけた。小学生が災害のメカニズムなどを理解したときや授業後に、「面白かった」、「お兄ちゃん優しかった」と言われてとても嬉しかった。小学生と同じ目線の高さで話したり、アイコンタクトを行ったりする工夫もした。

４　南海トラフ巨大地震

今後 30 年以内に南海トラフ巨大地震が 70～80％の確率で起きるとされている。NHK の記事によると南海トラフ巨大地震での死者数は 32 万以上と推計されている。主な要因は、2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災と同様に地震によって引き起こされる津波だ。沿岸部では 30ｍを超える津波が押し寄せる可能性もある。津波避難タワーや堤防の高さを高くするハード面の対策も必要だ。内閣府が 2019 年５月に最新のデータをもとに公表した推計では、死者数は３割近く減り約 23 万人と推計されている。多くの人が早めに津波から避難することで、より津波による死者を減らすことができると思う。

現在の日本は、高齢化社会が進んでいるため災害時に１人での避難が困難な方も多くいる。その方たちを素早く避難させるためには地域の方と協力を行う必要がある。普段から地域の防災訓練や避難訓練に参加することも重要だ。家族で避難所を決め、家具の固定を行い、防災リュックの中身の確認をするソフト面の対策も重要だ。できる対策をしておくことで１人でも多くの命を救うことにつながる。

５　将来の夢

（１） きっかけ

私は将来、救急救命士になりたいと思っている。救急救命士になる夢を持ったきっかけは中学校２年生の時に市民救命士講習会で心肺蘇生法や AED の使用方法を学び自分でも命を救うことができると実感したからだ。高校１、２年生の時には消防学校体験入校があり実際に救急救命士の方から応急処置について学び、さらに人の役に立ちたい、人を助けたいと感じた。

（２） 夢と防災

総務省消防庁のデータによれば、救急車で搬送される高齢者の傷病内容として最も多いのは「循環器系」の疾患で全国総数 30 万 9,802 人と発表されている。循環器系の症状として最もよく知られているのが高血圧症だ。高血圧症はその名の通り血圧が何らかの要因によって上昇している状態である。高血圧

を予防するには「適度な運動をする」、「飲酒・喫煙を控える」などの方法があるのでこのことを市民の方々にポスターなどを製作し伝えたい。

救急車で運ばれる方の４割は軽症と言うデータも東京消防庁が発表している。救急車を呼び出す 119 番とは別に、症状について相談できる全国共通ダイヤル「＃7119」が各自治体に導入されている。救急車を呼ぶかどうか迷ったら電話することを、病院や薬局、老人ホームなどにポスターを掲示することで不要な要請が減り１秒でも早く現場に到着し命が助かる確率が上がると思う。

今後必ず起こる南海トラフ巨大地震では、多くの負傷者が予測されている。大規模な災害時は交通網が寸断され公助が遅れてしまう。そのために、市民の方々に自助・共助の大切さを教えるため地域の防災訓練などを通じて正しい心肺蘇生法や応急処置の仕方を教えて１人でも多くの命を救う努力したい。

６　防災・減災を広める

「防災」・「減災」どちらも同じ意味だと思っている人が多くいると思う。災害が来る前にどのようなことをすればいいのか、わからない人も多くいるだろう。そのために、まず「防災」・「減災」の違いについて教え、広めないといけない。「防災」とは、災害を防ぐことだ。しかし災害を引き起こす自然現象を防ぐことはできない。「減災」とは、災害について学ぶ・地域の避難訓練に参加する・家具の固定をする・ハザードマップの確認をするなど、できるだけ被害を減らすことだ。日頃から、いつ災害が発生しても対応できるように備えることが大切だ。その大切さについて多くの方に伝えていかなければならない。

また、「防災や減災に興味がない・めんどうくさい・私はしなくても大丈夫」など、防災や減災について他人事として考えている人も多いのではないだろうか。私は、多くの人に命の大切さを知ってほしいと思っている。

７　高校生の私たちにできること

私は、阪神・淡路大震災を経験していない。もちろん震度７の地震を経験したことがない。私たちにできることは、被災者から聞いたことを自分の言葉で多くの方に伝えること。震災を経験していないからこそ、積極的に過去の災害や防災・減災について学ばなければならない。「災害時は、大人の判断より子供の判断が正しい時もある」と授業や東北訪問で学んだ。2011 年３月 11 日に発生した東日本大震災で、宮城県石巻市にある石巻市立大川小学校では児童 78 名中 74 名が亡くなった。災害発生時には、すぐ近くにある山に登って避難した児童もいたが児童らは先生の指示に従った。

東日本大震災で当時大川小学校に通っていた娘さんを亡くされた、佐藤敏郎さんの話の中で「助けられなかった命。助けられた命。それは、助けてほしかった命」という言葉が出てきた。震災発生時は、先生らも必死に児童を守ろうとしただろう。それなのになぜ、あんなにも多くの児童の命がなくなったのだろうか。私は、日頃の先生たちによる連携不足や備えができていなかったからだと思った。普段から私たち若者が防災意識を持たなければならない。高校生が小学校で防災授業を小学生に行う、小学生は家に帰って防災授業の内容を家族に伝える。地域の防災訓練に参加したことが多々あるが、親は自分の子供が防災訓練に参加しているのを見るだけだ。地域の方が、お母さんも一緒にどうですか？と聞いていたが、断っていた。子供から話を聞き、一緒に防災訓練に参加することで防災が広がると思った。

大人が全てを知っていて、言うこと全てが正しいと思ってはいけない。自分の命は自分で守る。これからは私たち若者の判断・行動も必要だ。想定に囚われず想定外を考え行動する。阪神・淡路大震災や東日本大震災で被災者の方がテレビで、「まさか」「想定外だった」と言っていた。多くの人が想定外の出来事で亡くなった。私は想定外を考えて行動をするからこそ自分の命を守ることができると思う。「想定外を考えて行動して良かった」と思ってほしい。命を守るために、想定外を日頃から考えなければならない。

８　最後に

今回語り継ぐを書いて、阪神・淡路大震災を風化させてはいけないと改めて感じた。阪神・淡路大震災などの大きな災害を経験したことがない私がここまで学んでこられたのは、家族や先生、クラスの仲間、地域の方々、外部講師の多くの方々から支えられてきたからだ。阪神・淡路大震災から 26 年。6434 名という、多くの方が亡くなったが神戸は 26 年前に大きな被害があったことすら忘れさせるくらいまでに復興した。それが原因で風化されつつあるのかもしれない。風化されることで、また同じ被害を繰り返すことにつながる。そうならないように、語り継ぐことは大切だと感じた。外部講師の講義をレポートにまとめたり、被災者から聞いた話をメモしたりすることだけが語り継ぐことだけではない。学んだこと、聞いたことを他人へアウトプットしていかないと聞いた話が無駄になる。もっと多くの人に防災の大切さを

広めて、今後発生する災害に備えていかないといけない。
　日本は災害大国であり、様々な災害が発生する。南海トラフ巨大地震に対して、阪神・淡路大震災の教訓や過去に起きた災害から教訓を生かし、備えることが必要だ。南海トラフ巨大地震に備えるために１番大切なことは「自助・共助・公助」だ。「自助」は、災害時に自分の命は自分で守ること。「共助」は、地域の方や地域コミュニティで災害時に力を合わせること。「公助」は、公的機関などによる支援のこと。３つの助のすべてが大切であると私は考えている。
　今回聞いた過去の災害の教訓を次の世代に語り継いでいきたい。環境防災科で３年間学ぶことができた知識を今は小学校で出前授業を行ったり地域の防災訓練に参加したりして伝えていく。将来、救急救命士になって環境防災科で得た知識や防災の仕方を活かすことはもちろん、救急救命士になって得た知識や応急処置の仕方を地域の防災訓練などを通して広め、語り継いでいきたい。

後世への語り継ぎ

河合　朱登

1　はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。私のように震災を経験していない世代が増えていく中で、地震による住宅の火災や倒壊、町が壊れていく様子を目の当たりにしたこと、焼けた町の雰囲気やにおいを実際に体感した人は少なくなっている。だからこそ、私は震災の話を聞き、これから起こりうる災害に対応するために、備えるために語り継ぐことをしなければならない。これは過去の災害を風化させないことでもあり、これからの社会の防災力を高めることにつながる。そしてこれから起こりうる災害に対して備え対応していかなければならない。このことから震災当時、今の私と同じ年齢くらいであった母に話を聞き、その経験を語り継いでいく。

2　阪神・淡路大震災

（1）概要

発 生 日 時…1995 年（平成 7 年）1 月 17 日午前 5 時 46 分
地　震　名…兵庫県南部地震
震　源　地…淡路島北部
最 大 震 度…震度 7
地震の規模…M7.3
震源の深さ…16 ㎞
人 的 被 害…死者 6,434 人（関連死 919 人）
　　行方不明者 3 人
　　負傷者 43,792 人
主 な 死 因…圧迫死　窒息死など
住 宅 被 害…全壊 109,406 棟
　　半壊 144,276 棟
　　一部損壊 390,506 棟
火 災 被 害…全焼 7,036 棟
　　焼損 7,574 棟

［神戸新聞 NEXT　参照］

3　母の話

（1）地震発生時

母は阪神・淡路大震災を経験した。長田区の駒ヶ林に住んでおり地震発生当時、朝早く地震が発生したため、まだ寝ていた。揺れが始まるとすぐに目が覚め飛び起きた。下から誰かに突き飛ばされたような感覚が 10～20 秒続いた。揺れが収まると家から外に出て町が壊れている様子を目の当たりにした。家族は全員無事だったが、余震の際倒れてきたタンスをかばった祖父の頭は流血しており、その一瞬の場面が今でも心に残っている。家は大きく傾いており、家の中は洗濯機で回されたように物が散乱していたのだ。近くに保育園があり家族全員で避難した。駒ヶ林は火災の被害は少なかったが北に行くほど町が火に飲まれていく光景が見えた。周りの人たちには殺伐とした雰囲気が漂っていた。泣いている人、茫然としている人、様々な人たちが入り混じっている光景を見て混乱した状態だった。戦争を体験したことはないが、そのような風景であっただろうと考えた。

（2）避難所生活

家の近くの保育所で避難生活を送っていた。元々その地域は長田港に面しており住宅街ほど人は密集しておらず、ほとんどの人が顔見知りであったため、避難所には 10～20 人程度しかいなかった。その当時すぐには救援物資も来ず、住民同士の助け合いで避難所では問題は起きなかった。避難所で一番厳しかったことは寒さであった、特に夜は冷え込んでおりピアノの下で寝ていた。救援物資が来るようになってからも住民同士での問題はなかった。不幸中の幸いで、長田港沿いの道路は通行ができていたため、たくさんの物資が届いており、物資が余るほどだった。しかし、その生活が長くなるにつれて様々な問題が発生した。避難所生活で家を離れているため、空き巣に入られて物が盗まれることがあったのだ、また

家が全壊し住めなくなった人たちが親戚の家や地方に行き元々あったコミュニティが無くなることもあったそうだ。避難所生活が進むにつれて震災前に住んでいた人はいなくなった。

（３）震災後の生活

母は当時高校生だった。地震発生時から日常生活が送れなくなり、しばらくの間避難所生活を余儀なくされた。しかし家が無事だったため他の人に比べると被害は大きくなかった。日が経つにつれて学校が再開され、普段の生活に近づいてきた。しかし地震の影響は大きくあった。授業が行われる中で、学校内で避難している人が生活を送っていることや、家をなくし親戚の家で生活を余儀なくされ学校に来ることが難しくなった生徒もいた。学校の雰囲気は震災前に通っていたものではなかった。

（４）話を聞いて

私はこの経験を聞いて想像することしかできないが、今、自分自身が住んでいる町のことだと思うと恐ろしいことが 26 年前に起こっていたと感じた。当時の母は今の私と同じ高校生である。阪神・淡路大震災が発生したとき、防災の知識もなく、何も備えをしていなければ、パニックになっていたに違いない。今私が学んでいる防災は、自分を守ることにもつながるのはもちろんだが、その学びを誰かに伝えていくことで、社会全体の防災力が上がっていくと考える。当時、神戸には地震が来ないといわれていた人が、凄まじい揺れを感じた時、どのようなことを思ったのだろうか。もちろん高校生だった母も地震が来るとは思ってもいなかっただろう。母の話を聞いて私は２つのことに気がついた。

１つ目は伝えることの大切さだ。阪神・淡路大震災の経験を後世に伝えていかなければならない。震災を経験していない若い世代が増えてくる。このような状況でまた災害が起きると、被害の拡大に繋がってしまう。震災の経験を伝えることで個人の防災力を上げるとともに、地域全体・社会全体で災害に強くなることができると感じたからだ。

２つ目は備えることの大切さである。火災の被害が大きかった長田の町に行った時、区画整理されている場所とされていない場所を比べると違いは明らかであった。今でも震災当時のまま残されている長屋や空き家があり、町の中での防災対策に格差があるのだ。このような対策はハード面であり、個人で解決することは難しい。だが、ソフト面は簡単なことから始められる、１人ひとりが意識することで防災力が上がるため備えることが大切である。この２つのことをこれからも考えながら学んでいきたい。

４　環境防災科

（１） 入りたいと思ったきっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは消防士である父の影響である。小さい頃から消防署に行き、消防の現場の話を聞いて、父の姿がかっこいいと思い、誰かの役に立つことができないのかと思うようになった。2011 年に発生した東日本大震災の時に私が鮮明に覚えていることは、父が被災地に派遣されたときのことである。その頃の私は災害について何も分からず、ただその現場に父が行くと聞いた時、恐怖を感じていた。その後自分自身で災害について調べるようになり、中学３年の時にこの環境防災科を中学校の先生からの教えていただき、この学科に入りたいと思った。

（２） 入学して

私が入学してからまず思ったことは、様々な分野から防災や災害に対して活動されている方の話を詳しく聞くことができること。入学する前に環境防災科について調べて、オープンハイスクールで先輩方の話を聞いてある程度は想像していたが、それ以上に防災はたくさんの職種・職業との関わりがあるのだとわかった。どの立場に自分がなったとしても防災とのつながりがある。そのためそれを自分事として考えることが大切だと知った。またそれを学ぶだけでなく誰かに伝えることの難しさがあることを感じた。また、入学する前は防災や災害を自分事として考えていなかったと感じた。実際に環境防災科に入る前は何か大きな災害が起きたら、新聞やニュースで見たりしても、行動に移すことなく終わっていた。

（３） 環境防災科での学び

３年間、環境防災科で防災を学んできた中で自分にとって大きな変化に繋がったことは防災と英語との関係性だ。日本国外でも大きな災害は続いている、授業の中で阪神・淡路大震災の時に海外からの支援活動があったと学んだ。元々、中学生の頃から英語が好きで海外への関心は強くあったが災害と関係性があったとは気づくことができなかった。２年生の「Active 防災」のネパール地震と JICA 研修で来られた外国人との交流が印象に残っている。

ネパール地震についての授業では、日本では防災教育をすることが一般的になっているが発展途上国ではその教育以前に教育を受けられない子供がたくさんいると知った。また、防災を学んでいたがその

行動が正しいと思ったことで亡くなった人がいるという話を聞いたとき、どのような災害でも想定外のことは起き正しいと思っていたことが逆に間違った行動に転じてしまうことがあることに気づいた。ただ防災を学び備えることだけがすべてではない。災害ではどのような行動が自分の命を守ることにつながるかを考える力、対応していく力が必要だと感じた。

JICA 研修では、来られた海外の方に災害時こんなものがあったら便利であろう物を考えて制作した非常用持ち出し袋(Emergency　Pack)を英語で紹介した。この授業では南米からの研修の方々が来られておりとても貴重な体験をした。日本の防災教育や防災マニュアルに書かれているような非常用持ち出し袋を基本とし、非常用持ち出し袋を作成した。この交流ではグループで研修に来られた方の話を聞くことができた。日本以外の国にも非常用持ち出し袋があり、日本が開発している防災グッズを伝えているそうだ。しかし、日本と比べて防災教育や避難訓練などはあまり力を入れていないため何を入れておけばいいのかわからないと教えていただいた。

この２つの学びを通して感じたことは、伝えることの重要性と難しさだ。やはり国が違えば言語も違う、これは一番の難しさである、いくら防災を伝えたい気持ちがあったとしても言葉が違うと何も伝えることができない。だからこそ私は伝える重要性があると感じたのだ、救えるはずの命を落とさないために正しい情報を伝えていくとによって災害の死者を減らしていくことができるとこの２つの授業を通して感じた。

５　夢と防災

（１） 将来の夢

私の夢はまだ明確な職種は決まっていないが国際的な仕事をすることだ。私は入学当初は消防士になることが夢であったが環境防災科に入り様々な視点から物事を見るようになったことで、世の中には自分が知らない仕事がたくさんあることを知った。なぜ私が国際的な仕事をしたいと思うようになったかは２つ理由がある。

１つ目は私が海外への興味があったからだ。日本には日本らしさがあり、外国にもその国の文化があり、様々なライフスタイルがあることが興味深いと思ったからだ。

２つ目は高校２年生の夏休みカナダに留学に行ったことだ。日本とは違う世界に行った感覚であり、すべての物事が初めてのようだった。カナダではたくさんの国から来た同世代の人たちに出会った、この経験は日本では中々経験できないことだった。

（２）これからの目標

私が卒業してからの目標は英語を話せるようになることだ。これからの生活の中で私は必ず使う機会があると考える。国際的な仕事をする上で英語を話せることは不可欠であり、これは仕事だけで役に立つわけではない。私は英語力を活かし、避難所の運営に関わっていきたいと考えている。避難所には日本人だけが来るとは限らない。被災地が観光地で観光客のほうが多い可能性も考えられる。そのような時、言葉の壁ができてしまうのだ。いくら防災の知識があり、備えをしていても伝わらなかったらその機能は発揮されないのだ。このことから私は３年間で学んだことをより多くの外国の方に広めて、避難所では率先して何か手伝いをすることや、より良い環境を作っていきたいと考える。また、日本人・外国人問わず日常生活においてもコミュニケーションを大切にし、防災の大切さを伝えていきたい。

６　どのような防災を伝えるか

私は一般的に「防災」という言葉は知られているが、「減災」という言葉はあまり知られていないのではないだろうか。言葉としては知っているが「防災」と「減災」の違いについてはっきりとわかっていない人も多いのではないだろうか。そこで私は、はじめにこの違いを伝えていきたい。まず「防災」は災害を防ぐということだ、だが災害を 100%防ぐことはできない。しかし被害を少しでも減らそうと災害について学んだり、地域の防災訓練やハザードマップを確認し、実際に危険な場所がないかなどを調べ自分で地図作ったりすることや、家具の固定や建物の耐震化などをすること。これらをすることで災害による建物の倒壊や人的被害を少なくしようとする取り組みのことを「減災」という。日常生活からこれらを実践していくこと、備えていくことが大切である。今後の災害に対して今私たちができることは、過去の災害の教訓を学ぶことや避難訓練に参加することだ。ここで大切にしておきたいことはコミュニケーションをとることだ。災害時になると道路は寸断され公的な救助を受けることが難しくなる。阪神・淡路大震災は自助や共助により助かった命がたくさんあるのだ、自助はもちろん自分の命を自分で守ることである。共助は共に助け合うということだ。人は助け合いながら生活しているように災害時にも助け合う

ことが大切である。しかし共助と言われているが、日頃から地域のコミュニティや住民同士のコミュニケーションをとっていたからこそできる行動である。普段からのコミュニケーションが災害時とても大切な要素になることを伝えていきたい。

また、私はこんな言葉を耳にしたことがある。『自分の町で被害がないから関係ないやん、自分は災害で死にはせんやろ』と言っている人がいた。どこかで大きな災害がおきるとニュースで取り上げられ目にする機会が多くなるだろう。果たしてそれをニュースとしてただ聞き流すだけでいいのだろうか。私はそうは思わない。もっと自分事として災害について考えていく必要があるのだ。自分がその状況その立場ならどのような行動をとっていたのだろうか。もちろん想定外は起きてしまう。正しい行動をしたが死んでしまう可能性もある。様々な行動の選択に正解はないということをしっかりと覚えている必要があり、最悪の場合を想定することが自分自身を助ける選択ができる。このようなことを私は伝えていく。

７　感想

私は語り継ぐの執筆を通して環境防災科の３年間と自分自身について、改めて考えることができた。今私が生きていることは当たり前のことではないということ、神戸の街が美しく保ち続けられていること、私が環境防災科に入った目的や防災に対する考えをもう一度確認することができた。環境防災科での学びや経験をインプットだけで終わらせるのではなく、アウトプットをしていきたいと思う。これから私のように経験していない世代が増えていく中でいかに防災・減災の大切さ、備えることの大切さを日常生活から考えていきたい。

８　最後に

語り継ぐにあたって私が知らなかった阪神・淡路大震災のことを学ぶことができた。私は阪神・淡路大震災を経験していなくても、教訓から自分事として考えることが大切である。また私が書いたこの語り継ぐのことを忘れずに、様々な人たちに伝えていく。

繋げる

桑田　瑞葵

１　はじめに

私は、阪神・淡路大震災を経験していない世代である。経験をしていないが、話を聞いて語り継いでいき、災害からの教訓をたくさんの人に広めていく使命があると考える。そうすることで、今後発生すると言われている南海トラフ巨大地震での犠牲者が少しでも減少するよう取り組んでいかなければならない。そのためにも、家族の話を聞き、これからの将来に繋がるようにこの「語り継ぐ」を書いていきたいと思う。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

発生年月日	1995 年（平成７年）１月 17 日５時 46 分 52 秒
地震名	兵庫県南部地震
震源地	淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 度）
規模	マグニチュード 7.3
最大震度	震度７
死者	6434 人
行方不明者数	３人
負傷者数	43，792 人
	うち重傷　10，683 人
住宅被害	639，686 棟
主な死因	圧死

（出典　ＫＯＢＥ新聞ＮＥＸＴ）

３　震災当時

（１）祖母の話

当時、祖父と祖母と母、叔父の４人で垂水区に暮らしていた。祖母は、朝５時に起床して家族のお弁当を２つ作っていた。祖父は朝ごはんを食べていた。母と叔父はまだ２階で寝ていた。お弁当のおかずをすべて作り終えてご飯を詰めようとしていた時に、ドンっと下から何か突き上げるような感覚で揺れた。祖母の体感としては、２回揺れたように感じた。机の下に隠れる余裕がなく近くにあった椅子につかまることしかできなかった。揺れが収まり周りを見渡しても真っ暗でどうなっているのか分からなかった。家族の無事を確認するために２階に向かって「大丈夫かー？」と大きな声を出した。すると、２人の声が聞こえてきた。家族みんな怪我をすることはなかった。真っ暗の中、懐中電灯を見つけだし家の中を見てみるとテーブルに置いていたお弁当箱や醤油などの調味料が揺れによりこぼれていた。食器やタンス、大きい家具が割れることや、倒れることはなかった。電気、ガス、水の確認をすると電気と水は使うことができなかった。ガスは、震災直後は使用することはできたがしばらくすると使用することができなくなった。外に出てみると花を植えているプランターが倒れて、土がこぼれていた。家の周りを囲っている塀などひび割れや、倒れることはなかった。

（２）その後の生活

電気と水は地震発生後２日目で復旧して使用することができたが、ガスはまだ使えなかった。当時祖母の家にはカセットコンロがなかったが、近所に住んでいる方がカセットコンロを２つ持っていて１つ貸してくださった。一番困ったのはお風呂で、近くにお風呂に入れる場所がなく隣の家の人の車に乗せてもらい遠いところまで行ったり、プロパンガスが使える家のお風呂を貸してもらったりした。スーパーは開いていて食事には困らなかった。祖母が住んでいる地域はどの家も被害が少なく、周りの住人どうしで震災を乗り越えていったそうだ。

母は、この生活のストレスから 40 度の高熱を出した。しばらくの間は、寝込んでいた。叔父は当時中学３年生で、高校受験を控えていた。垂水区内の高校に入学することは出来たが、祖父が名義になっている、曽祖父が所有していた灘区の空き家が全壊してしまったなどの関係で、入学費用などが１年間免除されたそうだ。卒業式も華やかな卒業式ではなかった。

母は、高校の校舎の一部が崩れてしまい、運動場にプレハブ校舎が建てられ、暖房器具もあまりなく寒い中半年ほど外での授業を受けた。祖父の仕事は、１週間ほどして始まった。通勤するのには、２時間ほど時間が必要だった。

４　祖母の話を聞いて

毎日学校の帰りに祖母の家に行っているが、今まで阪神・淡路大震災の時の話を聞くことがなかったため、当時の状況を知ることができて良かった。現在は電気と水を使うことができ、ニュースやラジオ、携帯電話などで情報を得ることができる。また、近所の方とのつながりがとても大きいと思った。近所に住んでいる人達は今も引っ越しをしておらず、私も交流があり顔なじみである。祖母の住んでいるところは、地域の交流は出来ていると思うが、高齢の方ばかりで避難するときは、援助が必要だと思った。

そして、阪神・淡路大震災前から建っている家が多く、築年数がとても古いため次に起こると言われている南海トラフ巨大地震の時はとても危険であると思った。「耐震工事をやったほうがいいじゃないか？」と祖母と祖父に聞いてみても「お金がかかるし後どれだけ生きることができるのか分からないから」と、諦めている様子だ。家族だが、どうすることが最善であるのかを少しずつ考えていきたい。祖母は足が悪く長時間、長距離を歩くことができない。さらに、避難するにも住んでいる地域の周りは急な坂道ばかりで、災害が起こったときはとても心配だ。

祖母はこの避難生活は辛いように思うかもしれないが、避難生活でしか出来ないことがあり、とても楽しく避難生活を送ることが出来たと言っていた。祖母が楽しく避難生活をすることが出来たのも日々コミュニケーションをとっているからだと思う。私の住んでいる住宅では、あまりコミュニケーションをとることが出来ていないと思う。もっと、地域の人と交流をしていき、積極的に地域の活動に参加していく必要があると思った。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは２つある。

１つ目は、舞子高校のオープンハイスクールに行った時に、「環境防災科」という学科を初めて聞いて、「防災を学ぶことってなんだろう」と、とても興味をもち先輩方の生き生きとした姿を見てかっこいいなと思ったからだ。先輩方に話を聞いてみると「すごく楽しいし、人前で話すことも得意になるよ。」と言っていた。私は、人前で話すことが苦手だったのでこの学科であれば苦手なことも克服することができるとおもった。

２つ目は将来の夢である看護師として働く上で、患者さんの命を救うために防災のことを知っていれば、迅速な対応をすることができ、多くの人の役に立てると思ったからだ。災害が発生したときに何も動けず、助けることができた命を亡くしてしまうのではなく、少しでも多くの人を助けたいと思い環境防災科に入学することを決めた。

（２）入学して

環境防災科に入学して多くのことを学んだ。外部講師の方のお話や、災害が発生する仕組みについて、災害時の心理状態、ボランティアをするにあたって大事にするべきことなど、他にも多くあり、挙げればきりがない。

特に印象に残っていることは東北訪問だ。初めて東北を訪問し、メディアだけの情報ではなく実際に被災した場所では、言葉では表すことができないが、何か空気が違うと感じた。被災した方のお話を直接聞いたときは、被災した方にしか分からない避難生活のことや、震災の状況を聞いてとても衝撃を受けた。東北訪問に行きその場に実際に行くことでしか感じられないものを感じることができた。そして、普段生活していることが当たり前ではないと改めて気付かされた。

変わったと思うことは、人前で話せるようになったことだ。入学する前までは、人前に立つ前に話す内容を決めていても、いざ人の前に立つと緊張して頭が真っ白になってしまい、いつも言葉に詰まっていた。しかし、入学してからは、発表をする機会が多く、だんだんと話したい内容が話せるようになった。一番自分変わったと思ったのは、神戸市医師会が主催している市民フォーラムでの発表だ。普段のクラス内の発表だと 40 人ほどだが、その倍以上の人の前で将来の夢や防災について何をする必要があるかについて話したときには、緊張したが多くの人の前で話すことができ、伝えたいと思ったことを伝えることができた。入学する前の私にはできなかったと思う。この環境防災科に入っていなければ、私は何も変わらないまま過ごしていたかもしれないと思う。これからも防災を学んでいき防災を伝える人になれる

ように努力していきたい。

６　ボランティア

私が力を入れて取り組んだ活動は、２つある。

１つ目は、特別支援学校との交流だ。特別支援学校に行く前までは、障害のある人に対して障害のない人と違うと勝手な偏見を持っていた。しかし、1年生の時に初めて特別支援学校の方たちと交流をし、今まで思っていた偏見が全くなくなった。なぜなら、特別支援学校の方たちと一緒に運動や、たくさんの遊びをしていくうちに障害のない人と同じように遊んでいることに気付いたからだ。そこで私は、外見や障害という名前がついているからということで、人を判断してはいけないと気付くことができた。交流をしてから私の考えが変わり、そしてもっと人と関わっていくことと、障害のある人ない人も同じ人であるということを広めていく必要があると思った。

２つ目は、地域内での清掃活動だ。3か月に1回私の住んでいる団地内で掃除をすることが決まっている。高齢者が非常に多く、足の不自由な人や、腰が曲がっている人などが多く暮らしている。若い人がとても少ないので積極的に参加して、高齢者の方と会話をしたりして交流することを意識している。お話をしていくうちにその人のことが分かり、災害が発生したときあの人は、足が悪かったから助ける必要があると分かる。そして、孤独死をなくす対策にもなると思い、これまでも、これからも、清掃活動に参加していきたい。

７　将来の夢

（１）きっかけ

私の将来の夢は、看護師になることだ。私が看護師になりたいと思ったきっかけは２つある。

１つ目は、小さい時から病院にお世話になることが多かったからだ。一番初めに手術をしたのは小学２年生の時だ。手術の前日、とても怖くてなかなか眠ることができずにいた。そんな時、夜巡回をしていた看護師さんが私に声をかけてくれた。「大丈夫だよ。みんな明日一緒に頑張るからね。」と言ってくださって、周りから見れば普通の声掛けかもしれないが、８歳の私にはすべての心配や不安が一気になくなった。だから私も人に元気を与えられる看護師になりたいと思った。

２つ目は、入院した時に見た赤ちゃん達だ。その赤ちゃんには点滴がついていた。同じ階にいた他の赤ちゃんは、小さい体にたくさんのチューブがつながっている子がいた。小さい体で病気と闘っているこの子たちを傍で支えていきたいと思い、小児科やこども病院で働きたいと思った。

（２）夢と防災

看護師にとって防災は必要不可欠だと思う。小児科、こども病院で働く上で、必要とされる防災力は２つあると考えた。

１つ目は、子供たちの安全だ。子供と言っても年齢の幅が様々であるし、症状も人それぞれ違う。その中で災害が発生したときに子供たちを安全に守ることはとても難しい。もし、電気が使用出来なくなった場合、呼吸器などが使えなくなり自発的に呼吸をすることができない子にはどうするのかなど、看護師同士で共通のマニュアルを理解しておくことや、情報交換をして、誤りがないようにすることが大事だと考える。

２つ目は、防災を教えることだ。小児科やこども病院で入院している子は、比較的長期間入院している子が多く、学校に通えている子が少ない。普通なら学校で防災学習や避難訓練などをして防災について学んでいくが、学ぶことができない。そのために私がしたいと思うことは、小さい子でもわかるように絵本を作ることだ。その内容で必要だと思うことは、地震が発生したときどうやって自分の身を守るのか、そしてどうやって避難をするのかを伝えたい。絵本であれば絵を見て分かることもあるし、興味を持ってくれると考えた。絵本を作る中で気を付けなければならないことは、嘘の情報を教えないことだ。嘘の情報を教えてしまい、命を亡くすことのないようにしていきたい。自分自身で身を守り災害を乗り越えられるようにしたい。

８　感想

この「語り継ぐ」を書いてみて、普段聞くことのできない話を知ることが出来た。叔父の学校の学費が免除されたという話は知らなかったので驚いた。母は、精神的に避難生活がしんどかったと言うのは何度か聞いたことがあったが、詳しく聞くことがなかったので、私は、避難所などで辛い思いをしている人を見つけられるようにならないといけないと思った。プレハブ校舎などを直接見たことがないし、建物

に入ったことがないので寒さを分かることが出来ないというのが残念だ。
　祖母の話を聞いて感じたことは、自分自身もっとコミュニケーション力をつける必要があると感じた。何をするにも話を聞くことや、その人が考えていること、思っていることをくみ取ってあげる必要があると思った。そのためにも、もっと多くの人と関わり周りを広い視野で見られるようになり気を使えるようにしていきたい。そして、周りの人から頼りにされるような人になりたい。

私たちが今できること

河野　凌也

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分に阪神・淡路大震災が発生した。死者は 6454 人にも及んだ。今年で震災から 26 年が経つが、震災を体験した人は年々減少している。そのなか私は震災から７年後に、神戸市で生まれた。そしてこの環境防災科に入学した。震災を経験していない私たちにできることは語り継ぐことだと思う。環境防災科の先生の話や外部講師として来てくださる方の体験などを聞き、それらを同世代や自分より下の世代に語り継ぐことができると思う。なぜ語り継ぐことが必要なのか。今後起こり得る災害から身を守るため。そして過去の災害で失った多くの犠牲を無駄にしないという事だと思う。「語り継ぐ」を、多くの人に読んでいただき防災に興味を持つきっかけになればと思う。

２　阪神・淡路大震災の概要

名　　称　兵庫県南部地震
発生日時　1995 年１月 17 日
震源地　淡路島北部
最大震度　７
地震の規模　マグニチュード 7.3
死　　者　6434 人
行方不明者　３人
主な死因　圧死
全　　壊　109,406 棟
半　　壊　144,276 棟
一部損壊　390,506 棟　「内閣府　阪神・淡路大震災教訓情報資料集阪神・淡路大震災の概要」

３　祖母の話

（１）地震発生

祖母は当時本多聞のマンションの５階に住んでいた。祖母は大きな揺れとともに目が覚めた。祖母が寝ていた布団の上にサイドボードの上に置いていた金魚の水槽が落ちてきた。その水槽を動かした後、まずしたことは叔母を起こしにいくことだった。叔母を起こし玄関に出て隣の家の人とマンションの外に出て避難をしていたが、余震が多く怖い思いをした。

（２）地震発生後

父が祖母の家に様子を見に行き母が妊婦ということもあったので、両親は父の実家である加古川に避難した。加古川はライフラインが止まっておらず安全だったからだ。一方祖母と叔母は同じマンションの１階にある親戚の家へと移動した。マンションの１階で揺れは小さく被害が少なかったからだ。それからライフラインが停止していたので、祖母は水をくむために垂水水道局に並んだり、叔母の会社の人から水を頂いたりした。ライフラインが回復するまでは親戚の家で避難し、入浴は父の実家でさせてもらった。

（３）震災から数日後

ライフラインが戻り、祖母は自分の家で生活を送れるようになった。しばらく経って祖母は長田の町の被害が大きいことを聞き、JR で長田に向かい、長田の町の現状をみて驚いた。そこは火災で燃えた家や建物ばかりで見ていられない状況だった。

（４）祖母の話を聞いて

阪神・淡路大震災当時の話を身近な人に聞くことは初めてだった。祖母に当時のことの質問をするとすぐに答えてくれた。質問をしながら「忘れられない記憶なのだ」と感じ取れた。その中でも印象的だったのが、長田に行き現状を見に行ったことだった。現在とは違い区画整理されてない状態で、長田は火災も酷かった。それを見た祖母の「何も言葉が出なかった」という言葉から、当時の様子が想像できた。普段の授業で来てくださる、外部講師の方の防災に携わる視点ではなく、防災に携わってはいない側からの視点ということもあり、当時の感情が伝わってきた。特に震災を経験していない私に当時の恐ろしさが伝わってきた。

４　母の話

（１）地震発生

当時、母は垂水区の本多聞に住んでいて、兄をおなかに授かっていた。地震発生直後、揺れとともに目覚めた。食器棚と冷蔵庫が前に飛び出し食器が散乱した状態になっていた。

（２）地震発生後

余震が続く中、ライフラインが全滅していたので、父の実家の加古川に車で移動した。加古川はライフラインが止まっていなかったからだ。ガスがプロパンガスだからお風呂にも入れた。神戸と加古川では被害状況に差があった。

（３）震災から数日後

神戸のライフラインが復旧してきたので、加古川から自宅に戻り家の中の片づけをし、余震の中普段の生活に戻っていった。妊娠６か月だったため、まちには出ず祖母の家には行くぐらいの生活をしていた。兄が生まれたころは神戸のまちに復興が始まりだしていた。

（４）母の話を聞いた感想

私が環境防災科に入学してから、初めて母から阪神・淡路大震災について聞いた。兄が阪神・淡路大震災が起きたころに生まれたのは知っていた。妊娠していたこともあって、母は当時震災よりもおなかにいる兄のことで必死だったと言っており、やはりライフラインは妊婦にとって欠かせないものだと思った。今後、避難経路の確認や家具の固定などを家族と欠かさずやっていこうと思った。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは中学３年生の夏だ。当時は、舞子高校の普通科を受験しようと思っていた。しかしある時に当時環境防災科の３年生と出会った。その時に進路について相談したところ、「環境防災科に来たら？」と言われたことがきっかけだった。そこから環境防災科の活動や創立までの歴史を知り、入学したいという気持ちが高まっていった。

（２）入学後にしたいこと

入学してからしたいことが２つあった。１つ目に「防災」についてもっと知りたいということだ。中学生の当時、私は防災という言葉をあまり耳にしなかったし、知識も全くなかった。しかし入学したいという気持ちが強くなるにつれ、もっと知りたいと思うようになった。２つ目に「ボランティア活動に参加したい」ということだ。ボランティアをしたことが一度もなく、当時のボランティアのイメージは、募金というイメージであった。しかし調べていくとボランティアにも様々なものがあって、やってみたいと思った。

（３）入学してから

環境防災科に入学してから、できる限り多くのボランティア活動に参加することを心掛けた。人生最初のボランティアは、西神南で行われた「ふれあい祭り」だ。会場設営やブース展示、地域の方との交流などと多くの役割があった。その時、私は何をしたらいいかわからず自発性が全くなかった。しかし、環境防災科の先輩が率先して動き、さらに親切に指導していただいた。そこで私は、「こんな先輩になりたい」と思ったし、縦のつながりの大切さを知った。失敗が多く、悔いが残ることが多くあったが、ボランティアをすることでやりがいを感じることがあった。それは、地域の方に和菓子を持っていた際に、「ありがとう」という言葉をいただいた時だった。普段何気なく使う言葉に、とても喜びを感じた。初めての経験で、失敗することやわからないことが多々あったが、とても良い経験になったと思う。

この他のボランティアで、印象的だったことは本多聞夏祭りでのボランティア活動だ。２年間参加したが、特に２回目の２年生のときが印象的である。なぜならば、私はリーダーとしてこのボランティアに参加したからだ。ボランティアのリーダーをすることが初めてで後輩も多かったので指示を出す機会も多かった。午前は指示を通すことがあまりできずにいたが、昼休憩のタイミングで３年生の先輩から「自分が動くことも大事だけれど、周りを見て役割を分担することも大事だぞ」とアドバイスをいただいて、午後からの活動では運営の際に的確な指示が出せた。このボランティアを終えて、リーダーとしての役割が理解でき、今後の活動に活かせると思った。

３年生になってからは、新型コロナウイルスによってボランティアに参加することが難しくなった。外部講師の方も足をお運びになられることが難しくなったが、改めて自分がどのように防災と関わりたいかを考えることができた。さらには新型コロナウイルスについて深く学習することができ、災害は自然災害から起きるだけでなく、ウイルスによっても引き起こされるのだと知った。

６　夢と防災

（１）将来の夢

私の将来の夢は、教師になることだ。きっかけとして多くの先生に憧れを抱いたからだ。小学生の時にこの感情はなかったが、中学に入ってから、担任の先生や顧問の先生と接していくなかで、こんな先生になりたいと思うことが多かった。その中でも顧問の先生は、部活での技術指導だけでなく、進路について相談していただいたり、悩みも聞いていただいたりと、生徒のことを１番に考える先生で、私も生徒と深く関わるような先生になりたいと思うようになり、私の目標となる先生像となった。

（２）防災とのかかわり方

教師は生徒の命を預かる、重大な職業であると思う。そうした中で、もしも学校で地震などの災害が起これば避難誘導は教師の役割となる。災害時の教職員の対応によっては、生徒の命を落としかねない。だからこそ教師は防災に重点を置くべきだと思う。

災害サイクルに沿って考えると、まずは災害の予防として、学校内の危険な箇所の改装や感震ブレーカの設置などを要請する。これは災害発生前にすることで死者を出さない重要なことだと思う。さらに月に一度避難訓練の時間を取り、生徒だけでなく教師も避難時の動きを体に染みつけさせる。そうすることで避難経路を覚え、避難の仕方がわからないことは必ずなくなる。しかし事前に避難訓練をしているから問題ないとは決して思ってはならない。なぜなら生徒はパニックで体が動かなくなることやけがをするリスクが高くなるからだ。その時に教師が的確かつ分かりやすい指示を送ることで生徒が命を落とすリスクが低くなると思う。つまり的確な指示や誘導を行うことが緊急対応となる。ではどのようにして教師が防災の知識を持つか。自分たちのように防災を学んでいる人は数少ない。それならば教師同士で避難時のことについて話し合い、互いに意見を共有することや防災教育を学校が取り入れることが大事だと思う。次に、復旧として生徒の身元の確認をし、学校に登校できる人数に応じて学校再開の日程を決める。生徒あっての学校だからこれは疎かにしてはならないと思う。最後に復興として、物的被害が酷かった箇所の改装や補強を要請する。これらは次の災害に備えるという点で必要不可欠となる。

（３）防災教育

防災教育する際に、気を付けなければならないことは、誤った情報を伝えないことだと思う。誤ったことを教えてしまうと、最悪の場合生徒たちの命を落とさせてしまう原因になりかねない。だからこそ、まず私にできることは防災について正しく知識をつけることだと思う。

私が防災教育をどのように携わるかというと、まず防災を専門として学習する学科は数少ないので、総合的な学習の時間などを使い全学年が防災教育する機会を作ってもらう。自分たち教師がずっと話すのではなく生徒たちに何かお題を出し、まず各自で考えた後グループに分かれ話し合ってもらう進め方をする。考え方はそれぞれあるが、その中には間違いや改善が必要な場合もある。そこで防災を教えていく立場の自分が正しい方法などを伝える。

（４）大切にしていきたいこと

防災に限らず、常に備えあれば憂いなしということを大切にしたい。防災でよく言われる言葉であるけれど、普段の生活から準備をしていれば失敗する確率は低くなるからである。普段から備えをすることでこれが習慣になり、自分の命を守るという自助にもつながる。これらを自分のみに留めず、生徒たちに伝えていきたい。

７　執筆を終えて

この「語り継ぐ」の執筆をする前は自分にできるのかと不安があった。しかし執筆をしていく中で、阪神・淡路大震災、防災、そして自分と向き合うことができた。特に阪神・淡路大震災について話を聞くいい機会になったし、当時の教訓を決して忘れてはいけないと強く思った。自分だけが知っているのではなく、知らない人へと伝えていくことが大事である。その伝え方として、この「語り継ぐ」が震災を風化させない手段になると思う。災害を経験していなくても防災について学び語り継ぐことで誰かの命を救うことに繋がるということが分かった。

環境防災科で学んだ知識や技術は必ず将来に役立つだろう。３年間防災の知識や技術を持ったからと言って誰かを救うことや自分の命を必ず守れるかはわからない。しかし可能性がないことはない。日々の積み重ねによって左右されるからだ。防災について学んできたことを自分のみに留めるのはもったいないと思うし、語り継いでいくことが自分たちのできることだと思う。誰かへと語り継いでいくことが、その人を救うことに繋がっていくし、メリットの方が多いと思う。だから、私は将来教師の立場で生徒に語り継いでいきたい。

これから生きていくなかで、今後災害大国である日本で災害に遭うことがあると思う。今のままでは災害時には対応できない。だからこそ、これからも防災について学びを深め常に防災と関わり、自分だけでなく、家族や友人に伝えていけるようになりたい。

私たちの使命

古賀野　琢翔

１　はじめに

いまから 26 年前の 1 月 17 日、罪のない多くの命がうばわれた。私は、阪神・淡路大震災を経験したことがないが、当時経験した人からお話を聞き、それを皆さんに伝えることで風化に歯止めをかけ、少しでも多くの方々に防災や減災に興味を持ってもらい罪のない命が犠牲にならないことを願っている。

２　阪神・淡路大震災

（１）父の話

当時、父は社会人 1 年目で神戸で冠婚葬祭の仕事をしていた。父の実家は神戸市北区にあり、あまり被害は受けなかったという。地震があった日の朝、揺れで目を覚ました。何が起こったのか分からなかったためリビングにあるテレビを見ようとしたら、地震の影響で倒れていて電源が入らなかった。状況があまりの見込めないまま、いつものように朝 8 時に車に乗って神戸駅周辺の職場へ向かった。その道中、岩石が転がっていたり、煙が上がっていていたり、道が隆起していたりして「これはおかしい…」と思った。会社につくと本来、来ているはずの社員が地震の影響で誰も来ていなかったそうだ。当然、このような状況で仕事をできるわけがなくその日は神戸市北区の家に帰った。帰りの道中、被害の状況を知るために遠回りして帰った。そこで父が目にしたのは、神戸の悲惨な現状と災害の恐ろしさだ。父はその光景を見てやっと「阪神・淡路大震災」がもたらした被害と神戸の置かれている現状を理解した。

父が震災当時一番印象に残っていることは「長田区民の温かさ」だそうだ。皆さんもご存じの通り長田区は震災時火の海となった。長田区民に限らず大切な家や財産を失った人はたくさんいるだろう。ある日、父は長田区にあるご家庭に仕事でお邪魔した。その家は地震と火災の影響で 1 階部分がつぶれ柱がゆがみ家が傾いていた。その上、度々襲ってくる余震の影響で家が揺れ、決して安全といえるような状態ではなかった。毎日、生きるのが精一杯なのは被災されたどの家庭も同じだが長田区民は特にしんどかったと思う。そのような中、お邪魔したご家庭は父にコーヒーを出してくれた。それを見て父は言葉がでなかったという。なぜなら、苦しい思いをしているはずの長田区民が当時、貴重な水を使ってコーヒーでもてなしてくれたからだ。たかがコーヒーかもしれないが父はとてもうれしかったそうだ。その後も神戸のいろいろなご家庭に行ったが長田区民ほど人を思いやって感謝してくれた家庭はなかったそうだ。

（２） 母の話

私の母は当時、神戸市垂水区に祖父・祖母・叔父・叔母を含む家族 5 人で暮らしていた。母の住んでいた家は当時築 40 年は経っていて木造で耐震性もあまりなかったそうだ。地震があった当日、母は「ゴゴゴゴゴゴ」という今までに感じたことない揺れが襲い目を覚ました。幸い、ケガは無かったがリビングに行ってみると食器棚から食器が散乱し、床一面に割れた破片が落ちていた。その光景を見たとき、「これはただ事ではないな。」と感じた。しばらくして家族全員の安否を確認し外に出てみると倒壊や半壊している家がそこら中にあり、これは夢か現実かしばらく分からなかったそうだ。母と同じように外に出てきていた近隣住民の噂では「地震の影響で淡路島が海に沈んだらしい・・・」とか、「ポートアイランドが海に飲み込まれた、」とか様々なデマが広まっていたそうだ。母の家は壁にひびが入っていたもののそこまで大きな被害は受けなかった。しかし、水道やガス、電気などのライフラインが地震の影響で断たれたため近くにある小学校に水を汲みに行き、当分の間給水車からもらう水と池の水で生活していたという。食器にはラップを敷くことで食べた後に水を使って食器を洗わなくて済むようにしていた。母は阪神・淡路大震災を経験して「あらかじめ食料品や生活必需品を備えておけばよかった。」と言っていた。

（３） 話を聞いて

私は今回両親から話を聞いて、神戸の街や長田の町がとても大きな被害を受けていたことを知ることができた。もともと、学校の授業や「長田の街歩き」で阪神・淡路大震災について分かっていたつもりだったが両親の体験談を聞いていくうちに自分が想像していた以上に大きく、残酷な被害を受けていることを知り、あらためて自然災害の恐ろしさや防災の大切さ、地域コミュニティーの重要性について理解をを深めることができたと思う。

父から「長田区民の温かさ」について聞き、震災直後、家や財産・大切な人を失い辛いはずの人たちがそんな顔を一切見せず町の復興と自分たちの生活の再建のために一生懸命頑張っていたことを知り、今僕たちが当たり前に生活できていることは実は当たり前ではなくて幸せなことだと実感させられた。ま

た、今から 26 年前に被災された方々が協力し合いながら、震災で壊れた「神戸の街」を地道に復興させてくれたことを学び、私は阪神・淡路大震災を経験していないが神戸に住んでいる以上、被災された方々への感謝の気持ちを忘れず私も地元のために阪神・淡路大震災の教訓を風化させることなく伝え続けていかなければならないと思った。

母の話で印象に残っているのは、「備えることの大事さ」だ。阪神・淡路大震災のように、いつ大規模災害が発生するかわからない。「発生してからでは遅い。」ということを母の経験談から学んだ。そのためこの環境防災科で 3 年間私たちが学んできた防災・減災の知識は決して無駄ではなく、むしろこれからの時代を生きていく上で必ず必要ということを実感した。得た知識を自分自身で実践することはもちろん、周りの人たちにアウトプットしていくことが高校で 3 年間「防災」を学んだ我々の使命だと私は思う。阪神・淡路大震災で犠牲になられた方々の命を無駄にしないためにも「教訓」と「防災」を少しでも多くの方に普及させていくことがこれからの課題だと思う。

３　環境防災科と私

（１）出会い

私はもともとあまり防災に興味はなかった。私が中学 2 年生の頃、勉強や他のことをする余裕がないほど部活動に全力だった。ヘトヘトになりながら家に帰宅し決まった時間に決まったラジオを聞きながらグローブやスパイクを磨き、明日に備えることが毎日のルーティーンだった。いつものように野球道具を磨いていると突然聞いていたラジオが中断され地震速報が流れた。そう、熊本地震だ。災害を経験したことなかった私はラジオから流れる被災者の戸惑いの声を聞き「自分にも何かできることはないか」と、思ったがどうすることもできなかった。今まで勉強も部活動も中途半端だった自分は、自分がやりたいことをできるのは当たり前ではないことに気づき、その日以降勉強も部活動も妥協をせずに頑張った。中学 3 年生になり進路を決める時期に舞子高校環境防災科のオープンハイスクールに参加した。そこで先輩方に防災の魅力と重要性を教えてもらい「自分も先輩みたいになりたい。」と思ったことを覚えている。それが私の転機だといえるだろう。

（２）学び

環境防災科に入っていろいろな体験をさせて頂いたが、最初に経験したボランティアは今でも忘れられない。舞子高校環境防災科に入るまで私はボランティアの経験はなかった。実際にボランティアをしてみると恥ずかしさと大変さで自分が想像していたものとはかなり違った。

１年生の時は外部講師の多さにとにかく驚いた。様々な経験をされた方々がその経験を私たちに伝えてくれるのだがレポートを書くのがとにかく大変で一言一句メモを取り、より良いレポートを作れるようにこだわった。

自分の夢を明確にしたのが「消防学校体験」だ。私はそこで消防士の正義感に憧れ自分もそのような存在になりたいと思った。もちろん憧れだけでできる仕事ではないということは消防学校体験で身をもって実感した。だからこそやりがいのある仕事だと思ったし今の自分に適していると感じた。

（３）環境防災科で学んで

私は環境防災科に入って本当に良かったと思っている。高校 3 年間で経た経験は環境防災科に入ったからこそできたことばかりで自分の明確な将来像を見つけることができた。私が防災を学び感じたことは、今の日本には絶対防災は必要だということだ。将来予測されている南海トラフ巨大地震の被害を最小限に抑えるためにも、異常気象が連発し日常茶飯事に災害が発生している日本のためにも防災は切っても切れない関係だ。しかし、私が見る限り全国に防災の重要性はまだまだ普及されてない。少子高齢化社会にある日本で若者が中心となり災害の恐ろしさと防災の重要性を伝え続けたらいつの日か災害による犠牲者が０になる日がくるだろう。今は夢物語だが環境防災科の OB・OG が今後さらに増え、先ほど言ったことが実現できる日が来ると思っている。その日が来るまで、「防災」を伝え続けたい。

３　将来の夢

私の将来の夢は地域に寄り添える消防士になることだ。私が消防士になって力を入れていきたいことが２つある。

１つ目は、「地域コミュニティの重要性」と「自助・共助」の大切さを地域住民に予め伝えることだ。私は環境防災科に入学し様々な防災・減災の知識を学んだ。その中で一番印象に残っていることは災害時、「公助」だけでは回らないということだ。この話は神戸消防の方が私たちが高校１年生の時に講義で教えて下さったことだ。講義して下さった消防士の方々は阪神・淡路大震災が発生した当時、実際に消火

活動や救助活動にあたっていて、その現状を目の当たりにしたという。私はその話を聞いて衝撃を受けた。なぜなら、災害時に限らずもしもの時には必ず消防や警察、自衛隊の方々が助けに来てくれると思っていたからだ。かつての私のように、もしもの時「公助」を頼りにしている人は日本中にたくさんいると思う。もちろん「公助」に頼ることは悪いことではないし全然かまわないと思う。しかし、公助ばかりを当てにして災害時、消防や警察が来なかったとき、その人はひどく失望するだろう。そのため私は「自助・共助」の重要性を地域住民にあらかじめ訴えると共に「地域コミュニティ」を大事にしてもらい災害時に「公助」なしでも自立できる街づくりを目指していきたいと思っている。

２つ目に、災害弱者を災害から守りたい。災害弱者とは高齢者・乳幼児・妊婦さん・手足が不自由な人・障害のある人・外国人などだ。日本は高齢化が進み今後さらに高齢者の割合が増えると予想される。そのような高齢社会の日本に南海トラフ巨大地震やその他の災害が襲ったらまず、第一に犠牲になるのが高齢者を含む災害弱者の方たちだ。そのような災害弱者を災害から守るために私は消防士になって「予防・啓発活動」に力を入れたいと考えている。そのために環境防災科で学んだ知識を活かして災害の恐ろしさと防災の重要性を地域の防災訓練や学校の避難訓練を通して発信し、将来起こりうる南海トラフ巨大地震の犠牲者を最小限にしたい。

４　語り継ぐ

私は大きな災害を経験したことがないが、当時の体験談を父や母に聞いたり、環境防災科で３年間学んで「防災の重要性」と「教訓をつなぐ」ことの大切さを再認識した。神戸に地震がこないといわれていたのに阪神・淡路大震災が発生したように、「日本」という国に住み続ける以上、地震や津波などの自然災害と共存していかなければならない。この地震大国で生き抜くためには防災は欠かせない。当たり前だが、自然災害は罪のない多くの命を奪っていく。阪神淡路大震災や東日本大震災に次ぐ新たな自然災害が日本を襲った時、犠牲者を最小限に抑えるためには「防災」を全国に普及させておく必要があると思う。それを行うのが環境防災科で学んだ人の使命だと思う。

私は「防災」を全国に普及させ災害時、犠牲者を最小限に抑えるために３つ考えがある。

１つ目は、阪神淡路大震災や東日本大震災の教訓を風化させずに後世へとつなぐことだ。これをするためには被災者が実体験を語る必要がある。被災者の中には大切な人を失ったりして嫌な記憶を思い出したくない方もいるだろう。私は災害を経験したことがないから被災者の方に気安く教訓の語り継ぎを強要することはできない。しかし、被災した実体験を語ることによって防災力向上につながり 1 人でも多くの命を救えるかもしれない。そういう意味では教訓を後世へと伝えることはとても意義のあることだと思う。そして伝えられた側もそれを周りの人へと伝えつなげる義務があると思う。教訓を伝えてくれた人は明るくふるまっていても必ず苦しい思いをしてきているはずだ。それでもその教訓を伝えてくれたのだから自分だけの知識にするのはもったいないし、語り部の方に失礼だ。

２つ目は、「地域コミュニティ」を使った防災だ。私は環境防災科に入学し３年間防災について学んだが災害時に一番重要なのが地域コミュニティだと考えている。なぜなら、公助任せの災害対応や自助だけでは限界があるからだ。阪神・淡路大震災の時に公助がキャパオーバーで救助や救出を求めている人、全員を救えなかったように大規模災害になると公助や自助だけでは罪の無い命は守れない。そのような時に活躍するのが「共助」だ。先程も述べたが「共助」は公助や自助でまかないきれないところを補完してくれる。そのため共助は公助や自助に比べて災害時、とても有能だと私は考えている。しかし、大規模災害が発生した時のような緊急時に共助を使おうと思ったら平常時からの「地域コミュニティ」が重要だ。具体的には、日頃からのご近所付き合いや、挨拶などのコミュニケーションなどがある。その際に、危険な場所の共有や天気の話、最近発生した災害の痴話ばなしをすることでその人自身の防災意識につながり、また、その人が家庭にその話を持ち帰り話題にすることで家族全体の災害に対する考え方が少しでも変わってくると思う。そのような些細な情報共有が大きな災害に立ち向かうためにとても大切だと防災を学び感じた。

３つ目は、SNS を有効に使うということだ。2016 年に発生した熊本地震では SNS で「動物園からライオンが脱走した。」というデマが拡散され被災者を混乱させた。今の時代、誰でも気軽に SNS などに投稿できる時代になってきているということもあり、熊本地震の時に限らず様々な場面でデマが拡散され情報の取捨選択が利用者に求められている。しかし、本来 SNS は使い方さえ守れば「防災」を普及するのに非常に有効な手段となるだろう。この「SNS」と「防災」が協力すれば災害大国日本で災害の主導権を握ることができると私は考えている。しかし、それを実現するためには今よりも多くの人に防災について知ってもらい SNS の使い方を守ってもらう必要がある。今の段階ではまだ実現不可能だろう。これを実

現可能にするには国民が SNS を味方につけ SNS 自体の信憑性を上げることがマストだ。もしこれが実現し、国民が SNS を味方につけることができたならばデマが拡散され多くの人を混乱させた影響力と同様に正しい情報が発信され人々を未然に災害から救うことのできる影響力を手にすることができるだろう。

５　語り継ぐを執筆して

今回、語り継ぐを執筆し環境防災科で３年間学んだことを振り返ると共に知らなかったことを知ることができたり、防災の重要性を再認識するきっかけになった。執筆するにあたって３年間の外部講師の方から学んで作ったレポートをもう一度すべて見返した。見返しているうちに１年の頃は言っている内容が理解できていなかったり、外部講師の方がお話してくれたものを完璧に自分のものにできていなかったが、高校３年生になると自分の意見や考え方を持てるようになり、より防災の奥深さを感じることができた。実際に震災を体験した人からお話を聞き私たちが学んでいることは将来、必ず誰かの役に絶対役に立つと確信することができた。阪神・淡路大震災の教訓や今までに語り部の方々が私たちに託してくれた知識を活かして高校を卒業し、社会に出てからも何らかの形で「防災」に携わり、もし、自分の住む地域で災害が発生したら自分が市民のリーダーとなり積極的に避難所運営や復興事業に貢献していきたいと思う。そのためには自分が災害で死んでしまったら元も子もない。災害時に自分の命だけでなく周りの命も守れるように普段からの備えを欠かさず「自分は大丈夫。」という安易な考えやその場任せの行動はせず、「災害は容赦なく罪のない命を奪っていく。」ということを常に頭の片隅に置き環境防災科で３年間学んだことに誇りを持ってこれからの毎日を過ごしていきたい。

追記

上記で私は消防士になりたいという夢を語った。この追記を行っている 12 月現在、神戸市消防局で来年から働くことが決まった。私が夢を叶えることができたのも環境防災科に入学し、最高の仲間と先生方に出会うことができたからだ。この恩を忘れず、これからは防災に力を入れ今後起こり得る災害から神戸市民を守れる消防士になりたい。

つなぐ

小林　和陽

１　はじめに

1995 年 1 月 17 日に起きた阪神・淡路大震災を経験していない。震災が起きてから長い年月が経ち被災地である神戸でも震災を経験していない世代が増えている。そして、それと同時に震災の風化が問題になっている。今後も震災の知らない世代が増えていくがその人たちに実際にあった震災の出来事を語り継ぎ風化させないようにすることができる。だから、自分のできることである語り継ぐということをして震災が起こっても同じようなことにならないようにしたい。

２　概要

発生日時：1995 年（平成 7 年）1 月 17 日　午前 5 時 46 分
震源地：淡路島北部　北緯 34 度 36 分　東経 135 度 02 分
マグニチュード：7.3
死　　者：6,434 名
負　傷　者：43,792 名
行 方 不 明：3 名
住 家 全 壊：104,906 棟
住 家 半 壊：144,274 棟
全　半　焼：7,132 棟
電 話 不 通：30 万回線
水 道 断 水：約 130 万戸
ガ ス 停 止：約 86 万戸
停　　電：約 260 万戸
火　　災：285 件　　［気象庁ホームページ］

３　母の話

（１）震災当時の話

震災当時母は神戸市西区に住んでいた。一軒家の２階で眠っていたら揺れを感じたそうだ。そして、1 階に行くと食器棚のお皿などが割れていたり学校に行く途中の道路に亀裂が入ったりしていたそうだ。ほかにはテレビが落ちたりして自分の部屋が散らかった状況だった。しばらくしてからテレビを戻して電源を入れたらいろいろなテレビ局が神戸の風景を中継していた。最初は映っているのが神戸だと気づかなかった、まさかそんな事態になっているとは思わなかったと話していた。そして家がなくなった人が一時的に住んでいた仮設住宅は実は家の近所にあってそこにはたくさんの人がいたと言っていた。

（２）祖父の話

祖父は当時、大阪にある会社に勤めていた。会社までいつも車で出勤していた。ニュースで現地の映像を見ていた時に出勤時間になり、家を出た。神戸の街がどのようになっているかあまりわからないまま車に乗り、会社に向かった。西区のほうは被害が少なく、いつもの風景が広がっていた。大阪に向かっている途中、渋滞があると知って高速道路を降り、下道で向かっていると、徐々に知っている光景が無くなっていった。倒壊した家が多くなっていき、この時間にしては多くの人が歩いていると気づいた。ラジオをつけて現状はどのようになっているか確認しようとした。ラジオから聞こえた情報で一番驚いたのは高速道路が横倒しになっていることだ。それを聞いて、渋滞の原因を知った。進んでいくにつれ、車の量も増えてなかなか進まなくなっていった。いつもでは考えられない状況だったので、そこから近かった広場に車を止めて会社に連絡した。その日は会社を休み、中央区の友人の家に向かった。家は無事に見えたが、訪ねた時は割れたお皿やガラスの破片などを片付けていた時だった。片づけを手伝って、ある程度片付いて家の外に出た。ガレージのシャッターが壊れていて車を出せず、買い物に行けないというので車に乗せて近くのスーパーに向かった。しかし、スーパーの前に着くと多くの人がいて買い物ができる状況ではないと判断して、別のスーパーに向かおうとしたら、神戸市のスーパーはほとんどがこんな感じだろうといったので芦屋のほうまで行った。必要最低限の食料と水と、ろうそくなども買った。祖父も一応食料と水を買ったそうだ。

友人を家に送って、ほかの地域の被害状況を調べるため、神戸市内を走り回った。

（３）話を聞いて

自分が普段住んでいる町には道路に亀裂が入っているところがあり、それが長年経っている震災が原因だったとは知らなかった。今でも祖父、祖母の家には少し壁に小さなひび割れのようなものがありそれも阪神・淡路大震災でできたもので自分の周りにはまだたくさんの震災の爪痕があると知った。

小学校のころ友達たちと楽しく遊んだ公園のある場所がもとは仮設住宅があった場所だったとは思ったこともなかった。しかし、話を聞いて色々調べてみたら写真や当時の新聞記事などもたくさん出てきて本当に地震で家がなくなってしまった人たちがここでしばらくの間過ごしていたと実感した。

４　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思った理由は、中学３年の時進路に悩んでいて時に担任の先生に舞子高校の環境防災科はどう？と言われて資料などを読んでみて夏休みのオープンハイスクールに行って実際にどんな活動をしているか、環境防災科の授業内容など聞いて、ボランティアなど人の役に立つことや地震が多い日本で災害時の対策なども学びたいと思い選んだ。

（２）環境防災科に入学して

環境防災科を受験すると決まってからは防災のことを少しは勉強しようと思い、図書室や先生方にどんな状況だったかを聞きまわったりした。

しかし、防災の授業や講義を聞いて、初めて聞くことや事前にしておくとよいことなど知って、まだまだ知らないことが多いことを自覚した。もっと真剣に取り組まなければならないと感じた。

そんな時「防災に正解はない」という言葉を聞いた。その言葉を聞いてはじめはとても驚いた。でもその言葉の説明を聞いて納得した。日本では地震が起きたら机やいすの下に隠れる、と小学校から教えられている。外にいた少年がそのことを教わり、地震が起きて建物の中に入りその建物が倒壊し巻き込まれ死亡したということがあった。ただ知識だけを増やしただけでは十分ではない。その時どのような「予想していなかった」ことが起きるのか、その事態をどう乗り越えるのかと考えておくことだけでなく、事前にどのようなことが起こる可能性があるかを調べておくことも大切なのだと知った。

（３）ボランティア

環境防災科に入学してから様々なボランティア活動に参加し色々な人と関わった。地域の祭りや募金活動など、わからないことや知らなかったことを教えてもらったりしていい経験だったと思った。

南淡路の中学校に出前授業のボランティアに参加した時、どのような内容にするか、パワーポイントを作成するかなど話し合っていた時、先生に間違った知識を教えてはいけないと言われた。間違った知識を正しい知識と思って教えられたとおりにしたら命を落とす危険があると言われ、自分が伝えることはとても重要で、その後の人生を変えてしまうのではないかという責任感がいきなり襲ってきた感じがした。それまでは、間違ったことは教えないということは当たり前のことだから詳しく考えずにいたが、当たり前だからこそとても重要であると理解した。そのうえで責任感を持ち、出前授業を行うことができた。

地域の祭りのボランティア活動や募金活動を行っていた時に、話しかけてもらったことが何度もあった。阪神・淡路大震災について思ったことや、被災後どのような行動をしたか、どの物資が必要かなど、１人ひとり違う考えを持っていた。話した後には、聞かせてもらった側なのに「ありがとう」と感謝されることも何度かあった。その時はなぜ感謝されたのかがわからなかったが、本や講義などで辛いこと苦しいことは自分１人で抱え込まずに誰かに話すことで楽になると聞いて、数 10 年たった今でも辛く苦しい話を聞かせてもらったのだと分かった。その後のボランティアからは、思い出したくもない出来事の話をしてもらっているという感謝の気持ちを忘れず、災害の教訓を伝えていかなければと思った。

そして今考えると、初めて参加した地域の祭りのボランティアでは、震災を経験した人と会話をしたり、主催者の人たちと会話したり知らない者同士会話したりしている様子を見て、こういうところが震災時共助につながっていけるのではと考えたりするできた。

５　東北訪問

東北訪問は１年生の時に参加した。この時初めて被災地に足を踏み入れた。東日本大震災当時は小学２年生だったが、テレビで見た東北の状況を見てとても驚いた。初めは何がどうなっているのか詳しいことがわからなかった。その後時間が経って少しずつ何が起きたのか理解した。駅前での募金活動をし

ている人たちやいろいろな有名人が地域の小学生にランドセルをプレゼントしたなどニュースで見て自分も何かできないかを考えたが、当時は募金をするしか考えられなかった。

高校になり防災のことに興味を持ち、環境防災科に入学して初めて自分が被災地に訪れることができた。そして実際に被災されたところを見たら、未だに周りに建物もなく走っている車は工事用のダンプカーのみの状況だった。

大川小学校では実際に当時その学校に通っていた娘を津波により亡くした佐藤さんから、震災前のその場の写真と照らし合わせてここではどんなことがあったか詳しく語っていた。震災から7年経っているとはいえ、とても辛いことなのに話を最後まで伝えていただいた。その小学校を解体するべきかそのまま残しておくべきか議論になったと聞いて、やはり辛いことなのだろうと改めて感じた。

宮城県多賀城高校の生徒たちとの交流では、同い年くらいの生徒たちが当時はどんな風景が広がっていたか、ここまで津波の水が高かったなど、当時の様子や想いなど聞くことができた。多賀城高校の生徒も当時は小学生であったが、その光景は鮮明に覚えていると言っていた。どれほど衝撃的だったか、当時の動画を見ながら語ってくれた。

６　南海トラフ地震

南海トラフ地震は100年～150年周期で起こっており、今後30年以内で70%～80%の確率で起こり、大きな被害があるとされている大型の地震である。ライフラインや交通施設等が被災し、建物倒壊による要救助者は約37,000人、津波による要救助者約29,000人と予想されている。また、膨大な避難者・帰宅困難者が発生するとともに、物資や医療機能等が大幅に不足する。その影響は被災地のみならず全国に広がっていく、とされている。

このような被害が予想されているが今からでもできる対策はある。例えば、非常持ち出し袋を準備しておく、家具の固定を行う、避難所やどこで家族と合流するか話し合っておくなど今からできる対策はたくさんある。

そして、阪神・淡路大震災や東日本大震災のように「まさか地震が起きるとは思わなかった」など想定にとらわれてはいけない。知識としては正しくてもその状況において間違った選択になることも理解しておかなければならない。今からでも１人ひとりが防災と積極的に向き合って行動すれば１人でも多くの被災者が減らせることができる。そのための行動の見本となるために環境防災科の生徒である私たちが率先して行動していかなければならない。

南海トラフ巨大地震対策検討ワーキンググループ － 内閣府防災担当

７　防災の重要性

日本はとても自然災害が起こりやすい国だ。しかし災害に対しての危険性を知っていてもしっかりと防災を学ぼうとする人は少ない。だから、災害の被害に遭う可能性も高い。今まで起きた様々な自然災害の教訓を活かして同じような被害に遭う人を出さないため、１人１人が防災としっかり向き合って、いろいろな状況を思い浮かべてどう行動するか考えればいい。災害時に、「運動が得意であっても不得意であっても」、いざという時自分の命を守るためにどうするか考えることはできる。そして、避難所などで必ず国からの援助を受け取れるとは限らないことも想定に入れて、その時に応じた最善の行動をとれるように非常持ち出し袋の中身なども確認しておくべきだろう。ただどんなに入念な準備や考えていた行動が災害時にできたとしても、状況によっては間違った選択になってしまう。そのようなときに落ち着いて考えて行動しなければならない。

防災や減災といった言葉を聞いて、日本に住んでいる人すべてが自分のことと考え、災害時の行動や防災の知識を増やすことができるだろうか。そのために、語り継ぐことが必要だと考えている。防災・減災を自分のことだと考えていない人や興味のない人に対して、災害の危険性を考えてもらうきっかけとしたい。語り継ぐ上で、大切だと思うことは、「簡潔に伝える」ということだ。これは今までも多くの人が行ってきた当たり前のことだが、伝える際にはとても重要なことの１つだと思っている。興味のない人に話をしても、その場では覚えていても時間が経過するごとに忘れていってしまう。そして、教えるだけでなく教えたことを行動に移すようにすることも、聞く側にとっても話す側にとっても重要なことである。

このように考えるといった行為は人間であるからできることだ。その状況にあった最善の行動をとって命を守る行為をしてもらいたい。今はネット環境が整備されていて様々なことを知ることができる。大半の人が持っているスマートフォンなどで、震災が起きたらどのように避難すればよいのか、どこに

行けばよいのかを簡単に調べて覚えておくだけでも実際に被災した時生き延びる可能性が増す。スマートフォンやパソコンなどで簡単に防災について調べることができる時代だ。そして、家族と話し合いをする機会を持つことも大切だ。

８　自分の夢

私の夢はまちづくりに関わることができる神戸市市役所のまちづくり課で、生まれ育ってきた神戸の街を災害に強く住みやすいまちにすることだ。長田のまち歩きの授業で様々なことを学んだ。古い木造建築が多く避難するときの道が塞がってしまったことや、家が燃えてその火が隣の家にどんどん広がっていき多くの命を失ったことを知って、日常を過ごすまちの危険な箇所を知った。学校から帰る途中にある小学生の時よく鬼ごっこなどして遊んでいた住宅街を通った時、古い木造建築の隣の細い道が目に入った。その道は公園までの近道としてよく使っていたが、時々前から通行人が来ると来た道を戻って片方が通りきらないと進めないほど細い道だ。その道は散歩などで利用している人がおり、災害に遭った時危険だとは考えていないだろう。長田のまち歩きで、どのような被害があったか知るまでは自分も何も考えずに利用していたと思う。まちに潜む様々な危険性を見つけることができた。そこに住んでいる人は知らないから、わからないから利用しているが、実際に震災が起きたらけがをして動けなくなったり通行できなくなったりするとは想像もしていないだろう。しかし、まちを作る時点で防災視点を取り入れたら被災時に多くの人が助かるのではないかと思った。家とは子供からお年寄りまでの多くの人が安心して過ごせる場、一番油断する場所だからこそ、特に注意をしなければいけない。家具の固定や避難するときに必要なものをまとめておくなどはできるが、家の耐震化や道路、歩道の整備は簡単にできるものではない。このようにまちそのものでも問題点がある。多くの人は街に潜んでいる危険を知らないが、多くの人が安心して暮らすことができて被災時には多くの人が助かるようなまちづくりに関わりたい。

９　語り継ぐ

自分の母親や自分の過去のメモや当時の資料など読み、改めて防災の重要性などを認識した。環境防災科に入学してから伺った外部講師の人の話やボランティア活動、東北訪問で出会った人達の話を振り返ったりすることができた。今でも思い出すだけでも辛いことだと思うのにしっかりと当時の状況を語ってくださった。そのような経験をしている人が今は減っていて、震災を知らない世代が増えている。しかし、被災者の方々の話を震災を知らない世代に伝えて、今後同じような被害を出さないようにすることはできる。震災時の行動だけではなく、未然に防ぐための行動もしっかりと伝えていき、多くの人が防災に興味を持ってもらえるように伝えたい。そして自分の命を守るための行動も大切だが「共助」も大切である。震災当時一番多くの命を救ったのが「共助」である。地震が来ることを予測して前もって準備をしているからといって安心ではない、と災害が多い国に住んでいる人すべてがそのように考えて、知識を増やし、準備をすることが当たり前になれるように今から意識していかなくてはいけない。

今後も日本では様々な災害などが起きるが、多くの命を守るため語り継ぐことは重要であると感じた。語り継ぐということを大切にしていこうと思った。

I want to protect my country

坂本　迅

１　はじめに

阪神・淡路大震災から 26 年が経ち、震災を経験していない世代が増えてきた。私もその中の１人である。今阪神・淡路大震災の記憶は風化しつつある。多くの尊い命を奪ったあの震災を決して忘れてはならない。今のままでは、震災から得た教訓や体験が忘れられ、将来また同じ過ちを繰り返してしまうのではないかと感じた。その為にも、阪神・淡路大震災について語り継いでいきたい。

２　阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16 ㎞
規模：マグニチュード 7.3
最大震度：震度 7
死者：6,434 名
行方不明：３名
負傷者：43,792 名
住宅被害：全壊 104,406 棟
　　半壊 144,274 棟
　　一部損壊 390,506 棟
火災被害：全焼 7,036 棟
　　焼損 7,574 棟

「内閣府より」

３　祖母の話

1995 年１月 17 日の朝、外はまだ暗く地震が発生するまで垂水区の自宅で眠っていた。午前５時 46 分に何かものすごい音が聞こえ、突然身体が振り動かされ上下に弾む感じがした。とても起き上がることも出来ず、咄嗟に布団をかぶった。家族も何が起こったか訳がわからず、揺れが収まるまでとても長く感じた。揺れている最中は自分の身体を自由に動かすことができなかった。地震の揺れが収まってから部屋を見回し、台所へ出ようとすると食器や鍋、食器棚までもがすべて散乱し、足の踏み場もなくなっていた。そのため、外に出るのが遅れてしまい、先に外に出ていた近所の方々が心配して見に来てくれていた。皆パジャマ姿で、その時は誰も状況が理解できていなかったが、家族や近所の方の顔を見ると安心できた。幸い近隣では大きな怪我をした人もおらず、元気に見えていた。しかし、時間が経つにつれて，周りがみえてきた。道路はギザギザに割れ、水道管が壊れて吹き出し、すぐに水が止まった。また、ガスもすぐに使えなくなり、日常の生活が送れないストレスが日に日に溜まった。地震発生直後はすべての景色がカラーではなく、セピア色に見えた。仕事は祖父と一緒に精肉点を経営していたが、もちろん店を開くことができなかった。店にはお肉がたくさんあったので、地震発生当初は近隣の人に分けていた。住んでいた垂水区ではまだ被害が少なく、早めに電気は回復し、テレビで状況を把握することができた。生活に必要不可欠な水確保がとても大変で重たくて、多くは運べなかった。しかし、近くの中学生がマンションの階段のところまで水を持って上がってくれたこともあり、嬉しい気持ちになった。１ヶ月くらい経った頃には、近くに給水車が来てくれて助かった。また、食べものは他県からの炊き出しが来ていて、他県のナンバーの車を見つけると他県の方がボランティアに来てくれた人だと思い少しうれしい気持ちになった。当時寒かったので、温かい食べものやボランティアの方々の励ましで心が温まった。地震から３ヶ月を過ぎるとライフラインが回復し、日常の生活を取り戻すことができたが、皆の心に何かしらの思いや傷が残っているように感じた。また、地震の情報もテレビを見るまで把握できず、被災していない親戚のほうが地震の状況をよく知っていた。ラジオなどの準備が必要と改めて実感でき、当たり前の生活の大切さや人の優しさが一番力になった。ボランティアや支援してもらった分、これからの災害では募金などの形で恩返ししたい。また、亡くなった方々の分の日々を大切に生きていきたい。と言っていた。

４　感想

祖母の話を聞いて感じたことが２つある。

１つ目は、私たち若い世代が積極的に行動しないといけないということ。私の住んでいる地域にもたくさんのお年寄りの方々が住んでいる。祖母の話にもあったように、お年寄りの人は重たい水などを運ぶことができず、もし運ぶことができたとしてもどこか痛めて怪我をするかもしれない。そのため私たちが率先して行動し、防げる事故や怪我を防ぎ災害時に少しでも笑顔の回数が増えるようにすべきである。

２つ目は、安否確認をできる限り早く行うこと。私の祖母の家が震源地から近く、電話など通じなかったため、親戚からは、亡くなってしまったと思われていたそうだ。今では携帯電話が普及されていて、今の私は何をするにも携帯電話を使っている。携帯電話なしの生活ではとても大きなストレスがかかってしまうと思う。これは私自身だけの問題ではなく、現代ならではの大きな問題だ。祖母の話にもあったが、中学生でも咄嗟に自分のできることを見つけて行動に移していた。このような行動ができるのは簡単なことではない。私も防災を学んでいる立場ではあるが、このような行動ができる自信がない。これから災害が起こった時には冷静に自分ができることを考えて行動に移せるようにしたい。これからの生活を大切にし、後悔のないように生きていきたい。

５　環境防災科

（１）　環境防災科に入ろうと思ったきっかけ

私が始めに防災に対して興味を持ったのは 2011 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災の時だ。私は時まだ小学２年生だった。その日は学校に行っていた。学校が終わり運動場で遊ぼうと外に出るために、職員室前を通りかかった。やけに先生方がうるさく、低学年だった私にも異変が伝わってきた。校長室の扉が全開になって開いていた。少しのぞき込むとテレビがあり東日本大震災の地震直後の中継がうつっていた。その映像の中に仙台市の無残な姿が映し出されていた。私の曾祖母や祖母の兄弟が仙台市に住んでおり、私自身も何度も足を運んでいた場所だった。この時に一番に思ったことは、祖母の親戚である私より年齢が１つ上の女の子だ。私が祖母の家に行けば必ず遊び相手をしてくれる、姉のような存在だった。私は中継を見ると遊ぶことを忘れていて、一直線に家に帰り祖母の家に電話をかけた。普通ならライフラインがやられてしまい電話はつながらないはずだった。しかし、祖母の家は都市部から離れた山に立っていたのが不幸中の幸いで、奇跡的に電話がつながり声を聞けたことで少し安心を取り戻した。この電話から３日後に電話がかかってきて、親戚の女の子も無事だという報告を聞いたときは本当に嬉しく思った。

中学３年生になった時私の将来の夢は税理士になることだった。しかし、税理士のことを調べていると、AI の開発が進み将来無くなってしまう職業１位という事実を知り、税理士の夢を諦めました。夢もなく、どこの高校を受験するか迷っていた時に環境防災科のことが先生の会話の中で出てきました。防災に興味があり、私の兄が現役の環境防災生で兄から進められたということもあり環境防災科に入学した。

（２）　環境防災科に入学してから

私が入学してから初めて行ったボランティア活動は、春のふれあいまつりだ。私は中学生の時に地域のゴミ拾いボランティアなどには参加したことがあったが、正直ボランティア活動を甘く見ていた。いざ始まると何をしたらいいのかわからないし、指示をもらって動くのかと思っていたらだれも指示を出してくれなかった。このボランティア活動で私は何の役にもたてなかった。このボランティアで、本当のボランティアとは何なのか、自分で考えて行動する難しさを学んだ。

高校１年生の間は講義がとても多い。警察や消防など防災に詳しく、さらには阪神・淡路大震災を経験している人の貴重な講義を聴くことができ将来災害が起きたときにどうすればいいのかなど考えることが増えた。

６　将来の夢

私の将来の夢はスポーツトレーナーになることか整骨院を経営することだ。私は小さい時から運動をすることが好きで、空手、水泳、野球などを習っており、週末になると友達と公園に行き体を動かして遊んでいた。体を動かすのが好きだという単純な理由からスポーツに関わる仕事がしたいと思ったのがきっかけだ。それから、スポーツに関わりのある仕事を探しているときにスポーツトレーナーの職業に出会った。また、スポーツトレーナーになる為に柔道整復師の資格を取ろうと考えた。柔道整復師は、骨折、

脱臼、打撲、捻挫などの怪我に対し、手術をしない整復・固定などの施術を行うことができる怪我を治す専門家のことで、柔道整復師養成施設となっている専門学校や大学を卒業し、国家資格に合格することで取得することができる。スポーツトレーナーに必ず必要な資格ではないが、取っておくと広い分野で活躍することができる。

７　夢と防災

スポーツトレーナーと防災の関わりや繋がりを考えたときに、第１に私ができる事は防災の呼びかけをすることだと考えた。スポーツトレーナーは幅広い年齢層のたくさんの人と関わる機会がある仕事だ。会話の間に少しでも防災の話を入れ込むだけでも、人の防災意識は変わると思う。何気ないところから防災を広げて行きたい。

第２にできることは、怪我をしてしまったときに簡単にできる処置の仕方などを、YouTube や Twitter などにアップすることで、災害時に役立つと考えた。怪我をしたときは病院の先生に診てもらうのが１番だが、災害時は特に病院にたくさんの人が押し寄せてくる。どれだけ待っても診察を受けることができなかったりすると、怪我が悪化してしまい最悪の場合一生使えないものになってしまうかもしれないので、少しでも怪我の悪化を遅らすように、SNS にアップしていきたい。

第３にできることは、病院との連携をとることだ。私は将来柔道整復師の資格を持ったスポーツトレーナーになるので手術をしない治療ならすることができる。しかし、誰も私が治療できることは知らないし、怪我をしたからスポーツジムに行こうと思う人はまずいないと思う。そのため私が病院と連携を取り、災害時には病院に行き私ができる治療をすることによって、診察待ちの時間を減らすことができると考えた。いつどこで災害が起きても対応できるように、柔道整復師の資格書を持ち歩いて生活したい。

今のところは柔道整復師の資格を取ることしか考えていないが、理学療法の資格などにも挑戦してみたいと考えている。

いつ、どこで、その資格を使う時が来るかわからないが、資格をたくさん持っていると、たくさんの人の役に立つし、災害時に何かの役に立てるかもしれない。そのため、いろいろな資格に興味を持ち、収得できるよう取り組みたい。

８　これから日本で起こりうる問題

少子高齢化が進んでいる日本。ただでさえ福祉施設に働き手がおらず、年金の負担額が増え逆に高齢者は年金をもらえる額が減っているというのに、そこに自然災害が多くの場所でたくさん起きると、処理が追い付かなくなり本当にまずい事態になる。さらには新型コロナウイルスが世界中で流行している。その為、外国との交流ができなくなり、世界各国で物資の不足や、貿易が一番の収入源の国はとても大変な状況になっている。

高齢者が災害時に１人で生き残るのは難しい。しかし若者は減り続けている。では誰が高齢者のケアや救助をするのか考えてみた。今の私には何も浮かばない。もちろん若者が働く量を増やせばいいことだが、働く場所がなく、働きたいのに働けない、働いても給料が安いなどといった問題が発生する。経済がうまく回ればすべての問題が解決されるとよく耳にする。しかし、経済がうまく回る気はしない。今までと同じように生活しては何も変わらない。現代はグローバル社会やネット社会などになりつつある。変わりつつあるものを活かし自分で考えて行動するしかないと考えた。

９　最後に

小学生の時に防災学習にとても熱心な先生がいた。その先生のもとで防災を学んだが今思えば、なんとなく取り組んでいた。災害というものを軽く考えていたのかもしれない。しかし、東日本大震災が起き、それをきっかけに防災に興味を持ち、環境防災科に入学できたことをうれしく思う。

私は環境防災科に入学し３年間学べたことを誇りに思いこれからの人生を過ごしていく。みんなが学ぶことのできない体験や、お話を聞けたことは生涯忘れないと思う。３年間で学んだことを自分だけのものにするのではなく、周りの友達や近所の方や家族へとたくさんの人に防災の大切さや、これからの地震に備えるべき点などを伝え地域全体で防災に取り組みたいと考えている。

今でも東日本大震災の被害を受けたところがまだそのままになっているかもしれない。町並みは元通りになっても、人の心にできた傷はまだまだ治っていないかもしれない。現在は新型コロナウイルスの影響を受け、さらに水害の影響を受けているところもある。自然災害は人の気持ちや状況に関係なく起

こるものだ。災害に終わりはない。災害が起きたときにどのような行動をとるか、災害が起こる前の対策をしっかりすることで、災害の被害を最小限まで抑えることが大切だ。日本を災害に強い国にするために、国民ひとり１人の防災に対する意識が大切になってくる。私はそんな世の中になることを心の底から願っている。

追記

私は韓国に興味があり、韓国でもスポーツトレーナーとして活動してみたいと考えている。そのために韓国の災害などを調べてみると、防災意識が低く、小さな地震でもとても大きな被害が出てしまっている。これ以上被害を広がらないようにも、仕事プラス防災学習を広げていきたいと考えている。好きな国を守りたい。

語り継ぐ。

坂山　優斗

１　執筆するにあたって

私は阪神・淡路大震災を経験していない未災者である。そして阪神・淡路大震災が起きて 26 年の月日が経過した今、震災の被災者よりも経験していない未災者が増加している。私たちのような未災者は実際に体験したことを語れないが、起きたことを風化させないために学んだことを後世に伝えることが大切である。そしてこれから絶対に経験すると言われる災害に向け備える。防災を考えたこともない方もこの語り継ぐを見て、過去の災害からの教訓を現在にどのように生かすか少しでも備えをすることや命を守ることについて考えてほしい。

２　母の話

阪神・淡路大震災当時は大阪市の一戸建てに住んでいた。当時高校３年生だった。１月 17 日午前５時 46 分３階の部屋で寝ていた母は、いきなり横揺れに遭いそこで目が覚めた。次第に揺れは縦揺れに変わり突き上げるような揺れであった。今までに経験したことのない揺れであった。大阪市は震度４であった。また、母の感覚では４～５分ほどの揺れに感じたが、実際は 50 秒ほどだったという。隣の部屋では妹（私からすると叔母）が寝ていたので様子を見に行くと普通に寝ていた。すると 2 階の方から声がした。安否の確認であった。リビングに向かってみるとテレビや家具、食器棚などは倒れていなかった。電気や水道、ガスなどのライフラインにも被害はなかった。７時ごろにテレビをつけてみると神戸や淡路の様子が映っていた。阪神高速道路が倒壊された様子や、長田地区の火災を見て驚きを隠せなかったそうだ。

３　父の話

阪神・淡路大震災当時大阪市のマンションに住んでおり母と同じ高校３年生だった。父は異変に気付きやすく少しの揺れで目が覚めた。初めの横揺れの時にはすでに部屋のタンスを押さえていた。揺れが横揺れから縦揺れになり地面から突き上げるような揺れだった。揺れは実際の長さより長く感じたそうだ。通学時間になり駅に向かった。電車が止まっており家に引き返したそうだが今考えてみると未明にあれほど大きな地震が起きているのに通常通り学校があると思ったことが不思議であると言っている。自分の周りでは被害がなかったが家に帰宅しテレビをつけるとその光景に驚いた。阪神高速道路の様子や長田地区の火災の様子、母とみていた映像は同じであったが父は特に阪神高速道路から観光バスの車体が半分出ていて宙に浮いている映像を鮮明に覚えているそうだ。

父は地震の３ヶ月後の４月から川崎重工業株式会社への入社が決まっていた。３月の下旬には垂水にある寮に入寮した。入寮当日は通常通りに到着できるのか不明だったため、朝４時に家を出発し 6 時に寮に到着した。大阪から倒壊した阪神高速道路の横を通り焼け野原なった長田地区の横を通り垂水まで向かった。長田地区はまだ焦げ臭かったという。４月７日が初出勤であり、電車での通勤であった。通勤が始まりしばらくしても火災で焼失した長田駅は仮設駅舎だったという。社会人１年目の生活とともに神戸の復旧・復興が始まった。

４　話を聞いて

私は「語り継ぐ」を執筆するまであまり家族や身近な人に阪神・淡路大震災のことを聞いたことがなかった。したがって、今回「語り継ぐ」を書くにあたって１番身近な人に聞けて良かった。両親は神戸ではなく少し離れた大阪で被災し、被害も少しで日常が変わることはなかったが報道を見て驚いたという。それを聞いて私が東日本大震災の時の状況と同じであった。私も東日本大震災のとき報道を見て津波の映像に驚いた。たくさんのものが流され、たくさんのものを飲み込み当時小学２年生の私には見ていられるものではなかったことを覚えている。

阪神・淡路大震災から 26 年が経過し月日を重ねるごとに話す機会が少なくなっていき、風化が進んでいるのではないかと思う。昔のことはすぐに忘れてしまう。風化を進めないようにするためにも、私たちが学んだ知識、阪神・淡路大震災の様子を今後の若い世代に伝承していかなければならない。そう私は思った。

５　環境防災科

（１） きっかけ

私が環境防災科に入りたいと思ったきっかけは、将来の夢にもつながることとなる大蔵市場の火災である。この大蔵市場火災とは、2017 年 10 月 25 日午後３時 45 分ごろ兵庫県明石市大蔵中町「大蔵市場」付近から出火し、市場内約 2600 平方メートルが全焼した火災のことである。(朝日新聞　DIGITAL)

この日私の中学校では文化祭が行われ発生当時にはまだ中学校にいた。大蔵市場の方向では白煙が立ち、消防車のサイレンが鳴りやまなかった。学校が終わった後、私は友人と現場に向かうことにした。火災現場付近ではすでに規制線が張られており、何 10 台もの消防車、何 10 人もの消防士が消火活動を行っていた。私は野次馬の１人に過ぎなかったが、炎の中で果敢に進み最前線で活動する消防士の姿を見てとても感銘を受けた。その時この人たちのように人の役に立ちたいと思い消防士になりたいと思うようになった。両方の思いをかなえるべく調べているとこの環境防災科にたどり着いた。しかしこの時点では防災に興味などなく、避難訓練くらいしかしたことがなかった。環境防災科を知るのが遅かったために舞子高校のオープンハイスクールには参加することができなかった。環境防災科の情報は中学校の同級生のお兄さんが環境防災科の出身であったため話を聞くことができた。同級生のお兄さんに言われ印象に残っている言葉がある。それは「“日常”は大切にせなあかんで」である。この言葉の意味を理解するのにはとても時間を要するものであった。

（２） 入学してから

環境防災科に入学してから多くのことを学んだ。高校に入学するまでに防災のことを全く考えたことのなかった私には新鮮なものばかりであった。ボランティア活動も決して多くはないが参加できるものには参加した。ボランティア活動で得ることは多く、特にコミュニケーションの大切さを学ぶ場面が多かった。私は人前で話すことが得意でない。その上人見知りであり人と話すことは好きではない。
入学して最初に参加したボランティア活動では、ふれあい祭りとして小さい子からお年寄りの方まで様々な世代の方がいた。役割を決める際にも話さずまったくコミュニケーションを取ろうとはしなかった。そんな中ふれあい祭りがスタートした。私はお年寄りの方と話すことを躊躇し同級生とずっと話していた。そんなときにある１人の先生から「あなたたちが楽しんでしんでどうするの、きちんと接しなさい」と背中を押され、お年寄りの方にコミュニケーションを取りに行った。話すことが苦手な私は何を話したらよいかわからず作り笑顔でいるしかなかった。しかしそのお年寄りの方はとても優しく話しかけてくれ、逆に気を遣わせてしまったのではないかと今では反省している。その後いくつかのボランティア活動を通して、少しずつではあるが話すことを躊躇しなくなり人前で堂々と話せることが多くなった。

（３） 消防学校

環境防災科では１年生と２年生に神戸市北区ひよどり台にある神戸市消防学校の体験入校がある。この体験は入学前から楽しみにしていてこのような貴重な体験ができることが、この環境防災科に入った理由として少なからずある。１年生の時には講義、規律訓練、消火訓練、ロープ結索、搬送法、煙体験、地震体験などたくさんのことを体験させていただいた。２年生の時は１年生の時の復習とより実践的な訓練であった。規律訓練ではできるまで何度も何度も繰り返し行った。１つのことを徹底すること、チームワークの大切さを知った。煙体験は訓練棟の３階部分を煙で充満させ、その中を進んでいくものだった。真っ暗で通常通り歩行することは難しく、非常口のランプが見えるのがやっとの状況であった。実際にはこの煙だけでなく炎もある中で救助するのはすごいと思った。地震体験では阪神・淡路大震災や東日本大震災の揺れを体験した。震度 7 ではただ座っているだけであるのに身動きが取れなく、何かにしがみついていないといけない状況であった。２年生の時は１年生の時の応用として２日間に分けて訓練を行った。その活動を通して一番印象に残っているのは救助訓練である。私は救助隊にとても興味があり将来入隊したいと思いひそかに楽しみにしていた。この救助訓練では空気ボンベなど救助資機材を使用し訓練するものであった。想像していた以上に過酷で大変なものであった。少しの距離を歩くだけでも列がバラバラになりまとまりがなくなっていた。全員まとまりを出すことで訓練が成り立つので正直まだまだであると思った。もう 1 つ印象に残っていることがある。それは２年生の時に生徒５人の小隊を作り行った総合訓練である。私は消火活動担当であった。総合訓練ではタイムが重視され１分１秒を争った。１人１人が自分の役割を理解し素早く行うことが大切であった。自分の中でもイメージはできていても実際に活動するとイメージ通りにいかないことがあり失敗もあった。また想定外のことが起きてしまい対応が遅れた。訓練を通して活動を行う際には想定外がつきものだと学ぶことができた。これが実際に、火災現場や災害現場であると訓練より多くの想定外が出てくるであろう。消防士が様々なケースを想定し、訓練を行う理由として現場で起こる想定外にしっかりと対応するためだと感じた。また

１人では火災や訓練を行えないことから、消防士においてのチームワークがどれほど重要であるかと改めて知ることができた。

（４） 現在

私は環境防災科に入学したのがきっかけで防災に関わるようになった。環境防災科に入学せず地元の高校に行っていたら地震やその他の災害、防災について勉強したり、ボランティア活動に参加したり、毎年行われている追悼式に足を運ぶことなどなかったであろう。

高校１年生の１月に初めて環境防災科の生徒と阪神・淡路大震災の追悼式に行かせていただいた。神戸市中央区東遊園地に向かう道中、同じく東遊園地に向かう人々を見て自分の無力さや儚さと感じた。「将来どのような道に進んだとしても阪神・淡路大震災のことを忘れないでおこう」と思った。高校２年生の１月は発生時刻に東遊園地には行けなかったがせめて中継は見ようと朝起きテレビの前で黙祷を行った。このとき阪神・淡路大震災から 25 年であったためにテレビで見る限り昨年より人が多いなと感じた。節目の年は行こうという人がいたのかもしれない。人の価値観であり、さまざまであるが毎年行ったほうが良いのかもしれない。第一に阪神・淡路大震災のことを忘れない・風化させないことが大切である。

（５） 未来

先ほども言ったが、私は阪神・淡路大震災を含め災害を忘れないようにしたい。

令和２年もすでに数々の災害が起きている。その一部として新型コロナウイルスのパンデミックや、九州の豪雨などである。先の災害も重要であるが北海道胆振東部地震や大阪北部地震、熊本地震までは東日本大震災など復興の様子がメディアで今報道されているだろうか、報道されることのほうが少ないであろう。災害を経験した世代がいなくなった時には風化するのを迎えるだけではないかと思う。

私たちから若い世代へと災害の恐ろしさ、それに備える防災の大切さを教える必要があると改めて感じた。これが「語り継ぐ」ということにつながるのだろう。

６　夢と防災

私の夢は消防士である。きっかけはいくつかある。主に消防士が実際に活動している現場を見て、私もその消防士にように人を助けることができる、人の役に立ちたいと考えたからだ。また直接人命救助に携わりたいという思いから特別救助隊になり、多くの命を救いたい。

消防士という夢をもって舞子高校環境防災科に入学したが、何度も夢が転々とする時期はあった。1 年生の時にたくさんの外部講師の方に来ていただき講義をして下さる。もちろん消防士の方やそのほかにも水道・ガスなどのライフライン関係の方、警察・自衛隊・海上保安庁の方など様々だ。その中で私は海上保安庁の方の講義が特に印象に残っている。私は海が好きである。家から近いこともありよく馴染みのある場所だ。海で働きたいと思ったこともある。海上保安庁の方の話の中に特殊救難隊の話題があった。特殊救難隊にも憧れを持った。消防士と海上保安庁、将来どちらに進もうか迷うことがあった。しかし、３年間で１つに絞れるきっかけがあった。それが消防学校体験訓練である。２回の体験訓練を通して感じるものがあった。１つとして、厳しさ。規律訓練、体力錬成では必死に厳しく指導していただいた。消防士になるということは自分が思っている以上に厳しいものであるということを改めて感じた。また、その厳しさを乗り越えることによって実際に現場で活動したときに活躍することができ、やりがいを感じることができると思う。人命救助やなにか活動する際は１つでも多くの命を救えるように厳しさに耐え、その壁を乗り越えたい。

消防士は消火・救急・救助のほかに予防・啓発・防災の任務がある。緊急出動の時以外は、地域住民や地域の学校に出向き予防啓発活動や防災教育を行っている。消防士になったらこの活動にも力を入れたいと考えている。3 年間環境防災科で学んで知識などを地域の防災訓練や学校での出前授業・避難訓練を通して伝えていきたい。災害の恐ろしさ、災害時における大切なことを伝えなければならない。学んだ情報は自分の中でとどめるだけではなく他人に伝えることが大切だ。これからも学ぶことを大切にし、正しい情報を他者に伝えようと思う。

７　感想

私は今回語り継ぐを執筆するうえで一番大切にしたいことがあった。それは伝えるということ。過去に起きた災害を風化させない、教訓を語り継ぐ。そして今後起きる災害に活かす。このことが大切であると思う。風化させないとはどういうことであるかと考えた。被災者にとっては目の前で起きた１つの災害を忘れることができないのであり、忘れないものへと変わる。日本にはそのような災害が数多くある。

しかしまだ経験していない人もいる。私を含め未だ経験していない人は自ら知らないといけない。そして人に伝える。人に伝えることにより、自分自身が学ぶことがあるだろう。この学びとどのように次につなげるかそこの真価も問われると思う。また、災害はいつ起きるかわからない。そしていつ起きてもおかしくはない。だから今すぐにでも対策・備えをしなければならない。災害がいつ起きるかわからない日本では１人ひとりが防災と関わる習慣を作ること、関わりが持てる環境づくりも大切だと思う。

８　最後に

「語り継ぐ」はさまざまな人のおかげで書き終えることができた。

私はこれから防災を学ぶことを続けたことを語り継ぐ・伝えていくということを大切にしていきたい。

かたりつなぐ

澤田　幸志

１　はじめに

語り継ぐことは大切だ。私は阪神・淡路大震災が起きた時には生まれていない。そして、経験していない世代はこれからも増えていく。この私たちや後の世代に語り継いでいかないと震災による被害や教訓が風化していき、次は自分たちや自分たちの子孫が被害に遭うかもしれない。同じような被害を繰り返さないために語り継ぐことが大切なのである。

２　阪神・淡路大震災について

名　　称：兵庫県南部地震
災　害　名：阪神・淡路大震災
発生年月日：平成７年（1995 年）１月 17 日午前５時 46 分
震　源　地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ：16km
規　　模：マグニチュード 7.3
人的・物的被害：死者…6434 名
　　行方不明者…３名
　　負傷者…43,792 名
住家被害：639,686 棟（全壊、半壊、一部破損の合計）
　　「総務省消防庁　平成７年１月 17 日　阪神・淡路大震災について（確定報）」より

このような多大な被害をもたらした阪神・淡路大震災、この災害が起きるまでは関西では地震が起きないと考えられていた。この誤った認識が被害を大きくした原因の１つである。また、阪神・淡路大震災が起きた 1995 年はボランティア元年とも呼ばれ、多くの方が様々な方法でボランティアとして参加された。

３　母の話

当時、西区の１軒家に住んでいた。地震発生の日、地震発生が早朝の５時だったこともありまだ２階にあった自分の寝室でいつものように眠りについていた。すると、下から「ドンッ」と突き上げるような音と衝撃で驚いて飛び起きたそうだ。そのあとすぐ「グラグラ」という横揺れが始まり怖くて布団の中に潜っていた。布団の中に潜っていると何かが布団に落ちてきた感覚がし、気にはなっていたが揺れの間恐怖から布団から出ることはできなかった。揺れが収まり、布団の中から這い出て見てみるとベッドの横に置いていたタンスの上にしまっていたはずの大きな分厚いアルバムが落ちてきていた。そして、「サァ」と青くなり、もし布団をかぶっていなかったら自分はどうなっていたのだろうかと考えると怖かった。

揺れが落ち着き、１階の台所に行くと食器棚が倒れていて、中にしまっていた食器があちらこちらに散らかっていた。電気は止まっていたので足元が暗く移動するのが難しかった。近くに置いていたストーブも倒れていて燃料の灯油も溢れていた。この時間帯にはまだ台所で火を使っていなかったので溢れているだけですんだ。もしあと 30 分遅い時間に地震が発生していたら住んでいる家は火事でなくなっていかもしれないと思うとゾッとする。

余震がないことの確認と日が昇ってくるのを待つためにしばらくじっとしていた。日が昇り明るくなってきたので余震に警戒しながら家の中でなにか使えるものがないか探していた。すると壁に大きなひびが入っている部屋もあった。見た瞬間崩れてしまうのではないかと感じた。

近くに住んでいた祖父母の家は自分の家よりもひどい状態になっていた。屋根にあったはずの瓦は崩れていて落ちて割れているものもあった。漆喰でできた壁にはひびが入っていたり崩れ落ちていたりする箇所があり、お風呂場の天井のタイルは全部落ちていてしばらく使えない状況が続いていた。すぐに業者に修理の依頼を頼んだのが同じ状況の家が多かったためか取り掛かり始めたのは数週間後であった。

電気とガス（プロパン）はすぐに使えるようになったが水道が復旧したのは数日してからだった。家に水を貯蓄しておらず復旧するまでは親戚の家から水を分けてもらいなんとかしのいでいた。また食事の際、極力水を使わないようにするために皿にはラップやらアルミホイルを巻いて使っていた。

家の中を片づけながらどこも自分たちの地域ほどの被害だと思っていたがラジオやテレビで長田の方の町が火事でひどいことになっていることを知り、言葉を失い呆然と聞き入っていた。そこで今回発生した地震の恐ろしさを感じた。

今でも工事の音などの大きな音や地響きを感じると当時のことを思い出してしまい、何かしている時でも手を止めて耳を澄まし、キョロキョロとしてしまう。

４　話を聞いて

私は語り継ぐの執筆をするまで家族に震災当時のことを聞いた事はなかった。というのも、家族であっても当時のことを聞くことには少しためらいがあったからだ。しかし、今回のことをきっかけとして当時のことを知ることができた。また今回は母だけの話を聞いたが機会があればいとこの母や祖父母にも聞いてみたいと思うようになった。

当時母たち家族が住んでいた家は取り壊され、新しい家に建てられている。それが今住んでいる家ということを聞いていく中で初めて知った。当時の爪痕が残っていないきれいな家になっている。最初に語り継ぐを書くために話を聞かせてほしいと当時のことを聞くと「あんまり覚えてないから」といってあまり話してくれずに相手にしてくれなかったが少しずつ話し始めて当時のことを話しながら思い出しているように見えた。被害は長田に比べると軽いと本人はいっていた。しかし、当時のことを聞いていると長田での被害と比べると確かに軽いがそれでも大きな被害を受けているように感じた。家の近くでの被害がこれだけなので長田のほうに住んでいた方は本当に凄まじかったのだろうなと感じた。また、母は地震発生直後こそは驚いたそうだがすぐに状況確認や家族の安否確認を行っていた冷静さに驚いた。母のように状況をすぐに飲み込み、把握し、冷静に行動できるようにならなければならないと思う。最後の工事の音や地響きの部分によって当時のことを思い出してしまうことは PTSD の症状なのかなと感じた。私は身近にいながらその症状に全く気づかずにただ音に敏感なだけだと思っていた。しかし、この話を聞いてから母の様子を気にしながら見ているとペットが立てた音などに敏感に反応していた。これは当時のことが影響しているに違いないと思った。

５　環境防災科

（１）きっかけ

私は中学生３年になるまで特に将来したいこともなかった。しかし、進路学習の授業の時に舞子高校の環境防災科という学科を偶然知り、興味を持った。他とは違う授業内容だったので自分のしたいことが見つかると思った。そこから、受験への対策をしていく中で夢も持つことができた。

（２）入学して

私は受験で受かってうれしい気持ちだったのだが、同時に防災についての知識は一般人程度でそのくらいの者が入ってからついていけるのか心配だった。しかし、そんな不安も日を重ねるごとに軽減されていった。私のような防災初心者でもわかりやすいカリキュラムになっており、ついていくことができた。3 年の間にたくさんの外部講師の方や防災科の先生から防災の大切さや過去の災害からの教訓に基づく新たな対策等を学び、実際に震災を体験された方の防災の知識を学ぶだけでなく、市民のリーダーシップをとり、緊急時等に引っ張っていく人材の育成もおこなっており、授業の過程の中で判断力や行動力等を養っていくことができた。

（３）消防学校

消防学校での経験はこの学科でしか経験できない非常に貴重な体験の１つであった。消防士になる前に消防学校で学ぶことができるのでどのような経験することができるのかすごく興味があった。消防学校は環境防災科のカリキュラムとして１年次、２年次に神戸市にある消防学校で体験入校するものだ。１年次の時は規律訓練を主に行った。ここでは連帯責任で１人のミスは全体のミスとされていた。実際の現場でも 1 人がミスしてしまうとほかの隊員の命にかかわってしまうからだ。そのため、ミスが起こらないように指導員の言葉を聞き逃さないように努めた。また声出しも実際の現場は野次馬や火災などの音で指示が通りづらくなってしまうので大きい声でハキハキとだすように心掛けた。

２年次には主に実践系の訓練を行った。使用している際はほどけないが使用後はすぐにほどけるようなロープの結索法やそれぞれの事態に対応できるような人員輸送法、ホースの扱い方や酸素ボンベの扱い方を教わって行った消火訓練などがあった。その中で一番印象に残っていたのは消火訓練だった。この消火訓練では燃えている建物に人がいることを想定し救出、消火を行った。私は救出を行ったが視界が悪く救護者を見つけるのに時間がかかってしまった。しかし、チーム内で指示を出し合い救護者を見

つけ安全を心掛け救出活動を行うことができた。ここで、見つからなくて慌てるのではなくチーム内で連携を取り合うことの大切さを改めて認識することができた。また、救護者側も体験したが待っている間は視界が暗く音もなかったので不安だったが救助班の声が聞こえると安心することができた。実際の救護者の方たちはもっと心細い心境なのかもしれない。消防士になることができればできるだけ早く救助活動を行いたいと思った。

６　私の夢と防災

（１）きっかけ

私の夢は消防士になることだ。これは祖父が消防士だったことが大きく関係している。私が物心ついた時にはもう引退しており、中学３年生になるまで知らなかった。たまに祖父母の家で一緒に食事をとることがありその時に色々な話を聞かせてもらい興味が湧いた。また、父の職場内で行なっている運動会で消防訓練を体験できるブースがあり、はしご車に乗せてもれえる機会があり、ますます関心が湧いた。そして、高校の学校の帰り道で家の近くにあったマンションが火災にあっている現場に遭遇した。当時の私は周りにいた人たちと同じように見守っていることしかできなかった。しかし、現場ですでに消火活動を行っていた消防隊員の方々は、炎に対してひるむことなく立ち向かっていた。私はその姿を見て、自分は見守っていることしかできない無力感を持つ一方で、災害の現場で活躍している消防士に対してあこがれを持ち、将来は消防士になるのだという興味から決意に変わった。

（２）仕事

消防士の仕事といえば最初に出てくるのは「消火活動」だと思う。実際私も消防士を目指し始めるまで消火活動以外知らなかった。しかし、消防の役割はその他にも大きく４つの活動があり、１つ目に「救急活動」これは 119 の通報を受け、急病人やけがを負った方に対して応急的な処置を行い病院などの医療機関に輸送する任務だ。２つ目に「救助活動」だ。これは災害現場や、火事、河川などでの水難事故に対して人命を救助する任務である。そして３つ目、４つ目が防災と深くかかわる任務だ。これらは「防災活動」と「予防活動」とある。防災活動は小学校や祭りなどで遊びを通じて防災の意識を育てることや、自治会などと連携して避難経路の確認などを行い災害による被害を減らす任務である。「予防活動」では建物の防火上の点検や消防用の設備について立ち入り調査を行い審査、検査、指導を行う。また既存の建物だけでなく建築中や施工中の建物にも出向き、施工状態や防火に対する基準を満たしているのかを厳格に調査する。

（３）防災のつなげ方

私は高校を卒業してすぐに消防士になろうと思っている。確かに大学卒業後や専門学校に通いながらでも遅くはないと思う。だが、それでも高校卒業後に受けようと思ったのには理由がある。それはこの学科に入っているからだ。普通の高校に通っているだけでは防災の知識を身につけることは難しかったと思う。その知識を十分に活かすことができるからである。また、高校卒業後に消防士になることにはメリットもあり、それは大卒や就職後の人たちに比べて実際の現場での生の体験や経験を豊富に蓄えることだ。実戦での経験を早くに積むことで緊急時に迅速かつ適切に判断を行うことができ、より少なく被害を抑えることにつながるからである。もう１つ理由があり、若い視点から物事を見ることができることだ。消防には幅広い年齢層の方がいて考え方も様々だ。そこで若者からの視点を取り入れることで幅広い年齢層に対する対策を立て対応の幅を広げることができると思ったからだ。

また、私の地域では消防団はあるが年齢層が高く、集まりも月に１回あるかないかくらいなので機能としてはあまりしていない。そこで私は地域の防災力を上げたいと思う。私が高校生のうちに蓄えた知識とこれから学んでいく知識を使い「自助」「共助」の部分の防災力を高めたいと思う。

７　最後に

現在、私たちの住む神戸の街は当時の傷が残らない住みよい街になっている。そして、今から生まれてくる世代の子供たちは本当に震災に見舞われた街なのかと疑うだろう、そのくらい復興が進んでいるのだ。

たしかに神戸は復興し良い街になったのかもしれない。しかし、それは表面上だけだと思う。街はきれいになり、住みやすくなったが人々の心はどうなのであろう。私は自分の母の話を聞いて復興はまだ終わっていないと感じた。母は災害の前のようには戻っておらず音に対して敏感になっている。私の母のように生活にあまり支障をきたさない程度にまで軽減されている方もいるだろうがいまだに深い傷を負っている方もいると思う。完全に治す「完治」は無理なので、せめて重りをわけあったり、話を聞くこと

で軽減させたりすることは専門家だけでなく私たちもできると思う。このようなことを考え、復興はまだ続けていかなければならないと思った。

また、今回の語り継ぐを書いている中で家族と話すことが多くなった。語り継ぐを書くまでは家族から当時のことを聞く機会はあまりなく聞けずにいた。しかし、今回、語り継ぐを書くという機会があり当時の状況のことを聞くことができた。私のように聞いたりするきっかけがなく当時のことを知らずに生きている人たちが多いかもしれない。そうなると、阪神・淡路大震災を知らない世代が多くなり、また「関西では地震が起きない」などのような考え方が生まれてくるかもしれない。そうなると阪神・淡路大震災の二の舞を演じることとなってしまう。そうならないためにも語り継ぐという形は大切なのだ。語り継ぐ事は自分たちの子孫を守ることにもなる。災害から得た教訓を次につなげることで変わり続ける災害に対して同じ過ちを繰り返してはいけない。また、私たちが生きているうちにやってくると予想されている南海トラフ巨大地震。この災害は阪神・淡路大震災の時よりも大規模な地域に被害が出ると予想されている。そこで阪神・淡路大震災また、他の震災から得た教訓を次は私たちがこの２つのことを踏まえ語り継いでいかなければならない。それが、私たち震災を経験していない世代の責任なのだと私は考える。

私たちの課題

高橋　綾香

１　はじめに

1995 年 1 月 17 日午前 5 時 46 分に起きた阪神・淡路大震災から 26 年が経つ。私は経験をしていないが、多くの語り部から当時の様子を聞いてきた。語り継ぐ人たちがいることで私たちは阪神・淡路大震災がどのような地震だったのかを知っているが、この先その人たちがいなくなってしまったら、、、。私たちやさらに若い世代はその恐ろしい災害を忘れてしまい、この災害の教訓が風化してしまう。この風化を防ぐには「語り継ぐ」ことが非常に大事だ。再び大きな損失を出さないために、私たちが伝えていかなければならない。

２　阪神・淡路大震災

名称：兵庫県南部地震
発生年月日：1995 年 1 月 17 日
時刻：午前 5 時 46 分 52 秒
震源の深さ：16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
人的被害：死者…6434 名
　　行方不明者…３名
　　負傷者…43792 名
住宅被害：全壊…104906 棟
　　半壊…144274 棟

阪神淡路大震災について（内閣府　防災情報のページ）より

３　先生の話

私が通っている塾の先生は当時、兵庫県垂水区に住んでいた。小学校２年生の時に引っ越してから１年も経っていない新築の家で寝ていた。いつもならタンスや本棚がある部屋で寝ているが、偶然にもその日は何も置かれていない部屋で両親と一緒に寝ていた。地震が起きた瞬間、何が起こったのかわからなかった。その時まで地震なんてものを知らなかった。驚いて布団から顔を出し、両親に抱きしめられながら守られた。初めて大きな地震を経験した。以前にももしかしたら経験していたかもしれないが、その時に初めて地震がどういうものなのかわかった。地震が収まってから外を見渡すと、電気が消えて真っ暗だった。朝の８時ごろになってから、テレビと電気がついて大変な状況になっていることに気づいた。テレビでは、知っている道路が曲がっていたり、町や家がボロボロになっていたりしているのを報道していた。だが、その時の事態をすぐには読み込めなかった。

それから余震が長く続いた。それがとても怖かった。次第に震度の強さが大体どのくらいなのかわかるようになってきた。地震が起きてから変わったことがたくさんあった。食事は、鍋の中にご飯や他の食材を入れて食べていた。両親が水をできるだけ使わないようにするために鍋を利用していたのだと今では思う。食器もあまり汚れないようにワンプレートにしていた。ガスコンロが配給され、食べ物にはそこまで苦労しなかった。ずっと自分の家や祖母の家で過ごし、避難所には行かなかった。断水されているため、公民館で給水をしながら生活をしていた。ガスも水もなくて、なかなか風呂に入れなかったことが辛かった。ゴルフ場が震災後の初めての風呂場だった。

「普通の生活に戻りつつあるな。」と感じたのは震災から１年ほど経った時だった。学校は再開し、授業をするようになった。しかし、授業は地震関係の授業が大半を占めていた。体育館は避難所になっていたため、体育の授業もなかった。仮設住宅は卒業するまであったことを覚えている。特に印象に残っていることは燃えた後の鷹取商店街に行った事や焼け野原を見学しに行ったことだ。鷹取商店街は燃える４日ほど前に訪れていたので、変貌した姿に驚かされた。また、学校以外に町の様子で印象に残っていることがある。それは、マンションなどの住居に赤・黄・緑の３色の張り紙が掲示されていたことだ。危険・注意・調査済みと書かれていて、それをなぜだか鮮明に覚えている。そして、一番人々が１つになったと感じた出来事が、野球チームのオリックスが優勝したことだった。その頃はイチロー選手もいて、その他

にも知名度がある選手が多かった。オリックスは、当時の小学生などの子供を招待することで多くの人々を勇気づけた。オリックスの存在が神戸を１つにしたと感じた。

震災から長い月日が経った今でもあの頃のことを鮮明に覚えている。今でも揺れを感じると身体が固まってしまうほどだ。どこかでまだトラウマになっているのだと思う。身近に亡くなった人がいなかったため、悲しい思いはあまり感じなかった。だが、そんな私でも当時の出来事が大きなトラウマとなっている。この震災を忘れないでほしい。若い世代に語り継いでいってほしい。

４　話を聞いて

私はこの話を聞いて改めて語り継いでいかなければならないと感じた。

先生から阪神・淡路大震災について聞いたことが１度もなく、今回初めて先生の口から震災について話を聞いた。私が先生に質問すると、その答え以外に思い出したことまで話してくださった。長い月日が経っても、それだけ鮮明に残っていることに震災の恐ろしさを感じた。また、話をしてくださった先生の目が熱くなっているのも感じ取れた。普段は陽気な人がここまで真面目な顔をすることに驚き、同時に緊張感が走った。話の中でふと先生は、「他の被災者を含めた中やったらそこまで悲しい想いはしていない方やと思う。」という言葉を放った。その言葉の裏に悲しい感情が隠れているのではないかと思った。はじめは、地震がどういうものなのかわからなかった先生が、子供ながらに懐中電灯などの備蓄品を常に常備していたと聞いた。震災が起こってから、子供がここまで防災に対して意識的になることに驚いた。震災が子供をそのようにしてしまったのではないかとも思った。また、大人の力にはかなわないかもしれないが、子供も立派な１人の人間であるのではないかとも思った。１人の子供が震災への意識を持つことで、周りの大人も勇気づけられたり、大切なことを気づかされたりしたのかもしれない。

震災時の小学校の様子からも詳しいことが聞けて勉強になった。焼け野原を見学しに行ったとき、子供たちはどのように思ったのだろうか。私が被災していたなら、絶対に耐えられないと思った。

話を聞いてから、震災の恐ろしさを語り継いでいくことの重要さがよく分かった。また、私たちの若い世代の言動でも人々の心を動かせるのではないかと思った。先生の「語り継いでいってほしい。」という伝言を胸に、防災と向き合い続けていきたい。

５　環境防災科

（１）入学したきっかけ

私は東日本大震災がきっかけで環境防災科に入学した。東日本大震災が起こったのは私が小学校３年生の時だった。私の親戚が当時この地震を体験した。幸いにも大怪我をすることがなく、生き残ることができた。私の親戚は、子供２人と夫婦の４人家族だった。栃木県宇都宮市に住んでいて、震度６強を経験した。当時小学生だった私は心配をすることしかできなかった。その時に自分の無力さと支援できないもどかしい気持ちを味わった。そして、中学生になってから環境防災科の存在を知った。防災を学ぶことで、少しでも多くの人を助けられるかもしれないと思った。この思いから防災に携わるために環境防災科を目指した。

（２）東北訪問

環境防災科に入ってから防災についてたくさんのことを学んできた。授業以外にボランティア活動から学べることもたくさんあった。その中で最も印象に残っているのは、東北訪問だ。私は２年生になってから東北訪問に参加した。１年生の頃は、部活動で忙しくて参加しようと思わなかった。そして、２年生になってから部活動も落ち着き、友達の誘いがきっかけで参加することにした。参加を決心してから、環境防災科に入学したきっかけを思い出した。入学当初は、環境防災科で防災の知識を増やして、人を助けられる立派な人間になれると思っていた。しかし、現実は甘くなかった。大事なことは知識だけではないことに気づいた。災害から想定する力、臨機応変に対応する力、思いやる気持ちなど、専門的なこと以外に防災に必要なことはたくさんあるのだと感じた。そう考えていくうちに、なんとなくという気持ちで参加しようとしていた自分を情けなく思った。また、東北訪問の参加を通して、被災地の様子と被災者の話から自分への課題を見つけようと思った。

東北訪問の１日目は、バスの移動とバス内研修で終了した。その夜は、仮設住宅で家から持ってきたバスタオルを敷き、タオルを枕代わりに丸めて就寝した。居心地が悪くてしっかりと睡眠をとることができなかった。残り３日間もここで寝た。他校や学校の生徒がたくさんいる中で寝ていたので、なかなか疲れが取れなかった。その時にふと思った。被災者の方々はこの不便な生活の上で、地震への不安を抱きながら寝ていたということを。実際に仮設住宅で３泊することで、被災者の不安や苦労を少し感じ

取ることが出来た気がした。そのような生活をしながら、語り部の方の話をたくさん聞いた。実際に震災を経験した人から聞く話は、現実的で恐ろしく感じた。何度地震の話を聞いても、経験していない私にとって刺激的なものだった。被災者の震災への悲しみや苦しみという感情だけでなく、被災してか立ち上がろうとしている姿にも胸を打たれた。そして、この東北訪問を終えて見つかった課題がある。それは、伝承をしていくことだ。防災を学んでいる人ならわかりきっていることかもしれない。だが、辛い思いをして乗り越えてきた被災者や亡くなってしまった犠牲者のためには、私たちが震災の教訓を語り継いでいくことが大事な課題だ。またこの課題は、私たちや次世代の人々がこれから防災と向き合っていく為のものでもある。

６　夢と防災

（１）私の夢

私の夢は国際関係の仕事に就くことだ。きっかけは英語が好きであることと中国語を勉強していたということにある。私は中学の頃に個別塾に通っていた。そこで、勉強をしていくうちに、英語を学ぶ楽しさを知った。しかし、中国語の方はただ何となく学んでいるだけだった。私は小学４年生の頃から中学２年生の頃まで中国語教室に通い、中国語検定３級に合格することができた。合格した当初とはというと、どのような場で生かすことができるのか、役立つことであるのか、そのようなことを１度も考えたことがなかった。ただ合格したことに安心感を覚えただけだった。それから半年を過ぎた頃、学校の授業で中国語は世界で２番目に話されている言語だということを知った。それを聞いてから、中国語と英語を学ぶことで多くの人々とコミュニケーションを取ることができるということを理解していった。それからこの事実を知ったのがきっかけで国際関係の仕事を夢見るようになった。

（２）防災との関わり

私の夢は、多くの人々と交流ができる仕事だ。その点から防災についての話を海外の人々に持ち出すことで、防災を他国に広められると考えることが出来る。例えば、海外へ行ったとき、その国ではどのような対策が行われているのか実際に自分の目で確かめることができる。また、現地の人々と情報を交換し、防災を広げていくことができると考えられる。

ただコミュニケーションをとるということ以外にも、国際ボランティアが存在する。国際ボランティアは支援をするボランティアから介護のボランティアまで幅広く存在している。実際に私が見たサイトでは、参加者のほとんどが「参加してよかった。」、「人とのつながりが増え、充実した活動になった。」と感想を残されていた。国際ボランティアから、災害などの教訓はもちろん人と人との関わりの大切さを感じた人が多くいたように思った。私は海外に行ったことや国際ボランティアに参加したことがないため、人々とつながることの温もりを感じてみたいと思っている。また、この参加者の方々のように、ボランティア活動の中で達成感と幸福感を得たいと考えている。

７　最後に

環境防災科に入学した時から、阪神・淡路大震災について学んできた。今回は初めて身近な人からの体験を聞く機会をいただいた。普段は全く地震のことについて触れることがなかったため、話を聞くのに緊張した。また、話している眼差しの熱さに胸を打たれた。被災した内の１人だったと理解していたはずだったが、その目を見てからやっと「この体験を乗り越えてきた１人であったのか。」と感じた。

身近な人から聞く震災の話は、今まで聞いてきた他の誰よりも現実味を帯びているように感じた。先生の当時の姿を思い浮かべながら話を聞いていた。まるで、地震が起きた街に迷い込んだように聞き入った。地震の恐ろしさ、苦労したこと、命を守ることの大切さなどの重要であることを、改めて感じることができた。

私はまた、国際関係の職に就きたいという思いが今回の執筆の中で強まっていくのを感じた。まだまだ防災についても、他国の文化についてもわからないことがたくさんある。だから、これから将来の先も多くのことを学び、人々をサポートできる人になりたいと思う。自分の好きなことや得意なことを防災に結び付け、社会的に貢献できるようになるのがさらに上の目標だ。

この執筆から、自分の防災へ対する気持ちも整理できたと感じる。今までたくさんの人々の話を聞き、触れ合ってきた。その中でもやはり１番大事だと思うのは、「語り継ぐ」ことだ。社会から見ると、私はまだ無力であると思う。それでも、防災への思いを伝えていきたい。語り継ぐことは、被災者のためだけでなく、自分や若い世代、将来のためでもあると思う。そのことに少しの人でいいから気付いてほしい。たった１人でも、人の心を動かすことが出来たなら、今後に襲い掛かってくるかもしれない災害に少し

でも備えられるかもしれない。私は今まで、「若い世代に語り継いでいってほしい」という言葉を何回も聞いてきた。その人たちのためにも、被災者の思いを背負って語り継いでいきたい。そして、自分や人々のためにも語り継ぐことの大切さを主張していきたい。

被害の大小ではない

竹中　歩香

１　はじめに

1995 年１月 17 日、阪神・淡路大震災が起き、家屋倒壊や火災などに巻き込まれ多くの方の尊い命が犠牲となった。地震発生から 26 年が経過した。今、この凄まじい惨劇を経験していない私に何ができるだろうか。それは、これまで学習してきたこと、ボランティアなどでお話を聞いたことを皆に伝え、広めていくことだと思う。この阪神・淡路大震災を風化させないためにもこの「語り継ぐ」を通してたくさんの人に伝えていきたい。

２　阪神・淡路大震災

（１）「あの日」の概要

発生日時	1995 年１月 17 日５時 46 分
震源地	淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ	16 ㎞
規模	マグニチュード 7.3
死者、行方不明者	6434 人、３人
住宅被害（全壊、半壊）	104906 棟、144274 棟
ライフライン	130 万戸（水道断水）、260 万戸（停電）、86 万戸（ガス供給停止）

（出典　阪神・淡路大震災教訓情報資料集阪神・淡路大震災の概要　内閣府）

（２）地震発生までの家族の日々

父と母は当時まだ一緒に暮らしておらず、母は稲美町の実家で家族と暮らしており、父も垂水区の実家で家族と暮らしていた。地震発生の前日まで普段通りの当たり前の生活を送っていた。もちろん神戸にあれほど大きな地震が来るなど少しも考えてもいなかった。

（３）母の経験

母(私の母)の家族構成は父、母、祖母である。１月 17 日５時 46 分、母はベッドの中で眠りについていたが、「ゴオォォ」という音と激しく突き上げるような揺れで目が覚めた。幸い母の寝ていたベッドの周りには倒れてくるような物はなく怪我はなかったが、揺れが長くなかなかベッドから起きることが出来なかった。その日は仕事が休みで父(私の父)と旅行に行こうとしていたが、父(私の父)から連絡があり、「今日地震やからやめとこか。」と言われ旅行には行けなかった。自宅はプロパンガスだったためガスに関しては大丈夫だった。電気も１～２日で復旧した。水は断水していたが井戸があったため井戸水で生活をしていた。祖母が東の空を見て「赤い。戦争の空みたいや。」と言っていた。

次の日、仕事に行こうと思ったが交通網が麻痺しており、いつもなら車で１時間のところが３時間もかかって職場に着いた。幸い震源地から離れたところに職場があったため、被害は少なかったが神戸から入ってくるはずの商品が入ってこなかったり、停電により会社のサーバーがダウンしてしまったりした。普通なら８時に閉店し、９時には仕事がすべて終わり家に帰れるはずが、震災後の約１か月間は 24 時まで仕事をしており、体も心もしんどかった。元々足が悪かったというのもあるが、この震災後の過酷な仕事の状況に体が耐えられず、仕事を辞めた。また、後に祖母が脳梗塞で亡くなった。母(私の母)は原因をこの地震のせいではないかと考えている。

（４）父の経験

父(私の父)の家族構成は母、姉、父(父は仕事で家には居なかった)である。その日は夜中の３時まで起きていて部屋の片づけをしていた。寝ていると、夢の中で揺れているような感覚で目が覚めた。目を開けると布団の横にあったタンスの上に置いていた物が次々と自分の体に落ちてきた。起き上がろうと思ったが揺れで起きる上がることができなかった。揺れが収まりリビングに行こうとすると、揺れにより襖が開かなくなってしまい部屋から出られなかった。母はごみを出しに外に出ていた。自分の息子がタンスの下敷きになっているかもしれないと急いで同じマンションの知らない男の人を連れて急いで戻ってきた。「大丈夫か？！」と声が聞こえて大きな声で「大丈夫や！ありがとう！」と返した。襖を無理やりこじ開けて部屋の外に出た。姉の部屋には倒れてくる物などが無く無事だった。

地震により、マンションの貯水タンクか倒壊した。地震が収まった直後ラジオをつけて情報収集しようとしたが「強い地震がありました。」との情報ばかりが流れていて、欲しかった情報が貰えなかった。

しばらくして電車や高速などの交通網の被害の情報が入った。
家の前に公衆電話があったため行列に並んで母（私の母）に旅行を中止にしようという連絡をした。家にいてはライフラインを使えない上に部屋も物が散乱しており、危険だと感じたため建物のないところに逃げようと母、姉を連れて西神南に行った。向かっている最中に東の空から黒い煙が上がっているのが見えた。着いてから少し雨が降ったがその雨が黒かった。戦争の時の黒い雨とはこういうものなのだと感じた。余震は何度か来たが、大きな揺れはなかったため２、３時間で家に戻ることにした。家に着いたのは昼頃で上高丸小学校に水をくみにいった。そのあと近くにあったコンビニエンスストアに寄ったが、閉まっていて「品数が少なくてもう売るものがないので、持って行って下さい。」と言って商品を配っていた。家はこのまま生活することができなかったため、近くにあった父の祖父の家に避難した。電気は１時間ほどで復旧したが、ガスは１か月半、水は３か月も止まったままだった。
３日後仕事に向かったが、垂水から加古川までの距離を７時半に家を出て 12 時半に職場に着いた。職場から母(私の母)の家が近かったので仕事帰りに水を貰って帰ったり、お風呂に入れさせてもらったりした。母と姉は家の近くにある銭湯に行っていた。１か月半から３か月かかってやっと罹災証明書を貰った。父(私の父)の家は一部損壊であった。
母方の実家に様子を見に行くために長田の実家まで原付バイクで行った。道がガタガタでいつもより時間が掛かった。実家は震災の１年前に木造の家から新しい新築の家に建て替えたところであったため、被害を受けることはなかった。建て替えていなかったら倒壊していたのかもしれない。長田区役所に行って牛乳や毛布などの支援物資を貰った。そこで衛星電話で母に祖母の無事を伝えた。だが、後に父の祖母がパーキンソン病を発症して亡くなった。父もその原因はこの地震のせいではないかと考えている。

（５）振り返り

母は、この地震を経験して、教訓にしたいことは「どこの避難所に避難しているかなどの家族の場所を把握しておくことだ。」また、「いつ地震が起きても逃げることができるように逃げ道の確保が大切だ。」と話していた。
父は、人間が生きていくには水が一番大切ということが分かったため、「地震が起きたらすぐに風呂に水をためる。」また、「逃げ道を確保するために、地震が起きたらすぐにドアを開けることが大切だ。」と話していた。

（６）話を聞いて

私は今まで阪神・淡路大震災に関わった方や被害を受けた方の講義やお話をたくさん聞かせていただいたが、父と母の話は他と少し違うものであった。だが、父、母の祖母は震災が起きてすぐに亡くなった話を聞き、母の実家の様な建物やライフラインの被害が少なかった所でも、父の様に少し家屋に被害を受けた所でも苦しみ辛い思いをするのは同じだと感じた。それらのことから、心のケアの必要性を実感した。被害の大小ではなく、その人に応じた心のケアをしていくことが大切だと思った。災害が起きた直後への対策はもちろん必要であるが、起きてしばらくした後の対策も同時に行わなければならないのだと感じた。環境防災科での授業で何度か心のケアについて勉強したことがあるがさらに深く知りたいと思うようになった。また、私の身近にあの震災による被害者がいることを実感し、私の住んでいるこの神戸があの大きな地震を起きた地であるということを再認識することができた。講演会や講義に行かずとも周りにあの地震の被害者がたくさんいて、いつでも聞くことが出来るのだと感じた。家族と阪神・淡路大震災の時のことについて話す機会は環境防災科に入学してからは多々あったが、ここまで詳しく聞く機会はなく貴重な経験であったと思う。そして身近な人から聞くことで、これから起こる地震や様々な災害などに対して私たちは常に死と隣り合わせで生きているのだと感じた。これは災害だけに言えることではないが、この事実に対してどう防いでいくべきか、また起きた際にはどう対処すべきなのか、どう被害を少なくするのか。その選択肢増やすためにも、私たちにはさらに多くの知識を学び、理解を広めていくことが必要だと思った。だからこそ、防災をこれからも学び、周りに発信し伝え続けていかなくてはならないと感じた。

３　環境防災科

（１）入学前

環境防災科に入学する前は、防災について考えることは出来なかった。だが、そのころから誰かの役に立ったり、自分が行ったことで人を笑顔にしたりする職業に就きたいと考えていた。その考えのきっかけになったのは中学校のときに毎年行かせていただいたボランティアだ。幼稚園に行き幼児のお世話や遊び相手になるボランティアだ。私が本を読んだり一緒に遊んだりするととても喜んでくれて「あゆか

おねえちゃん！こっち！」と笑顔で走ってきてくれたのがとても嬉しかったのを今でも深く心に残っている。このことがあり、私は将来、人を笑顔にして人の役に立つ職業に就きたいと思うようになった。またこれが、私が環境防災科に入りたいと考えるきっかけでもある。

（２） 入学後

今ではこの環境防災科に入学して良かったと思う。様々な講義を聞かせていただいたり、現地に行って被害を受けた方とお話したりして多くの教訓、知識を得てきた。その中で防災について考えることなどできなかった私に変化が生まれ、防災の重要性に気付いた。それだけでなく、地域のお祭りや、幼児とのふれあい、被災地訪問や、大学生と協力して活動したりなど、これまで様々なボランティアに参加させていただいた。これらの活動を通じて人と人との関わりの大切さや、どんなに辛いことも仲間と協力していけば乗り越えていくことができるのだと気づくことができた。また、その中で将来自分のなりたいものを見つけることができた。

私はこの学科に入り、心の面でも人間的にも成長することができた。年を重ね自然と成長することはもちろんだが、入学前から比べるとたくさんの視点から物事を考えるようになったと思う。本音を言えば、災害のメカニズムなどを学んでいくにつれて災害に対する恐怖感が増している。だが、恐れているだけでは何も防ぐことはできない。こういった不安や恐怖を少しでも取り除くためにもさらに多くのことを学び、行動の選択肢を増やしていきたい。そして学んだことを少しでも多くの人に発信し、誰かの支えになりたいと考えている。

４　私の夢

（１） 夢

私の夢は視能訓練士になることだ。視能訓練士は主に子供の弱視など目に障がいのある子どもの訓練を行ったり、眼科での一般検査をしたりする。目指すきっかけの１つとして挙げられるのは、私自身が子供のことが好きだということだ。もう１つのきっかけは、ボランティアで幼稚園に行った時に出会った女の子だ。その女の子は弱視で目に障がいがあった。私はその女の子が１人で居たり、同じクラスの子から仲間外れにされたりしている所を多々見かけた。私は仲間外れにしている他の子たちにどのように声をかけて行動したらよいのか分からなかった。そして、私は目の前の辛い思いをしている女の子のために何もしてあげることができないのだ、ととても悔しい思いをした。このことがあり、私は出会った女の子のように目に障がいのある子どもたちに悲しい思い、辛い思いをしてほしくないと思うようになった。そしてその子どもたちの支えになりたい。そのような思いから視能訓練士になることを目指すようになった。

（２） 何がしたいのか

目などに障がいのある方は、災害弱者と呼ばれることがある。文字の通り災害に弱い人間という意味だ。阪神・淡路大震災や東日本大震災の時にはたくさんの視覚障がい者の方がつらい思いをした。例えば、新聞、掲示板など視覚から得ることができる情報が全く入らない。そのため極端な情報量不足に陥ってしまい、最悪の場合逃げ遅れて命を失ってしまった事例もある。また、その避難の際にも誰かが手を引っ張らないと逃げることができず、どこにどのような危険潜んでいるのかがわからない。このことは災害時だけに言えることではない。普段の生活の中でも誰かの助けがないと生活することが難しい。視覚などに障がいのある方は我々以上に死と隣り合わせで生活している。このリスクを少しでも少なくしていくためには、障がい者に対する理解私をたちが示すことが一番大切だと考えている。私が視能訓練士になったら、視覚障がい者の理解を広める活動をしていきたいと思っている。具体的には、子ども向けに幼稚園や保育園などで視覚障がい者に関する講義を行ったり、子供でも分かるような絵本などを病院などにおいたりして、少しでも多くの人に障がいについて知ってほしいと思う。理解し合い、協力し合うことが防災や減災に繋がっていくと思う。そのためにも防災の知識も視覚の専門的な知識もしっかりと勉強をし、立派な視能訓練士になりたい。

５　最後に

私は今、震災の面影のないとても住みやすい街で生活している。その様な生活が当たり前で生活していると地震などの過去の忘れてはならない記憶が薄れてしまう。震災の面影はなくなることは神戸の街が復興している事実であり、誇らしいことなのかもしれない。しかし、震災の教訓や体験はこれからもこの先ずっとなくなってはいけない。今、実際に阪神・淡路大震災を経験した方が少なくなっていることは事実である。このままではこの震災が風化してしまうかもしれない。そうならないために経験していない

私なりにできることを見つけ阪神・淡路大震災を語り継いでいきたい。
　今回、「語り継ぐ」を執筆するにあたり、直接家族に震災体験を聞き、自分の持っている知識の整理をすることが出来た。また、「語り継ぐ」のおかげで家族にもう一度地震や自然災害について考えるきっかけを作ってあげられたと思う。普段、何不自由なく暮らしているのが当たり前ではないことを私も家族も再確認することができた。「語り継ぐ」があったからこそ、阪神・淡路大震災のような災害による辛い思いを繰り返さないために、大切な人を失くさないために、この震災を経験していない私なりに学んだこと、感じたことを語り継いでいきたい。そう強く思うことが出来た。

未来を守るために

竹野　克海

１　はじめに

私は 2002 年に長崎県で生まれ、各地を転々とした後、中学に上がると同時に、神戸に引っ越してきた。授業で阪神・淡路大震災について学ぶまでは、震災があったことは、全くと言ってよいほど知らなかった。今の神戸の街は、26 年前の１月 17 日に発生した阪神・淡路大震災の被害が目に見える形であまり存在しておらず、とても美しい街だ。しかし、神戸の街には時が経つにつれ震災を経験していない若者が増加している。また、私のように他県から移住したことで阪神・淡路大震災が発生したことすら知らない方が少なからずいる。この様な風化を防ぐため、私は震災について語り継いでいく必要がある。阪神・淡路大震災を忘れないために。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

名称：兵庫県南部地震
日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
震源地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ：16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
最大震度：震度 7
人的被害：死者…6434 人
　　行方不明者…3 名
　　負傷者…43,792 人
全壊：109,406 棟
半壊：144,274 棟
一部損壊：390,506 棟

「阪神・淡路大震災について（確定報）（平成 18 年５月 19 日、消防庁)」より

（２）祖夫母の話

祖夫母は、須磨区に住んでいた。その当時の体験を聞いた。阪神・淡路大震災の前日の夜７時か８時頃にとても小さい揺れを感じた。また、外を見てみると赤い月が出ていて「明日、何かあるかもしれない」と、とても不安な気持ちのままその日は、就寝した。

次の朝、５時 46 分、和室で寝ていたら「ドンッ」と建物が崩れた感じの揺れが襲った。その後すぐに、横揺れに襲われた。仏壇やタンス、食器棚が倒れてお皿がすべて粉々になった。ピアノが１ｍほど動いた。祖父は「地震や！」と言い靴を履いて家族全員で外へ逃げた。避難所の鷹取中学校に向かう途中、道が凸凹になっている場所もあれば、陥没していた場所もあった。近所の木造住宅に住んでいた人は、家が潰れて亡くなっていた。鷹取中学校に着いたら、既に遺体安置所になっており、とても悲惨な光景で独特の臭いがした。その日は、鷹取駅の方向から飛んでくる火の粉が怖かったので、家族全員で車の中で寝た。

祖母の友人は、３階建ての家に住んでいたが、地震の影響で家が２階になっており、自分の子供を守るために抱いた格好で遺体として見つかった。服は血だらけになっており、とてもショックで中々立ち直ることが出来なかった。

祖父は、勤めていた会社が潰れたと聞いたため、須磨から灘にある会社まで自転車で行った。翌日の帰り道で阪神高速道路の下を通って帰った。阪神高速道路は崩れていてビルのようだった。銀行は休みで、父はセンター試験が終わったばかりだった。妹はまだ幼かったので親戚に預けた。水道１ヵ月、ガス３ヵ月、電気が１週間で復旧した。10 日間お風呂に入れなかった。被害の少なかった親戚の家でお風呂に入ることが出来た。それからの生活は、地震がいつ来てもいいように、家にあるものでオシャレな格好をし、いつ死んでもいいようにしていた。

１週間経っても配給は来なかった。そのため、正月に餅つきした時の余った餅を近所の人全員に配って食べた。何日かした後に配給のおにぎりが１人１個配られた。カビの生えたものもあったが、とてもありがたかった。

（３）経験して大切だと思ったこと

祖母は、備蓄・避難の準備をしておく大切さ、知恵をつけることの大切さ、生きるすべの大切さが被災して大切だと思った。備蓄・避難の準備をしておくことによって配給がなかなか来ない中でも飢えを耐えることができる。知恵があることによって、今から何をしなければならない、どうすることが最善なのかという事やこれからの生き方を考えることができるのでこの 3 つのことが大切だと思ったと話していた。

（４）父の話

当時は高校３年生、祖父母と一緒に須磨に住んでおり、自宅の２階で寝ていた。５時 46 分、突き上げられるような揺れで起きた。寝起きだったこともあり、夢の中だと思った。すぐに下に行こうとしたが、物が散らかっていて中々下にたどり着くことが出来なかった。1 階についてから地震が起こったことが分かった。朝の早い時間だったので、暗く、テレビをつけようとしたが電気が停電していて、つかなかった。そこで、情報が入らない怖さを知った。当たり前の日常が送れることがとても幸せだと知った。父の祖母の安否確認をするために祖父母の家に向かった。信号機が動いていなかった。火事になっている家を見つけたが、まさか街一面焼けるとはその時は思わなかった。祖母は無事だった。

叔父さんの家が長田にあったので見に行くことになった。その時はまだ火の力も弱く、街の人がパジャマ姿で毛布にくるまっている人が公園にたくさんいた。

家に戻って家の中の片づけをした。９時、10 時辺りにラジオを聞くため電池を買いに５㎞離れたところまで自転車で買いに行った。ラジオを聞きそこで被害の様子を知った。被害を聞いてとても驚いた。どこに避難したらいいのか分からず、電気、ガス、水がなかった。熱帯魚を飼っていて、地震で水槽は壊れなかったがヒーターがつかなくなって、水が冷たくなり死んでしまった。命の尊さや自分のせいだという後悔があった。近所の人が生き埋めになっているのを聞いたので、助けに行った。自動車を動かすのに４～５人で動かした。埋まっていた人は亡くなっていた。その日の夜は車の中で寝た。

次の日、長田の街を見に行ったら消防車がたくさんいた。戦争を経験していないが、戦争が起こったのかと思うぐらい火の勢いや建物の倒壊がひどかった。消防士は水がなく呆然とその光景を見ていることしかできていなかった。帰り道に水道管が破裂をしており水が噴き出ていた場所を発見した。その時はとてもうれしく、水を飲み、手や足などを洗った。

三木市に住んでいる親戚の家にお風呂に入りに行った時に、垂水などの街は電気がついているが、須磨や長田の街の電気がついておらず、とてもひどい被害だったことを知った。

配給は１週間後に徐々に増えていった。ボランティアの方がたくさんいたが、興味本位の人が多かった。あまり困っているわけではない人ばかりに支援がいき、本当に困っている人の支援がおろそかになっていた。とても残念だった。

この地震で学んだことは、地震によって職を失った方を多く見聞きしたので、手に職を付けないといけないと思ったことと、ライフラインがいかに大切だということだ。

（５）話を聞いて

私は阪神・淡路大震災の被災された方や関わった方の話をたくさん聞かせていただいたが、祖父母の話や父の話を私は聞いたことがなかったのでとてもよい機会になった。いつも祖父母の家に遊びに行く際はとてもニコニコしているので、地震が起こったことなどについては、考えたこともなかった。しかし、阪神・淡路大震災を経験されて祖母のつらい過去や地震発生の直後、災害発生前日の話、ライフラインの事など詳しく聞くことができた。特に印象に残っていることは、配給がなかなか来なかった時に家にある餅を近所の方全員に配ったことやボランティア活動の在り方だ。地震が発生していつ配給が来るのかわからない状況で近所の方の食料がなくて困っている時、私だったら仲のよい方や近所の方全員ではなく１軒２軒が限界だと考えた。また、周りの人が困っている時に自然と手を差し伸べることができ、とても尊敬している。自分も同じ場面に遭遇した時、同じことができるように備蓄をしっかりとしていくが大切だと祖父母の話を聞いて感じた。話をしていくうちに防災バッグの大切さを改めて実感した。今回の話を風化させないために、次の世代へ語り継いでいくことが私たちの役目であると感じる。

２　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科について知ったのは、中学 3 年生の頃だった。その頃、私はどこの高校に行ったら良いのかとても悩んでいた。そのような時に、担任の先生や環境防災科で学んでいる先輩の話を聞いた。防災について学んでいること、ボランティア活動をたくさん行っていることなどだ。その話を聞き少しずつ

興味を持ち、環境防災科に入りたいと思うようになった。

（２）入学してから

入学した頃の将来の夢は、保育士になることだった。保育士になって、小さい頃から防災を楽しく身につけてもらうことが目的だ。しかし、環境防災科に入学してから「災害と人間」の授業で海上保安官の方の講義を受けて私の夢は海上保安官になることに変わった。私は海が好きで、災害が発生した時に最前線で人を救うことや事前に災害を防ぐことを仕事として行っていることを知り、とても魅了に感じたことが理由だ。

外部講師のお話や環境防災科に入学してからボランティア活動を行ってきた。たくさんの人と触れ合うことでコミュニケーション能力を身に付けることや阪神・淡路大震災や東日本大震災での教訓、これからの備え方などたくさんの防災に関する知識を身につけることが出来た。

例えば、自助や共助の大切さ、防災バックの作り方、ハザードマップで自分の地域を確認する大切さ、過去の災害の教訓、それをどう生かしていくかなどたくさんの事を学んだ。これをきっかけに家族や友人と学んだことを共有しようとする意識が生まれた。

環境防災科で過ごした３年間は、とても濃いものとなった。他の高校や普通科では体験できなかった授業やボランティア活動などを体験できて良かった。

これらの事を活かして、防災のリーダーとなり１人でも多くの命を救えるような人間になりたいと考えることが出来た。

３　私の夢

私は、海上保安官になった際、取り組みたいことが２つある。

１つ目は小学校などで海や川についての知識を身につけて事故を減らす講義を行うことだ。理由は、小学校などでは警察官による犯罪や防犯ついて、消防士による避難訓練や蘇生法などの練習をしてきたが、子供の海や川の事故が多発しているのにも関わらず、海や川などについての知識、事故防止について、教えてもらっていない子どもが多いと考えたからだ。夏になるにつれ毎年のように水遊びをしていた子が事故を起こし、それが原因で亡くなる子どもがとても多い。私は海や川の知識がほとんどないことが原因と考えた。そのため私は小学校などで海や川についての知識を身につけて事故を減らす講義を行いたいと考えた。

２つ目は海上保安庁が開催するイベントや SNS 等を通して防災について広げたいと考えている。イベントや SNS 等によって小さな子供から大人までが一緒に参加でき、たくさんの人に情報を共有できると考えた。例えば、小さい子どもでも楽しく、分かりやすいクイズ、歌やダンスなどを通して防災について知識が身につくと思ったからだ。また、危険な場所を確認し近づかない、健康状態が優れない時は入水しない、悪天候の恐れがあるときは近づかない、必要に応じてライフジャケットを活用するなどの情報発信、防災に関する講演会や年末年始テロ防止啓発活動などで広げていきたいと考えている。

海の安全を守る事、また小さい子供などが海や川などで事故を起こさないで楽しく安全に遊べる事を意識し、この仕事を行いたいと思う。

４　最後に

私は、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震など大きな災害を経験したことがない。しかし、経験していないが災害に備えることはたくさんあると私は考えている。

１つ目は防災である。日本は災害大国と言われている。毎年どこかで大きな災害が発生している。いくら現代の技術が進歩しても自然災害に勝つことが出来ない。そのため１人１人が自分の身を守れる行動、防ぐための行動をとらなければならない。例えば、発生確率の高い南海トラフ巨大地震では、約 32 万人の方が亡くなると考えられている。しかし１人１人が防災意識を高める事によって、亡くなる方が約２万人になると言われている。ではどのようなことをしたら死者数を減らすことが出来るのか。例えば、防災バックを準備、家具の固定、避難所の確認、ハザードマップの確認、家の耐震補強などをすることだ。しかし減らすことができてもまだ約２万人の方が亡くなる予想だ。２万人の人が亡くなるということは東日本大震災と同じ死者数だ。そのことを踏まえて１人１人が防災に対する意識を高めないといけない。

２つ目は語り継ぐことだ。災害に対する知識を持っている人が少人数であることや、過去の災害が風化してしまうことなどがある。語り継ぐことが必要となってくる。語り継ぐ事によって過去の教訓、過去の失敗からの学びなどたくさんの情報を得ることが出来る。時間が経てば災害を経験した人が少なくなり、風化していく。そのため、私の使命は後世に語り継ぐことだと考えている。

今回、祖父母や父から阪神・淡路大震災の貴重な体験を聞くことが出来てとてもよい経験となった。聞いた話を風化させないように、語り継ぎ、未来につなげるため自分に出来ることからしていこうと思う。読んでいただいた方ありがとうございました。

あの日を未来へ

竹山　美羽

１　はじめに

震度７の揺れが神戸を襲い、人々の命を奪った阪神・淡路大震災。あの日から 26 年経っている。私は 2002 年生まれであるため、震災を経験しておらず、経験された方々のお話を聞くことしかできない。だが、私には阪神・淡路大震災のように甚大な被害が出ないよう、大切な人を失わないよう、語り継がなければならない使命感がある。震災を経験していない私たちのような世代が増えていくなか、過去の災害の教訓を生かし次の災害での被害を減らしたいという思いから、震災を経験した両親の話を私が代わりに責任を持って語り継ぐ。

２　阪神・淡路大震災の概要

発生日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分 52 秒
震源地：淡路島北部（北緯 34 度、東経 135 度）
震源の深さ：16 ㎞
最大震度：震度７
規模：マグニチュード 7.3
死者：6434 人
行方不明者：３人
負傷者：43792 人

〈内閣府「防災白書」〉

３　母の話

私（母）は、垂水に母（祖母）と５階建ての最上階の団地に２人で住んでいた。地震が起きるまでは家で寝ていたが、５時 46 分にドンっと下から突き上げられ、目が覚めた。上から天井が落ちてくるかと思い、急いで枕で頭を隠して布団にもぐった。大きな縦揺れが 15 秒以上続いたように感じた。母とは違う部屋で寝ていたので、揺れが収まってからすぐに母のもとへ駆け寄った。足元を見るとぐちゃぐちゃで、食器棚から食器が割れ落ちていた。テレビも落ちていた。落ちているテレビを元通りに置き、漏電している可能性があったものの何も考えず電源ボタンを押した。咄嗟に出た行動だった。すると奇跡的に電源が入ったので、母と一緒にニュースを見た。高速道路が崩れ、震度６や震度７と報道され神戸の様子を知り、大事になっていると驚いた。少し時間が経ってから玄関を開けて外を見てみると、家の周辺では火事はなかったが、長田や須磨の方から黒い灰が空から降ってきているのが見えた。その空はとても黒くて怖く、戦争が起きたのかと思った。明石海峡大橋が崩れていないか確認しながら階段を下りていき、下の階に住んでいるおばさんと合流した。幸いにも階段に少しひびが入っただけで、団地は崩れていなかった。家に帰り、水や電気が止まっていないかを確認した。ライフラインは止まっていなかったため、避難所に行く必要もなく、ご飯を作って食べることができた。だがその日から２、３日は仕事を休んだ。仕事場は元町であり、電車通勤だったが、須磨駅までしか電車は走っていなかった。そのため仕事へ向かう際は、須磨から歩いて仕事場がある元町まで行った。仕事場へ向かう人々は、電車が走っていないため私と同じように歩いていた。当時は、今のようにスマートフォンが無かったため普段歩いたことがない道を迷いながらも１時間以上歩いた記憶がある。幸い仕事場も被害はなく、今まで通り仕事ができた。

４　父の話

父は当時、伊丹に住んでいた。

1995 年１月 17 日、あの日の早朝は今でも覚えている。16 日の夜、仕事の帰りが遅くなり午前２時頃に就寝したが、ものすごい地響きですぐに目が覚めた。ドーンという音と共に横になって寝ていた体が一瞬バウンドするかのように宙に浮き、縦揺れが始まったあと、すぐに横揺れが始まった。その時は建物が崩れ押しつぶされる事が頭をよぎり、「頼むから崩れないでくれ」と心の中で叫びながら必死に頭を布団で隠すことしか出来なかった。ただ揺れが収まるのを待つしか無かった。感覚的には１分以上は揺れていた気がする。よく聞く避難経路の確保のためドアを開けたり身を守るために机の下に入ったりする

などの咄嗟の回避行動ができなかった。経験したことがない揺れだったという事もあり、いざそういう状況になると体が動かず何も出来なかった。揺れが落ち着いてからすぐに着替えて靴を履いた。なぜなら足の踏み場もない程に物が散乱し、食器や食器入れのガラスなどが割れていたからだ。まずガスの栓を閉め、電気と水道の確認をしたが、通っていなかった。そして倒れたタンスや机などを直し、家族の安全を確認してから薄暗い中、外の様子を見に行った。幸いに建物の火事がなく最小限の被害で済んだ。周りの家や建物も甚大な被害は受けていなかった。夜が明け周りの人たちが外に集まりだしてから、建物のすぐ近くにある集会所へ行き避難所の状況を見に行った。すでに何人かは避難しており、少しの時間を過ごした。避難所は仕切りなど無く、ただ床に座るだけ。そこで簡易ラジオでニュースを聞いて情報収集した記憶がある。建物が大丈夫だったので寝泊まりは家でしていた。電気は２、３日で復旧したが、水道は２、３週間断水していた記憶があり、その間は避難所にて給水を受けていた。トイレやお風呂など水を使う事には非常に苦労した。仕事場は元町で、自宅近くの最寄り駅まで単車、そこから電車を使っていたが不通だったため会社に連絡が取れるまで自宅待機していた。連絡が取れてからは取引先も共に被災したこともあり、半年間くらい休業を指示された。一度単車で元町まで様子を見に行ったが、道中は火事になっている建物、倒壊した建物、亀裂の入った道路、横倒しになった高速道路などを目の当たりにして、何も言葉が出なかった。

５　話を聞いて

このように語り継ぐ機会がなければ、きっと両親から詳しく阪神・淡路大震災の話を聞くことはなかっただろうし、両親があの日を思い出すことはなかっただろう。今までたくさんの外部講師の方の講義でお話を聞ける機会が多かったが、１番身近にいる両親の話は聞いてこなかったので、今回話を聞くことができてよかったと思う。また、このような機会で話を聞けるのはとても貴重で、決して忘れてはいけないことだと感じた。

私は両親が兵庫県に住んでいたことは知っていたが、今まで震災の話を聞いてこなかったので、聞いていくうちに阪神・淡路大震災の被災者だということを理解した。また私には毎日温かいご飯があり、勉強できる環境があり、帰る場所がある。当たり前に過ごすことができているけれど、これは当たり前でも何でもなく大切にするべきものだと、両親の話を聞いて思った。いつ災害が起きるか分からないし、いつ大切な人を失うか分からない。いつか今過ごせている環境がなくなるかもしれないと思うと、次の災害へ備え、当たり前のように生活できている日々に感謝するべきだと思った。

話を聞いて本当にあった出来事なのか半信半疑な部分はあったが、26 年前のあの日を思い出し、私のために話をしてくれた両親に感謝したい。

６　環境防災科

（１）きっかけ

私は中学生の頃から警察官を志していたが、防災の知識を何も持っていなかったため、知識を蓄えてから警察官になろうと思い、環境防災科への合格を目指した。また、人の役に立つことをするのが好きで、中学生の頃からボランティアに何度も参加していたことがあり、この環境防災科なら自分がしたいボランティアも自分が勉強したい防災もできると思い、目指すようになった。

私が環境防災科を知ったのは中学２年生の冬から中学３年生の春頃だが、中学３年生の夏休みにあったオープンハイスクールでは当時緊張や恥ずかしさもあってか、興味があった環境防災科ではなく、普通科の授業を受けた。その後私は環境防災科を選択し授業を受けなかったことをとても後悔し、11 月にあった説明会に参加した。その際に先生や先輩方のお話を聞いて、「必ず合格して防災を学び、災害時に人々を救える警察官になる」と心に決めた。

（２）入学して

防災に興味はあったが知識が全く無かった私は、学ぶことが楽しい、面白い、という気持ちよりも難しい、悲しい、辛い、というマイナスな感情が徐々に増えていった。今まで知らなかった話ばかりで、初めは戸惑いが隠せなかった。自分が生まれた街で起きた阪神・淡路大震災でさえも詳しく知らなかった。授業や講義を受けて災害の背景の深さを知り、度々胸が痛くなった。それと同時に災害への備えをすることがやはり１番大事だと感じた。私は将来の夢である警察官になるために、そして災害で命を失わないように、知識を蓄えたいという一心で防災を学ぼうと前向きになった。

７　南海トラフ巨大地震

南海トラフとは、日本列島に位置するユーラシア大陸プレートの下に海洋プレートであるフィリピン海プレートが南側から年間数センチ割合で沈んでいる場所である。30 年以内に 70％～80％の確率で必ず発生すると言われている南海トラフ巨大地震は最悪想定の死者・行方不明者は合わせて約 22 万人とされている。約 100 年～200 年間隔で蓄積されたひずみを解放する大地震が発生しており、近年では、1944 年に発生した昭和東南海地震、その２年後の 1946 年に発生した昭和南海地震がこれに当たる。昭和東南海地震及び昭和南海地震が起きてから 70 年近くが経過しており、南海トラフにおける次の大地震発生の可能性が高まってきていると言える。

私は約 22 万人という数字を聞いて、私もそのうちの１人になってしまうのではないかと度々思う。考えれば考えるほど怖くて仕方がない。南海トラフ巨大地震を知った中学生の頃は、ただ地震が怖いという思いしかなかった。だが今は違う。環境防災科で３年間たくさんの方からお話を聞いて、ただの恐怖心とは何か別の恐怖心を抱いている。

南海トラフ巨大地震だけではなく次の災害で失うものがゼロに近くなるように、被害をできるだけ最小限にする必要がある。被害を最小限にしようと１人１人が備えをし、正しい情報を収集することで被害は減り犠牲者も何百人、何千人、何万人と減らせることができるという。阪神・淡路大震災や東日本大震災の教訓を学ぶことも、南海トラフ巨大地震や次の災害に活きるだろう。

実際、南海トラフ巨大地震が 30 年以内に発生する確率が高いと言われているのにも関わらず、災害の備えをしている人は少ない。だから今すぐにでも家庭内でできる非常持ち出し袋の準備、家具の固定、耐震化、避難経路の確認など、簡単にできることから取り組むことが必要である。まずは地域の方に南海トラフ巨大地震について知ってもらい、防災対策をするきっかけを私が作れたらいいなと思う。

８　将来の夢

（１）きっかけ

私の将来の夢は、警察官だ。私が初めて警察官と関わったのは中学生の頃。笑顔でとても優しく接してくださったことを今でも覚えている。常に怖いという私のイメージとは正反対だったため、とても警察官が魅力的だった。「私もあのようなかっこよくて優しい警察官になりたい」と思い、憧れを持つようになった。

（２）夢と防災

私は警察官になってからの目標がある。それは、広域緊急援助隊の１人になることだ。広域緊急援助隊は救助のスペシャリストと言われているため、そう簡単にはなれない。だが私は広域緊急援助隊の１人になり、災害時に人々を救いたいと考えている。

その理由は、「社会環境と防災」や「Active 防災」、「災害と人間」の授業で災害時の話を聞いた際に、自衛隊や警察官でも目の前の命を救うことが出来なかったというお話を聞いたからだ。私が全く防災の知識が無かった中学生の頃は、災害時には必ず自衛隊や警察官が助けてくれると思っていた。だがそれは間違いだった。ほとんどは、自助や共助であるということ。自助や共助ができなかったとしても、自衛隊や警察官に助けを求めるが自衛隊や警察官にも限界があり、場合によっては救うことができないと言う。私はそのことを知り、授業内でドキュメンタリーなどの動画を見た際に目の前にある命を無駄にしたくない、大切な人を失った人の悲しい顔を減らしたい、と強く思った。

私はまだまだ防災の知識が足りない。このまま人命救助や心のケアに携わった際に、自分は無力だと感じるだろう。そして自分は何のために活動しているのか分からなくなるだろう。そうならないために３年間学んできたことをもう１度学び直し、実際に広域緊急援助隊の１人になって人命救助等に携わり、自分の手で人々を救えるような人間になろうと思う。

９　感想

こんな私が両親の話を語り継いでいいのか、と始めはとても不安になった。しかし、語り継ぐを執筆するにあたって今まで知ることがなかった両親の震災の話が聞けて、自分のためにも両親のためにもなったし、両親の震災の風化を防ぐことができてよかった。また、家族で災害に備えようと見直し、災害意識を持つきっかけになった。震災を経験された方からのお話や自分自身が経験したことを語り継ぐことで、もちろん風化を防ぐことができるし、人々が災害への備えを行ったり防災に興味を持ったりするきっかけを私が作れたらいいなと思う。だから今回だけに限らず、これからも語り継げるように努力していきたい。

これから災害時に市民のリーダーとして、警察官として、防災を学んできた者として人々を助けることができるのか不安でいっぱいである。不安であるうちは、まだまだ力不足であると言えると思う。より力をつけるために卒業まで 17 期生と共に防災と向き合い、考え、あらゆる状況に対応していきたい。そして卒業後も防災を学び続け、災害時にあらゆる状況において最善の判断をし、周りをまとめられるような行動できるように引き出しをたくさん作っておきたい。

同じ夢を持った仲間、災害時共に活躍するであろう夢を持った仲間、全く違う職種を志している仲間 38 人全員が、卒業後災害時に同じ場所で、あるいはそれぞれの場所で協力しあえたり、人々を救う活動を行ったりしていたらいいなと心から思う。

追記

私がこの文章を執筆した頃は、夢を実現させようとしている途中であった。しかし、追記を行っている１月現在、警察官なるという夢を叶えることができた。４月からは、３年間環境防災科で学んできたことを生かしながら、警察官として県民を守っていきたい。

“震災未経験者”が語り継ぐ

田中　颯馬

１　はじめに

阪神・淡路大震災発生から 26 年が経過した。私を含め震災を経験していない世代が神戸で半数以上を占めるようになった。震災が発生してから７年目に私は誕生した。私は生まれてから今までを神戸で過ごしてきた生粋の神戸っ子である。私は、幼稚園、小学校、中学校と阪神・淡路大震災についてそれなりに学んできた。高校は兵庫県立舞子高等学校・環境防災科に入り阪神・淡路大震災での教訓を学習してきた“震災未経験者”の私が、阪神・淡路大震災の当時を語り継ぐ。

２　父の阪神・淡路大震災

私は、環境防災科に入る前から、父が当時消防職員（現在は、救急救命士）だったため、以前から震災の話を聞いていた。しかし、今回当時の出来事を改めて聞くと阪神・淡路大震災の悲惨さが伝わってきた。以下に記したものは父が経験した内容である。

震災での体験談は、2018 年に環境防災科を卒業した私の兄が制作した「語り継ぐ 14　The fear ignorance　～無知の恐ろしさ～」から引用したものである。

（１）震災発生

私（父）は、消防職員として３年目で、３名の後輩ができ先輩としての自我が芽生えてきた頃であった。またその年は、成人式もあり大人としても責任感が芽生えてきていた。

発生当日は非番日であり、家で就寝していた。地鳴りのような音に驚き、直後には床から非常に強い衝撃を受けた自身の体で飛び上がり、枕元には高さ１メートルの冷蔵庫が倒れてきた。

須磨区の高台にある独身寮の５階に住んでいたため、須磨から長田の西側を見渡すと、10 数か所で火柱が上がっていた。すぐに勤務先である西消防署に電話連絡するも、明確な判断が得られなかったため、自主参集することを決めた。当時付き合っていた妻に連絡し無事を確認後、実家の熊本に連絡しようとしたが電話は不通になった。

自家用車で西消防署伊川谷出張所に向かう途中に、ラジオを聴くと神戸市全域で火災や家屋の倒壊があり行方不明者が数千名いるとの情報が入った。淡路が震源地であるため対岸にある西区は壊滅状態を予想していたが、思った以上に伊川谷町は被害が少ないようであった。伊川谷出張所に到着すると、ここのみ被害が甚大で地盤沈下し、隣の農協の建物とはズレが生じ、事務所内の棚はすべて倒れて壊滅状態だった。

（２）長田区へ出動

事務所内を片付ける途中で、乗務していたポンプ隊が長田区に派遣が決まり、慌てて先輩の所持していたカップ焼きそばを３人で分けて伊川谷出張所を出発した。途中、西消防署に寄り用意されていたおにぎりを１個食べ、長田消防署により指示を受けるよう任務を受け、西消防署を出発し長田消防署に向かった。

長田消防署に向かう西神中央線、西神戸有料道路はかなりの渋滞であり、サイレンを鳴らして向かうも、車両が通ることができる状況ではなかった。途中私を含めた隊員が下車し、一般車両を制止し消防車を通すよう指示した。長田消防署に近づくほど空が煙で真っ黒になっており、長田天神の近くでは昼間なのに薄暗いという異様な光景であった。

長田消防署へ着くと、前の路上には多数の消防車が到着しており、川を隔てた隣の工場が炎上中であった。隊長とともに事務所内の所長室に向かうも、事務所は誰もおらず、署長室には数名の幹部がいたのみであった。その幹部から明確な命令や情報がなかったため、隊長が長田消防署から直線距離で 200 メートルほどにある御船通で火災防御することを判断し向かった。

道路にある消火栓や防火水槽はあらかじめ使えないという情報を得ていたので、当時あった長田の市民プールからホース延長することを判断したが、おそらくほかの消防隊も十分な水量の確保は難しいと思っていた。しかしプールにある消防車は１台のみであったため、十分に水量は確保できた。御船通はプールから数百メートルの距離があるため、１本 20 メートルあるホースで足りるのか心配だった。なんとかホースカーや背負いのホースを繋ぎ、一線を確保し火災防御にあたったが水圧が十分でないうえに、２丁目分くらいの敷地を我々の一線で消さなければならない状況であった。最初は炎上中の文化住宅を消しており、隣にあった新築の一戸建てを守ろうと思っていたが水圧が十分でなかったため、窓から火

が入りすぐに燃えてしまった。どの角度から放水しても全く消すことができなかったため、角に建っていた耐火構造のマンションを守ることを念頭に置き火災防御を実施した。

途中で生き埋めになっているおばあさんの救助を求められたが、全く応じることができなかった。家族も納得していたのか諦めており、この建物は燃やさないでほしいと希望のみを私たちに伝えた。

（３）寒さと空腹

一切飲食せず火災対応をしていたが空腹はさほどつらくはなかった。防火服はずぶぬれになり、かなり寒かったので燃えている家の熱で暖をとり、防火服を乾かした。長田消防署に食料があるとの情報あったので、全員で長田消防署に向かうとお菓子が数個転がってあるだけであった。満足に空腹を満たすことはできなかったがすぐに現場に向かった。そのころには空腹感が強かったが、全く食料がなかったため、我慢して火災防御を続けていたところ、住民が私の肩をたたき「兄ちゃん、腹減っとるやろ！家は燃えとるからあきらめてこっち来ておにぎり食べ！」と声をかけてくれた。そこはキリスト教の教会で、壊れた家から米を、壊れた自動販売機から水を持って炊き出しをしていた。声をかけてくれた住民は後から分かったのだが、文化住宅隣の新築一戸建ての住民だった。ありがたくおにぎりを１個食べて、お礼を言い現場に戻ろうとしたところ、「もっと食べ！」といってくれたものの被災している住民には悪い気がしたので、さすがに断った。

そうこうしていると消防車に食料が届いているとの情報があったため、消防車に久しぶりに戻ると、水と食パンの耳が届いていた。普段なら絶対に食べない組み合わせであったが空腹を満たせればいいと思い一気に食べた。

（４）長田区の火災防御終了

ほとんどの街が燃えてしまったが、何とか当初の目標であったマンションだけは守り、気が付けば午前２時であった。一段落したところで西消防署から交代要員が現場到着したため、交代した。伊川谷出張所に帰ったが、よほど疲れていたのかそこからの記憶は全くない。

（５）火災防御と緊急出動

次の日からも須磨区や長田区にいろいろと現場に行った。ほとんど救助されていたのか、埋まっているのかわからなかったのか、そこでは遺体捜索することなく火災防御ばかり実施していた。数日後になって燃える現場もあり震災後数日は火災防御や、急にガスや水道が通ったため管の破裂でのガス漏れ警戒や漏水対応に明け暮れた。

火災防御とともに交代で緊急出動もした。現在は救急救命士であるが、当時は救急隊員の資格を取ったばかりであり、年齢も若かったため休まず現場活動させてもらった。その中で初めて自殺未遂の現場に出動した。

傷病者は 40 代の男性で、比較的被害の少ないマンションに住んでいた。根が真面目であったのか、震災でつらい思いをしている方が多い中、自分は何事もなく生活していることがおかしいと思ってしまったらしく、精神的不安に陥ってしまい、４階から飛び降りてしまったとのことであった。幸い下股の骨折のみで済んだが、こういったところも震災の影響が出てきていると感じた。

（６）震災後の住民生活

災害対応はいったん終了したため、自宅の寮に戻り落ち着きを取り戻しつつあった。私自身は被災していないが、寮ではガスや電気が来ていない状況と買い出しにいても買うことができる商品がないという状況であったため不便を強いられた。

西区には広大な土地があったため仮設住宅が多数建築され、街並みや住民の状況が変わった。震災後には自殺を図った男性のように、精神的不安定に陥った方が多数見られ、緊急搬送に苦慮したこともあった。併せて高齢者の１人暮らしが増え、今まで住民が協力して暮らしていた状況が破綻し、孤独死が多くなったように感じた。

消防生活３年目でここに書ききれない、もしくはいろんなことがありすぎて覚えきれていない状況を経験したという。

父は後に隊長となり、2011 年、東北にも出動した。「兵庫県緊急消防援助隊員として経験したことを東日本大震災に生かすことができたと思う。」と最後に言った。

現在、父は大規模災害緊急隊長に昇格し、いつ発生するかわからない災害に備えて力を尽くしている。

私は、この父の話を聞いてとてもショッキングだった。いつも陽気な父が真剣に話す姿はとても印象的だった。一番印象に残っているのは、生き残ったにもかかわらず自殺未遂を働いてしまった人の話だ。阪神・淡路大震災が発生するまで近年大きな災害がなかった日本では、被災後のアフターケアがままなっていないことが想像できる。そういった心のケアは若者たちが積極的に働かねばならないと思う。だ

からこそ専門的な知識をある程度学べる環境づくりはこれから機会を増やさなければならないと考えている。

３　母の話

母は当時のことをあまり覚えてないという。少しずつ思い出しながら当時のことを話していった。

北区の実家で寝ていた。ベッドで寝ていたところ突然の揺れに驚き恐怖を感じた。枕元の本棚が揺れに乗って倒れてきて下敷きになったが、布団をかぶっていたため身の安全は確保できた。家族全員無事だったことに安心した。

北区は、ガスと電気は止まったが水道は無事だった。水があったことで心身ともに安心していた。ライフラインが断絶していた長田区の人たちは有馬街道を徒歩で水を受け取りに来た。その後北区のライフラインはすぐに復旧した。長田区や中央区に比べたら、北区の被害はとても小さかった。

話した内容は少なかったが、言葉一つ一つに重みがあった。ショックが大きかったのは確かだ。話を聞いていて忘れたのではなく「忘れたい」という気持ちを持っている印象を受けた。それぐらい当時は、過酷でショックの強い出来事だったことが安易に想像することができた。

４　祖父の話

祖父は当時、東京で会社経営をしていたため、単身赴任で千葉に住んでいた。21 年半の長期単身赴任生活だった。その間、阪神・淡路大震災は発生した。当時、関東から見た阪神・淡路大震災のことを聞いた。以下が祖父の話した内容である。

当時、地震のことを知ったのは、朝６時の朝の NHK テレビニュースだった。テレビ画面では大阪 NHK 放送局内の蛍光灯や机上の書類等が大きく揺れ落下しているものが映し出されていた。報道は具体的な被害状況は不明の段階で、「大きな地震が関西で発生した。」という内容のみであった。

神戸は大丈夫だろうと思っていたが、家族が住んでいたので念のため当時は珍しかった携帯電話を使用し連絡を取った。連絡はすぐにつき家族全員の安否を確認した後、家の中の被害状況などを詳しく聞いた。家具や食器棚が倒れ、物の落下などがあったが誰もけがはしなかった。私が帰省していれば大けがしていたという。普段私が寝ているところに整理ダンスが崩れ落ちたのである不幸中の幸いであった。

いろいろと情報が入ってきたのは昼休みの時だった。それまでは関西地区の地震があったという話題があがっていただけである。当時は今のようにパソコンもインターネットもないからだ。そこで初めて震度７の大震災で甚大な被害が出ている事、阪神高速道路神戸線でバスが落下しかかっていた事、長田区で大規模火災が発生している事を知った。その後、家族のことが心配になり何度か連絡したが、不通。3 日間連絡を取ることができなかったのだ。地震直後に連絡していたため多少の安心感はあったが、「あの時連絡をしていなければ不安で仕方ない毎日だったと思う。」と言った。

祖父の話を聞いて情報の必要性をとても感じた。現代社会では、携帯電話を持つことはほぼマストに近い状況にある。それが、災害で連絡手段が簡単に途絶えてしまえば 26 年前と何ら変わらないことになってしまう。祖父の話のように連絡が取ることができれば、十分な安心材料になる。つまり、連絡網・通信網の整備強化は防災・減災の一種だと考えている。実際、大震災の教訓から、メッセージアプリ LINE では、緊急時に返信できなくてもメッセージを読んだとわかるように「既読」と表示される機能を付けた。私も 2018 年に発生した大阪北部地震では、母親に携帯で電話をするもつながらず不安な１日を過ごしたという経験をした。これから携帯電話をうまく利用することは防災・減災の必ずカギになってくるだろう。

５　叔母の話

叔母は当時、三田市の母子にいた。神戸市から少しだけ離れているが、母子も大きく地面が揺れた。叔母は当時看護師として病院勤務をしていた。以下が叔母の話した内容である。

地震が発生したのは仮眠室で仮眠をとっている時だった。最初は何があったのか全く分からなかった。ものすごい地響きの後、体を大きく揺すられた。すぐに布団に身を隠して、身の安全を確保した。収まった後は、病院内の停電、看護学校の生徒たちの叫び声、看護当直室の電話が鳴りっぱなしなど、すでに病院内は戦場と化していた。

着替えた後、補助の電気で呼吸器の必要な患者の所に人工蘇生器を持って走り回った。患者の命が最優先であるために、身を粉にして看護し続けた。そのほか、寝ている患者の頭にテレビが落下し、出血しているのを縫うことも多々あった。

あまりに忙しかったのと、停電のせいか神戸市がもっとひどいことになっていると知ったのは発生から約２時間後であった。さらにその約２時間後には灘から出勤している看護師が血相を変えて出勤してきた。そこで初めて神戸の状況を知り、食料の確保やカセットコンロなどを買い集めた。それをもってまた灘に戻るよう指示した。三田のものを買えるだけ買って長田区にも持って行った。

叔母の夫は消防職員あったため、すぐに本部から連絡があり長田区に向かった。三田消防は一番に長田区で消火活動をしたという。消火活動は父の話と同様で、あまりに過酷であった。

６　海外の防災　～貧富の差から生まれる防災力の差～

私は 2018 年 12 月に舞子高校が毎年行っているネパール訪問に参加した。自分自身初めての海外渡航だったため新鮮かつ驚きの連続であった。以下に記したものがその内容である。

私が一番驚いたのは、2015 年４月 25 日に発生したネパール大地震の影響でできた家屋や建物のがれきがいまだに撤去されていなかったことである。貧困地帯に限ってその現状であった。日本と比べて復旧・復興のペースは全体的に遅れてはいたが、地震から３～４年経ってがれきが積み上げられているという現状に絶句した。そこで普通に出店を営業したり近隣住民で会話していたりする姿は、今でも鮮明に記憶に残っている。

ネパールなどの後発開発途上国では、貧農の差によって生じる教育環境の差が問題である。実際、カトマンズ首都圏では成人識字率が７割を超えるのに対して最も貧困であるネパールの極西部では成人識字率が半数にも満たないというデータもある。つまり、ネパールの貧困地帯では満足に教育を受けられていないという現状にある。その結果、自然災害のメカニズムを知ることなく成人してしまう人がいるという環境であるため、「地震はナマズが起こすもの」といった神話のような事実無根である情報を信じることしかできないのである。そのため、がれきがあっても普段と変わらない生活ができてしまうという状態に驚愕してしまった。

このことから言えるのは、防災力向上のためには教育が必須なのであるということだ。自助を行うにも共助を生むにも公助を受けるにも知識がないと始まらない。世界の防災力を上げたいならば同時に教育環境を整えなければならない。

７　自分の将来像と防災のつながり

私の夢は、サッカーの指導者になることである。それは、プロサッカーチームなのか高校や中学といったアマチュアサッカーなのかはまだ決まっていない。だが、どちらにも共通して言えるのは、教育者になるということである。つまり、防災とは切っても切れない仕事だということだ。

地震・津波だけでなく近年は異常気象が異常と感じられないほどの頻度で私たちを襲ってくる。技術が進化し雨雲レーダーなど簡単に見られるようにはなったが、それすらも潜り抜ける突発的な豪雨も存在する。それから、選手・スタッフを守るには適切かつ迅速な判断・対応が求められる。そのことを達成するためにも指導者自身の防災力がなくてはならない。だから私は、環境防災科で学んだことは自分の将来の夢に非常に役立つと考えている。

私は、現在大学進学を志望している。大学に進学した際には、教育と防災のつながりやスポーツをするにおいて防災の知識は必須であるということを環境防災科で過ごし学んだ３年間に加えて深く学んでいきたいと考えている。

８　さいごに

執筆している私はいまだに“震災未経験者”である。ただ人生を日本という災害大国で過ごしていく限り“震災経験者”になることは間違いないだろう。

執筆するにあたって聞いた震災も話は、いつも温厚で優しい身近な人間からはとても想像できないような悲惨で残酷な話だった。特に父の話は、実際現場に出動した人間として震災の話を語り継ぐというのは当たり前で受け取ってもらいたいという姿勢だったのがとても伝わってきた。だからこそ、上記に記した家族や親戚から話してもらったことは忘れてはいけないし忘れたくない。そして、話を聞いた私や私の執筆した内容を読んだ人には、次の世代へ語り継ぐ義務があると思う。私は、その義務を必ず全うして“震災未経験者”というレッテルを言い訳にしない“災害に強い人間”になりたいと思う。

あの日限りを防ぐ語り継ぎ

出井　和翔

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分に、阪神・淡路大震災が発生した。この災害により多くの人の命が失われた。もう２度と多くの被害を出さないために語り継ぐ必要がある。けれども私は震災を経験していない。そのため実際に経験した父と母の話をもとに阪神・淡路大震災を語り継ぐ。

２　阪神・淡路大震災の概要

発生日時	: 1995（平成７）年１月 17 日午前５時 46 分 52 秒
地震名	: 兵庫県南部地震
震源地	: 淡路島北部
震源の深さ	: 16 キロ
最大震度	: 震度７
地震の規模	: M7.3
人的被害	: 死者 6434 名（関連死 919 名）行方不明者３名　負傷者 43792 名
主な死因	: 圧迫死（圧死、窒息死など）
住宅被害	: 全壊 109,406 棟　半壊 144,276 棟　一部損壊 390,506 棟
火災被害	: 全焼 7036 棟　焼損 7574 棟

［神戸新聞ＮＥＸＴ］参照

３　母の話

母は当時加古川に住んでいた。祖母は５時に起きて朝食の用意をしていた。するといきなり、「ガタガタガタ」と家が揺れだした。家の中の食器が割れ祖母がパニックになっていた。それでも母達は加古川に住んでいたので神戸よりは被害が少なかった。その時母は祖母に「早く起きなさい！」と叩き起こされた。母は何があったかわからず呆然としていた。祖母がパニックになっていて「何があったん？」と聞くと「地震や！地震！」と言われ驚きが隠せなかった。すぐにテレビをつけると神戸が火の海になっていた。母はその時初めて加古川に住んでいてよかったと言っていた。

４　父の話

父は阪神・淡路大震災を経験した。父はその時寝ていた。するといきなり、「ドォーン！」と爆弾並みの大きな音がした。その瞬間目が覚め、激しく揺れだした。父は瞬時に机の下に潜り込み一命をとりとめた。当時父は三宮の市営住宅に住んでいた。建物が倒壊することはなかったが、家の中の被害はひどかった。キッチンに置いていた水槽が落ち水浸しになり、食器も割れ、私の父は金物屋を経営していて店の中に入ると店内がぐちゃぐちゃになっていた。外に出るとガス管が壊れガスの臭いが充満し、目の前のマンションが倒壊し火事になっていた。しかし、父は自分の家の被害がまだ少なくて安心したと言っていた。なぜなら父は本当なら亡くなっていたかもしれないからだ。元々父は震災前、市営住宅ではなく古い一軒家に住んでいた。しかし、区画整理の対象になり市営住宅に住むことになったので建物が倒れることなく家の中の被害だけで済んだ。もし前の一軒家に住んでいたら全壊になって何もかも失い家の下敷きになり亡くなっていたと言っていてゾッとした。

５　父と母の話を聞いて

私は父の話を聞いて、印象に残ったことが２つある。１つ目は、地震が起きても瞬時に机の下に隠れて一命をとりとめていたことだ。もし私が阪神・淡路大震災を経験していたらしっかりと机の下に隠れることはできていただろうか。口では災害が起きたらこうしないといけないといくらでも言えるが、いざ行動するとなるとできていたのだろうかと思うと父は偉大だと感じた。

２つ目は、父は亡くなっていたかもしれないというところだ。父が住んでいた市営住宅も半壊だったらしいが、もしあの区画整理がなかったら全壊で父は亡くなっていた。もし父が亡くなっていたら私もここにはいなかったと思うととても恐ろしいと感じた。

母の話を聞いて思ったことは２つある。１つ目は、祖母が起きていてよかったということだ。もし祖母が寝ていたら地震が来ていることに気づいていなかったかもしれないから起きていてよかったと感じた。

２つ目は、震度４でも意外と被害が大きいということだ。父と比べるとひどい被害はあまりなかったが震度４でも食器が落ちて割れたりすることに驚きを感じた。そう考えると震度７の地震を受けた神戸はとても大変だったのだと改めて感じた。

６　南海トラフ巨大地震

今まで書いてきた阪神・淡路大震災よりも危険な災害が神戸を襲うと言われている。それが南海トラフ巨大地震だ。南海トラフ巨大地震とは、今後 30 年以内で 70%～80%の確率で発生すると言われており範囲は神戸だけでなく、静岡県から宮崎県にかけて被害があり、その一部では震度７となる可能性があるほか、それに隣接する周辺の広い地域では震度６弱から６強の強い揺れになると想定されている。また、関東地方から九州地方にかけての太平洋沿岸の広い地域に 10m を超える大津波の襲来が想定されている。その中で兵庫県が起こる被害予想が約３万人と言われておりこれは津波による被害が大きいからだろう。そのため１人１人防災に関心を持ち今のうちに防災対策を心掛けたほうが良い。そうでなければ多くの被害が出てしまう。南海トラフ巨大地震の被害を最小限に抑えるには、今から減災の努力を進めていけば、被害を大幅に減らすことができるとされている。例えば、家具の固定、非常用持ち出し袋の作成、ハザードマップの確認などそのような基本的な減災をしっかりしていくことが大事になってくる。このような災害が来る前にしっかりと今のうちに備えるのが大切だと私は思っている。

７　環境防災科

（１） きっかけ

私は最初環境防災科という学科の存在を知らなかった。現在、私は三宮に住んでおり、行きたい高校の中に舞子高校は入っていなかった。しかし、私には将来なりたい職業があった。それは消防士だ。そのため、「もっと消防にかかわる高校に行きたい」と先生に相談すると「舞子高校に環境防災科という学科があるけどここは消防と関わっていると思うよ」と勧められオープンハイスクールに行くことになった。そこで桝田先生や在校生の話を聞いて受験を決め、舞子高校環境防災科に入学することができた。

（２） 入学して

入学してまず思ったことは、ボランティア活動が多いことだ。入学する前から環境防災科のことを調べていてボランティアがあることは知っていたがこんなにもたくさんボランティアがあることは知らなかった。その中でも驚いた活動は東北訪問だ。最初ボランティアは兵庫県内でするものだと勝手に思っていたが違った。私は行ってはいないが、実際現地に行き東日本大震災の被害が大きかったところを見に行ったり、現地の方の体験談を聞いたり、現地の学校の方と交流したりなどとても貴重な機会だと感じた。

もう１つは外部講師の方がよく来て下さることだ。１年生の時「災害と人間」という授業があった。その授業は毎週月曜日と金曜日にありどちらも２時間使って授業する。そのため、どのような授業なのだろうとわくわくしていた。すると外部講師の方がやって来て災害や防災のことを教えてくれた。外部講師の方は消防士、警察官、大学の教授など色々な方たちが来られた。その方たちは災害や防災のことがとても詳しく、とても分かりやすい講義をしてくださった。このような貴重な体験ができて環境防災科に入ってよかったと実感した。

８　消防学校体験入校

私が舞子高校に入学して一番挑戦してみたかったことは消防学校体験入校だ。消防学校体験入校は、１年生、２年生と実施され、１年生が初級、２年生が上級と分かれていた。私の夢は消防士であるため、とても興味が湧いていた。中でも一番大変だったのは規律訓練だ。規律訓練は、基本の姿勢、休めの姿勢、敬礼などがあり一見簡単と思うかもしれないが、これがとても辛く難しい。１年生の時は規律訓練をしていたが熱が出てしまい、ほかの訓練を受けられなかった。他にも、ロープ結束、救助訓練、消火訓練などまだまだたくさん訓練があったのに受けることができずとても残念だった。そのため、２年生こそは体調を整えて頑張ろうと思い、１年後また消防学校の時期がやってきた。

（１） １日目

２年生の内容は、１年生の時より難しくなっておりしかも２日に分かれていた。１日目は規律訓練、救助訓練、放水訓練、ロープ結束、煙中活動訓練。２日目は規律訓練、ホース延長、総合訓練というとてもハードな２日間だ。はじめに規律訓練が始まった。私は１年生の時規律訓練しか受けられなかったため、とても緊張した。１年生の時より厳しくなっており難しく大変だったが何とか乗り切ることができた。

次にロープ結束だ。ロープは自分の体にロープを巻き付け人を助けるために使用する。ロープ結束は結び方がたくさんあり約 20 種類あるが私たちはその中で４種類練習した。教官が丁寧に教えてくれてできるようになった。消防士になったら結び方を全部覚えないといけないので大変だと感じた。次は救助訓練だ。救助訓練は３人ペアになって１人を２人で持ち上げて落とさないように運ぶ方法を教えて下さった。重い人を運ぶのは大変だったがやりがいがあった。これで午前の部は終了した。昼の休憩が終わり、次は放水訓練が行われた。放水訓練は火を消さないといけないので水の量がとても多く水圧が凄まじく、しっかりと持っていないと飛ばされそうになるぐらいだった。もっと鍛えないといけないと感じた。次は１日目ラストの煙中活動訓練だ。煙中活動訓練は煙で充満している建物に入り人を救助するものだ。しかも空気ボンベを背負いガスマスクをつけ建物の中に入り救助しないといけない。その空気ボンベは約 20 キロもありとても重かった。いざ訓練棟の中に入ると煙で真っ暗になっており何も見えず助けることがとても困難だった。消防士はこのようなことをして救助をしていると思うと大変な仕事なのだと改めて痛感した。そして無事１日目が終了した。

（２） ２日目

２日目は規律訓練、ホース延長、総合訓練だ。規律訓練は２日目のためか慣れてきた。皆もきれいに揃うようになり教官に褒められ嬉しかった。次はホース延長だ。ホース延長は放水をする際、火事現場に水が届かないときに実施する。（ホースを延長すれば長くなり火事現場まで届くようになるということだ。）意外と延長するのは簡単なのだが、これをできるだけ早くあまり時間をかけずに作業しないといけない。これが難しい。しかし、実際火事現場に着いたら早く火を消さないといけないため、早くホースを延長しないといけない。もたもたしてしまうと消火する人に迷惑が掛かってしまうのでとても重要な役目だ。私もできるだけ早く延長できるように心がけたが早くしようと思うとあまりできずとても難しかった。最後は総合訓練だ。総合訓練は２日間やってきた訓練をまとめて実践していくという訓練だ。救助する班、消火する班、と分かれていて私は消火する班だった。前半後半と分かれていて私は後半だった。前半の人たちが始まった。みんなしっかりとできていてみんな成功していた。私たちの番が回ってきた。とても緊張して汗が噴き出してきた。ホースを延長し結束し火を消さないといけなかった。一番自信がないホース延長をしないといけなかった。しかし、頑張ろうと思い訓練に集中した。すると練習であまりできなかったホース延長ができるようになり見事訓練を成功することができた。しっかり集中すればできることを学んだ。１年生の時のリベンジが果たせてとても嬉しく思った。このような貴重な体験ができ、消防士になって生かしていきたいと感じた。

９　将来の夢

私の将来の夢は消防士だ。主に、消防隊と救急隊で分かれており私は救急隊に入りたいと考えている。救急隊になりたいきっかけは私が中学２年生の時に経験した職業体験が大きい。その職業欄の１つに消防士と書いてあり、当時の私は、「消防士ってどんな仕事をするのだろう？」と興味を持ち消防局へ訪問した。その時も規律訓練、救助訓練、放水訓練などを行い、とてもきつかったがやりがいがあり消防士になりたいと思った。しかも私の叔父とはとこは消防士であり、どちらも救急隊として活動している。また、叔父に関しては救急救命士になっている。そこで叔父とはとこに家に来てもらい、どんなことをしているのか、どうやったら消防士になれたのか、救急隊の仕事内容などをたくさん聞き、私も人を助ける格好良い職業で働きたいと思い消防士の救急隊になろうと決心した。

消防士になりたい理由がもう１つある。それは親に恩返しをしたいからだ。私は今まで親に迷惑をかけ続けていた。わがままを言ってやらせてもらったり、色々困らせたりしてきた。しかし、親は嫌な顔１つせず自分のやりたいことをやらせてもらい、支えてくれた。だから次は私が消防士になって親孝行をし、恩返しをしたい。次は私が支える番だ。（だから私は人を助けられる消防士になりたいという夢がある。）

消防士は災害救助だけでなく、住民自身が自助、地域で共助ができるように活動していることが魅力的だと考える。地域とのつながりが大切だと思ったのも、環境防災科に入学してわかったことだ。この高校で３年間学んだ知識や経験を生かして、消防士になったら地域の人たちに伝えていきたい。また、火事や救助現場では活躍できる消防士になりたい。

10　最後に

阪神・淡路大震災を経験していないから、災害を他人事だと感じている人も少なくはないと思う。実際私も環境防災科に入るまではそうだった。しかし私は、父の話を聞き、環境防災科で学んだことを生かし

ながら考えることができた。父の話を聞いたとき改めて地震が怖いということを再確認できた。しかし、これから起こると予想されている南海トラフ巨大地震は阪神・淡路大震災よりも恐ろしい地震で、しかも津波が来ると予想されている。死者は兵庫県だけで推定 20000 人の方が亡くなられると言われていてとても危険だ。そのため、私はこの死者数を少なくするために今やっている防災がある。それはいつ起きても対応できるように家族全員の防災バッグを作ったり、耐震グッズを倒れてきたら危ない棚につけたり、津波が来ても大丈夫なように家族全員でハザードマップを見たりなど他にもやらないといけないことはたくさんあるが私はこの３つを行っている。しかし、私だけが防災に力を入れても死者数は減らない。だから私が消防士になったら地域の方に防災の取り組み方やどのような備えが必要かなど地域の方々に教えたいと考えている。そうすれば推定 20000 人の方が亡くなるところを０人とまではいかないが半分以上の方が亡くならずに済むのではないかと思っている。南海トラフ巨大地震は 100％来ると思う。だが地域の方１人１人が備えると被害も少なくなるし死者数も減る。だからこれから来る災害に備えて準備していくことが大切だ。

「きっかけ」が繋いでくれたこと

戸澤　幸咲

１　はじめに

「日曜日は学校があります」１月 15 日の金曜日の帰りの会。当時小学１年生だった私は担任の先生の冒頭の言葉に耳を疑った。「えっ～？！なんで学校があるん！」みんな声に出してせっかくの日曜日がなくなることに不満を零していた。私もその中の１人だった。「それはね、阪神・淡路大震災の式典があるからですよ」この頃は、まだ東日本大震災が起こっていなかったり、新潟県中越地震（2004 年 10 月 23 日に発生）時は私がまだ２歳の頃だったりと大規模な災害について無知だった。そのため、阪神・淡路大震災の式典が追悼式だなんてこの日の自分は思ってもみなかったと思う。当日、倒れている高速道路や煙に覆われた神戸のまちを DVD で観た。そして、防災訓練をし、運動場で音楽の授業で練習してきた『幸せ運べるように』を全校生徒で歌った。学校が終わり、宿題で出された阪神・淡路大震災の式典の感想文を書いている時だ。経験していない私がなぜ阪神・淡路大震災を学ばければならないのかと疑問を持った。知って何になるのだろう？学んで自分はどうすればいいのだろう？この疑問が私の阪神・淡路大震災のことを知りたいと思った原動力になったきっかけだと思う。小学１年生のこの小さな疑問が役に立たないと思っていても、阪神・淡路大震災という言葉が出るとなぜか聞き入ってしまうのだ。そのため、語り継ぎをする人たちに「語り継ぐ１人になれる」と教えてもらったときは感銘を受けた。小学生から高校生までの 11 年間の学びを今、私なりに語り継ぎたいと思う。

２　阪神・淡路大震災

祖母は、当時小学６年生の叔母と成人式で明石の実家に帰ってきた叔父の３人で１月を過ごしていた。実家は４階建てで叔父が２階、叔母と祖母は４階で寝ており、始めの揺れには気づかなかった。

祖母の話

叔父の声に目が覚め、何事かと驚いたが、２回目の横揺れで「避難しなくては・・・！」と急いで服と靴下に履き替え１階に向かった。しかし、玄関の前にある本棚が倒れてしまい、本棚を踏んでまでしないと外に出られなかった。家から出て、まず見えたのは目の前の道路と家の間が３メートルくらい埋まっていたことだった。液状化現象が起こったのだ。家の前にある小学校に避難しようと３人で学校に逃げた。数時間経って、祖母は兵庫区で貸していたアパートの様子が気になって、会社の車でも無事だった 10 人乗りの車を使い、アパートに向かった。道中お店やコンビニで食料を探していたが１軒だけしか開いていなかった。その１軒のお店に入ってみたらパン屋さんが来ていて、「パンをもらえませんか」と声をかけると「予約しているパンなので売れません」と言われ、何も買えず車で目的地に向かうことになった。長田区の近くまで着くと火事のせいで長田区から約 1 キロメートル範囲までしか車が入れなかったので、仕方なく 2 時間くらい歩くことになった。歩いていると、JR の線路から下（南方面）は危なかったと後々分かるようになった。ゴムとガソリンの匂いと黒い煙が強く、その中から生き埋めになった人を救出してほしいという声やビルから降りられず救助を求める叫び声、埋もれた人から聞こえる泣き叫ぶ声が聞こえてきた。この声にどうしようもないという思いでいっぱいになり、瓦礫の下にいる人を踏んでいるのでは・・・と考えてしまう気持ちを抱えながら、「ごめんなさい」と心の中で呟き、叔母と一緒に歩いていた。苦しかった。ビルも家も崩壊していて、長田病院の真ん中の階が潰れていた。長田病院のような建物の状況がこの地域では多かった。このときに見た神戸の震災の朝の景色の赤さを今でも忘れられない。火事のせいでできた色かと思ったが、その色とは違う真っ赤な空だった。

明石を出発して３時間。やっとの思いで貸しているマンションに着き、見てみると全壊していた。しかも隣の５階建てのマンションが下に潰れて３階になっていた。貸していたマンションの住人の人の安全確認を取り、近くの避難所に避難してもらった。それを終えると、とりあえず明石に帰ろうと考え、帰路についた。この日は運動場の真ん中に車を止め、車内で過ごすことになった。

明石の避難所ではトイレは水道が使えず、プールの水を汲み自分たちで運んだ。震災から２日目にパンを１人１つもらい、３日目は温かい味噌汁と塩おにぎりをもらった。味噌汁と塩おにぎりを高齢者の人たちに渡している際、みんな寒い思いをしていたからもらって嬉しそうにしていた。水をタンクで溜めていたり、当時アメリカに滞在していた母や伯母がアメリカ産のお米を届けてくれたりしたので近所や叔母の担任の先生などに配った時、沢山の「ありがとう」という声をもらった。

自分たちの生活は、朝は物を買ったり、貸しているマンションの住人とビルの確認をしたりした。夕方は地震の揺れがまだ怖かったため、運動場の真ん中で家から取ってきた敷布団ともらった布団で車中泊するの繰り返しだった。震災から３ヶ月は本当に忙しかった。会社の車を業者の人に廃車してもらわないと自己責任になると聞き、頼んで無料で片付けてもらったり、会社が震災で廃業してしまったので、従業員とハローワークに行くのと同時に区役所に全壊・半壊の証明書の手続きをしたりの休む暇もない日々が続いた。特に問題になったのは、ビルを潰すお金だった。自分たちでしなければならなかったので潰すのに 2000 万円必要だった。そんなお金を当時は持っていなかったので、集めていた家賃とまだ持っていた３つのビルを売りそのお金はビルを潰すお金に費やした。ビルの取り壊しに悩んでいたある日、兵庫区にあったアパートの近くで火事が発生した。結局は隣の建物で鎮火してしまったが、この時「火事になるくらいやったらこのアパートも灰になってくれたらええのに」と祖母は思った。その理由は、持ち主にお金はもらえないが、貸している人たちにはお金が少しもらえるという話を聞いていたからだ。少しずるいなと感じていた。忙しい時期が終わり、仮設住宅の申し込みをしたのは震災から半年後だった。

震災があって思ったことは２つある。１つ目は会社の収入だけで生きていけると思っていたけれど、反対にお金のかかる状況になり、１からの生活になって大変だったこと。２つ目は、叔母が３年くらい余震を怖がり、ずっと離れなかったことだ。特に２つ目は印象に強かった。５、６年くらいしたら落ち着きを取り戻し、震度がどれくらいか言えるようになっていた。それから、叔母も大人になり今は東京で仕事をしている。しかし、神戸で小さい地震が起これば「地震きてたみたいやけど大丈夫？！」と連絡がきたり、阪神・淡路大震災以降お葬式に参加した際、「死人の顔を見たくない」と言ったりと辛い顔をするのを見るようになった。それくらい阪神・淡路大震災の記憶が残っていると思った。最近だと、今住んでいる近所の人たちも阪神・淡路大震災の記憶が怖いからか電気やラジオをつけたまま寝ており、震度３くらいの地震でも外に出て様子を確認しに行く姿を見かけるほどになっていた。当時の子供たちや 60 歳近くだった大人たちは阪神・淡路大震災の心の傷が残っていると思う。

３　話を聞いて

阪神・淡路大震災の体験の話を聞かせてほしいとお願いした際、祖母は当時の貸していたマンション近くの景色や液状化した建物の様子などの計７枚の写真を見せてくれた。「神戸の復興はよそから見たら『えー！？』って思うほど早かったんやと思うわ」と言っていた。そして、「でも、まだ叔母みたいに思う子もおるんやね」とも言っていた。正直、私はこの話を聞いたとき、何も言えず、何も考えることができなかった。驚きが強すぎたからだ。『光の裏には影がある』と環境防災科で教えてもらったのだが、阪神・淡路大震災でできた心の傷を持つ人は光（今の日本の姿）に隠れて今も影で生きているのだと改めて実感した。それと同時に、祖母と講義をしていただいた講師の方の「子どもたちやお年寄りは災害で心の傷を隠してしまっている」という考えがリンクしていると分かった。復旧＝復興に現在の日本はなってしまっているのではないかと少し悲しい気持ちになった。復旧は壊れてしまったものをもとに戻すこと、復興はもとあったものよりも更に良くするものという意味がある。もとの生活に戻そうと頑張っていることは分かるが、人間が恐怖を感じたまま生きていくことになってしまえばどうなるだろうか。心の病を病気とみなさないと聞いたことがある。その人が持つ過去の心の傷を支える人が今も昔にも必要だと思った。防災・減災を語り継ぐ役目を担う私にできることは他人事ではなく自分事として考えることだと思う。過去を知り自分の日常と照らし合わすことはもしもの災害に少しでも自分が生き延びる力になると考えている。同じ過ちを繰り返さないように教訓や体験談を聞くことの大切さを学んだので、知識だけを伝えるのではなく、こういった現状を伝えなければならないと改めて思った。

４　環境防災科

（１）　きっかけ

『ひょうご安全のつどい』という式典を知っているだろうか。この式典は、風化しがちな防災意識を新たにするとともに、震災の経験と教訓を発信し、1.17 を忘れずに語り継ぐためにある。１.17 ひょうごメモリアルウウォークや阪神・淡路大震災で犠牲となられた方々への哀悼の誠を捧げるとともに、安全・安心な社会づくりに向けて歩む決意を子どもから大人までが内外に発信している。（１.17 は忘れない　ひょうご安全の日公式サイト参照）この式典に私は小学６年生から中学３年生参加していた。この式典で環境防災科を知ったのだが、そのきっかけとなったのは、中学１年生のときに参加した防災訓練だった。中学生の子どもたちは救援物資の運搬やけが人になる役割をした。防災訓練の待機中、赤いジャージを身にまとった団体が来た。誰だ？と思いながらその団体を見ていたとき、「大丈夫ですか？」「この人を運

ぶぞ」とまるで本当に災害現場にいるように動いていたのだ。ひょうご安全のつどいが始まる前、「めんどくさい」「適当でええやろ」と言っていたクラスメイトがいたせいか、訓練を真面目にしていたら笑い者にされてしまうから皆に合わせておこうと自分に自信がない私はこの時思っていた。しかし、みんなで真剣に取り組む姿を見た瞬間「かっこいい・・・」「私もこの人たちのように頑張りたい」と強く思ったのだ。式典が終わり、学校に帰ったときに担任の先生にあの団体は誰なのかと聞いてみたり、調べたりした結果『舞子高校環境防災科』を知った。ボランティア活動や先輩方が式典で残した若者のメッセージや『語り継ぐ』を知るたびに憧れが強くなり、そして、自分の言葉で伝えることに挑戦したいとも思っていたので、この環境防災科でたくさんの経験をしてみたいと考えた。当時の自分を思い返すと意志を固め、行動に移したのは初めてのことかもしれないな、と思う。このきっかけのおかげで私自身を大きく変えさせてくれたと思うと凄いなと実感した。

（２） 高校生活

「初めてのことが多すぎた」これが３年間環境防災科で過ごしてきて思う感想だ。垂水区に行くために電車やバスを使って通学すること、誰も知り合いがいない環境に飛び込んだこと、防災・減災をそれぞれの視点でたくさんの方に講義していただいたこと・・・。溢れ出るほどの初めての出来事を思い出す。それくらいめまぐるしい日々だった。その中で私は環境防災科に入学して、他の学校・学科では違うものを身近に感じることができたと思うことがある。それは、知らなかったことや考えたことがなかったことを教えてくれて、将来の自分と高校生の自分を繋げてくれる場所であったということだ。防災・減災も知識はもちろんあったが、先輩方や先生方のアドバイスを聞いたり、自分の在り方や防災・減災とどう向き合えればいいのか自分のことを客観的に見つめたりできた。この教えてもらったことを実践できたこともある。兵庫県防災ジュニアリーダー合宿で毎年に行われている東北訪問で現地の方での交流会にて、１人寂しそうにしていた女の子を見つけたときのことだ。準備をしている大人たちの姿を見ている１人の女の子を見たとき、誰か遊び相手にならないといけないのかなと思い、友人を引き連れ、女の子に声をかけた。始めはお互い人見知りで、ぎこちなかったのだが遊んでいるうちに打ち解けていき、自分から「この遊びをしたい」といってくれるようになった。夢中で遊んでいたとき、「楽しそうだね」と現地の方々が笑顔で話しかけてくれた。このとき、環境防災科でお世話になった和田茂先生のおっしゃった「子どもの笑顔は大人たちに笑顔を届けてくれる」という言葉を思い出した。この言葉が目の前の出来事になっていることに感動した。先生方や先輩方、講師の方の言葉の深さを知ったこの出来事を活かし、今は子どもたちや大人たちの心理を学び、声かけや小さな行動に中の変化に気付ける人になるという夢を持てた。初めてだらけの世界であっても、自分のことを自分自身で知れることにできた。この場にいたことを感謝したいと思う。

（３）ボランティア

「小遣い稼ぎだろ！」「募金活動なんてやめろ！」「偽善者がやることじゃない！」これらは私が実際ボランティアでとある年配の人から言われたことだ。当時は高校１年生で初めての募金活動だったこともあったからか不思議な気持ちになった。その理由は、ボランティアはいいことだと思っていたからだ。実際会えなくても支援できる、誰かの支えになれるなどボランティア活動は人を助けることができる素敵なことだと考えていた。そのため、実際に「ボランティアをするな」と言われたときは、「なんでそんな風に言うのだろう？」と不思議に思い、この疑問を抱えたままその日のボランティアが終わった。後で調べてみると、募金詐欺（ありもしない話をでっち上げたり、実在する有名な話題に便乗して金品を詐取する行為のこと）や自己満足でやっているだけだと思う人がいるなどボランティアの見方が人それぞれにあると分かった。ネットで検索してみても「ボランティア」に続く文字は「偽善者」だったり、「自己満足」だったりする。

このような結果から考えると、善意に思うものであっても反対の意見を持つ人がいるということを自然と忘れていたのかもしれないと私は思った。人はそれぞれの持つ経験やきっかけのもとで現在の自分をつくっていると私は考えている。その生きてきた中で今までに見てきたもの、感じてきたものにいくつか嫌な出来事や辛い・苦しい思いをしてきた人もいると思う。「騙された」や「許されない」と心に傷を負った人、「テレビや新聞で知った出来事に嫌気が差した」というマスメディアの情報だけを鵜呑みにしてしまう人などたくさんの人が暮らす社会の中で、それぞれが持つボランティアの概念がある。この概念を持って生きている人たちを否定してまでボランティアは善意だということができるだろうか。ひとりひとりの過去を知ろうと思えば、できることはできるが、そこまで考えて行動しようと思うにはたくさんの経験が必要だと思う。今の私はたくさん経験をしてきたとは思うが、人の心や視点を考えて取り組むにはまだまだ未熟者だと思う。しかし、「未熟者だから」、「偽善者だと思われたくないから」とい

う理由でボランティアをやめることはどこか違う気がすると思った。この２つの考えを融合させた結果として、私は色々な意見がある中で自分の経験を伝えることによって、ボランティアを偽善だと思う人を少しでも偽善ではないのだと考え方を変えさせるきっかけ作りを自発的にしてみればどうだろうと思った。「ありがとう」といわれて嬉しかった、「偽善者」と言われて驚いたなど自分の経験を伝え、その人へ寄り添っていく。難しいことではあるが、やる意味はきっとあると思う。ボランティアの賛成と反対の存在が表裏一体の関係であることを忘れず、これからもボランティアでもらったきっかけを活かし続けたいと私は思う。

５　受け止めることを大切に

私の将来の夢は公認心理師である。

見出しに書いてある「受け止める」という言葉。何気なく使うこの言葉にどういう意味が込められているのだろうか。この言葉を少しでも読者の方々にもわかってもらえるよう、「受け止める」と「受け入れる」と似ている言葉から違いを見つけ、大切にしたい理由を書きたいと思う。一緒の意味だと捉えがちになりそうなこの２つの言葉。まず「受け止める」という言葉の意味は、相手の意見を一度確認し、その後自分の意見を確かめること。次に「受け入れる」という言葉の意味は、相手の意見に自分の意見を合わせること。この２つの違いは、自分の気持ちがお互いに言えるかどうかということだと私は考えている。例えば、防災・減災を相手に伝えようとするときの対象の人を考えてみるとする。阪神・淡路大震災や東日本大震災を経験した人とまだ大規模な災害を経験していない人（この人たちのことを未災者と呼ぶ）の２つに分かれる。未災者の中でも防災・減災は大事なものだと考える人やあまり関係がないのではと考える人がいたり、経験者の中でも自分の体験を知ってほしいと思う人や大切な人を失い、苦しんでいるけれど立ち直りたいと思う人がいたりとこの世界には様々な考えや意思を持つ人がたくさんいる。その様々の対象の人がいる中で「これは専門家の人が言っているから絶対にこうだ」「防災・減災は関係がないとか思うな！」とむやみやたらに押し付けて、相手を置いてきぼりにしてしまう環境を自分で作ってしまったら相手の人はどう思うだろう。きっと、聞いている人から見れば「受け入れる」行為になってしまうと思う。私は、語り継ぐこととともに被災者になった人と私たちのような未災者の人たちが防災・減災を少しずつでも意識していかなければならないと考え、「受け止める」環境になるように相手の気持ちを考えて寄り添うことも大切だと思った。その人の意志や考えを知識で押し付け、少し知識があるだけで自分が正しいと相手を置いてきぼりにしてしまうのは違うと思う。「今からでも大丈夫だよ」と防災・減災を身近に感じてもらうことが意識を生み出すスタートだと思う。この意識をしてもらうきっかけを作るのは自分自身でもあり、防災・減災を学んだ人ができることだと考えている。

６　さいごに

「今年は『きざむ』やねんて」2020 年１月 10 日（金）、神戸市・三宮で開かれる追悼行事「1.17 のつどい」の会場に竹灯篭を並べて書く 2020 年の文字が「きざむ　1.17」決まったと友達の声が聞こえた。漢字１文字のイメージがあった竹灯篭の文字がひらがなだと知ると驚きがあったが、ひらがなの方が誰でも読めていいし、どの世代にも震災を伝えたい思いがあったのかなと思っていた。当日、慣れない早起きをして会場に向かった。追悼式の参加率が減少しているとニュースがあったように去年より少し減ったなと思いながら、竹灯篭に火を灯しに歩き回っていたときだった。「とうとうお母さんの年を越えていきます。家族みんなで、１日１日頑張っています」と遺族代表の方の追悼の言葉が聞こえていた。この時だ、震災があってから今日まで亡くなった人を思いながら必死に生きてきた人たちが、震災の記憶を苦しい出来事でも辛い気持ちを抱えていても１つ１つを刻んで次世代の私たちに語り継ごうとしている姿に気づいた瞬間だった。私は、1.17 の日にしか知れないことがあるのだと改めて分かった。

私は、１．17 からきっかけをたくさんいただき、たくさんの出来事に出会うことができた。そして、それと同時にきっかけを知った人は大きく変わることができると自分が体験し、環境防災科の皆の姿を見て実感した。私は「さいごに」の冒頭に書いた「きざむ」のことを書いたエピソードから、震災を想うことが未災者でもできるということ、語り継ぐ活動にとって大切な行動だと私は考えている。自分の行動が例え小さいことだと思っていても、どこかの誰かの命を救ったとき、その人にとってのヒーローになれるということは素敵なことだと思う。きっかけを見つけ、きっかけをつくることの大切さを胸に、私自身も震災の記憶を刻んでいる人たちの手助けができるように今生きているこの時間を精一杯に頑張りたい。

１人１人に素敵なきっかけが訪れますように、今日も私は祈っている。

未災者から未災者へ語り継ぐ

長友　和希

１　はじめに

近頃、阪神・淡路大震災を経験していない人が増え始めた世の中で、未災者の私たちができることは限られていると思う。語り継ぐといっても、私たちは決して被災者の方々の想いを全て理解することはできない。今でも、私が経験したことの無い様なあれほど大きな地震が起きてしまうことが想像できない。私が生まれてから起こった東日本大震災や熊本地震でさえ、経験しなかった私にとっては被災した恐怖や災害後に感じるストレスの大きさを簡単に理解することはできない。

しかし、これから先南海トラフ巨大地震や、沢山の災害が起こる可能性のある日本に住んでいる私たちは、過去の災害と向き合わなければならない。災害を経験された方の哀しみや悼みを知らなければならないと思う。なぜならこのような酷い災害で、自分の大切なものを失い、沢山の人が傷つくような災害を、もう二度と繰り返したく無いと思う気持ちは、被災をされた方々も、私たち未災者も、きっと同じだと思うからだ。

今回お話を聞く私の母は、当時宮崎県に住んでおり、被災していない。

私の“語り継ぐ”は「未災者から未災者へ」をモットーに書いていきたいと思う。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

名称：兵庫県南部地震
日時：1995 年 1 月 17 日午後 5 時 46 分
死者：6436 名
行方不明者：3 名
負傷者：43,792 名
全壊：104.906 棟
半壊：144.274 棟

阪神・淡路大震災について（内閣府　防災情報のページ）より

直下型地震のため津波は起こらなかったが朝早くに起こった震災だった為、朝ごはんの準備で火を使用している人が多く、火災により木造家屋に大きな被害が出た。また、倒壊家屋が多かったため、家の下敷きになり怪我や亡くなった方が多かった。

（２）阪神・淡路大震災と私

「しあわせ運べるように」この歌は私が阪神・淡路大震災を知る一番初めのきっかけとなった。この歌を知ったのは小学生の時だった。その頃の私は、地震というものを全く知らなかった。なぜ避難訓練をするのか、なぜこの歌を歌うのかも分からなかった。しかし、小学校で多くの防災授業を受けるようになって、震災は本当に恐ろしいものだと感じるようになった。今では、逆に小学生に防災の出前授業に行くなど、教える側になった。阪神・淡路大震災のことや災害の恐ろしさを伝える難しさだけでなく、もどかしさをとても感じる。しかし、今後起こるだろうと言われている南海トラフ巨大地震に備えるためには、まず過去の災害などについて自分自身が多くの知識を付けることが必要だ。

この歳になった今、改めて幼いころから防災教育をすることは大切なのだと考える。

３　阪神・淡路大震災と母

（１）当時の母

当時母は、宮崎県で航空会社に勤めていた。その日母は、急いでいたため朝起きてニュースを見ずに会社に出勤した。阪神・淡路大震災のことについて知ったのは、お昼休みの時間に見たニュースだったそうだ。その時、火事の様子や倒壊家屋の写真などを見てとても信じられなかったという。幸い、神戸に家族や友人はいなかったため、連絡を取る必要のある相手がいなかったのだが、母の友人曰く、震災当時は全く電話が繋がらなくて本当に大変だったそうだ。

母が言うには、阪神・淡路大震災が起こってから暗いニュースばかりで景気だけでなく本当に日本が暗くなっていく気がしたのだという。今まで地震について詳しく調べたり学んだりしてこなかった母は、地震の恐ろしさを初めて痛感したという。母は、とても他人事だと思えず大きなショックを受け、被災地

から遠く離れていることから何も出来ない自分の非力さをとても感じたという。そこから母は、ネットや町中で募金活動をしているのを見かけると、なるべく募金するようにしていたそうだ。

神戸への転勤が決まったのは 12 年前、私が小学生になろうとした時だった。今まで秋田県や北海道、鹿児島県など沢山の場所で生活をしていたが、神戸への転勤が決まった時に父と母が私に、兵庫県で起こった大きな地震の話をしてくれたことをうっすら覚えている。

「阪神・淡路大震災って知ってる？」まだ小学生にもなっていない私に両親に問いかけた。もちろんその頃の私はその震災どころか地震というものについても全然知らなかった。

（２）取り組み

小学校の時、塾で東日本大震災の被災地に文房具を寄付しようという取り組みが実施されたことがあった。その時母は私に、「被災地には本当に大変でつらい思いをした方が沢山いるから、私たちができる事はしていけたらいいね」と言って、ノートやペンを買って私に渡してくれた。母が私に環境防災科を進めてくれたのも、当時、阪神・淡路大震災の発災時に母が感じた自分の非力さと防災や減災について勉強してこなかった事を後悔していたから、という思いもあったそうだ。母からその思いを聞いたのは、初めてだったので驚いた。

４　母が私に伝えたかったこと

「災害を経験していないから何も出来ないんじゃない。私が何も知らなかったから、何も出来なかっただけなんだと思う。だから、貴方は環境防災科で勉強して災害が起こってしまった時に後悔が無いように、沢山防災について勉強してほしい」と話してくれた。私はより防災の知識を身に付けて、母や、家族の命を守れるようになりたいと改めて強く感じた。

また、この思いはお母さんが私につないでくれたように、私も子供に伝えていきたいと思った。

５　阪神・淡路大震災と父

父も宮崎県で仕事をしていたため、阪神・淡路大震災を経験していない。父は国家公務員で国土交通省に所属し、仕事をしていた。国土交通省では被災直後から関係機関と協力して社会基盤の復旧・復興に取り組んでいたと教えてくれた。そして、社会基盤に関する教訓も技術的な面で調査研究を積み重ねてきた。一方、阪神・淡路大震災から年月が経過し、被災体験の風化が危惧されていることから、平成 12 年度には、改めて幅広い視点から社会基盤に関する震災の教訓について検証を行ったと教えてくれた。それは、震災後に発行された様々な文献（書籍、新聞、雑誌、報告書等）から教訓にすべき被災当時の実体験や災害から市民生活を守るために記述などの収集を行うということだった。それに加え、様々なアンケート調査をおこなったり、ボランティア活動に参加された方の意見をまとめたりしたという。父も、もちろん大きな災害を経験した経験はなかったため、実感がわかない不思議な感覚になっていたと教えてくれた。

６　環境防災科

（１）きっかけ

私は中学校１年生の途中から環境防災科に入るのが夢だった。理由は２つあり、まずは私の夢が警察官だったからだ。環境防災科の先輩方は消防士や警察官になられる方が多いと聞いた。環境防災科に入学すれば、先輩方や先生方のお話を聞けるし、警察官になったら大切になる防災について勉強できると思ったからだ。

もう１つは、ボランティア活動だ。私が通っていた中学校はボランティア活動が盛んで、私もよく活動に参加させてもらっていた。中学校でのボランティア活動は主に地域の活動（清掃ボランティア活動や地域のハイキングなど）に参加し、お手伝いをしていた。そんな活動が好きだった私はこのような活動を高校生になっても続けたいと思い受験することを決めた。

（２）入学して過ごした３年間

環境防災科に入学して様々なボランティア活動に参加させていただいた。その中でも印象に残っているのは防災学習の出前授業とネパール訪問だ。出前授業では、様々な所に行かせていただいた。小学校、中学校、特別支援学校…。それぞれの場所で適した、伝え方をする難しさや大切さを学んだ。「誰に、どのように、何を伝えたいか」これを意識して様々な出前授業に参加させていただいた。これは出前授業だけではなく語り継ぐときにも大切だと気付いた。また、私たち若者が阪神・淡路大震災や他の災害を教訓に、これから起こると言われている災害に備える大切さ、このような悲惨で残酷な出来事を風化させて

はならないということを伝えるために語り継ぐのだということを、伝えていきたい。
次に、ネパール訪問だ。ネパール訪問に参加させていただくにあたって、ゴルカ地震について調べた。当たり前のことだが、他の国でもこの様な大きな災害が起こっていることに胸が傷んだ。また、ネパールと日本では文化や習慣までもが違う。災害の備え方も違う。ネパール訪問に参加して一番感じたのは避難訓練の質の違いだ。ネパールで行われている避難訓練は、もし隣にお年寄りがいたら、もし隣に足が不自由な人がいたら、など沢山のシチュエーションを考えて実際に、どうしたらよいのかを実施しているものだった。緊張感も感じられた。一方、日本で行われている避難訓練はどうだろうか。一応、火災訓練と地震の避難訓練は分けられているものの、違いが分からない。また、避難が終わると「全校生徒が避難終わって静かになるまで〇分かかりました。」で終わるのは、せっかく避難訓練をしているのに非常に残念に感じた。このように、様々な災害や他の国を見てみるとより、どのような防災活動を強化すればよいのかが分かりやすくなるのだと感じた。
これらの経験や授業で学んだ沢山のことを自分の中だけで閉じ込めておくのではなく、そのために語り継ぐ必要があると思う。

７　夢と防災

（１）私の将来の夢

私の将来の夢は警察官だ。本格的に警察官を目指し始めたのは小学校の時、警察犬のテレビを見たからだ。当時、警察官は悪い人を捕まえるということだけが仕事だと思っていたのだが警察犬というものがあることにとても驚いたことを覚えている。もともと幼稚園の頃から警察官になるのが夢だった私は、この頃から警察の中でも警察犬訓練士に憧れるようになった。
その中でも私は小型警察犬の警察犬訓練士になりたいと思っている。東日本大震災の災害直後、警察犬訓練士の方が警察犬を連れて救助活動に行ったとき、狭い隙間や高い場所での救助活動を行うときに小型犬の大切さに気付いたのだという。しかし、小型警察犬はあまり普及していないのが現状だ。その理由として、小型犬は状況の変化などに敏感で、メンタルのサポートが必要とされるなどの問題が挙げられる。そのため、私は小型警察犬の訓練士になるために、小型犬についても勉強し、災害時に活躍できるようになりたい。

（２）警察官と防災

警察官にはたくさんの職種がある。必ずしも希望する部署に入れるわけではない。しかし、警察官になって防災に関わらない職種はないと思っている。例えば電脳警察とも呼ばれるサイバーポリスは、ネットや SNS 上での犯罪を取り締まる部署だが、災害時にはネット上でデマが流された事例がある。そのような時、誤った情報を与えて混乱させないようにする。また、大きな災害が起こった時には、災害警察派遣隊というものが結成され、全国各地から警察官が被災地の救出活動にあたる。
このように、警察官は防災と隣り合わせで仕事をしている。だからこそ、防災の知識を持った人間が必要だと思う。知識といっても、ただ自分が知っているだけでは意味がない。それをほかの人に上手く伝えられることが大切だ。今の私にはまだそのような力はない。防災の知識もまだまだ不十分である。だからこそ、阪神・淡路震災や他の災害についても調べたりお話を伺ったり、それを自分で考えて整理をして、語り継ぐことがとても大切だと思う。

（３）どのように防災を広めていくか

警察官と防災の関りはとても深い。しかし、それらをどのように伝え、広めていくのかがとても難しい。ホームページなどで取り組みについては書かれているが、それだけでは影響力が足りないと考えた。しかし、この前ニュースで兵庫県警の取り組みについて取り上げられていた。県警の方は「阪神・淡路大震災を知らない世代の警察官が増えてきた中で、災害の取り組みや訓練などを強化したいと思っている。」とお話しされていた。そして、若者警察官を中心に被災して信号が動かなくなった時、手動で警察官が信号機の代わりなる交通整備の訓練をしていた。この様な取り組みをテレビなどで放送することで、そのテレビを見た人や警察官の組織としての防災力が共に向上すると思う。
また、防災の日や阪神・淡路大震災の起こった日にイベントを行ったり、夏祭りで消防士の方が消火訓練をしてくれるように警察官も、警察犬を連れて行ってイベントに参加させたりするのもよいと思う。

８　最後に

今回この「語り継ぐ」を書かせていて頂くにあたって、沢山の方々のおかげで書き綴る事が出来た。話を聞かせていただいた母やこれまで私に防災について教えて下さった先生方には本当に感謝している。

ありがとうございました。

環境防災科に入らなければ災害や防災について、こんなに興味を持ったり学びたいと感じたりすることは、無かったと思う。しかし、私は環境防災科に入学させていただき先生や専門家の方などに幅広い視点で災害や防災について教えていただいた。それだけでなく、多くのボランティア活動に参加させていただき、人と人とのつながりの大切さと自分で考え行動を起こす必要性を感じた。だから、私は将来環境防災科を卒業して違う進路で歩んでいくことになってもこれらの知識や学んだこと、考えたことなどを無駄にすることは絶対にしたくない、と「語り継ぐ」の執筆をしていく中で改めて感じた。

私は環境防災科の先生が仰ってくださった「日本は災害大国だけれど、防災大国ではない」という言葉がとても印象に残っている。現に、災害の起こる可能性は理解していても当事者意識を持って防災・減災に取り組んでいる人は少ない。災害について沢山の知識を教えて貰ったからには、その知識や思いを語り継いでいきたい。

この文章を書き終わったことで「語り継ぎ」をやめるのではなく、将来の自分も夢と防災を繋げ、環境防災科と私を切り離さないようにしたいと感じている。

語り継ぐ

名取　彩乃

１　はじめに

1995 年１月 17 日の午前５時 46 分に起きた阪神・淡路大震災。この地震は町や命をはじめとする多くの大切なものを奪った。そして、人々の今までの日常が一変し、消えない傷は残っている。その後、町は復興していき災害を実際に経験していない世代が増えていくのと同じように災害への関心や意識の薄れが見られる。また、今後も起こる可能性が高いといわれている災害、近年では南海トラフ巨大地震などに対しての準備や理解も不足している。その中で私ができることは多くの人に災害を知ってもらい備えていくことだ。また、阪神・淡路大震災をはじめとするさまざまな災害の教訓を生かす必要がある。そのために環境防災科で学び感じたことを、災害を知らない人へと伝えていく必要がある。そうして防災の知識や対策を日常のものと認識してもらうべきなのだ。

２　阪神・淡路大震災

（１）母の被災体験

田舎から帰った次の日の朝に災害が起こった。それにより今までの生活が大きく変わった。電気の復旧は早かったためテレビを見ることができたがそこには２階が潰れている自分の学校が映っていた。近くの建物が火事によって燃えていたことによって映っていたらしい。学校が使えなくなり、学校を再開する際は別の土地に学校の仮設校舎が建てられていてそこで授業が行われた。場所が変わったことにより、仮設の学校へ行くことは不便だった。学校だけでなく家での生活でも大きな変化があった。水の使えないときにはお風呂は銭湯へ行くこともあったが人が多く行列ができていた。また、飲み水や生活用水として使うような水は小学校へ来る給水車にタンクを持ってもらいに行くという生活が続いた。ライフラインがないという生活が不便で印象的だった。

（２）叔母の被災体験

当時母と住んでいた叔母は揺れが起こり怖くなって布団をかぶった。枕元に本棚があり、本が降ってきた。本棚自体は頭に落ちてこなかったが命の危機を感じた。揺れがひとまず収まると家族で集まり復旧の早かったテレビを付けた。するとそこには、長田の火事の様子が映し出されていた。その時住んでいた塩谷からは空が曇っているようで火事の煙の影響だと思われた。その後の数日間は家族みんなでいつでも外に出られるように頭付近に靴を置きコタツに雑魚寝して寝ていた。

会社へ行かずに家で待機をしていたが、２、３日後に会社から来るようにと電話で伝えられた。その際交通手段がなく車で迎えに来てもらい出勤しようとしたが、渋滞がひどく時間かかった。会社に着くと先に仕事をする訳ではなく、地震によって散らばったものの片付けをした。その後帰宅する際にも渋滞していていた。水が使えずお風呂に入ることが出来なかったため、加古川や魚住など被害の少なかった友人の家にお風呂を借りに行くこともあった。友人宅に泊まっていた日に、出勤しようと友人に車を出してもらって行く途中で会社から電話が来て車以外の手段で来るように言われた。そのため、地下鉄で板宿まで行き神戸までは徒歩で通勤した。そのとき周りには同じように歩いて通勤している人が多く見られた。会社の人たちの中でも避難所の人の多さや設備にストレスを感じて会社で寝泊まりをする人もいた。物資などについては、会社近くの弁護士会館の広場でのお菓子や乾パンなどの支給や近所の人がおにぎりを持ってきてくれること、九州の友人から水のいらないシャンプーが送られるなど感謝してもしきれないような支援があった。このとき人のぬくもりを感じた。

神戸では地震は来ないという考えを持っている人が多く、自分もその一員であり災害に対する備えを何もしていなかった。地震で少しでも揺れると思い出し、自分自身はそんなつもりはなくても身構えてしまうくらい怖い出来事であった。また、時間帯が早く家族みんながそろっていたためパニックになることは無かったが、もし自分１人で災害にあったらどうなっていたのか想像が出来ず、備えの必要性がわかる出来事でもあった。

（３）父の被災体験

当時大久保に住んでいた際災害が起こり、部屋のものがぐちゃぐちゃになって枕元にあるテレビが落ちた。少しずれていたら頭に落下してしまうところだった。揺れを感じたときに家が倒れるのではないかと思うほどだった。揺れが収まってすぐに埼玉に住む兄に電話を掛けて無事を伝え、テレビではどのように報道されているかを聞くと、京都で揺れたという情報しか出ていなかったそうだ。それを聞いた

直後に電話が切れ、その後掛けてもつながることが無かった。部屋のものを片付けていると電気などが復旧しテレビを付けると長田の火事の様子が映っていた。ご飯は朝の分しかなく、昼ご飯に何か無いかと買いに出かけようとすると道は渋滞していた。バイクで出かけたため時間は余り掛からなかったが店内には商品がほとんど無かった。親が家の近くでパンを買ってきてその日はパン２、３個で過ごした。２日目からは支援物資として食べ物が支給されたため助かった。その日から揺れに対し恐怖を感じ敏感になるようになった。

次の日に長田に立ち寄ることがあり、街の様子を見てみると、そこでは多く呆然とする人たちがいる状況だった。その後ガソリンスタンドに寄ろうと向かってみれば、100～200 台の車が並んでいて最終的にガソリンを入れることが出来たのは１週間後だった。

住んでいたマンションは新築だったため家への被害は少なかった。しかし、周りの家の多くは地震の影響で半壊・全壊だった。半壊の家は黄色い札、全壊であった家は赤い札という識別の札が貼られていた家が多数あった。当時受験生であったため大阪に受験で行くことがあったが、電車がまだ須磨までしか通っておらず時間がかかりとても不便だった。

関東から関西に引っ越してきて１年目だったが、関東大震災などの災害が起こっていた関東とは違い関西は安心だと思っていた時に起こった出来事だったので備えも何もしていなかった。そのため災害への対策の必要さがわかった。

（４）話を聞いて

今回大まかにしか知らなかった家族の被災体験を細かく聞き、特に印象に残ったことは災害への意識の薄さとそれによる備えの重要性だ。

災害発生直後の様子を聞くと、枕元にあるものがもう少しずれていれば頭に直撃していたという話があった。それが実際に起こっていれば、私が生まれることはなかった。それはとても恐ろしく、改めて今自分自身や家族が生きていることに感謝すべきであると思わされた。このような、地震によっての落下物の危険性があるということは、備えがしっかりしていなかったということだ。備えていないことによって衝立などで防ぐことのできた家具の転倒が起こった。こういったところで、備えが足りずに危険性を高めてしまった。備えが足りないという点に関して、食料備蓄についても同じことが言える。支給が来るまでの食事や水などに関して切羽詰まる状況であり、大変困っていた。改めて、災害前に備えることの重要さがわかる話であった。

交通に関して、渋滞というキーワードがよく出ていた。みんながみんな車に頼り、その結果渋滞による混乱を招く事態になった。電車が止まっていたことや、遠い場所への通勤など仕方ない面もあるが、これも食料の備蓄などの災害に対する備えがなかったために買い出しに行く人が多かったのではないかと考えた。またそれによるガソリンの需要が大きく、スーパーなどと同様に多くの人が並んでいるため数時間待つという結果になっていた。その時の状況を初めて知り、このような事態を想定しておかなければならないと感じた。

災害は起こらないという考えから、災害自体への警戒が薄かった。父も言っていたように関東大災害が起こったことで、災害に対して関東は気を付けなければという考えになっていたらしい。それを自分事だと考えずに関西は大丈夫だと考えて災害に対して備えをしていなかったことを知り、改めて災害について知ってもらうことが重要だと感じた。

ほかにもこのことによって災害に対する意識が変わったことや備えていくようになったことなど多くのことを聞き、自分のできる限りで聞いたことや環境防災科で学んだ災害について語り継いでいきたいと改めて感じた。若い世代や被災経験のない人たちが知らないからという理由で学ばず備えないという現在の状況は非常に危ない。このような状況をなくして、防災減災へとつながるようにしていきたい。

３　環境防災科

環境防災科では、実際に講師の方から被災体験を聞くなどの座学で防災をただ学ぶのではなく、災害に関連する施設の見学や、災害時にどうすればよいかについての仮定などを立てて、周りの人と考えを共有するディスカッションなど、体験を重視した学びを行っている。１年生では、主に外部講師の方から災害について直接話を伺う機会が多かった。これにより、災害に対しての浅かった知識がより深まった。２年生では、避難所などで心的にどのような変化や不安があったかといった、目には見えない心についての話や、１月 17 日前後に行われるメモリアル行事の運営や司会などの実践的な活動が多かった。３年生になると、将来を見据えて防災とどのようにかかわっていくのかという観点の授業が多くあった。

この３年間で今まで知らなかった災害について、また被災者の方など多くの話と教訓を聞いてきた。そ

こで、自分がどのように防災と向き合っていくべきか、様々なことを学び得ることができた。これを生かし将来の夢に向けて、防災に対して積極的に取り組んでいきたい。また、今後起こりうる災害に対応するために主に災害に対しての備えができていない人たちに災害について学んだことを語り継ぎたい。そして、過去の災害から学んだ教訓とともに災害で命を落とす人を減らしたい。

４　夢と防災の関わり

（１）将来の夢

私の将来の夢は小学校教諭になることだ。きっかけは「先生」という存在へ憧れを持ったことだ。小中高と 12 年間という長い年月学校に通い学ぶ。それにより先生と過ごすという機会は多くそこで教わることも多い。小学校の頃、身近で働く大人である学校の先生に多くの間お世話になったことにより強く憧れを抱いた。その頃から将来の夢を聞かれると、先生になりたいと思うようになった。

さらに、高校生になり本格的に先生になると考えたとき小中高のどの先生になりたいかということに悩まされた。その時に小学校の頃、阪神・淡路大震災について話してくれた先生が思い浮かんだ。その際の真剣な表情がとても印象的で自分もその先生のように記憶に残るような授業がしたいと思うようになり小学校の教諭になろうと思うようになった。また、この出来事が環境防災科に入ろうと決める際に背中を押した。

（２）防災との関わり

この学校教諭という職業で防災と関わることは主に防災教育である。災害に対して弱い立場である子供でも、災害に対応できる習慣があれば被害を最小限にできるからだ。特に、これから起こりうる可能性の高い南海トラフ巨大地震への対策としても防災教育が必要となる。また、災害が多発しておりそれに対しても対応していかなければならない。防災の知識や備えが子供たちにいかに必要かわかる事例が東日本大震災で２つあった。

１つ目は宮城県の大川小学校での出来事である。災害に対しての備えが少なく、津波は来ないという過信が影響し被害が大きくでた。これによって多くの児童と教職員が亡くなった。もっと災害に対しての知識があれば、マニュアルがしっかりしていれば被害を抑えることができたのではないかといったことを考えさせられた。また、どれだけ災害に対しての意識の薄さや備えの不十分さがあったかということを知らしめられる出来事であった。

２つ目は岩手県釜石市の鵜住居小学校と釜石東中学校などの「釜石の奇跡」と呼ばれる出来事である。津波からの被害が最小限に抑えられた出来事だ。１人１人が津波に対して生き残るための行動や命が危ないという判断を子供が自らして行動に移すといった児童・生徒の行動や、学校側の災害に対しての備えが児童たちに伝わっていたという状況によって避難がうまくいった事例だ。この出来事は災害への対策がされていれば被害を抑えることができるということを多くの人に広めた。

この２つの出来事は大人だけが対策が必要というわけではなく、子どもたちへの防災教育が重要だということがわかる。また、学校などの組織がマニュアルや事前の備えができていると即座に対応や正しい行動ができなくなる可能性が高くなる。そのため、災害に対する対策の見直しや準備などが重要となる。このような防災教育に対してより良い対策ができるようにかかわっていきたい。

（３）大切にすべきこと

防災に対して備えるべきことは多くあるがその中でも特に力を入れていくべきことは、伝えることと備えることだ。防災への知識が薄い人、災害を知らない人など防災に関心を持つ人は少ない。そういった人へ防災について教える前になぜ防災が必要なのかという点を知ってもらうことから始めるべきだと考えた。そのため、阪神・淡路大震災や東日本大震災などの被災体験についてどのような状況からどんな被害が起こったのか、どういった改善がされていれば防ぐことができ悲しい思いをする人が減ったのか、このような点を理解した上で災害について知ってもらうということが重要になる。そして災害を知ってもらうだけでなく、同じような被害を出さないように教訓を生かしこれから起こりうる災害に備えていく必要がある。

そこで防災教育を行い災害に対する意識を高め、いつ災害が起きても備えがあるからと思える状態にするべきなのだ。そのために環境防災科で学んだ多くの被災体験や教訓に基づく防災への取り組みを伝えてくべきなのだ。さらに、伝えていかなければならないのは主に若い世代である。若い世代は災害後に生まれていることが多く、災害について知らない場合や、備えや災害時の行動などを言われるがまま行動する場合があるからだ。そのため、小さい子供でも備えることが大事ということを伝え、家族全体が防災への取り組みを行えるようにしなければならない。これらを実現するために将来の夢である教諭

という立場で多くの人に伝え、備えてもらえるような活動をしたい。そして、災害がもし起こったとしても被害を最小限にできるように努めていきたい。

５　最後に

今回は身近な人から阪神・淡路大震災についての話を主に聞いたが、過去の災害で多くのものが奪われ、なくなってしまった。それらが今、風化しようとしている。このままでは、次に起こる災害で過去の災害と同じ悲しみを生み、後悔をすることになる。そうならないためにも、今まで環境防災科で学んできたことを発揮する必要がある。

私が環境防災科に入って得たものは多い。災害に関する知識だけでなく、被災された方の体験談とその時を経て何が大切になるかを学んだ。そしてこれらの教訓を防災に生かす必要があるということがわかった。今後起こりうる災害に対して備えることにより、被害がどれだけ減るのかを多くの人に伝えることがいかに大切なことであるかを学んだ。実際にそれをボランティア活動で実感した。また、今回の機会で身近な人の被災体験から人それぞれ思うことがあり、それは風化させてはならないものだと感じた。特に、今の生活が当たり前でなくかけがえのないものであるという実感を忘れてはならない。そうして感じたことを１人で持っておくのではなく、多くの人と共有していくべきだと思った。このように、災害を風化させないために日々過ごしていきたい。

「 繋ぐ 」

西村　大空

１　始めに

1995 年 1 月 17 日午前５時 46 分に発生した、阪神・淡路大震災。この震災から 26 年たった今、実際に震災を体験していない人が増えてきた。この震災を「風化」させるのではなく、これからも「語り継ぐ」ことが私たちにできることだ。これを環境防災科で学んだ人たちが中心となって行っていかないといけないと私は思う。自分なりに環境防災科で学んできたことをまとめ、１人でも多く、たくさんの人に読んでもらい、実際に被災した人の代わりに当時の体験・教訓を語り継いでいきたいと思う。

２　概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
発生日時：1995 年（平成７年）１月 17 日午前５時 46 分
震源地：淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ：16 ㎞
最大震度：震度７
規模：マグニチュード 7.3
死者：6432 名
行方不明者：３名
負傷者：43,792 名
全壊家屋：104,906 棟（186,175 世帯）
半壊家屋：144,274 棟（274,181 世帯）
一部破壊：390,506 棟

出典「防災白書」、「阪神・淡路大震災について（確定法）」

３　父の話

父は当時神戸市東灘消防署で救急隊として勤務していた。

（１）地震発生

地震発生当日は、非番日で自宅の１階で寝ていると、雷が落ちたような大きな音と経験したことのない床から突き上げるような強い衝撃で目が覚めた。その後すぐに大きな横揺れが起こり地震と分かったが、揺れている時間は長くすぐに起き上がることはできなかった。揺れが収まってから家の中の様子を確認したが、停電はなく、家具も倒れていなかった。だが、食器棚は壁から大きく移動していて食器が落ち、割れて散乱していた。

玄関から外に出て様子を確認したが、普段と変わったところは全くなかった。テレビでは地震速報と臨時ニュースで大阪の映像が映っていたのでこの時は大阪で地震が起きているのだと思っていた。電話はつながりにくかったが、京都の実家に連絡が取れ安否確認をすることができた。

職場からは、緊急招集の呼び出しはなかったが、職場の様子が気になり電話をしてみると、「大変なことになっているから早く来てくれ！」と一方的に告げられ通話が切断したので「大変なこと？何？」と思いながら、すぐに出勤の準備をして車で職場に向かった。向かう途中の車の中のラジオから長田区で火災が発生していると流れていて、神戸でも被害が出ていることを知った。

神戸の街を一望できる六甲山のトンネルを抜けたところでは、黒煙が何本も街のいたるところで立ち上がっていて、自分の目を疑い、言葉が出なかったのを覚えている。市街地では、今にも倒れそうに傾いている建物や街路樹が至る所に散見できた。

（２）救助活動

現場につくと倒壊建物の救助活動が始まった。余震が続く中、倒壊し傾いているマンションの瓦礫の中から助けを求める声が聞こえた。ライフラインの断絶で普段当たり前のように出ている消火用水がなく、遠くの川や学校のプールの水を利用した。遠距離ホースを延長している間に火災がみるみる延焼拡大して大火事となり徹夜で消火活動を行った。病院が機能していなかったため、負傷者や亡くなった人を毛布に包んだり、畳を担架代わりにして消防署に連れて来られる住民の対応を行った。仮死体安置所や応急救護所の設置、運営に当たるなどで数日間は圧倒的に力不足だった。

数日すると他都市から集まった自衛隊や応援隊のおかげで、夜間は交替で事務所の椅子に座り仮眠が取れるようになった。それまで食事をとった記憶がないが、数日後に救援物資等のお弁当が少しずつ届くようになった。地震発生から 10 日を過ぎた頃から、交替で一時帰宅の許可が出た。幸い自宅付近のライフラインのダメージは少なく早い段階で復旧していたので、帰宅した際の入浴で当たり前のように水が出ることに感謝した。

（３）震災の教訓

大震災を経験するまで公助に重きを置いて仕事をしてきたが、自然災害の前では消防の無力さを痛感させられる出来事だった。阪神・淡路大震災では大半の人が自力や家族による救出（自助）や、近隣住民の協力により、救出（共助）されていることから、自助・共助が災害対策には必要不可欠であることをこの災害を通じて学んだ。自然災害を防ぐことはできないが、自分自身や家族を守るために起こった時にはどうするのか、どのような準備をしておくのかなどを話し合っておくことが大事である。

（４）話を聞いて

私は父親の話を聞き、初めて聞いたこともたくさんあった。今まで阪神・淡路大震災での話を聞くことはあったが、ここまで詳しく聞いたのは初めてだった。父が当時どのような気持ちで働いていたのか私の想像をはるかに超えていた。震災での教訓で自助と共助が 1 番大事であることを学ぶことができた。災害から学んだことをこれからに生かせるように語り継いでいきたい。

４　祖母の話

祖母は当時保険の営業をしていた。

（１）地震発生直後

朝、起床して家族のお弁当を作ろうとして 1 階のリビングで準備をしていたら、急に今まで体感したことのないような下からの大きな突き上げがあった。何が起きたのかわからないままで次にまた揺れが起き、立つことすらままならない状況であった。家族がまだ地震の揺れでも起きなかったので大きな声を出しながら起こしに行った。そのあとテレビがついたので見ていると、高速道路は破壊されていて、車も宙に浮いているようだった。一番印象に残ったのは、長田の町の火災だった。その映像を家族みんなで見ていて、全員で震え上がったのを覚えている。

（２）地震発生後

祖母は母親の安否が気になり、連絡をしてみようとしたがつながらなかった。直接母親のところに行くと母親には被害がなくほっとした。自分の家は地震の影響で住めなくなることはなかったから、避難所に行く必要はなかった。しかし、ガスや水道が使えなくなり近くの小学校に自衛隊の隊員の方々が来ていたため水をもらうために並んだ。ガスが止まり、お風呂に入ることができなかったので、舞子高校の近くに住んでいた母親の家のお風呂を借りていた。

保険の営業をしていて自分のお客さんに被害がないか確認するためたくさんの避難所に行った。その時の光景は忘れることはない。たくさんの段ボールで区切られており、人々が生き延びるのに必死だった。

（３）話を聞いて

祖母の話を聞き、今まで講師の方々や、父親の話は聞いたことがあるが、祖母の話は初めて聞いた。この時はまだどこで水を受け取ることができるのか、また、避難所はどこなのかということを理解していなかったと聞いたので家族で話し合って避難所を確認や、避難経路の確認などが大事だと改めて思った。そして、ライフラインの重要さも改めて感じた。祖母の言っていた周囲の人は生き延びることに必死で水をもらうことも簡単ではなかったというのを聞いて、講義で聞いた話とはまた違った話を聞くことができたので良かった。

５　環境防災科

（１）きっかけ

きっかけは、中学３年生の時の担任の先生だ。夏休み前の担任の先生との面談で「将来消防士になりたい」と伝えると、先生に「舞子高校の環境防災科はどうか」と進めてもらったことが大きなきっかけだ。それまでは、どこの高校でもよく、３年間を過ごした後に消防士になろうと考えていた。しかし、担任の先生に環境防災科をすすめられ、詳しく調べた。すると、防災について詳しく学べることや消防士や警察官、自衛隊など様々な講師の方に話が聞けることや１年次と２年次に消防学校体験入校があり、実際に消防学校を体験できること、地域の祭りやたくさんのボランティアに行けることを知り、環境防災科を

調べていくうちにこの学科に行きたいと思うようになった。

（２）ボランティア

私が入学して初めて参加させていただいたボランティアは、西神南で行われたふれあい春祭りだ。私は今までボランティアに参加した経験がなく、何もわからないまま参加したボランティアだ。初めて会う、ボランティアの関係者の方々や、祭りに参加する地域住民の方々とコミュニケーションをとることができず、環境防災科の先輩を見ていることしかできなかったのを覚えている。私は、このボランティアで耳の不自由な方と会話する機会があった。そこで何も知らない私は話すこと以外のコミュニケーションを知らず、初めてのボランティアで困っている私を見て当時の 3 年生の先輩はメモとペンを持ち私と交代で対応してもらったことを鮮明に覚えている。私はそのボランティアに参加し、会話以外にも人と意思疎通する方法があることを学ぶことができた。

（３）消防学校体験入校

私はこのような貴重な体験ができることが、環境防災科に入学した理由の１つでもある。私はこの消防学校を体験してから体験前よりも、消防士へのあこがれが強くなり、消防士になりたいという気持ちがさらに強くなった。１年次には講義、規律訓練、ロープ結索、搬送の訓練などが主であった。２年次には総合訓練など実践的な訓練が多かった。

１番印象に残っているのは、総合訓練で私たちの小隊が行った放水訓練だ。火災の消火や人を搬送するには、その隊の隊員との連携が必ず必要だ。だから私たちの隊は、訓練の前にあらかじめ動きの確認をしていた。だが、実際訓練が始まると、思い通りに進まないことや、思いもよらないことなどがたくさんあった。１人がミスをすると、全員の判断が遅れ、そのあとのすべての動きに影響が出ることを身に染みて感じた。活動は全て１人では行えず、チームワークの大切さを改めて感じた。

（４）環境防災科での 3 年間

環境防災科は、全国でも珍しい防災の知識を学ぶことができる学科だ。カリキュラムの 3 分の１が防災の専門科目で、教科書はないので先生がすべて授業内容を考え、自分たちに必要な防災の知識を教えてもらうことができる。私は環境防災科に入学するまでは、防災について何も知らない状態だった。だが外部講師の方々の講義を受けることや、先生方の授業を通して防災について学ぶことができた。過去の災害の教訓や、災害が発生してできた法律などについても知ることができた。このような学習をしてきた私は全くなかった防災の知識を得ることができた。だから私はこの経験を将来、救急救命士になっても活かし、これからの人生に生かしていきたいと思う。

６　夢と防災

私は将来、救急救命士になり、たくさんの人の命を救いたいと思っている。

（１）きっかけ

きっかけは２つある。１つ目は父親の影響だ。私の父親は、神戸市消防局の救急救命士として勤務している。その父親に話を聞くまで私は将来の夢はなかった。父親と話しているときに「今までたくさん出動してきたけどその中でたくさんの血を見ることもあったし、目の前で亡くなった人もいた。今まで救えなかった命もたくさんある。」という父親のさりげない一言で、私は今まで消防士の方は、絶対に人を助ける人たちだと思っていた。しかし、この言葉を聞いて自分自身が消防士となり人の命を守りたいと強く思った。2 つ目は、１度父親の勤務していた消防署に行ったことがあり、その時の消防士の人たちの様子を見て、私も消防士になりたいと思った。その時の消防士の方々の訓練の様子は今でも忘れることはない。当たり前のことをすべて全力で行い、道具もどんなものでも大切に扱い、地域の方とも積極的に話す消防士の人たちはその街のヒーローのように見えたからだ。

７　これから人生と防災

これからどこで生活しても日本に住んでいる限り必ず災害は発生する。これからの人生に切っても切り離すことができないのが災害だと思う。「備えあれば憂いなし」という言葉があるように、必ず災害を体験することになる。その時にどのようにして被害を最小限するかが大事なことだと思う。事前の準備や日頃から災害への危機意識を持つことが大切だと思う。これをすべての人が自分事としてとらえることで防災力は確実に上がり、災害での被害者が減少すると思う。

８　最後に

この「語り継ぐ」を執筆していく中でたくさんの思いがあることを知った。震災を体験していない自

分が執筆してもいいのかと思ったこともある。しかし、話を聞いていく中で思ったことがある。震災を体験していないから思うことがあり、感じることがあった。今までたくさんの方々にお話を聞かせていただき、それを将来、救急救命士となり、自分なりの方法や自分にしかできない方法で語り継いでいくことが大切だと思う。救急救命士だからこそできる活動があることを執筆していくうえで気付けて良かった。これから環境防災科で学んだことを広める場面も出てくると思う。環境防災科での学習を将来に活かし、過去に起きた災害と同じ被害を繰り返さないようにしたい。これからもボランティアに積極的に参加し、防災についてこれからも学んでいきたいと思う。

「かたりつぐ」

元　みるう

１　はじめに

私は実際に阪神・淡路大震災を経験していないが、環境防災科でこの震災から多くの教訓を学んできた。何もしないでいると、この教訓は風化してしまうだろう。風化させないためには、語り継いでいくことが必要だと考える。ここでは祖父の阪神・淡路大震災と東日本大震災の経験についてのインタビューと私が環境防災科で学んだことを記したいと思う。

２　阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16 キロメートル
規模：マグニチュード 7.3
最大震度：７
死者：6434 名
行方不明者：３名
負傷者:43,792 名
住宅被害：639,686 棟（うち全壊　104,906 棟）
被害総額：9 兆 9268 億円（国予算のほぼ１割の規模）

「特集」阪神・淡路大震災-神戸新聞 NEXT（被害の概要のページ）より

３　祖父の話

（１） 阪神・淡路大震災

震災当日

震災当時、祖父は物流会社に勤めていた。出勤のため、起床した直後に地震が発生。幸いにも室内の観葉植物が倒れる程度で、大きな被害はなかった。電気はすぐに復旧し、テレビに映し出される映像を見て、愕然とした。高速道路の橋げたが倒れている、高速道路上でバスが宙づりになっている、電柱が倒れている、家・マンションの１階部分が押しつぶれている、あちらこちらで火災が発生しているなど被害が次々に判明した。ガスは夕方に出るようになったが、水道は出ているため、被害はあまりない状態だった。当日は手段がなく会社には行けなかった。

２日目以降

何日も休みを取るわけにもいかず、娘の 50cc のバイクで１時間以上かけて出社した。会社周辺の建築物は倒れかけていて、船が着く岸壁は大きく陥没していた。また、この影響で荷役設備はレールからズレ、使うことができなくなったため、「終わった」と感じた。こ唯一使用できる携帯電話で歩きながら本社にこの状況を説明すると、初めて被害の大きさが分かったようであった。

それと同時に、阪神電鉄青木駅近くにあった社宅が倒壊しており、住人達を加古川に避難させることとなったため、会社の船（8,500 ﾄﾝ積み）に乗せて避難をする作業をした。隣の石油基地が爆発するとの情報が入り避難勧告が出たが、最後の避難者まで乗せることができた。結果、石油基地は爆発せず無事避難できた。

製鉄所の被害状況の確認が始まり、翌日から連日連夜の復旧工事会議が始まった。それと平行して、関連会社からの救援物資が昼夜問わず入ってくるため、船の対応をした。仮眠を取りながら動いていたが、かなりの寒さで寝ることができなかった。水曜から土曜まで家に帰らずに対応をしていた。

ビル、家屋、電柱等が倒れていて、バイクは危険と判断し、自動車での出勤に切り替えた。渋滞がひどく朝早く出勤し、帰りは遅く帰る生活が当分の間続いた。

（２）東日本大震災

震災当日

２週間ほど神戸の病院に入院していて退院の日だった。東北の方で地震があったとは聞いていたが、テレビで流れてくる津波の映像は、合成されたものと思っていた。港でコンテナーが流され、車、家が

次々と流される映像を見て恐ろしく感じた。当時、千葉県に赴任していた関係で、すぐに事務所に電話を入れたが通じず、また、関係者の携帯電話に電話をしたが全く通じなかった。夜になってようやく担当者と連絡が取れ、余震が続き事務所の中には入れないこと、また、道路、建屋で液状化現象がみられることなどだんだんと状況が分かってきた。

２日目

翌日、加古川の事務所に行きメールでやり取りを行い情報収集に努め、被害の大きさに驚いた。従業員、その家族にも被害が無く安堵した。しかし、震災と同時に帰れる人は家に帰ったが、道路が大渋滞で、やっと夜中に自宅についた人、千葉県から茨木県へ徒歩で苦労して自宅に着いた人等帰宅難民の実情が分かった。

３日目

役員全員が本社に集まり救援物資の調達について話し合いをした。物資は神戸、加古川で調達し自社の船で輸送することにした。

４日目

夕方、千葉県に帰った。家の中は物が散乱していると考えていたが、タンスが斜めに倒れ掛かっていた程度で大きな被害はなかった。

５日目

いつも通り、バスで出勤した。道路は相当な範囲で液状化現象になっており、復旧には 2 週間程度かかると判断した。事務所、倉庫、クレーン、岸壁関係は専門家にチェックをしてもらい相当な被害であることが分かった。

その後

物流会社としてお客さんに製品を届ける義務があるが、トレーラーの燃料や自動車のガソリンが少なくなったため、関西からタンクローリーを調達することも考えたが、船の燃料タンクの軽油を抜いてもらい活用した。今回の体験は 1995 年の阪神・淡路大震災の経験から学んだことが多いと感じた。

２　話を聞いて

祖父が神戸で阪神・淡路大震災を経験したことは知っていたが、これまでじっくりと話を聞く機会がなかった。阪神・淡路大震災の時、祖父が救出活動をしていたとは知らなかったので驚いた。避難勧告が出ている中、全員を無事に避難するところまで送ることができてよかったと思う。混乱した状況の中で、大勢の人を早く移動させるために会社の船を使うという判断をして、行動しているのがすごいと思い改めて共助の大切さを感じた。また、阪神・淡路大震災で石油基地が爆発する恐れがあったことを初めて知った。

東日本大震災の話を聞いて、私も東日本大震災について少し思い出すことができた。祖父が千葉県に行くと聞いて、「本当に大丈夫なのかな。千葉県って地震のところに近いのに。」と不安に思ったことである。だが、千葉県に帰ってからのことは聞いたことがなかったため、今回このような形で聞くことができてよかった。祖父は救援物資の活動に関わっており、どのような職業でも防災は関係していると感じた。災害時に活動する職種は医療や行政のイメージが強いが、さまざまな会社が自分のできることをして、被災地を応援しようとしていることに気づいた。

祖父は阪神・淡路大震災の経験が東日本大震災での行動に大きく影響したと聞き、今回聞いた話を決して無駄にしたくないと思った。経験を聞いて、改善策を立てておくことで、次の災害での被害を減らせるからである。阪神・淡路大震災を風化させないために、この「語り継ぐ」を通して伝えていきたい。

３　環境防災科

（１）きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、災害医療に携わりたいという夢があったからである。東日本大震災があったとき、被災地の状況が連日テレビで報道された。世界中から医療チームが派遣されていることを知り、自分も被害に遭った方たちの力になりたいと思うようになった。特に東日本大震災では精神面のケアが問題視されていたので、それを改善したくて DPAT に所属する臨床心理士を目指していた。DPAT は災害現場で活動するので、環境防災科なら災害の知識や注目されている災害医療について学ぶことができると思い、受験することを決めた。

（２）入学してから

１年生のときは「災害と人間」という授業で、たくさんの外部講師に講義をしていただいた。自衛隊や

消防士に当時の災害現場での活動や、阪神・淡路大震災の教訓を活かした活動や対策について教えていただいた。一番印象に残っているのはCODEの講義である。CODEは海外の災害支援活動をしている。災害が起こるのは世界共通であるが、それぞれに発生しやすい災害やその土地ならではの防災があることを知ることができた。また、災害のメカニズムなど基本的な知識を学習した。

２年生では新たに「Active 防災」という授業が始まった。この授業では外国の方を招きその国で起こる災害や対策を学んだ。また、災害時の心理状態や心のサポートについて学んだ。英語教材を使うことが多く、防災だけでなく同時に英語も学ぶことができた。私はこのActive防災で明確な将来の夢を持つことができた。

３年生ではコロナの影響で思うように活動ができなくなってしまった。募集されていたボランティア活動は次々に中止になり、このコロナ禍の中でできる活動を自分たちで考える機会が与えられた。私が思うコロナ禍の中でできることは、売れ残ってしまい廃棄されてしまう食材を買うことだと考えた。日ごろから食品ロスの問題がとり挙げられているが、給食や飲食店がストップしたことにより増加しているからだ。今までどれだけ恵まれた環境でボランティア活動を行えていたのかがよく分かった。

（３） ボランティア活動

私が参加したボランティア活動で印象に残っているのは語り継ぐことを目的とした活動だ。私は神代小学校の出前授業と神戸市医師会が主催する市民フォーラムに参加した。出前授業では小学生が対象なので、難しい言葉を使わないように「標高」を「高さ」に言い換えたり、飽きさせないためにパワーポイントのスライドにアニメーションを付けたり、防災に興味を持ってもらえるように新聞スリッパを一緒に作り小学生にもできる防災を紹介したりした。授業は、小学生が積極的に発言してくれてスムーズに行うことができた。

市民フォーラムの対象は医療関係者と市民で、主に高校生が考える防災についてお話しした。私の役割は震災を体験していないが防災を勉強している若者の意見を伝える事で、なぜ防災を学ぼうと思ったのか、防災を２年間学んできて何を感じたかを考え、自分を見つめ直すことができた。この市民フォーラムで伝えたことは「みんなの防災意識を高める事が必要」ということだ。防災は学んでいる者とそうでない者との間に差ができてしまうから、もっとたくさんの人に関心をもってほしいと思う。

この２つの活動で学んだことは、語り継ぐ目的や対象をきちんと把握することである。同じ語り継ぐ活動でも、小学生には楽しんでもらいながら行うことを重点的に、市民フォーラムでは高校生の立場として考える意見を学んできたことを交えながらお話しした。これからも相手に求められていることを理解して活動を行っていきたい。

４　将来の夢

（１）きっかけ

私の将来の夢はDPATに所属する看護師になることだ。もともと臨床心理士を目指していたが、Active防災の授業で心のケアを学んだり、災害看護についての資料を読んだりしたことで、看護師として心のケアに携わる仕事がしたいと思うようになった。DPAT とは、災害派遣精神医療チームのことで被災者だけでなく支援者の心のケアを行うチームのことである。

（２）夢と防災

私は環境防災科で学んできたからこそできることをしてみたいと思っている。それが何なのかまだわからないが、看護大学では災害看護を専攻し、もっと災害時の医療について学び、環境防災科で学んできたことを活かしていきたい。DPAT に入り、被災者や支援者の心のケアをするだけでなく、災害時の精神医療体制に関わっていきたい。心のケアについて焦点が当てられ始めたのは最近なので、改善すべき点を見つけみんなが心身共に健康な状態でいられるような活動がしたい。

５　まとめ

（１）「語り継ぐ」

私は今まで家族の震災での体験を聞く機会が無く、この執筆をするにあたって初めて祖父の話を聞いた。授業では新長田を中心に勉強していたため、自分の家の近くの被災状況がわからなかったが今回話を聞き今までで一番当時の状況を鮮明にイメージすることができた。今回聞いたことを、私の中だけで留まらせてはいけないと思う。震災を体験していない私だけでは、何もできない。だから、たくさんの人に震災の体験談を聞いていく中で教訓を見つけ、次来るかもしれない災害に備えて多くの人に語り継ぎ、少しでも多くの人を災害から守るお手伝いがしたい。

（２） さいごに

私は「かたりつぐ」を作成して、語り継ぐことの大切さを再確認することができた。環境防災科としては、このように「かたりつぐ」の執筆を通して語り継ぎの機会が与えられたが、これから私たちはそれぞれ違う道を進むことになる。それでも、どの仕事にも防災は関わっている。祖父のように自分のいる場所だからこそできることを考え、実行していきたい。私の将来の夢である看護師は老若男女問わず多くの方と接する。医療現場だからこそできる防災や、伝えられることを考え、これからも防災と関わり、広めていきたい。高校で出前授業をした経験を活かして患者さん向けに防災教室を実施したり、医療従事者に防災知識を共有したりして災害に強い医療体制づくりに携わっていきたい。

Ne m'oubliez pas

平井　志歩

１　はじめに

私は阪神・淡路大震災を経験していない。兵庫県では４人に３人が阪神・淡路大震災を経験していないといわれている。つまり約７割もの人が未経験ということだ。そして１つ言えることは、その事実を覆すことはできないということだ。その覆すことのできない事実を後世に語り継ぎ、今後起こりうる災害に備えることが今の私にできることだ。

２　阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震
震源地：淡路島北淡
発生日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
震源の深さ：16 キロメートル
最大深度：震度７
最大深度：マグニチュード 7.3
死者数：6, 434 名
行方不明者：３名
負傷者：43,792 名

「阪神・淡路大震災について（内閣府　防災情報のページ)」より

３　母の話

普段通りに寝ていると、体を大きく揺さぶられるような感覚で目を覚ました。その瞬間に「地震だ。」と思った。激しい揺れとともに、テレビや食器などが飛び散る「ガシャーン」という音が鳴り響いた。不安と焦りを感じつつ、揺れが落ち着くと急いで飛び起きた。外に出ると地域の人も外に出てきていて少し安心した。就寝中だったためか、地震はそれほど大きく感じなかったが、今までとは全く違う景色が広がっていた。１人暮らしをしていたため、情報を共有できるのは近所の人だけだった。情報がすぐにでも欲しかったため近所の人に声を掛けるととても驚かれた。自分の足の裏側が血まみれになっていた。心配をされたが痛いという感覚はなかった。電気が止まっており、テレビから情報を得ることはできず近所の人の車にあるラジオを一緒に聞かせてもらった。淡路が震源であることは把握できたが被害があったのは西区までだろうと思い、当時勤務していた三宮の職場に向かった。車で向かっている最中、板宿付近で火事が起こっていて、自分が考えていたよりも被害が大きいことを実感した。そして、当時の職場である日生三宮ビルに着くと、４～５階が潰れており、到底勤務場所である 11 階まで行くことはできなかった。そして出勤できないと分かったとき、ようやく自分の置かれている状況を理解し、大きな地震だったと知った。その後すぐに帰宅した。あまりの被害の大きさに驚き会社に連絡を入れていなかったため、安否確認が取れず会社の人に迷惑をかけた。

地震の翌日からは当時の交際相手の実家で当分の間お世話になることが決まった。その時に久しぶりに心が落ち着いたように感じた。申し訳のない気持ちもあったが、ひとりで過ごすよりかは何 10 倍もましだった。自分は被害が少なく家にいても落ち着かないので、当時の交際相手とその弟と神戸まで車を走らせた。自分たちにも何かできることがあるはずだと直感的に考えたからだ。しかし神戸に着くと想像をはるかに超えた大きすぎる被害に戸惑いと不安を隠せなかった。そのためボランティアとして活動しようとしたが何もできず心がとても苦しかった。

しばらく経ってから実家に帰ることとなった。当時の実家の安心感は今でも忘れられないほどだ。普通だと思っていた生活が当たり前ではなかったのだと気付き、感謝の気持ちでいっぱいだった。せっかくのこの時間を無駄にはしたくなかったため車の免許を取ることにした。とにかく自分の置かれている状況を忘れたかった。今では足のけがで大変な思いをしたことを生かし、寝室や台所にスリッパを置くようにしている。またペットボトルの水を備蓄するなどをしている。

４　母の話を聞いて

初めての経験でかなりのパニック状態に陥っていたのだなと感じた。また自分が毎日平穏な生活を送

ることができているのは当たり前のことではないのだと痛感した。母が震災体験を語っている姿をみることは少なく、話を聞く機会もほとんどなかったので話を聞くことによって母のことをより知ることができうれしく思った。ニュースなどで取り上げられている人たちが多くの被害にあったのはもちろんわかるが、被害に遭った人のみならず、震災を経験している人のほとんどが苦しい思いをしてきたという事実にも目を向けていかないといけない。

そして、次に起こりうる災害に備える教訓として伝えていく必要がある。私は母の話を聞き２つの教訓を学んだ。１つ目は常に自分の身の周りにスリッパを用意しておく必要があるということだ。震災時の屋内は、ガラス片などの危険な物が床に散らばっている可能性が高く、安全に避難するためにスリッパを用意しておくべきであるということ。２つ目は、正確な情報を入手する手段を確保しておくということだ。災害時はただでさえ情報が入手しにくいのにフェイクニュースやデマが流れていたりもする。フェイクニュースやデマに流されることなく正確な情報を入手することは生き抜くうえで重要だということ。今回学んだ２つの教訓を活かし、災害時に苦しくつらい思いをする人を１人でも少なくしていきたい。そのためにも阪神・淡路大震災についてより知る必要があるし、知っていきたい。

５　父の話

父は震災が起こる前日に愛媛県で行われた旧友の結婚式に行っていた。次の日に仕事があるため、愛媛県には滞在せずに、速やかに帰宅していた。寝ていると突然大きな地鳴りとともにベッドごと体を大きく突き上げられた。とにかくずっと揺れて、何が起こっているのか全く理解することができなかった。当時父は震源から離れた場所に住んでいたため、大きな被害はなかった。しかし、家中に家具や食器が散乱し、地震の恐怖を身をもって感じさせられた。自宅周辺の被害も少なく、神戸の町が変わり果てた姿になっているとは思いもしなった。そのため、友人や交際相手などに連絡を取ることもしなかった。家の中に散乱した食器などを片付けて、息抜きにテレビをつけてみると、火事の映像や崩れた家屋の映像が流れていた。とても衝撃的で今でも鮮明にその映像を覚えている。自分の地域との被害の差に驚いたのではなくただただその光景が恐ろしかった。頭の整理がついていないながらにも、震源が淡路であることは理解した。

その後西区で１人暮らしをしていた交際相手のことが心配になりすぐに車で向かった。いつもより時間のかかる道のりが恐ろしく重くこれから先の生活を不安に思った。交際相手の安否確認をし、２人で被害の小さかった父の実家に帰った。その後のことは実家に帰ったことによる安心感からか覚えていない。翌日からは母の行動と同じだ。神戸の町で父の弟が煙草を吸おうとしてライターに火をつけたがすぐに火を止めた。なぜなら、その場に長時間いたため感覚が麻痺していたが、ガス漏れの匂いがひどく強かったことを思い出したからだ。その後実家に帰ってテレビで神戸の銀行に強盗が入ったことを知り、やるせない気持ちになった。父は職業柄多くの人と関わる機会があり、住んでいる場所や地域によって震災への　関心の差を強く感じた。震源から少し離れた地域やそれ以上に遠く離れた地域の人は、この震災を他人事と考えており、大きな被害にあった地域の人たちは生活再建のめどが立たずあまり元気がなかった。そのため職場では震災関連の話をすることはなかった。当時を振り返ると忘れてしまっていた部分が多々あった。話をするために思い出す時間が必要だった。だから震災経験者は震災の記憶が曖昧になって薄れてしまう前に、自分の口から後世に伝えるべきだ。そうすることによって自分の中での記憶の整理にも繋がるし、風化を防ぐことにも繋がる。

６　父の話を聞いて

災害はいつ起こるのかわからないということを改めて痛感した。被災しているのは自分だけではなく、自分より大きな被害にあっている人もいるということを頭において震災後の生活をする必要があると感じた。また、話をすることによって被災者の心の整理の手助けをすることができると感じた。災害時に犯罪行為が行われてしまうのはとても悲しいし、そういうことをなくすために事前に、災害時の防犯グッズを準備するなどの対策をしておく必要があると強く思った。できればそのような対策をしなくても犯罪行為が起こらないようにしたい。父の話を聞き、私は災害時こそ思いやりの心を忘れずに持つべきだという教訓を学んだ。災害によって大きな被害に遭った人もいれば小さな被害で済んだ人もいる。また、家族や親戚を亡くした人もいればそうでない人もいる。何が言いたいかというと「全く同じ」は無いということだ。災害時は各々が様々な経験をして、いろいろな感情があり、誰かが相手や周りのことを考えずにデリカシーのない発言をしてしまったら、言われた側は一生忘れられない記憶となり、心の傷となってしまう可能性がある。だから、災害時こそ周りに配慮して発言や行動する必要があるのだ、と父の話を

通して学ぶことができた。

７　環境防災科

（１）入学のきっかけ

私が環境防災科に入学しようと思ったきっかけは２つある。１つ目は小さいころに何気なく見ていたテレビで流れた東日本大震災のニュース映像だ。とても衝撃的な映像で、幼いながらにも大変なことが起こっていると感じたのを覚えている。その映像の中には、自分と同じ年齢くらいの子どもが悲しみ、そして苦しんでいる映像も映っていた。代わることはできないが、少しでも力になりたいと思ったことが１つ目のきっかけだ。２つ目は姉の影響だ。私の姉は環境防災科卒業生である。姉が毎日楽しそうに学校生活を送っていることや、実際に被災地を訪問して様々な活動をしているところを近くで見て、私も環境防災科に入りたいと思ったからだ。

（２）入学して

私は環境防災科に入学するまでは防災や減災に関する知識が全くと言っていいほどになかった。しかし防災・減災に無知な私でも高校生活の３年間で多くの知識を身につけることができた。各学年ごとに例に挙げて話していくことにする。

まず１年生では大学教授や警察、消防などの行政機関の外部講師による講義や、校外学習などの実践的・体験的な授業とともに、レポート、発表、ディスカションなどを通じて基礎的な防災や減災の知識を身に付けることができた。２年生では外部講師を招き六甲山フィールドワークで六甲山の地形や地層について詳しく学んだり、長田街歩きでは震災当時の長田の状況やその後の教訓を学び、まちづくりについて考えを深めたりもした。1年生と２年生の２年に渡って消防学校に入校をした。基礎である規律訓練からロープ結索や搬送法、煙体験、消火訓練などの本格的なことを学ぶことができた。日々危険と隣り合わせで活動している消防士の偉大さを改めて痛感し、消防士への憧れを抱いた。また、ネパールの防災事情に触れ、学校に常備できる非常持ち出し袋を作ったりもした。３年生では将来の夢と防災の関係を調べ、その夢の実現のために必要な力やどのように防災とかかわり続けるかを考え発表し、様々な防災の広げ方や可能性を感じることができた。これらの経験は環境防災科でしか経験できない。とても恵まれた環境で活動をしてきているからこそ学んだことや経験したことを広げていく必要がある。環境防災科の名前に泥を塗らぬよう正しい知識を広げていきたい。そして社会全体が、日本全体が、世界全体が防災・減災を日常の一部として生活をする時代を築いていきたい。

８　私の夢

私の将来の夢は美容師だ。きっかけは幼いころから通っている美容室のシャンプーの匂いが好きだったから、という単純なものだ。私は美容師の世界で防災・減災を広めていきたいと考えている。美容師と防災・減災は一見あまり関連性がないように感じるかもしれないが私は密に関わっていると思う。例えば災害時だ。災害はいつ起こるのかわからないから常に備えておく必要がある。もしカット中に地震が発生したならば、自分が持っているハサミなどの危険なものを安全なところに直さなければならない。このように災害時のことだけを考えていては防災・減災につながらないと私は考えている。だから災害が発生する前にハサミを直す安全な場所を確保するなどの備えをする必要があると思う。私はそのような備えを呼び掛けていけるような美容師になりたい。

また地震が起こると「断水」をしてしまう恐れがある。その際に事前の準備として、シャンプー台１台につき６～８L の水を常備したいと考えている。なぜ６～８L の水かというと６～８L の水があれば、肩くらいの長さの髪の毛を洗い流すことができるとされているからだ。災害時は命を守ることも大切だがひとりの美容師として、お客様の命はもちろん髪の毛を守ることも使命だと考えている。私の考えがマイノリティだとしてもそれを広めていく必要があると私は考えているから、広めていけるような活動をしていきたい。現在の日本は多くの災害が発生しているが、今までの災害で教訓として受け継いできたことを生かし切れていないように感じる。「教訓を生かす」ということは過去の災害で学んだことを生かし被害を最小限にすることだと私は考えている。そうするためには実践的に防災・減災に取り組んでいかなければならない。そこで私は美容師の世界で防災・減災を率先して広め、社会で防災・減災が日常に当たり前にある環境を作っていきたい。

９　語り継ぐ

私は高校生活の３年間で多くの方々の震災の経験談を聞かせていただく機会があった。その話を今ま

でに、どれだけ語り継ぐことができたのだろうか。そう多くは語り継ぐことができていないのが現状である。語り継ごうとしなかったのではなく語り継いでいってよいのか、またどのように語り継いでいくべきなのかを自問自答し続けてきたのだ。語り継ぐことに悩みを抱えていた時、夏休みの東北訪問をさせていただける機会があった。私は１年生の時は都合が悪く参加できなかったため、２年生では参加しようと思い参加した。その東北訪問で答えの見つからない悩みを払拭することができた。東北訪問では被災された方々のお話を聞かせていただいたり、また被害の大きかった場所を見に行ったり、地域の方々とコミュニケーションをとったりもした。その中でお話をしてくださった方が、聞いたことを自分の言葉にして語り手や話し手となって語り継いでいって欲しいという趣旨のことをおっしゃっていた。その言葉を聞いて、私は今まで、聞かせていただいたお話を一言一句誤りのないように伝えていかないといけないと深く考えすぎていたのだと気づくことができた。私のように聞かせていただいたお話の語り継ぎ方に悩んでいる人がいるのならば、この言葉をかけてあげたいと思う。「語り継ぐ」という言葉だけを見ると堅苦しくたいそう難しいことのように感じてしまうが、被災された方の話を聞いて感じたことや考えたことを周りの人に話をして共有することでも「語り継ぐ」ことができるということをもっと多くの人に知ってほしい。そして私たちのような震災を経験していない若い世代の人たちにも過去の災害を語り継いでいってもいい、ということを胸に刻んでほしい。

10　最後に

今回の「語り継ぐ」の執筆により阪神・淡路大震災の恐ろしさや多くのモノを一瞬にして失ってしまう人間の儚さを痛感することができた。また、語り継いでいくことの必要性を強く感じることができた。私は「語り継ぐ」の執筆を通してひとりの人間として成長できたように思う。環境防災科では多様な方々に多様なお話を聞かせていただくことができ、環境防災科でしかこのようなお話を聞かせていただく機会はないと私は思う。そしてこのようなお話を聞くことのできる環境防災科に入学できたことを誇りに思っている。この環境防災科で過ごした３年間で学んだ様々なことを忘れず、自信をもって語り継いでいきたい。また、将来私に家族ができたとき、悲しい思いをしてほしくないので語り継ぐことを続けていきたい。

教訓から学ぶこと

平井　涼賀

１　はじめに

1995 年１月 17 日阪神・淡路大震災が起きた。それから 26 年経ったこの神戸の町は当時では考えられないくらいの復興を遂げた。それと同時に私たちの様な震災を経験してない人や、阪神・淡路大震災のことを知らない人が増えてきている。このような中、南海トラフ巨大地震という新たな災害がこの町を襲うとされている。環境防災科の生徒として、私は過去の災害から得た教訓を未来の為に語り継いでいきたいと思う。

２　阪神・淡路大震災の概要

発生年月日：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
規模：マグニチュード 7.3
震度分布：震度７　神戸市須磨区～西宮市(幅約１㎞、長さ約 20 ㎞の一帯)
　　淡路島の北淡町・一宮町・津名町の一部、宝塚市の一部
震度６　神戸(上記の震度７地域を除く)・洲本
震度５　京都、彦根、豊岡
震度４　大阪、舞鶴、和歌山、奈良、姫路、津、岡山など
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16ｋｍ
死者：6434 人(関連死含む)
ライフライン：停電　260 万戸
　　断水　49 万 5300 戸
　　ガス配給停止　85 万 5900 戸

関西電力株式会社報告書より

３　阪神・淡路大震災

（１） 近所のＹさんの話

当時 Y さんは 23 歳だった。Y さんは関西電力送配電株式会社の明石支店の技術科に勤めていた。仕事は主に発電所から送られてきた電気の送電などを行っていた。

（２）震災発生

震災当日、Y さんは寝ており、いつも通りの出勤をする予定だった。しかし、突然の強い揺れに襲われ目が覚めた。この揺れがどれだけの被害を出しているかなど、何の情報も得られないまま出勤する時間になったので、出勤することにした。普段会社に 15 分で着くところが、倒壊した家屋や電柱などの影響により 30 分ほどかかってしまった。170 人くらいの人が当時会社に勤めていたが、当日は 170 人全員が揃わないままの状態だった。後で分かったことだがその日、全社で 34%の人が出社出来なかった。その日のうちは、会社も被害を受けてしまったから瓦礫の撤去などの作業を行った。次の日から、各自どの区画の送電・配電をするか、またこの復旧作業にあたっては、設備安全、作業安全、電気安全を徹底し、２次被害の防止を図りつつ早期復旧をしろと指示を受けた。Ｙさんは明石市と垂水区と西区の復旧を担当したが、家屋、電柱など全てがグシャグシャでほとんどが直せる状態ではなかった。よって送電や配電をした時にスムーズに行うことができるかなどの調査がメインとなった。また、四国や九州の電力会社の方々が発電機車などにより、支援に来てくださった。この際に高速道路の主要なインターチェンジなどに迎えに行き、そこから渋滞や道路規制による到着の遅れをなくすために白バイやパトカーによる先導を依頼し、早期到着を目指した。応援が来たことでよりたくさんの地区に応急送電ができ、特に病院、警察、消防、市役所を中心に送電を行った。夜は、応援に来て頂いた他電力の方たちを優先して会社に泊まらせていたため、寝る場所もままならなかった。寝る場所やご飯は地震発生から３、４日目から充実するようになった。その後、発電所が再稼働し電気が送られるようになった。それが行われるようになったお陰で電気が点いているとこと、点いていないところが分かるようになり電気が点いていないところへの送電を繰り返す作業を 21 日までやり続けた。21 日に送電の目途がたったことで 22 日からは兵庫区の復旧の応援に入った。そこでは、家屋損壊の著しい地域では高圧線の切り離しなどをし、送電対象から除外

するとともに、あまり家屋への被害が少ない区域へは、バイパスケーブルや仮架線によって接続をした。応急送電が可能になった家屋には順次、安全を確認しながら応急送電を行った。また、人工呼吸器を使っている家庭などへは優先して送電を行った。この作業を繰り返し行った。作業をするためにはどうしても家の敷地に入る必要があり、消防の方から入っていいところの説明はされるが、その説明が不足していて入ってしまうこともあった。誤って入るとそこに住んでいる住人から「入るな」「お前らが電気を送るから火事なってんねん」とでかい声で罵声を浴びせられることも多くあった。また、瓦礫の隙間から亡くなってしまった人の遺体を見てしまったことで、身体的にも精神的にもきつい仕事になった。しかし、感謝されることもあり、それだけが救いだった。その後その場所が落ち着き転勤になった。また、この町に戻ってきて復興した町を見てうれしく思うと言っていた。

（３）母の話

阪神・淡路大震災が起きた当日、母は福井県の京都に近い位置で暮らしていた。その地域では少ししか揺れを感じなく、またこれまでに地震を経験したことがなかった。そのため、揺れで目を覚ましたが、またすぐに眠りについた。起きて、テレビをつけると神戸で凄い地震があったということに気づき、今朝の揺れのこととつながっているのだと思った。その時は災害への関心もなく他人事にしてしまったが今では備えを意識するようになった。これらからはもっと熱心に防災に向き合っていきたいと言っていた。

（４）Ｙさんの話を聞き感じたこと

Ｙさんの話を聞いて考えたことは２つある。

１つ目が災害時の人の心理の面だ。自分のことでいっぱい、いっぱいになってしまうとストレスもたまるし他のものにあたりたくなるしイライラする。このようなこともこの３年間で学んだことの一つだ。それを直接言われた人から聞いたことで、何とも言えない気持ちになった。話を聞いたときは普通に話していたけど、当時どのような気持ちになったのかなど様々なことを１対１で聞いたことでより深く想像も出来た。また、テレビを見るだけではわからないことの方が多いと改めて実感した。テレビでは絶対に罵声を浴びせられた、など黒い部分の話はしないと思った。直接話を聞いたからこそ当時のことをより深く学べると思った。

二つ目は、話を聞いていく中で自分が目指している消防士が出て来た。災害時、消防士が警察や自衛隊などと連携することは知っていたが民間の会社とも協力していることを知った。様々な機関が協力しなければ、素早い復興はできないし、人々にも迷惑をかけてしまうのだなと思った。

（５）母の話を聞いて感じたこと

防災に興味を持っていないと、自然災害が起きても他人事のように感じてしまうのだと改めて思った。しかし、災害多発時代になってしまった現代の日本では絶対に他人事ですむ問題ではない。そのため、防災のことを３年間専門的に学んできた自分たちや、防災のことを専門にしている人たちが防災を伝えて、少しでも他人事と思う人を減らしていくことが重要だと思った。

４　環境防災科

（１）　きっかけ

私は小さい頃から人の役に立つ仕事に就きたいと思っていた。そんな時に近所であった火事や、東日本大震災の時に災害現場でも活躍する消防士を見て消防士になるということが私の夢になっていた。このことを中学生の時に担任の先生に伝えると環境防災科を勧められた。その時に初めて環境防災科というもの知った。１年時と２年時に消防学校を体験することができ、卒業生が消防士になっているのを知り環境防災科に入学することを決意した。より深く調べていくと、多種多様なボランティア活動や被災地支援、夏休みにある東北訪問のことを知り興味を持った。その中でも特に、東北訪問に興味を持った。なぜなら、当時小学生だった私には東日本大震災というものは衝撃的なものであって、消防士を目指すきっかけにもなったことであったからだ。画面越しではなく、自分の目で直接見たいと思い、また、被災者の気持ちを聞きたいと思ったからだ。

（２）　入学後

環境防災科に入学すると、部活との両立を目指して行けるボランティア活動には、できるだけ参加することを心掛けた。初めて参加したボランティア活動は西神南であった「ふれあい祭り」だ。そこでは地域の方との交流や会場設営、ブース展示などの多くの役割や目的があった。始めは自分が何をしたらいいかわからず、積極的に動けなかったが、先輩や先生のフォローもあり、最後には自分から積極的に動くことができ、達成感を感じたのを今でも覚えている。

それから募金活動や地域のお祭りのお手伝いなど様々なボランティアに参加し、たくさんの方々と交

流することができた。それらを通してつながることの大切さや、地域というものが自分が思っているよりも重要ということを学べた。

（３）東北訪問

環境防災科に入学する前から行くと決めていた東北訪問には、１年時の夏休みに参加しました。参加する前までは、私たちが出来る事をしに行くのだ、ボランティアをしに行くのだと思っていました。しかし、ほとんどの日程が被災した方のお話を聞かせて頂いたことや、被災地の町歩き、被災地の高校生とワークショップなど、私たちが学ばせてもらうために訪問するというものであった。多くの行程を通して、被災した方の気持ちの変化や被災した街がどのように復興していくか、東日本大震災の教訓などを学ぶことができた。

また、被災地や被災者との繋がりを切らせないことも重要なことだということを学ぶことが出来た。この東北訪問に参加する前まではボランティアに参加してそれで終わってしまうものだと思っていた。でもこの東北訪問の中で被災者の方々と焼きそばパーティーをしたことや、全員で円になって「しあわせ運べるように」「花は咲く」を合唱したことで被災地、被災者との継続的な交流が大切なことだと学んだ。このような交流を次の世代へ繋げていくことが災害を風化ということに繋がっていくのだと思った。

（４） 消防学校

環境防災科では 1 年時と 2 年時に神戸にある消防学校への体験入校がある。この体験は環境防災科に入ろうと思えるきっかけになったもので、入学する前からずっと楽しみにしていた。消防士になる夢は小さい頃から持っていて、その自分の夢である消防士の方と同じように訓練できる貴重な体験だった。１年時では１日、２年時では２日あり、その内容としては、講義を一番初めに受けそこから規律訓練、ロープ傑作、搬送法、消火活動などがあり、２年時でより実践に近い形で訓練することができた。この中で印象に残ったことが２つある。

１つ目が規律訓練だ。これは基礎の中でもできて当然のものであり、チームワークが重要な消防士にはとても大切なことである。今まで動画などで見てきた消防士の１つ１つの行動全てにルールがありそれを当たり前にこなしていたのだと実感することができた。実際に自分たちがやってみると常に意識しとかないと、すぐに乱れることがあるなど、集中力のいるもので規律訓練の重要性と大変さを思い知らされた。

２つ目が消火活動だ。火災を 1 分 1 秒でも早く鎮火することが最大の目標だ。５人小隊の１人１人に別の役割が与えられており、1 人がミスをしてしまうとそこで止まってしまい、鎮火ができないということになってしまう。だからこそチームワークが重要で、自分がする行動に責任を持ち取り組むことが大切だと思った。しかし、本番では練習でスムーズに出来ていたことが少し手間取ってしまったり、本部の指示の声で自分の声でかき消されたりするなど、足らないところが多くあった。それを消防士の方はもっと難しい状況の中で当たり前にこなしている思い、消防士の過酷さを実感し、改めてかっこいいなと思った。この消防学校で得ることが出来た多くの経験を、消防士として少しでも活かしたいと強く思った。

５　南海トラフ巨大地震

これから 30 年間の間で南海トラフ巨大地震が起こる可能性は 70%～80%とされている。更に死者数は 30 万人以上出てしまうとされている。これの原因として挙げられるのが東日本大震災でもあった津波である。いかに早く高い場所へ、垂直避難ができるかそれが非常に大切になってくるはずだ。しかし、少子高齢化社会と言われる日本には多くの高齢者がいて、その大多数が 1 人の避難が難しい人だと思う。このような人々をどの様に助けていけばよいか。これは公助、すなわち自衛隊や消防、警察の助けも重要だと思うが、何よりも共助これが大切になると思う。国がハード面の対策例えば津波避難タワーの建設、堤防を高くするといった対策には、これには多額のお金がかかってしまうからどうしても限度というものが生まれてしまう。だからこそ国民全員が災害への備えを日頃から行うのを大前提として、地域ごとに繋がりあって助け合うということが大切だと思う。これを当たり前にすることで、南海トラフ巨大地震やその他の自然災害が起きても１つでも多くの命を救うことにつながるのである。

６　さいごに

今、私たちが住んでいる日本は四季があり、季節ごとに美しい景色を創り出し人々を魅了している。しかし、その自然は突然牙をむき災害というものを引き起こす。この災害は日本にいる以上、当たり前に起こるものであり、避けることや出来ない。災害は起きるたびに多くの人から大切なものを奪いそし

て、教訓をもたらしている。避けることができないのであれば私たちは日頃から備え、教訓から学んでいかなければならない。私は「語り継ぐ」を通して改めて阪神・淡路大震災の怖さ、教訓を学びなおすことができた。そして、１度でも災害を体験したら、その時に抱いた思いというものは消えないものになるのだと思った。しかし、それを伝えられず、どんどんその災害が風化してしまうという問題がある。風化させないために震災を経験していない私たちに出来ることは、その思いを語り継いでいくことだと思う。消防士になって、この環境防災科で得た様々な知識、思いを地域である避難訓練や防災に関するイベントで広め、風化させないために語り継いでいきたい。

被災地と向き合う

藤井　大地

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分に襲った最大震度７の兵庫県南部地震によって、6434 名の尊い命が奪われた。しかし、私はその大地震を経験していない。そして、私だけでなく 26 年経った今、神戸市民の半数が経験していない。だからこそ、この大地震を経験していない私たちの世代が「語り継ぐ」存在になる必要がある。防災を３年間学んできたからこそ、未来の命を守っていくためにその役目を果たし、次の世代へつなげていきたい。

２　父の友人であるお寺の住職さんの被災経験

（１）聞くことにあたって

今回、神戸市長田区で被災されたお寺の住職をされている父の友人の方からお手紙をいただいた。以降は、手紙の原文である。

（２）住職さんの手紙

１、震災当日

私は、当時、神戸市長田区大道通に住んでおり、ものすごい揺れで目が覚めました。寝ていた部屋は、ステレオが落ちてきて、「かたづけるのが大変やなぁ」と思いながらも再び寝ようとしていましたが、父の声「大丈夫か？」で、事の重大さを知りました。起きて下の階に降りようとしました。階段が斜めになっており、降りづらかったです。居間に行くと、食器棚がテーブルの上にあり、隣の部屋では、祖母がいましたが本棚から本が落ちてきていましたが布団を頭からかぶって寝ていたので無事でした。父はタンスの角で頭を打って怪我をしたみたいですが、それ以外は、みんな怪我はありませんでした。

外に出てみると、お寺(住んでいた自宅)は、隣の工場にもたれかかり斜めになっており、周りの建物は軒並全壊(その頃は長屋多かった)。道を挟んで、北側の倉庫や長屋が火事だったのと、お寺から東側の日本ローソクという工場も火事になっていました。お寺にしばらくいましたが、夜が明けて周りが暗くなるにつれて、被害の大きさに気づきました。そして、私は須磨区にある叔父のお寺を訪ねました。被害はなかったのですが、その周りの建物は、倒壊し火事になって全焼となるのがほとんどでした。後に火が来て、叔父のお寺も全焼となってしまいました。

そして、私は高砂市にある母のお寺に疎開しました。母の父である祖父が「神戸を一度見に行きたい。」と言ったので、一緒に神戸へ向かいました。向かっている途中の車窓から「戦争の爆撃にあったみたい。」と祖父が言っていたことを今でも記憶に残っています。

２、その後

その後、復興に向けて動き出しました。町の方は、近くにあった市民グラウンドに仮設住宅が建ちました。そして、山陽電車が地下に、阪神高速山手線ができ、建物が建ち並び復興したように見えました。ただ、新長田の南側の商業ビルや大正筋・本町筋・六間道など、今は、シャッターが下りてまだまだ復興とは程遠い状況です。

３、役に立ったもの

ライフラインが復旧するまでは、バーベキューコンロやストーブ、カセットコンロ、お寺にあった大きなローソクが役に立ちました。近くのお肉屋さんが、「冷蔵庫が使えなくなったので食べてください。」とスジ肉などのお肉を頂いたので、バーベキューコンロやカセットコンロで、焼肉にしたり、スジ肉をおでんにしたりして、食べました。

４、震災後の取り組み

私がこの震災や東日本大震災、水害などを通して問題だと思ったのは、心の癒し、気持ちの部分だと感じました。私は、東日本大震災の時に東北に傾聴ボランティアに参加させていただきました。このボランティアで学んだこととして、こちらから話すのではなく、まずは耳を傾ける、話を聞くことの大切さを知ることができました。

３　父の被災経験

（１）震災当日

震災当日、加古川の実家で２階の寝室で寝ている時に、ゴーという音で目が覚めた。その直後、とても

大きな揺れを感じた。高校生の時に地震を経験していたため、すぐに地震だと分かった。突き上げるような縦揺れとゆっくりと長い横揺れが１分くらい続いたように感じた。前の本棚から本が落ちてきたり、その上にある神棚のお神酒が落ちてきたりしたが、布団をかぶっていたため、怪我はなかった。地震が収まり、家の１階に降りた。皿の一部が落ちて割れていたが、それ以外は大した被害はなかった。テレビをつけると、地震があったと伝えていた。

時間が経つにつれて、だんだん被害が大きかったことが分かってきた。それを知って、何も考えずに最寄りの駅に向かった。自転車で JR 東加古川駅に向かう途中、ブロック塀が壊れている家を見かけた。駅についた時には電車が止まっていた。家に帰って、朝ご飯を食べていたとき、ヘリコプターで神戸の上空を旋回していた中継で被害が甚大であることが分かった。初日の中継では、長田の街が大きな被害が出ているとテレビでよく放送されていたので、長田に住む友人が心配になった。電話をかけたがつながることはなかった。ほかの友人は朝、電話が通じていたが、昼はつながらなくなっていた。夜になってようやく近くに住んでいた友人と電話がつながったので、翌日に水とおにぎりを持って長田の町に行こうと約束した。

（２）翌日

翌日、JR も山陽電車も止まっていた。電話で約束した友人を車でひろってから、長田の街へ向かった。車で神戸市内の街中を通るのは、混んでいて時間がかかると思ったので、西神中央に車を駐車し、地下鉄で向かうことにした。震災翌日の１月 18 日は、西神中央駅から板宿駅までしか電車が再開していなかったため、友人宅から１番近い新長田駅ではなく１駅前の板宿駅で降りた。

板宿の駅を降りて南側の地上に上がると、煙のにおいが充満していて、倒壊した建物も多くあった。寄り道をせずに、まっすぐ新長田駅の近くにある友人宅へ向かった。友人宅の市営住宅は幸い倒壊していなかったため自宅を訪ねたところ、友人は食料の買い出しのため不在であったが、友人の母親が出てくれた。友人の母親に作っていたおにぎりを手渡したところ、「わざわざ来てくれてありがとう。」と感謝された。その時、友人の母が少し疲れていたように見えた。後に友人に買い出しについて聞いたところ、友人は空いているコンビニを探して車で西の方角へできるだけ遠くに向かったそうだ。

その後、別の友人の住居であるお寺に向かった。その道中は、家屋の倒壊や火災で通れない道があったため、普通であれば、歩いて 20 分程度の道のりだが、1 時間かかった。お寺に着くと、お寺の門が倒れていた。お寺の入り口が塞がり入ることができないため、家の前にいた。しばらくすると、前の建物に避難していたお寺の住職さんである友人の父親が声をかけて下さった。そこで友人の無事を確認した。板宿に到着してから 4 時間ほど経っていたので、慣れていたのか、感覚がマヒしているのかは、わからないが、臭いは気にならないようになっていた。友人の安否を確認するのが必死でそれどころではなかったのかもしれない。その日は、友人の安否が確認できたため、被災された方の邪魔にならないように家に帰ることにした。

４　話を聞いての感想

私は、このお手紙や父からの話を聞いて、阪神・淡路大震災の爪痕を感じられないほど神戸の街が復興していることに気づいた。長田の街に行ってみたが、軒並み全壊していた地域は、跡形もなく住居が立ち並んでいたり、商店が立ち並んでいたりと長田の街は復興していると私は感じた。しかし、震災以前から住んでいる方にとっては、私が感じていたこととは異なり、以前のような活気がないことから、復興には程遠いと感じていた。私はこのことを知って、住んでいる方と住んでいない方では、復興の基準がまったく違うものだと思った。被災していない人だけが復興に携わるのではなく、被災した方の意見も取り入れて復興していかなければ、地域住民が思い描く復興とは、ほど遠くなってしまうものだと感じた。

５　環境防災科

（１）災害を学ぶ

私が災害について学び、環境防災科に入るきっかけとなったのは、東日本大震災である。

当時、金曜日の４時間授業が終わり祖父母の家でテレビを見ていた。２時 46 分突然放送局のオフィスに切り替わり、左右にオフィスの机が動いていた。しばらくすると、ヘルメットを被ったアナウンサーが必至で地震があったこと、これから大きな津波が来ることを伝えていた。小学２年生と幼かった私は、「津波」という言葉を知らず波と聞くと、プールの波を想像していた。しかし、そのようなものとは大きく異なり、堤防を越え海の範囲が広がっていた。車を飲み込む津波の映像は今でも鮮明に覚えている。それから数日経っているにもかかわらず、ゴールデンタイムでも原子力発電所事故について放送している

のを見て、「日本が変わった、大変なことが起きた」と初めて感じた。そのことをきっかけに、東日本大震災や阪神・淡路大震災について放送するテレビを見つけては、欠かさず見るようになり、防災・減災に対して興味を持つようになった。

環境防災科を知るきっかけとなったのが、小学校の先生である。防災に興味を持っていた私に、「高校で災害について学べる学校があるよ。」と教えていただいた。私はそのことを聞いて、すぐに環境防災科に興味を持ち入学したいと感じた。自宅から遠いことから両親から反対されたが、最後は私自身の意思を尊重してもらい、環境防災科を受験し入学することができた。入学してから今までの３年間、講義や被災地に行かせていただいて災害について学ぶことができた今、胸を張って入学してよかったと感じている。

（２）被災地に足を運んで

私は、２年生の夏、全国ジュニアリーダー合宿と福島学宿に参加し、福島県と宮城県の被災地に行かせていただいた。その貴重な経験の中で一番感じたことは、被災地復興には、地域差があるということだ。例えば、東北地方の中心として栄えている仙台市周辺の地域では、新しいマンションやショッピングモールなどができていたり、建設中であったりして復興が進んでいる印象だった。しかし、原子力発電事故のあった福島県浜通りでは一部の地域で、帰宅困難区域が解除されていないため、国道沿いの住宅では、３月 11 日のまま時が止まっていたように感じた。住居は、いまだに取り壊されずに屋根瓦が剥がれ落ち、壁にはひびが入ったままで、庭には一階を覆い隠すほど伸びた雑草が、そのまま放置されていた。飲食店は、窓が割れたままであったり、看板の文字が剥がれ落ちたままだったりした。住宅街は、野良猫などの動物であふれかえっていると聞く。人が帰って来られないというのは、そういう現実が起こってしまうのである。当たり前のことではあるが、人が住んでいない町は、とても寂しかった。このように、東日本大震災から十年が経つが、復興の地域差を強く感じた。しかし、実際は私自身、被災地に何も貢献できていなかった。そのことで、申し訳ない気持ちや、やるせない気持ちを持った。そのため、私はふくしま day というイベントに運営側として参加した。このイベントでは、福島の「今」を知ってもらうことを目標に取り組んだが、福島や東日本大震災の被災地にルーツがある方や、防災に興味がある方のみの参加だった。福島の風評被害などを減らしていくためには、防災に興味を持っていない人にも参加してもらう必要がある。今後はその問題点を解決して、大学生としての目線から、少しでも多く被災地「福島」に貢献していきたい。

６　夢と防災

私の将来の夢は、社会科教諭になることである。教諭として、防災について実現したいことは、３つある。１つ目は、災害時の対応について正しく行動できるように伝えていくことだ。自らの口で、避難訓練や、HR の時間などの短い時間を活用し、信用できる情報を正確に伝え、生徒たちに興味を持ってもらえるように伝えていきたい。そして、生徒たちが自分の命は自分で守り地域の人も巻き込んで避難できるように教えていきたい。

２つ目は、災害への備えを見直すことだ。学校が災害について準備をしている代表例として避難訓練があげられる。現在多くの学校では、「避難訓練＝校庭に避難」が当たり前に行われている。しかし、それはどのケースでも正しいとは思えない。なぜなら大雨や大雪の日でも地震は来たり、校庭が液状化やひびが入っていたりとかえって校庭に避難することがさらに危険を起こすケースがあるからだ。東日本大震災でも実際、液状化で校庭に出られなかった事例がある。本当は、周りに何も落ちてこないところに避難すべきだと、教えなければならない。このように、私たちが、当たり前に教えられてきた防災教育は、足りない部分が多いと感じた。そのため、災害が起こる前に、災害に対する準備を学校全体で見直し改善していきたい。

３つ目は、防災について生徒だけでなく、近隣に住む地域に住む若い世代の方にも知ってもらうことだ。地域の防災訓練に参加するのは、高齢者や小学生が多い。このことは、大きな問題がある。なぜなら、地域を引っ張るべきである 10 代、20 代が参加していないからだ。この原因としていつどこで開催されるかを知らないことが挙げられる。多くの地域では役所や回覧板、町会の会議・看板でしか開催日時を知ることができないのが、現状である。だから、私は生徒と一緒に、若い世代が目につきやすい駅の掲示板や SNS を通じて発信し、地域のリーダーとして防災訓練に、積極的に参加できるような環境づくりを行っていきたい。

７　最後に

環境防災科の３年間で私たちは、多くの方から被災体験を聞かせていただいた。でも、聞かせていただくのが当たり前のようになっていないだろうか。宮城で東日本大震災を被災した同年代の友人が「思い出したくないこともあるが、後世に伝えるために語り継ぐことが必要だ」と言っていたように、被災した方からすれば思い出したくないことであるが、被災された方が私たちの世代や未来の世代のために、懸命に語り継いでいただいている。私たちはそのことを意識し、正しい情報を間違って理解しないように語り継いでいかなければならない。未来の災害に備えて、「語り継ぐ」というバトンを絶対に途絶えさせないように、これからも防災・減災に関わり続けていきたい。

記憶

藤澤　倖

１　はじめに

阪神・淡路大震災震災を経験していない人が増えてきている。だからといって、「何もわからない」「何も知らなかった」では、大切な人を守ることができない。ましてや自分の命も守れないかもしれない。それを防ぐためには、誰かが震災について語り継いでいかなければならない。私は、阪神・淡路大震災を経験していないが、この３年間で多くのことを学んできた。それをこの場を借りて伝え、語り継ぎたいと思う。

２　概要

発生日時：平成７年（1995 年）１月 17 日 05 時 46 分
震源地：淡路島北部の北緯 34 度 36 分　東経 135 度 02 分
マグニチュード：7.3
最大震度：７
死者：6,434 名
行方不明者：３名
負傷者：43,792 名
住家全壊：104,906 棟
住家半壊：14,474 棟　［気象庁ホームページより］

３　父の話

（１）　地震発生

当時、16 歳の高校１年生で神戸市西区のマンションの４階に住んでいた。就寝中に聞いたことのない「ゴーーー」という音で目が覚めた。起きた瞬間、すごい揺れで初めてそこで地震と分かった。今回もいつもの地震と同様にすぐに収まると思っていた。しかし、今までの地震とは違った。自分の中では、３分くらい揺れている感じがした。揺れが止まるのかと不安になった。

（２）　地震後

地震発生後、家の中はぐちゃぐちゃになっていた。台所の食器棚から食器が飛び出していた。テレビも元あった場所から３メートルくらい飛んでいた。外を見ると、朝早かったがすごい数の人が家から出ていた。家族も直ぐに家を出た。外に出て、マンションを見るとたくさんのヒビが入っていた。

曾祖父とは一緒に暮らしていなかった。安否確認するための物がなかったため、家族みんなで曾祖父の元へ車で向かった。信号が点滅していた。動いていない信号を見て、父はとても怖く、不気味に感じたそうだ。車のスピードを落としながら、ゆっくりと進んでいった。周りの家は、ほとんど崩壊していた。曾祖父は、避難所に行く準備をしており無事だったそうだ。

学校は他の建築物と比べて、少しだけしかひびが入っていなかった。そのため多くの人が学校に避難していた。友達に会うことができず精神的にストレスがたまっていたが、学校に行くと仲の良い友達と久しぶりに再会することができた。とても安心することができ、気持ち的にも楽になったそうだ。

（３）　その後の生活

余震が１日に８回程続いた。震度１くらいの地震もものすごく怖く感じた。マンションが崩れるのではないかという不安があり、３日間車の中で寝た。しかし、エコノミークラス症候群で亡くなる人が出てくるようになり、４日目からは家で寝ることにした。

水がなかった。水を買いためておくという考えがなかった。近くの小学校で水を配っていたため、灯油缶を持っていき入れてもらった。トイレの水や飲み水、洗濯物を洗う水として使っていた。小学校では、カセットコンロも配られていたが食料は配られていなかった。また、初めて水が要らないシャンプーが開発され配られた。

（４）　教訓

震災時、１番困ったことは水が出ないことだった。水を買いためておくことの大切さを学んだ。現在は、水を無料で配ってくれるところには遠くからでも分かるように看板が立ってある。父は、とてもその看板に目が付くそうだ。震災時に家から近かった小学校も現在、無料で水を配る看板が立てられている。

その看板を知っておくのと知らないとでは、災害時大きく変わってくると思う。

（５） 話を聞いて

私はまだ大きな地震を体験したことがないため、余震が１日に８回程続いたということを聞いて想像ができなかった。とても怖かった。環境防災科でたくさんの災害の勉強や防災の勉強をしてきたが、実際に災害が起こるとなると学んできたことを活かせるかどうかわからない。もしかしたら、精神的に私がしんどくなり何もできなくなるかもしれないと思った。

４　母の話

（１）地震発生

当時、16 歳の高校１年生で神戸市西区の一軒家に住んでいた。就寝中に聞いたことのない「ゴーーー」という音で目が覚めた。起きた瞬間、すごい揺れで初めてそこで地震と分かった。死ぬかもしれないと思った。

（２）地震後

地震発生後、家具の固定を一切していなかったため、タンスや食器棚、仏壇が倒れていた。当時は、タンスの上にガラスの人形ケースを飾っていた。すごい揺れで人形ケースが落ちて割れた。布団を頭までかぶり無事だったが、もしかしたら大けがをしていたかもしれない。地震の影響で屋根が崩れ半壊だった。外に出ると、たくさんの家の屋根が崩れていた。道路には、たくさんのひびが入っており、車では移動できなかった。

（３）その後の生活

水は１週間以上断水が続いた。水が出なかったため、食器洗いやお風呂、トイレの水などにはとても困った。紙皿や紙コップがとても役に立ったがスーパーに買いに行っても売り切れ状態だった。幸いにも、家の前に農業用水が通っていたためトイレの水は何とかなった。カセットコンロがあったが水が出ないためカップラーメンも作ることができず、カセットコンロの意味がなかった。少しでも水を貯めるために、雨水をバケツにためていた。

（４）教訓

家具の固定は必ずしなければならない。高いところには物を置かない。実際に 10 年以上も同じ家に住んでいると、家具も増えてくる。最初は、高いところに物を置いてなくても次第に家具が増えてくると収納場所が無くなり高いところに物を置きだすと思う。だから、常に家を片付けておくことが大切だ。災害時も家が散らかっていたら避難するときに時間がかかってしまう。常に家の中をきれいに片づけ、高いところに物を置く習慣をなくすことが必要だ。また、水が出ないことを経験して水の買い貯めや非常食は本当に大切だと思った。

（５） 話を聞いて

インフラや食料ストップによるストレスは多くの人が抱え、普段通りの生活が出来ずに不自由を強いられるということは大変だと思う。もし自分が同じような状況に置かれ、直接被害がなくとも震災の影響というものは、広く大きな範囲で存在するのだと痛感させられた。

５　環境防災科に入って

（１）入学を決める出来事

私が小学５年生の時、祖父母の住むマンションが火事に遭い消防士の方に助けていただいた。その時は、かっこいいから消防士になりたいと思っていた。中学３年生の進路を決める大事な時期に祖父母が私に火事が起こった日の出来事を詳しく教えてくれた。もし、消防士の救出が少しでも遅れていたら、助かっていなかったそうだ。思い出のものだけでなく、大切な人までも燃やし奪っていく火事の怖さを改めて知った。この経験から私は、消防士になり災害で大切な人を失わないように、災害での死者０人を目指そうと思った。私は環境防災科に入り、たくさんのボランティア活動や過去の災害の教訓を学び、消防士になって防災を地域の方々に伝えていこうと思った。

（２）入学して

環境防災科に入学して様々なことを学んだ。様々な外部講師の方の様々なお話や発表の仕方、災害時の人の心について、ボランティア活動の仕方や大切なことなどたくさんのこと学んできた。学んできたことを、それぞれがこれから進む道で防災を繋げていかないといけない。そして、伝えていかないといけない。それが今の私たちにできることだと思う。また、防災を学び知識をつけただけではない。かけがえのない仲間と出会い、３年間同じクラスで全ての行事にほかのどのクラスよりも熱く、楽しく、全

力で取り組んできた。この３年間があったからこそ、どんなに辛いことや苦しいことがあっても乗り越えようと頑張れる。そんな仲間と出会い、過ごした日々がこれからの糧となるだろう。

（３）東北訪問

私は、高校１年生の夏に東日本大震災で津波の被害が大きかった宮城県に行った同世代の子たちから聞く話は、大人から聞くよりもなぜか頭に当時の情景が鮮明に広がってきた。たくさんの被災された方の話を聞いた。その中でもある１人の方から頼まれたことがある。80 代のおじいちゃんの話だ。「テレビに映っていることが全てではないことを知ってほしい。大人は災害時、周りが見えなくなる。線路にはたくさんの死体が引っかかっていた。目の前で流されていく人をただ見ることしかできなかった。もっと辛くて残酷なこともたくさんあるということを、持ち帰って伝えていってほしい。」と言われた。私は、兵庫県に戻ってからボランティア報告会に参加し、東北訪問で学んだことを多くの高校生や中学生に伝えることができた。防災を伝える立場として、間違った情報を与えてしまうと人の命を奪ってしまう。この報告会を実施するにあたって、1 ヶ月前から震災についてもう 1 度調べた。また、東北訪問で学んだことを分かりやすく伝えるために家族や友人の前で何度も発表の練習をした。このボランティア報告会を通して、計画することの大切さ。その計画を実行することの大変さを学んだ。

６　熊本豪雨

令和 2 年 7 月。豪雨災害から６日目の９日午前、甚大な被害が出た熊本県の津奈木町や球磨村などでは行方不明者の捜索が続いた。県によると、県内の死者は午前８時現在、計 58 人となった。このほか住所不明の１人が心肺停止。行方不明が八代市と津奈木町の各２人、芦北町の１人、球磨村の５人の計 10 人となっている。［熊本日日新聞より］

今回の豪雨はたくさんの地域に被害をもたらした。熊本県の球磨川が氾濫するなど甚大な被害をもたらした豪雨は、土曜日の明け方、午前 4 時 50 分に大雨特別警報が出る最悪のタイミングだった。朝寝坊ができる休日で深い眠りにつき雨音の察知は遅れがちで夜明け前で降雨状況も目視できない。テレビやインターネットを見る時間帯でもなく情報をキャッチしにくいなど、避難開始のきっかけをつかめない悪条件がそろってしまったと思う。老人ホームでは、たくさんの死者が出た。前日に雨雲レーダーを見て、いち早く避難することはできなかったのか。たしかに、注意報も出ていないのに避難する人はほとんどいないと思う。しかし、人の命を預かる仕事に就いたからには、間違った行動をしてはいけない。例えどんなに条件が悪かったとしても、事前に避難することはできたのではないだろうか。また、老人ホームは浸水想定区域に指定されており、常に災害と隣り合わせだった。昨年の佐賀県の洪水でも大雨特別警報は早朝 5 時 50 分だった。教訓を生かせなかったと言える。この災害がこれからの課題につながってくると考えている。この災害を他人事のように「わざわざ危ない場所に家を建てなかったらいい。」など他人事に捉えるのか「自分がもしここに住んでいたら」と考えるかではこれからの災害時の行動に大きく関わってくると思う。日本で安全なところはどこにもない。私たちは常に災害と隣り合わせだということを頭に入れておきながら、これから生活していかなければならない。

７　夢と防災

消防士になってからがスタートだと思っている。私は、災害での死者０人を目指し消防士として活躍できる人になりたい。

私が小中学生の時、よく消防士の方々が学校に来てくださり放水活動を一緒に体験させていただいた。当時は、楽しいなということだけしか頭になくひたすら放水していた。しかし、環境防災科に入学してたくさんの過去の災害について授業で勉強し、たくさんのボランティア活動に参加して思ったことがある。それは放水活動をして何になるのかということだ。たしかに消防士になりたいと思う人は増えるかもしれない。だが、人を守る立場としてなぜその場を借りて防災に関する授業をしないのか、とても疑問に思った。だから私は、出前授業に積極的に参加し放水活動だけでなく、防災授業や避難訓練も取り入れていきたい。避難訓練は子供たちだけでするのではなく、親にも参加し訓練していきたいと考えている。もし、家に家族全員がいる時災害が起こったとする。子供は避難訓練で学んだから正しい知識があるが、親が間違った知識を持っていたとするとその正しい知識も親によって無駄になるのではないだろうか。だから家族全員が避難する時の正しい知識を持っておかなければならない。また、消防局のホームページには子供向けに地震のメカニズムや非常用持ち出し袋など分かりやすく書かれているところもある。しかし、そのホームページを見る人は果たして何人いるのだろうか。たしかに、消防士を目指している人は見るかもしれないがそうでないサラリーマンや子供たちは見るのだろうか。決して多

くはないと思う。だから私は、出前授業などの終わりに子供たちにプリントを配布したいと考えている。プリントには、ホームページに飛べるようにQRコードを貼り付け、少しでも多くの人に防災や地震のメカニズムについて知ってもらいたいと考えている。

８　最後に

専門家や行政がどれだけ頑張ったとしても災害で死者は必ず出てしまう。その理由として、私は１人ひとりの防災意識の低さが原因だと考えている。行政や専門家にも必ず限界がある。災害の専門家は、たくさんの防災グッズを発明してくれた。また、私たちがどれだけ過去の災害と向き合い風化させないか。そして１人ひとりの防災の意識を高めることが大切だと考えている。だから、私は消防士になり防災を伝えていく。今までは防災を教えてもらう立場だった。今度は、地域の住民や大切な人を守るために高校で学んできたことを教えてもらう立場から伝える立場として活動していきたい。そしてこれからの災害で消防士として多くの人を助け、活躍していきたい。

私はこの３年間で多くの人に支えられ、「防災」というものを学んできた。この出会いに感謝してこれからの社会を生きていく。

風化の意味

前川　大樹

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分。それは起きてしまった。兵庫県南部地震だ。震災名は阪神・淡路大震災とされ、26 年の月日が経った。私はまだ産まれていないため阪神・淡路大震災を経験していない。防災・減災について興味を持ち始めた今、環境防災科で本格的に防災・減災について勉強している。私は幸いにも大きな災害を体験したことがない。地震に遭ったこともなければ、津波に遭ったこともない。何の経験もない私がこのような語り継ぎをすることは不可能なことに近いが、高校３年間で身につけた知識、家族や身近な人から聞いた話を元にこれから語り継いでいきたいと思う。

２　阪神・淡路大震災

（１） 祖母の話

祖母は当時 46 歳で神戸市西区に住んでおり、保育士として西区の保育所に勤務していた。地震発生当日の朝、自宅の２階で寝ていると飼い犬の大きな鳴き声で目が覚めた。目が覚めた直後、下から突き上げられるような激しい縦揺れに襲われた。縦揺れに襲われた後、外から誰かが揺らしているかのような激しい横揺れに襲われた。地震発生時は、息子２人が家で寝ていた。突然の出来事で状況も理解できていないまま息子２人の部屋に急いで行った。長男は倒れかけているタンスを抑えていたが次男は寝ていた。揺れが収まった後急いで息子２人を連れて外へ出た後、父の車へと避難した。約１時間車の中で様子をうかがい、その後家へ戻った。家の中に入りリビングやキッチンの様子を見ると目を疑った。４つあった食器棚の扉が全て開いた状態で、中にあった食器はほとんど落ちて割れていた。冷蔵庫の扉も開いていて、中の食品が閉まっていたはずの野菜室の中に落ちていた。地震の横揺れで野菜室の扉が開いたことが原因だ。勤務していた保育所は地震から約 20 日間休みになった。保育所に行けない間、家のことや自分のことで大変だったが何よりも心配だったのは保育所に通う園児のことだった。もし園児がいる日中に起きていたら園児を守れていたかどうかわからない。地震当日は１日中家の片づけに追われた。家の損傷は瓦が何枚か落ちただけで済んだが家の中は悲惨な状況だった。割れたお皿が至る所に散らばり、裸足では歩けない状況だったため靴を履いたまま家の中に入った。次男が近くを車で見に行くと、近くの新幹線の線路が崩れ落ちていて通行止めになっていた。地震直後から電気・水道・ガスは通っていなかったが食料には困らなかった。地震発生後、初めてお風呂に入れたのは３日後。西新町のお風呂屋さんが開いたという情報が入り家族全員で入りに行った。そこで改めて生きていることのありがたみを感じたと言っていた。

（２） 祖父の話

祖父は当時神戸市営バスの運転手をしていた。地震発生時は須磨の事務所の２階にいた。地震が起きた瞬間は建物が潰れてしまうのではないかと思った。揺れが続く中、ふと車庫に止めてあったバスを見ると、横転しそうな勢いで横に揺れていた。その日はバスの運行は運休になった。じっとしていられず、同僚と周りの様子を歩いて見に行った。すると民家の火災現場に出くわした。大きな火柱をあげる民家の中からは「助けてくれ～！」という声と共に叫び声が聞こえてきた。しかしどうすることもできなかった。火を消すことも助け出すことも。それから毎日「人を見殺しにしてしまった。」と自分を責め続けた。何もできなかった自分が情けなくて恥ずかしいと毎日言い続けた。

（３） 話を聞いて

今回初めて祖母から阪神・淡路大震災の話を聞いた。話を聞いて思ったことは、自分はまだまだ阪神・淡路大震災を知らないということだ。自分が今住んでいる町の被害や当時の住民の暮らしを全然分かっていなかった。自分の無力さを実感した。今住んでいる西区は周りと比べると幸いにも被害は少なかったことは以前から耳にしていた。だが被害が少ないといっても経験した人からするととんでもない被害だった。

テレビ等では報道されていないかもしれないのが不思議に思うくらいだ。祖母の家は被害が少なったが周りではもっと深刻な被害も出たという。そんな時に助け合える人になりたいと思った。祖母が言っていた「生きていることのありがたみ」。この言葉を聞いて今祖母や祖父、両親が生きていることは当たり前ではない、だからこそ日々の生活を大事にしていきたい。また祖父は阪神・淡路大震災の話を、涙を流しながら話してくれた。話を聞く前はまさかそのような経験をしたとは思ってもいなかった。きっと

祖父は当時を思い出し、涙が流れたのだと思う。私は話を聞くことが申し訳ない気持ちになった。自分がもしそのような現場に居合わせていたら、何も出来ていなかったと思う。だから祖父が自分を責め続けた話もよく分かった。自分なら立ち直ることすらできないと思う。

今回の話を聞いてまだまだ阪神・淡路大震災の被害は世に知られていないと思った。テレビ等では報道されない被害は山ほどあると思う。そのような被害が知られていないままだとその被害は忘れられ風化してしまう。そして次の災害でまた同じ被害が出てしまう。そうなればこれらの被害は無駄になってしまう。またその被害によって被災された方、亡くなられた方に失礼だと思う。そうさせないために私は、これからもっと色々な人から話を聞いて兵庫県内のみならず全国に伝えていきたいと思う。そしてその地域に阪神・淡路大震災の教訓を伝えていきたい。

３　環境防災科

（１） 入学のきっかけ

私が環境防災科に入学しようと決めたきっかけは中学校２年生で受けた防災学習で防災に興味を持った私に、中学校の担任の先生が勧めてくれたことだ。それまでは防災というものに興味がなく、災害が起きても他人事だと思っていた。入学を決めた時は興味があるだけで知識はゼロに近かった。しかし興味を持った私は、防災についてもっと専門的な学びをしたいと思った。将来の夢が教師だった自分は、防災に関する知識を深め、次は自分が防災教育をしたいと思った。

私は環境防災科の説明会に参加した。その時に大勢の前で堂々と話をする環境防災科の先輩方に感銘を受けた。私も先輩方のように人前で堂々と話せるようになりたいと思った。また説明会の時に聞いた東北訪問をはじめとした数多くのボランティア活動に自分も参加してみたいと思い、より一層環境防災科に入学したいと思った。

（２） 入学後

環境防災科に入学した私は、出来る限り多くのボランティア活動に参加することを心掛けた。初めて参加させていただいたボランティア活動は西神南で行われた「ふれあい祭り」。活動内容は、会場設営やブースの展示、地域の方々との交流などがあったが、自分は何をしていいのか全く分からなかった。しかし環境防災科の先輩方に、親切に指導していただき本当に助かったのを覚えている。

このボランティアの目的は地域の方々との交流。しかし私は交流も出来ず立ち尽くしていた。そんな時環境防災科の先輩方が優しく声をかけてくれて地域の方々と話すことが出来た。その中で１人のおばあさんと一緒に話したことが印象に残っている。そのおばあさんは１人で席に座っていたのでおばあさんに自ら声をかけて売店の食べ物を一緒に食べた。しばらくお話をした後、おばあさんが笑顔で「お話をしてくれてありがとう。おかげで元気になった。これからもがんばってね。」と言ってくださった。私はその言葉を聞いて、元気にすることができてとてもうれしかったことを覚えている。初めての経験で不安しかなかったが、ボランティア活動を通して、自分にとって貴重な経験をすることが出来た。

他にも数多く参加してきたボランティア活動の中でも特に大きな経験ができたボランティア活動がある。それは、兵庫県立視覚特別支援学校に行き、視覚障害者の方たちと一緒にスポーツをしたり、防災についての意見交換をするというものだ。まず視覚障害者の方とフロアバレーというスポーツをした。このスポーツをしたのは初めてだった。このフロアバレーをして思ったことは目が見えないという恐怖の中生活するのも難しいのに、スポーツをするなんて本当に素晴らしいなと思った。次に防災学習を行った。この防災学習では、普段の防災学習では学べないことを数多く学ぶことが出来た。一番印象に残っていることは、視覚障害者のみならず、身体障害者の方々は災害時、避難したくても避難できないということだ。このボランティア活動を通して初めて障害者の方の意見を聞くことが出来た。それから私の防災への意識は変わった。今までの自分は自分中心の防災しかしてきていなかった。身体障害者の方々は、災害弱者となることしか考えていなかった。今後は自分の事のみならず、災害弱者からの目線も重点的に考えていきたい。

４　東日本大震災

私が舞子高校の環境防災科に入学して特に力を入れて学習したのが東日本大震災である。理由は私が生まれてから覚えている中で初めての大きな災害であり、災害の恐ろしさを知った災害だからだ。2019年12月10日時点で、死者は２万4585人にも上った災害だ。当時小学校２年生だった私が今まで東日本大震災について学習してきた中で印象に残っていることが２つある。

（１） 釜石の奇跡

東日本大震災の地震発生直後、釜石東中学校の生徒達は直ちに学校を飛び出し、高台をめがけて走った。彼らを見て、近所の鵜住居小学校の児童や先生達も後に続き、さらには多くの住民もそれに倣った。岩手県釜石市の 3000 人近い小中学生のほぼ全員が避難し奇跡的に無事だった。このような事例があるがこれは本当に奇跡だったのか。私は奇跡だとは思っていない。

なぜ 3000 人近い小中学生が助かったのか。それは定期的に行われていた避難訓練と昔から伝わるある教えがあったからだ。避難訓練では、釜石東中学校の生徒と鵜住居小学校が合同で避難訓練をするといったものがあった。東日本大震災発生当時釜石東中学校の生徒が鵜住居小学校の児童の腕を必死に引っ張って逃げていた。それを見て自分たちも避難しないといけないと思い近隣住民も避難していった。

そのような彼らには避難３原則という言葉がある。

原則１：想定にとらわれるな
原則２：その状況下で最善を尽くせ
原則３：率先避難者たれ
というものだ。

さらに釜石市では昔から「津波てんでんこ」という言葉がある。てんでんことは各自のこと。海岸で大きな揺れを感じたときは、津波が来るから肉親にもかまわず、各自てんでんばらばらに一刻も早く高台に逃げて、自分の命を守れという意味だ。東日本大震災が発生すると、釜石東中学校の副校長は教室から校庭に出始めた生徒たちに、「(避難所へ) 走れ！」「点呼などとらなくていいから」と大声で叫んだ。

（２） 旧石巻市立大川小学校の出来事

旧石巻市立大川小学校では児童 108 人のうち 70 人（職員を合わせると 74 人）が死亡あるいは行方不明になった。なぜこんなにも多くの死者・行方不明者が出たのか、授業を始め、自分でも大川小学校の出来事についてたくさん調べた。そして当時そこに通っていた方のお話を聞くことが出来た。教職員が避難経路をどのようにするか等分かっておらず、校庭に避難させられ、津波がすぐそこまで来ていると分かってから動き出した。地震から 10 年が経った今だから言えることだが、上に記した避難３原則をもっと多くの学校に広めていたらこんなにも多くの人が亡くなることはなかったのだろうと思う。あの時大川小学校の裏山に逃げていれば命は助かったかもしれない・・・。今さらそうはいっても亡くなられた方は帰ってこない。とても悲惨な気持ちになる。

（３） これらの出来事のまとめ

この２つの出来事は対照的だと思う。私は将来、防災教育に力をいれて行っていくつもりだ。その時にこの釜石の奇跡、大川小学校の出来事について詳しく伝えていきたいと思う。それが学んだ者の役割であると思う。

また、これら２つの出来事の教訓から、地元神戸でもっと防災を広めていきたいと思う。神戸では過去に阪神・淡路大震災が起きており教訓をいかした防災学習が十分に行われていると思う。しかし今では阪神・淡路大震災を経験した人が神戸でも少なくなってきている。そんな神戸に東北での出来事から学んだ教訓を伝えていきたい。大川小学校の悲劇からもっと頻繁に避難訓練を実施していたらこんなに大きな被害が出なかったのだろう。避難訓練の大切さを実感した出来事だ。小学校や中学校の避難訓練を見直した時にまじめに取り組む生徒もいればまじめに取り組んでいない生徒もいた。１人でもそういう生徒がいれば、救える命も救えない。そういった生徒をなくすことが、防災・減災につながると私は思う。そして、今私たちが阪神・淡路大震災や東日本大震災の学習をはじめ、防災・減災を学ぶことは、亡くなられた方の命を生かすことだと私は思う。

５　夢と防災

私の将来の夢は教師になることだ。ただ教師になるのではなく、防災の専門知識を持った教師になりたいと思っている。理由は自分が受けてきたこの防災学習というものを、次は自分がしたいと考えたからだ。今、日本中では災害が多発している。その影響からか学校での防災学習というものが全国的に増えている。そのような中、防災の専門知識を持った教師が少ないというのが実態だ。今の防災学習のままでもいいのかもしれないが、せっかくやるのであればレベルの高い防災学習をするべきだと考えている。そして私はその防災学習の第一線に立ち取り組んでいきたい。また、この防災学習をするうえで２つ大切にしたいことがある。

１つ目は継続的に行うということだ。環境防災科では３年間継続的に防災学習を行っている。しかし他の学校はどうだろうか。ほとんどの学校は、年に１，２回、多くても３回程度だと思う。やることに意

味があるとは思うが、その１回や２回で生徒や児童は防災・減災に取り組んでくれるだろうか。「継続は力なり」という言葉があるように、何事も継続することが必要だ。継続することで自分の力となり、いざという時にその力を発揮することができる。

２つ目は地域の防災リーダーの育成だ。自分が学んだものを自分が住む地域で災害が起きたときにリーダーとなれる人材を育成したい。理由はいざ災害が起きた時、地域住民は何をすればいいのかわからずパニックになってしまう。そんな時だれか１人でもリーダーとなる存在がいれば、みんなに声をかけることで全員が１つになり避難することで全員の命を救うことができると思う。そのためには人一倍防災について学習し努力しなければいけない。しかしそんな人材が１人でも多くいることでより多くの命を救うことができる。

そして最終目標は１人でも多く、防災・減災を伝える人を増やしていきたい。防災・減災に携わっている以上は自分のものにして終わりではなく、次の世代へと語り継いでいくことが防災・減災を学ぶ上での義務だと考える。だから将来自分がこれまで学んできたもの、経験してきたものを伝え、１人でも多く防災・減災に携わる人を増やしていきたい。

６　最後に

私はこの語り継ぐや３年間の学びを通して、阪神・淡路大震災が起こるまで本当に神戸で震災は起きないと思っていたということが改めて分かり、震災に対しての風化というのは本当に怖いと思った。だから私はこの語り継ぐを通して皆さんに伝えたいこと、それは過去の災害を風化させてはいけないということだ。これは私が防災・減災を学ぶ上で一番大切にしていることだ。もしも私たちのような防災・減災を学ぶ人がおらず、伝える人もいなかったら過去の災害は誰にも知られない。そうなれば、もし災害が起きた時過去の災害の教訓は生かされず、同じ被害がでて二の舞になってしまう。しかし今防災・減災が重要視されている中でも風化は進んでいる。その風化をギリギリの状態で食い止めている状態だ。このままでは、風化は一生続くこととなり、防災・減災を学ぶ意義を見失ってしまう。そうならないために私は死ぬまで防災・減災に携わり、死ぬまで防災・減災を学び続けたいと思う。

過去の人々の想いを未来へつなげる

前林　亮香

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分に阪神・淡路大震災が発生した。この震災では 6434 人の命が失われ、阪神地域と淡路島の広範囲に甚大な被害を及ぼした。今では震災から 26 年が経ち、被災地は以前と見違えるほどに復興した。そして、震災を知らない人も増えており、風化が懸念されている。震災が風化することで、当時の人々の思いや経験が忘れ去られ、教訓が生かされなくなることが考えられる。私は震災から７年後の 2002 年に生まれたため、震災を直接経験していない。したがって、風化を防ぐためにも両親の体験をここに綴ろうと思う。

２　阪神・淡路大震災　概要

・発生日時：1995 年１月 17 日　午前５時 46 分 52 秒
・震源地：淡路島北部
・最大震度：７
・地震の規模：マグニチュード 7.3
・死者：6,434 人
・行方不明者：３名

神戸新聞 NEXT より引用

３　父の話

父は当時、市役所職員で、洲本市に住んでいた。

（１）地震発生

寝ているときに強い揺れに襲われ、身動きが取れなかった。家の土壁にひび割れがあったが、自宅周辺の風景を見ても、暗くて様子がよくわからず、見てすぐにわかるような被害が特になかったため、特に何も思わなかった。後から、自宅の近くに屋根が壊れた家があったことを知った。テレビで阪神高速が倒れている映像を見て、「これはふつうやない。なんでこんなことになっとるんや。」と思った。酪農を営んでいる父は、「牛が変な鳴き方をしていた」と言っていた。

（２）その後

まずは職場である町役場へ向かった。そこでは、自席のすぐ後ろのロッカーが倒れていた。その後、消防団員として家屋調査に向かった。市役所近くの商店街では、瓦が落ちて屋根がむき出しになるなど、木造家屋が軒並み被害を受けていた。避難所運営や仮設住宅関係には携わっておらず、被災調査の翌日には通常業務に戻っていた。震災の翌年には、地震で壊れたため池を他府県からの応援と協働して直した。また、北淡町に行き、断層が走って壊れている田んぼを直していた。地震で壊れたため池や田んぼを見ると、今までに見てきた壊れ方とは違う壊れ方をしていた。通常なら、水や風に徐々に浸食されていくのだが、地震によって下から突き上げられたため、本来なら入らない箇所にひびが入っていた。加えて、台風の被害を受けた際には壊れた箇所がすぐわかるのだが、地震は地中にも被害を及ぼしたため、どこがどのような壊れ方をしていてどんな影響を受けているのかがわかりにくかった。特に田んぼでは、復旧の翌年にお米が採れなかった所も一部あったが、原因はわからなかった。

2013 年に淡路島地震が発生したが、洲本市に住む人の中には、「阪神・淡路大震災より大きな被害を受けた」という人もいたという。

（３）今思うこと

県外からの応援のほか、自分自身が県に出向していたこともあり他府県の技術職の方々に技術を教えてもらったり、現場に向かったりするなど、一緒に仕事ができたことがありがたかった。また、特に地震はいつ来るのかがわからない。想定外の被害は出ないようにしなければならないが、そうするためにはお金がいくらあっても足りない。日ごろから意識を高めておくことが大切だと思う。行政はルールの中で生きているようなものであるため、復旧や対応などのスピード感がない。これまでの災害を経て災害に関係する法律は整備されているが、広域的に他府県とお互い協力できる制度がよりよくなってほしい。

４　母の話

母は当時、滋賀県の大学に通う学生だった。

（１） 地震発生

当時住んでいた大津市で観測した震度は５だったが、家具が倒れることはなかった。揺れが収まった後、淡路島の実家から電話がかかってきたため、家族の無事を確認することができた。７時ごろにテレビをつけると、阪神高速が倒壊しているというニュースを見た。とても信じられなかったが、神戸が大変なことになっていることは分かった。後になって実家に電話をかけたが回線がパンクしており、つながらなかった。

その日はいつも通り大学へ向かった。お昼頃に公衆電話を使ってもう一度実家に電話をかけると、つながった。祖母が実家の様子を教えてくれた。お風呂場のタイルが数枚割れたが、特に被害がなかったことがわかったので安心した。夜にテレビをつけると、どの放送局も被災地の生中継や VTR を放映していた。真っ暗な街に火事の炎が赤々としていたのがとてもショッキングで、情緒不安定になった。このほか、普段は消して寝ていた電気をつけたままにして寝るといったことが１か月ほど続いた。

（２） 大学生だからこそできたこと

当時のアルバイト先では、ポイントをためた時の景品のポケットティッシュを寄付した。

震災からおよそ１か月が経った頃、友人が「被災地の力になりたい」と言ったことから２人で両手にいっぱいのティッシュやタオルなどの物資を被災地に持って行くことになった。電車に乗り、大津から大阪、西宮を経て住吉あたりまで移動した。神戸へ近づくにつれてブルーシートをかぶせた建物が増えていった。到着した公園では、一面中にテントが張られていた。テント村の受付に物資を渡し、一駅分歩いて帰った。まちはほこりまみれだったが、被災者の人々は淡々と過ごしていた。生活再建などやるべきことがたくさんあったからなのだろうか。帰り道で求人広告を見つけたが、この募集は被災地の外部の人に向けたものではなく、被災者に向けたものであることに気づいた。

春になり、実家に帰った。当時は特になりたい職業はなかったが、震災が「地元で働きたい」と思うようになったきっかけの１つになった。そして、地元の市役所職員になった。

（３） 今思うこと

神戸に住む友人は、多くの近隣住民が震災で亡くなり、自分の店も被災したという。今でも震災メモリアルパークに連れて行ってくれるほか、震災当時のことを伝えようとしてくれている。当時を乗り越えた神戸の人々には、思い入れがあって、神戸のことが好きなのだろうなと感じる。また、今の神戸を見て、あれほどの被害を受けたのに元の姿に戻っている神戸がすごいと思う。

５　話を聞いて思ったこと

両親から震災の話を聞くのは初めてではなかったが、具体的な話は聞いたことがなかった。両親の話を通じて震災をより身近に感じることができた。加えて、当時と現在の両親の思いを知ることができたので、話を聞いて本当に良かったと思う。また、当時大学生と市の職員として働き、被災した地域も異なる２人の話を聞いて、それぞれがとった行動の違いについて知ることができた。年齢や立場が異なるが、どちらも人を支援していることに変わりはないので、私も災害時にはどんな形であれ被災者の方を支援できる人になりたいと思った。父の話を聞いて、自分の生まれ育った町も被害を受けて小学校の運動場に仮設住宅が建ったこと、通学路には地震の被害を受けて取り壊された建物があり、そこは今も空き地になっていることを初めて知った。母の話を聞いて、被災地から遠く離れている地域にも震災の影響を受けた人がいることを知り、震災を語り継ぐことに被災地からの物理的な距離は関係ないことを感じた。私が環境防災科に入学していなければ、両親からこのような話を聞くことはなかったのではないかと思う。

６　将来の夢

（１）きっかけ

私の将来の夢は、地方行政職に就くことだ。その中でも特に、広報活動または地域の魅力発信に関わりたいと考えている。目指すようになったきっかけは大きく２つある。まず１つ目は、自分が生まれ育ったまちに貢献することができることに魅力を感じたからだ。過疎化や少子高齢化によって徐々に活気が失われていく地元の現状を見て、地域活性化に携わりたいと思うようになった。また、環境防災科に入学し、防災科目やたくさんの講義を通じて過去の災害や防災について学んだ。そして、私たちが学んだ防災を生かしながら災害に強いまちづくりができることを知り、取り組みたいと思うようになった。

２つ目は、市役所職員としてはたらく両親にあこがれを抱いたからだ。毎日住民の暮らしをサポートして地域社会に貢献する姿に尊敬の念を抱いた。そして、私も両親のようになりたいと思うようになった。

（２）防災とのかかわり

書くまでもないことだが、行政は防災とは切っても切れない関係にある。仕事の内容は配属される部署によって異なるが、堤防や防潮堤などハード面での備えやハザードマップの作成・啓発、被災時には避難所の運営など災害の予防から復興まで主体的にかかわらなければならない。その中でも、私は災害の予防として防災関係のイベントの企画や運営等を通じて住民の防災意識の向上に努めたいと思っている。東日本大震災では、津波が堤防を破壊して想定外の被害が起こってしまったことや、水害では堤防が決壊して町が水浸しになってしまうなど、堤防や防潮堤などの物理的な備えでは被害を防ぎきれないことが多くある。そのため、地域住民はもちろん、移住を考えている地域外の人にも災害のリスクを知ってもらうことは必要だと考えている。

７　環境防災科

（１）防災を学ぼうと思ったきっかけ

小学生の時に受けた防災教育で、阪神・淡路大震災や 2004 年台風 23 号で地元が受けた被害を知り、衝撃を受けたことがきっかけで、災害や防災について興味を持つようになった。そして、中学 2 年生の時に「高校生、災害と向き合う」を読んだ。この本を読む以前から災害ボランティアに興味を持っていたが、大人にならなければできないことだと思っていた。しかし、この本を読んで、自分たちのような若者にもボランティアはできることに気づき、自分もボランティアに参加したいと思うようになった。また、被災者の方々と寄り添いながらボランティア活動に取り組む先輩方の話を読んで私も先輩方のようになりたいと思い、受験することを決めた。

（２）入学して

環境防災科に入学し、たくさんの講義を受けたりボランティア活動に取り組んだりした中で、私はたくさんの方々の想いに触れてきた。そうした中で、震災の経験や個人の思いを風化させてはいけないということを一番強く思った。1 年生の時に、ある方の講義を受けた。その方は阪神・淡路大震災で家族を失っており、前でお話しされるときに声が震えていた。震災から 20 年以上が経つ今でも心の傷は癒えていない人がいることを実感した。また、２年生の時、災害メモリアルアクション KOBE の取り組みで街頭アンケート・インタビューをさせていただいた。そのときお話を伺った方が、「震災と近い時期に発生した地下鉄サリン事件の影響で世間の関心がそちらに移り、そこから被災地の報道の数はどんどん減っていった。とても寂しかった。見捨てられたというか、忘れられていると感じた。」と話してくださった。私は事件があったことは知っていたが、まさかこの事件の影響で震災の報道数が減っているとは思ってもいなかった。ボランティア元年と言われている阪神・淡路大震災だが、見えないところではこのようなことがあったことは知らなかった。また、震災ではボランティアが全国各地から集まったからこそ復興したと思っていたので、とても衝撃を受けた。

このほか、消防学校体験入学や長田まち歩き、小学生への出前授業など普通科では経験することのできない貴重な経験をたくさんさせていただいた。

（３）平成 30 年 7 月豪雨ボランティア

概要

・死者：224 人
・行方不明者：８人
・住家全壊：6758 棟　半壊：10878 棟　一部損壊：3917 棟
・床上浸水：8567 棟　床下浸水：21913 棟　など（平成 30 年 11 月６日現在）

気象庁 HP より引用

私は高校１年生の８月９日に災害ボランティアに参加させていただき、岡山県倉敷市真備町に行かせていただいた。参加しようと思ったのは、連日、ニュースで報じられる悲惨なまちの姿を見て、少しでも被災地の力になりたいと思ったからだ。

学校から真備町に向かうバスの中で、道路沿いに積まれた瓦礫や浸水の痕が残った建物を見て、何も言葉が出なかった。お手伝いさせていただいた方の家は、2 階の上まで浸水しており、その跡がくっきり残っていた。私は、家の瓦礫を運び出す作業をしていたのだが、泥だらけになった家具や日用品を見て、つい最近まであった日常生活を奪っていく災害の恐ろしさを改めて実感した。また、活動中に「この地域は

もう全滅や…」と被災地の方がつぶやいているのを聞いた。この言葉を聞いて悲しくなったと同時に、同じ思いをする人を増やさないためにも、災害に強いまちづくりに携わりたいと思うようになった。

実際に被災地で活動して、自然災害の恐ろしさを目の当たりにした。テレビ越しでは感じることのできない空気が被災地にはあった。数日前まで、そこにはたくさんに人々の日常生活があったことを考えると、このような災害を忘れてはいけないと強く思った。また、この体験で見た景色や空気を忘れずにほかの人にも話していきたいと思った。

８　最後に

防災に関わることは決して難しいことではなく、私たち環境防災科の生徒にしかできないことではない。防災に興味を持ち、本を読んだり話を聞いたりして知識を蓄え、そのことを身近な人に共有することで、少しでも人の命を救える可能性がある。さらに、実際に非常用持ち出し袋などを備えるほか、家の家具の配置を変えたりすることで、自分の命だけではなく、家族の命も救うことができる。この「語り継ぐ」を読んで過去の災害に興味を持った方がいるなら、ぜひ身近な人に話を聞いてみてほしい。そして、その話を友達や別の家族に伝えることで災害の教訓や当時の人々の想いは受け継がれていき、忘れ去られることはなくなる。

もし、この「語り継ぐ」という冊子を読んで、「自分も周りの人に聞いてみよう」と思うきっかけになったり、過去の災害に興味を持つきっかけになったりすれば、とてもうれしい。

未来に語り継ぐ

松岡　紗輝

１　はじめに

私は阪神・淡路大震災のような大きな災害を経験したことがない。だからといって、震災のことを知らなくてもいいというわけではない。これからの未来を担っていく者として震災を知り、私たちの同年代や後世に語り継いでいく義務がある。震災は確実に風化しており、このままでは同じように大きな災害が起こった時にまた同じような被害を受けてしまう。だからこそ、環境防災科の生徒として様々な人からお話を聞き、学んできた私たちが震災を語り継ぎ、震災を知らない未災者に伝えていく必要がある。

２　阪神・淡路大震災の概要

名称：兵庫県南部地震
発生日時：1995 年１月 17 日午前５時 46 分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
死者：6434 名
行方不明者：3 名　〈内閣府より〉

３　祖父母の話

発生当時、神戸市中央区に私の祖父と祖母、私の父、愛犬２匹で住んでいた。地震により、壁と畳の間に５～10ｃｍの隙間ができ、トイレやお風呂が使えなくなるなど、自宅外部の被害よりも自宅内部の被害が大きく、復旧までに約１年という長い時間がかかった。

（１）震災発生

祖父母は初め、今までに経験したことのないような大きな揺れだったため地震だとは気付かなかった。また、発生時は自宅の２階部分で寝ていたため助かったが、もしもあの時１階で寝ていたら生きていなかったかもしれない。いや、確実に死んでいた。そして阪神・淡路大震災が発生した日は火曜日だった。そのため、朝早くから家族分のお弁当や朝ごはんの支度に取りかかろうとしていた。その時に阪神・淡路大震災が発生した。もう少し早く起きて支度にとりかかっていれば、火事になっていたかもしれない。様々な偶然がつながって今生きることが出来ているのではないかと振り返っていた。

祖父と私の父は家族の安全を確認した後、生き埋めになっている近所の住民の救助に向かった。様々な場所から「助けてくれ！」という声が聞こえていたからだ。しかし救助に向かったのはいいが、救助するための機材がなかったため救助が間に合わなかった。そのため、本来であれば助けることが出来た命も助けることができなかった。救助を開始した時には様々な場所から助けを求める声が聞こえていたのだが、時間が経過するにつれてその声は聞こえなくなっていった。こういったことから多くの人が亡くなっていくのを肌で感じた。祖父は精一杯救助活動にあたったが、助けられなかった方に申し訳ないと語っていた。また、祖母は祖父と父が近所の方の救助に向かう際、「いかんでええ！」と怒るように言った。自分の家も大変なことになっているのに近所の人を助けに行く余裕などないと感じていたからだ。しかし、祖父と父は祖母の思いを振り切って近所の方の救助に向かった。

（２）震災発生から生活の再建まで

当時住んでいた自宅は建物の基礎となる部分が割れてしまっていたため、被害認定調査で全壊判定となり住めなくなってしまった。そのため、地震が発生してから２～３週間程度は車で生活することになった。もちろん避難所で生活をしようと思えばできたのだが、当時は２匹の犬を飼っていたため、ほかの避難者に気を遣い、「避難所に行く」という選択はしなかった。「しなかった」というよりも「できなかった」と言った方が正しいのかもしれない。食料は近くの避難所にもらいに行ったが届いておらず、震災発生前に備蓄していたカップラーメンなどを食べてしのいでいた。

震災発生から再建までの間に一番困ったことは水がなかったということだ。特に衣服などの汚れてしまったものを洗うことができない、お風呂にも１週間ほど入れないなど衛生面での問題が目立った。車での生活が限界を迎えそうになった頃、祖父が仕事をしていたおかげで西宮市にある祖父の会社の社宅に入ることができた。自宅の再建が完了するまでの約 1 年間はこの社宅で暮らしていた。社宅に入れた

ことにより少し安心した部分もあったが、社宅でも水が出なかったのでお風呂にも入れなかった。さらには、食料もなかったため完全に「安心できる生活」を送ることはできなかった。食事はしばらくの間、近くのコンビニ弁当や簡易食品を食べていた。そのさらに１年後、現在暮らしている家に住むことができるようになり、やっと元の生活に戻れたと実感した。

当時のことを振り返ってもらうと、「とにかくしんどかった。あの時は本当にみんなよく頑張ったと思う。でももうこのようなことはつらい経験はしたくない。」と語っていた。

（３）祖父母の話を聞いて

祖父母の話を聞いて私に関わって下さるすべての方々に「ありがとう。」と伝えたくなった。阪神・淡路大震災という大きな災害から生き延びてくれたからこそ私がいる。そして、私は大好きなテニスや旅行ができる。私が私の大好きなことができるのは当たり前のことではない。だからこそ私は今生きてくれている私に関わる全ての人に「ありがとう。」と感謝を伝えたい。

私が祖父母の話を聞いて印象に残っていることが大きく分けて２つある。

１つ目は祖父の話の中でででてきた「救助するための機材がなかったことが原因で救助が間に合わず、本来であれば助けることができた命を助けることができなかった」という言葉だ。「救えるはずの命が救えなかった」ということは、阪神・淡路大震災発生前に十分な備えが出来ていなかったということが引き起こした絶対にあってはならないことであり、絶対に語り継がなければならない教訓であると思う。このようなことを今後の災害で起こさないようにするには、防災の重要性を多くの人に知ってもらう必要がある。それだけではなく、震災発生前にしっかりとした備えができていなかったことが原因で多くの人が命を落としてしまったという事実を多くの人に知ってもらい、たくさんの人に「災害に備える」ということの大切さを知り、関心を持ってもらう必要があると考えた。

２つ目は阪神・淡路大震災の当時の話をしている時の祖母の表情だ。私が話を聴いている時、祖母はどこか辛そうで悲しい表情をしていた。これまでを振り返ってみれば、祖母と一緒にいるときに阪神・淡路大震災の話をあまりしたことがなかったように感じた。祖母がこの表情をしたのは阪神・淡路大震災が発生してから元の生活に戻るまでの約１年の間に私が想像できないほどつらく悲しい思いをしたからではないかと思う。そのため、私は長い時間をかけてじっくりと話を聞くことができなかった。私が話を聴くことで思い出したくもないものを思い出してしまったのではないかと思ったからだ。もし本当にそのような思いをしてしまったのであれば本当に申し訳ない。このように被災者の中には「震災を語り継いでほしい」と思う人もいれば、「思い出したくない」「話さないでほしい」と思う方もいる。だからこそ私は無理に話を聴くのではなく、その人が「話をしたい」と思った時に聴くようにするべきだと思った。今回は当時のお話を全部聴けたわけではない。そのため、これから祖母と一緒にいるときに話を聴けるタイミングがあればもう１度聴こうと思う。

上記以外にも私は震災がきっかけで仲が悪くなった人も多くいることを知っている。私の身近な人にそのような人がいるからだ。これは震災がもたらした「見えない被害」ではないか。「目に見える被害」だけではなく「目に見えない被害」をも人間に与える災害は本当に恐ろしい。今後、生きていく中でそのような災害は絶対に起きてほしくない。

４　環境防災科

（１）入学のきっかけ

入学を志望した理由は主に２つある。

１つ目はボランティア活動に興味があったからだ。私は、小さい頃から地域の清掃活動に参加したり母親の職場に手伝いに行ったりしていた。これまでの経験の中で、自分が人のために何か行動することで喜んでくれる人がいる嬉しさを感じるようになり、「もっとボランティア活動をしたい」と思うようになった。２つ目は、小さい頃から阪神・淡路大震災について学ぶ機会が多く、「怖い」「死にたくない。」と思うようになったからだ。小学生の頃から阪神・淡路大震災や東日本大震災などの震災学習を行い、「防災をすれば命を守ることができる」ということを教えてもらったが、正直何をすればよいのか分からなかった。そのため、高校では「防災」について学びたいと考えた。

（２）入学して

環境防災科での３年間は、「防災」について深く考えてきたとても濃いものだった。そして環境防災科にしかできない取り組みを多くさせていただいた。その中でも私はボランティア活動に力を入れてきた。

１年生では、「舞子高校の環境防災科」として初めてボランティア活動に参加した。本格的なボランティア活動に不安とワクワクの気持ちを持ちながらの挑戦だった。２年生では、「自分たちが引っ張ってい

かないといけない」という想いが強かったため、１つ１つのボランティア活動に責任を持って取り組んだ。そして、舞子高校として行うボランティア活動のリーダーを多く経験させていただいた。初めてのリーダーで最初は何をすればよいのか分からなかったが、先輩方がサポートしてくださり、徐々にチームを仕切ったりまとめたりをできるようになった。しかし、リーダーをすることは本当に難しく、とてもしんどかった。当時の私はボランティア活動のことや人間関係などの悩みをひとりで抱え込んでしまうことが多く、自分で自分を追い込んでしまっている状態だった。今思えばひとりで抱え込むのではなくもっと周りに頼り、仲間と一緒に協力して取り組むことが出来たのではないかと思う。周りの人と協力して助け合うことの大切さと先輩の偉大さを痛いほどに感じた１年だった。３年生では、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、学校が３か月近く休校になり、準備していたほとんどのボランティア活動がなくなってしまった。これまでに当たり前のように取り組んでいたボランティア活動が出来なくなってしまったことで、私が普段当たり前にできていることは、当たり前のことではないということを改めて感じた。また、ボランティア活動がなくなってしまったことで支援が必要な方が多くいるのに、その方たちの力となることができないことに対してとてもモヤモヤしていた。外出自粛期間中でもボランティア活動はできないのか。休校中はほぼ毎日「私にできることは何か」考えていた。そして外に出て活動することはできないが、これまでのボランティア活動で関わっていた人と連絡を取ったり、身近な人に防災を伝える・一緒に防災を考えたりすることはできるのではないかと考え、家族や友人に伝える活動を行った。「自由に活動ができないから動かない」のではなく「自由に活動できないからこそできることを考える」ことが大切だと考えるようになった。

ボランティア活動を通して学んだことは数え切れないほどある。そしてこの舞子高校で経験させていただいたことは全て、これからの人生に必ず必要なものばかりであり自分の「武器」になると思う。今後もボランティア活動で学んだことを無駄にすることなく、人の役に立てることをたくさん行いたい。

５　神戸のまちを災害に強いまちに

前文で「人の役に立てることをたくさんしたい。」と書いたが、「神戸のまちを災害に強いまちにする」こと。これが私のしたいことであり、私の夢だ。私が思う「災害に強いまち」は大きな災害が発生する前から正しい備えができており、災害が発生した際にも被害を最低限に抑えることができ、少しでもはやく消防や自衛隊が救助活動に取り掛かり、被災者がはやく元の生活に戻ることができるまちだ。また、被災後の生活でも被災者どうして支え合い・助け合いができるような関係が構築されているとベストだと思う。

「環境防災科」という人々の「思い」と「命」から成り立つ学科に入学してから、阪神・淡路大震災や東日本大震災など様々な災害で被災された方からたくさんのお話を伺った。たくさんの方の辛かったことや心の支えになったもの、震災への思いを聞き、これから起こる災害ではこれまでと同じようなことは繰り返してはいけないと思った。そのためには「神戸のまちを災害に強いまち」にしなければならない。災害に強いまちを作るには主に２つの方法があると考える。１つ目は建物の耐震化や整備などといった「ハード」面での防災を行うこと、２つ目は人々の防災意識の向上や防災訓練の実施、地域コミュニティの強化といった「ソフト」面での防災を行うことである。私は２つ目のソフト面での防災に深く関わりたいと考えている。

私は「防災」をたくさんの方にやってもらうにはまずはたくさんの人に災害について知ってもらい、防災に興味を持ってもらう必要がある。そして、たくさんの人に興味を持ってもらったうえで積極的に防災訓練やイベントを開催し、地域コミュニティの向上に繋げたい。そして災害発生時に共助が多く行われ、１つでも多くの命を災害から守ることができるまちを作りたい。また私がこういったまちづくりに関わる際には、その地域に住む方と共にまちを作っていくことを意識して取り組んでいきたい。なぜなら、それぞれの地域ごとに伝統的なイベントや歴史、景観などがあり、その地域に住んでいる人の思いも詰まっているからだ。長くその地域に住む人の中にはまち自体に思いを寄せており、その地域に住むことが「生きがい」と感じている人も多くいらっしゃる。私はそのような方々の思いも大切にしたい。だからこそ、地域の方々と共にまちを作っていきたい。

環境防災科に入学し、「防災」を学んできたからこそできること・伝えられることはたくさんあると思う。この３年間で学んだことを最大限に発揮し、「災害に強いまち」を作っていく。

６　未災者の私にできること

「阪神・淡路大震災を経験していない私にできることはあるのか」と考えながらこれまで防災を学んで

きた。この３年間でたくさんの方の体験談や阪神・淡路大震災への思いを聞いてきたが、お話を聞かせていただく中で「大きな災害を経験したことがない私が『語り継ぐ』活動など行ってもよいのか」「私に『語り継ぐ』権利はあるのか」など様々な葛藤があった。なぜなら、これまでお話を聞かせていただいた方々はどの方も私が想像もできないほどつらい経験をしていたからだ。

そんな気持ちを抱きながら災害メモリアルアクション KOBE や出前授業などを行っていたが、「やはり阪神・淡路大震災は私が語り継がなければならない」と思った出来事がある。それは２年生の夏休みに災害メモリアルアクション KOBE の活動として行った垂水駅での街頭調査だ。この街頭調査では阪神・淡路大震災を経験した方に直接お話を伺い、災害時に重宝したものや復旧していく中で心の支えになったものなど、主に阪神・淡路大震災が発生してから復旧していくまでのことを聞いていた。その中で私たちは 70 代くらいの男性にお話を聞かせていただいた。その男性はいろいろと質問させていただいた後で「今って震災を経験してへん人が増えているよな。経験した人もおらんくなってまうし、世の中の状況はどんどん変わってまうから震災は忘れられていくねん。当時だって阪神・淡路大震災が発生してからもう３か月後には報道されなくなっとった。地下鉄サリン事件があったからな。僕たちが必死で復旧しようとしてんのに世間は地下鉄サリン事件の話題ばっか。さみしかったな。見捨てられたっていうか忘れられた感じがしたわ。悲しいなあ。」というお話をされた。この時に「私が語り継いでいかないと阪神・淡路大震災が忘れられていってしまう。」「このような方の思いが無駄になってしまう。」と思った。いま生きている人から阪神・淡路大震災が忘れられていくようなことはしたくない。阪神・淡路大震災が忘れられてしまえば、この３年の間に私にお話していただいた方の思いがたくさんの人に知ってもらえなくなり、今後発生する南海トラフ巨大地震などの大きな災害で阪神・淡路大震災のような被害が繰り返されてしまうからだ。それだけは絶対に避けなければならない。だからこそ私は阪神・淡路大震災を「語り継ぐ」活動を続けていこうと思う。

７　最後に

「語り継ぐ」を執筆するにあたって、はじめはどのようなものを書けばよいのかわからず不安だった。書くことに少し戸惑いもあったためなかなか進まなかったが、「自分の思っていることを素直に書こう」と思い、書き出してみると阪神・淡路大震災や語り継ぐことに関して様々な思いが沸き上がり、この「語り継ぐ」を読んでいる人にこの３年間で伝えたいと思ったことをたくさん思い出した。こんなにも誰かに伝えたいことがあるのだと自分でも驚いた。このように自分の想いを誰かに伝えたいと思ったことは初めてだ。これは環境防災科に入学し、たくさんの活動を通して被災者の方から震災発生当時のお話や震災に対する今の想いを実際に聴いてきたからこそ生まれる想いなのだと思う。恐らく、しんどいことを避けてなんとなく高校に通い、なんとなく高校生活を送っていれば、こういった特別な想いは抱かなかったと思う。そしてこの３年間で自分自身の変化にも驚いた。中学生まではかなりの引っ込み思案で自分の思っていることをはっきりと相手に伝えることが出来ず、他人の前に出て発表するなど断固拒否していた人間だった。しかし今では、人の前に立って発表し、しっかりと自分の考えていることを相手に伝えることができるようになった。さらには、これまでは恥ずかしくて言えなかった「ありがとう」や「ごめんなさい」という感謝の意味を含む言葉をはっきりと言えるようになった。また、ボランティア活動ではリーダーを経験し、少しではあるが人をまとめることができるようになった。

このように、私を育ててくれたのはこれまでに私に関わって下さった方々である。そして、自分を成長させてもらったということは、今度は私が何かを育てていく番なのではないか。私は「まち」を育てていく。そして「神戸」というまちを「災害に強いまち」にする。それが私にできることであり、夢の１つである。また、これからの未来を担っていくのは私たちのような震災を経験していない未災者である。このような世代に阪神・淡路大震災を語り継がなければ、大きな災害が発生した時に当時と同じことが起きてしまう。それだけは絶対に避けなければならない。だからこそ、私は今後も「災害」と向き合い、環境防災科で学んだことを「語り継ぐ」活動を続けていく。私のような未災者が震災を語り継ぐことで、誰かの命を守るきっかけにならばよいと思う。

未来のあなたのために

松原　陽向

１　はじめに

1995 年１月 17 日午前５時 46 分阪神・淡路大震災が発生した。災害は私たちの都合のいいように待ってはくれず、いつ起こるのか分からない。明日起こるかもしれない。一瞬にして私たちの今までの生活を奪ってしまう。普段から何気なく行っていた挨拶、会話すべて当たり前なことではない。だからこそ防災を学んでおく必要があり、日々日常の生活を大切に過ごしていかなければならない。自分の命、周りの命を助けるために。そして、後悔しないためにも。

２　阪神・淡路大震災

名称：兵庫県南部地震
日時：1995 年１月 17 日　午前 5 時 46 分
規模：マグニチュード 7.3
最大震度：７
震源地：淡路島北部
死者：6434 名
行方不明者：３名
負傷者：43,792 名　　（内閣府　防災情報ページより引用）

３　祖父の話

（１）震災発生時

地震発生時は車を運転していたため、地震の揺れにはきづかなかった。伊丹空港にむかうため高速道路に入ろうとすると入り口が閉鎖されていた。ラジオで確認すると地震が発生したことを知ったそうだ。伊丹空港に近づくにつれ、地震のすごさを実感したとともに神戸に住んでいた親戚が心配になった。そして安否確認を行うと無事と知りホッとしたそうだ。姫路にある自宅に向かう途中で阪急伊丹駅の悲惨な状況を目にした。

（２）会社

祖父は NTT 姫路支店に勤務していた。震災後すぐに招集がかかったそうだ。姫路から神戸への安否確認電話が集中し、電話交換機がパンクしてしまったためだ。各電話局の電源確保のために、近隣市内からサイレンを鳴らしながら移動電源車を神戸市内の電話局へ運び、各地域で災害時の臨時電話を開設した。移動電源車とは発電設備を搭載した車両の事で、移動先で電源供給を行うことができる車である。震災時は、臨時電話に安否情報の連絡のための長蛇の列ができていた。勿論、警察、消防、病院等の公共施設は最優先で回復させていった。幸い電話局ビルは倒れてなかったので、電話の復旧は早かった。NTT 社員は震災直後から、神戸市内の電話局から各家庭、会社へ電話回線を復旧させるため、電話局で泊まり込んで作業をした。各エリア毎、地域毎に小さな電話交換機を設置して、各エリア毎の電話回線を復旧させた。祖父も各エリア毎の小さな電話交換機を開通させるためのソフトデータを神戸菊水ビルで 100 装置以上作っていた。神戸市、芦屋市、尼崎市の各エリアに小さな電話交換機を設置して、各エリア毎の会社、家庭に新しい電話回線を開通させていた。各家庭の電話線を復旧させるため、倒れた電柱を取り替え、一軒一軒に電柱から電話線を引き電話を開通させた。各エリアに小さな電話交換機を設置する理由は、設置場所から各家庭へ電話が引けるからだ。

また、神戸市長田近辺は震災直後の火災のため、電話の復旧はかなり遅れたそうだ。

18 日からは NTT 姫路支店のメンバー全員でおにぎりを作り、被災した方へ支援したそうだ。翌年の 1996 年からは神戸に転勤した。被災した地域に小さな交換機をいくつも立て、地域の復興作業に携わったそうだ。

（３）話を聞いて

祖父の話を聞き、改めて助け合うことの大切さを感じることができた。被害が小さい地域が、被害が大きい地域へ力を貸すことで、より効率よく復旧作業が進められる。１日でも早く復旧を目指し、自分が担当している地域以外の地域に出向き懸命に復旧に向けて働くことで、電話の復旧だけではなく、被害にあった神戸市 NTT の方々の、目に見えない心の部分の復旧にもかかわってくるのではないかと思った。

また、祖父の話で出てきたおにぎりを作り支援するなどの行動１つが、被害者の心を救うことに繋がっているのだと思った。人間のあたたかさこそ、困難を乗り越え復興していくにあたって、大きな力となると実感した。

震災後の復旧作業で、最前線で働いていた方のおかげで今の生活がなりたっているということに感謝しなければいければいけない。

４　環境防災科

（１）志望理由

私は環境防災科を志望した理由は２つある。

１つ目は災害時に活躍できる助産師になりたいからだ。災害時でも出産育児を行う方がいる。防災の知識を持っておくことで、精神的にも身体的にもサポートでき、安心して出産育児をしてもらえる環境作りができるようになりたい。そのために、環境防災科に入り防災の知識を身につけ、ボランティアを通じて、沢山の方々の意見に耳を傾け、さまざまな方向から物事をとらえられるようになりたかったからだ。

２つ目は今後起こり得る災害に備えるためだ。私の住んでいる地域では南海トラフ巨大地震が発生した場合、高確率で山崎断層も連動し地震が発生するといわれている。今後起こり得る災害時に私に何ができるのか、また、どのように災害と向き合い自分と周りの人たちを助けられるのかを学びたかったからだ。

（２）入学後

環境防災科に入学し最初の印象は、私が想像していたよりもクラスメイトの防災知識が豊富だったということだ。特に驚いたのは「しあわせ運べるように」をほぼ全員が歌えることだった。私は曲すら知らなかった。そのような中で防災を学んでいる自分がとても恥ずかしかった。しかし、それをきっかけにもっとボランティアに参加し、沢山のことを学ばなければいけないと思い、積極的に参加させていただいた。

教育カリキュラムの約３分の１が専門科目ということもあり、防災について考える機会が沢山あった。防災について学べば学ぶほど、災害の恐ろしさを知ることになった。本当に自分の命と周りの命を守ることは出来るのだろうか、と多々考えることもあった。しかし、学ぶことにより自分の可能性が広がり、その可能性により、役に立てる機会があるのではないかと気づかされた。たくさんの方と交流し、学びだけでなく考えや視野が広がるきっかけとなった環境防災科に感謝している。そして、今では誇りに思っている。

５　ボランティア活動

（１）東北訪問　2018 年８月１日～４日

環境防災科に入学したら必ず参加したいと考えていた行事の１つであった。

現地に行くまでは写真でしか被災地の現状を見たことがなかった。しかし、実際に被災地に足を踏み入れてみると、私が想像していた風景とは大きく異なった。建物が１つもなかったからだ。それを目にしたときにようやく地域の方が寂しいとおっしゃっていた意味が理解できた。

この東北訪問では命の大切さを学ぶことができた。自分で考え行動する１つ１つのことが、命にかかわってくる。だからこそ、災害が起こる前に今自分ができることを考え、実行していきたいと思った。そして、想定外のことが起こった時に、臨機応変に対応できるようになりたいと感じた。雁部さんが「１日１日を大切に」とおっしゃっていた。災害は一瞬にして私たちの生活を奪ってしまうからこそ、日々の生活を大切にしていきたい。例えば普段から何気なく行っていた挨拶やコミュニケーションだ。そして、今当たり前にできていることが災害時では当たり前ではない。自分の命も当たり前ではなく、いかされているもので、自分だけの命ではないと改めて考えるよい機会となった。

（２）熊本訪問　2019 年 11 月 14 日～11 月 17 日

熊本ジュニアリーダー育成合宿に参加する中で、仮設住宅で生活をしていた子がたくさんいたことに衝撃を受けた。村が孤立してしまい、買い物に行くにも一苦労だったそうだ。しかし、支援物資のおかげで元の生活に少しずつ近づけたというのを聞き、支援物資の大切さ、また、助け合うことの大切さを改めて実感した。

地域の方からの講義で印象的だったのが、「娘に日ごろから料理をさせている」と言葉だ。災害時、日ごろから行っていることが役に立つ。だからこそ日常を防災と関連づけ、私たちの日常生活に取り入れていきたい。

この合宿を振り返り、避難所においての子供たちの存在の大きさ、また、行動力に驚かされた。子供たちが避難所となっている小学校で水くみや、トイレ掃除を行っていると、使い方を改めてくれる方が続出したという事があるように、小学生や私たち若者が行うことに意味があるのだと思った。だからこそ、もし舞子高校が避難所となった場合、私たちが主体となって行っていくことへの意味も感じることができた。

（３）芦屋特別支援学校との交流

参加しようと思ったきっかけは災害時に障害のある方にどのように支援したら良いかわからず、声のかけ方などを知りたかったからだ。

最初は同じ年代の高校生にどのようにわかりやすく噛み砕いて説明すれば良いか、どうしたら盛り上がってくれるのかなど、不安でいっぱいだった。しかし、いざ教室に入ると、とても明るく話しかけてくださりすぐに緊張から解放され、なじむことができた。出前授業では、阪神・淡路大震災と災害時の避難について話しに行ったが、芦屋特別支援学校の生徒さんは驚くほど知識が豊富で、一緒になって学ぶことができた。また、芦屋特別支援学校は埋め立て地に建築してあり、南海トラフ巨大地震が発生した場合、最大3.7mもの津波が押し寄せるといわれているため、各自のレベルにあわせて持久走を行っていた。避難場所までに坂道が多いため、普段から芦屋特別支援学校の生徒さんが取り組んでいることが災害時に必要な体力づくりにも繋がっていると感じた。この出前授業は自分も吸収するところが多く、教えるだけでなく一緒になって学ぶことができ、とても貴重な体験になった。

（４）子どもたちとの交流

この３年間で２歳児～中学生の幅広い子どもたちと関わる数々のボランティアに参加してきた。ただ子どもが好きという理由で参加してきただけでなく、将来の夢が子どもにも関わるからこそ今から少しずつ子どもたちとの関わりを増やしていきたい、また、楽しく防災について触れ、興味を少しでも持ってもらいたく、参加してきた。１～３歳児は言葉があまり通じないため、子どもたちが知っている言葉で話すことさえ難しく、泣いてしまう子もいた。その子達をうまく慰める先生方を見て、尊敬したのと同時に、先生のように小さい子の心に耳を傾け、寄り添える人になりたいと感じた。また、私は２歳の子でも自分の命を守ることが出来ると思う。実際に２歳の妹に防災ダックを教え、行ってみたことがある。「地面が揺れたら？」と問うと、すぐに頭をかかえしゃがむアヒルのポーズをとることが出来る。まだ地震についてたくさん理解することは難しいが、かみ砕いて説明すれば、頭を守ることは出来るようになる。幼い子を守るのはそばにいる家族や先生方の役目だが、もしもの時に備えて伝えていくことは私たちの役目だ。そして、子供たちに楽しく防災について触れてもらい、少しでも防災に興味を持ってもらう事が大切だと思った。

６　将来の夢

（１）きっかけ

私の夢は防災の知識を持った助産師になることだ。小学生の時にエリザベスブラックウェルの本を読んだことや、母が養護教諭ということもあり、医療に興味を持つようになった。また、小学生の頃から年下の子と遊ぶ機会が多く、子供や赤ちゃんが好きで親子が微笑みあう姿を見ていると朗らかな気分になる。いつかこの親子の関係が誕生する仕事に就きたいと思うようになり、助産師という職業を目指すようになった。

（２）夢と防災

助産師になったら行いたいことが３つある。

１つ目は妊婦用非常用持ち出し袋の作成である。妊婦さんは私たちが用意している非常用持ち出し袋に加えて、他の物が必要ようになってくる。例えば、災害時は食に偏りが出るためサプリメントを用意しておくなどだ。そういった災害時必要になってくる物を妊婦さんと話し合い、非常用持ち出し袋を作成したい。

２つ目は防災授業の実施である。災害時に注意すべきことや、災害前に準備しておくことを伝えていきたい。また、熊本地震で問題視されたエコノミークラス症候群についても伝えていきたい。熊本地震の際に、車中泊でエコノミークラス症候群を発症しお亡くなりになった方々の約８割が女性となっている。その原因として小さい子供がいて世話を行わないといけないため外に出られない方、また、妊婦さんなどだ。妊婦さんは普段から人１倍健康に気を付けてなければいけない。そのため、災害時に健康のため車の中で過ごした方も多いのではないかと考えられる。そのことが逆効果となりエコノミークラス症候群を発症してしまった。エコノミークラス症候群は簡単に予防することができるからこそ防げたことであ

る。そこでエコノミークラス症候群でお亡くなりになる方を少しでも減らすために、予防策などを過去の事例と共に伝えていきたい。

３つ目は災害現場に参加することだ。災害時に出産される方もいて、環境が整っていない中での出産は、不安やストレスがかかり体調を崩しやすくなると考えられる。精神的にも身体的にもサポートし、助産師、また、看護師として病人のケアや心のケアを行いたい。そして、安心して出産・育児をしてもらえるような環境作りができるようになりたい。

７　感想

この語り継ぐを書くにあたって自分を見直す良い機会となった。改めて、日々の生活を見直し、改善しなければいけない課題もたくさん浮かび上がった。そのことを高校生の時の自分の意見、またこれからの意見をてらしながら、防災と関わりながら考えていきたい。また、語り継ぐを書くにあたって協力していただいた方々に感謝していきたい。

８　最後に

小学生、中学生のころは親や先生の指示に従って生きてきた。しかし、災害時には大人も子供に戻ると言われている。若者にしかできないこと、また、若者ならではの視点も役に立つ。だからこそ私たち若者が防災について学ぶ必要がある。防災について学ぶにあたり、最初は少し抵抗があった。私の言動一つが、自分だけでなく他人の命にも関わってくるからだ。私と同じ考えを持つ人もいるかもしれない。しかし、背伸びするのではなく、今自分ができる役割を果たすことも誰かの役に立つ、誰かを救うことが出来ると思う。まずは防災に関心を持ち、関わっていくことが大切だ。

「過去」と「未来」を繋ぐ

宮本　莉沙

１　はじめに

阪神・淡路大震災から 26 年、現在の神戸の町は当時の爪跡がほとんど無いといってもいいほど復興を遂げている。しかし、時間が経過するにつれ、私のように震災を経験していない世代が増え、風化しつつある。風化を防ぐために、今の私に出来ることは何だろうか。それは環境防災科で学んだことや伺ったお話を語り継ぐことだと考える。その第１歩として、私はここに父と母から聞いた話を語り継ごうと思う。

２　阪神・淡路大震災

（１）概要

名称：兵庫県南部地震
日時：平成７年（1995 年）1 月 17 日　午前５時 46 分
震源地：淡路島北部
震源の深さ：16 ㎞
地震の規模：マグニチュード 7.3
最大震度：震度７
死者数：6,434 名
行方不明者数：３名
負傷者数：計 43,792 名　（出典：内閣府防災）

（２）父の話

20 歳の時に垂水区内の自宅で被災した。地震発生時は２階の自室で寝ていた。すると突然下から突き上げられ、次第に横揺れに変わった。何が起きたか分からず、布団をかぶることしかできなかった。揺れが収まると母（祖母）が「地震、地震！」と言いながら階段を裸足で駆け上がってきた。地震と言う母の声で初めてこの揺れが地震であることに気が付いた。１階が危険であったため、２階にある兄（伯父）の部屋で日が昇るのを待った。電気が止まってしまいテレビが点かず、ラジオも無かったため、情報収集ができなかった。日が昇るまでに余震が体感１分間隔で何度も発生した。地鳴りがする度に余震が来るのが分かったが、何もすることができなかった。７時を過ぎて日が昇り、少し気持ちに余裕ができた。自室に戻ると壁のカセットラックからカセットテープが落ち、ベッドの上に散乱していた。１階のキッチンでは食器棚から飛び出した食器が全て割れていた。被害状況を確認し終え、兄と近くのコンビニへ食べ物を確保しに行った。すると店員の方に「停電でレジも使えないからタダで持って帰ってください。」と言われた。少しして電気がついた。しかし、ガスがまだだったためお風呂に入れなかった。そのため、加古川のあまり被害のなかった親戚の家に避難をした。加古川の親戚の家にはガスが復旧するまで避難した。その後自宅に戻り、父（祖父）はポートアイランドの会社に出勤をした。しかし液状化現象によってボロボロだった。出勤するのに車で４時間かかったそうだ。通っていた専門学校は地震の影響で電車が止まり、３月頃まで休校だった。久しぶりに登校した時に見た倒壊した三宮のホテルは今でも忘れられない。震災から１年以内に瓦礫の撤去などの復旧が終了した。東日本大震災や熊本地震などのほかの災害に比べて、復旧が早かった。

阪神･淡路大震災から 26 年経った今でもあの恐怖は忘れられない。今でもあの地震の地鳴りが染み付いており、寝ている時に地鳴りに似た音が聞こえると飛び起きることがある。もう、あのような経験はしたくない。

（３）母の話

当時、西宮市にある自宅で被災した。地震発生時は早朝だったため、自分の部屋で寝ていた。５時 46 分、激しい揺れに見舞われた。ベッドのすぐそばにあった本棚から本が自分の上に落ちてくる中で、布団をかぶり、揺れが収まるのを待った。揺れが収まると、父（祖父）が割れた食器の上を裸足で歩いて部屋まで助けに来てくれた。自宅は半壊という被害をうけたが、避難所で生活しなければならないというほどではなかった。自宅の中は多くのものが倒れていた。タンスは全て倒れた。家にあった水槽も倒れ、金魚が飛び出していた。ライフラインが止まってしまったため、給水車などを活用して生活をした。弟（叔父）は専門学校の合宿に参加していて長野県にいたため、震災は経験していない。震災のことはテレビを

見て知り、連絡を取ろうとしたがなかなか繋がらず、不安で仕方がなかったと後から聞いた。宝塚市にある祖母（曾祖母）の家は全壊だった。祖母はタンスとタンスの間で寝ていたため隙間ができ助かった。幸いにも、この震災で身近な人が亡くなることはなかった。

時間が経過し少しずつ情報が入ってくるようになった。すると、三宮の職場の近くにあるいつも行っていた銀行が倒壊したことを知った。もし日中に阪神・淡路大震災が発生していたら、あの倒壊した銀行にいたかもしれない。そう思うととても怖かった。三宮にある職場は倒壊しなかったものの、職場は働くことのできる状況ではなかった。そのため震災直後から大阪で働くようになった。その後、三宮に戻ることなく仕事を辞めるまで大阪で働いた。

また震災後数か月は、動悸がしたり、よく眠れなかったりというような日々が続いた。そのような自分に不安を抱くこともあった。

（４）話を聞いて

今まで阪神・淡路大震災について、被災された方や復興等に関わってきた方からお話を伺ってきた。だが、「語り継ぐ」を執筆するまで、父や母から詳しく阪神・淡路大震災について話を聞いたことがなかった。阪神・淡路大震災について話を聞くことに抵抗があったのかもしれない。実際に話を聞いて、自然というものは、人間が生きていくうえで恵みでありながら、恐ろしいものであると感じた。私の現在住んでいる垂水区でも崖崩れが発生するなどの被害が出ていることは今まで知らなかった。また母が半壊やタンスが全て倒れるほどの被害をうけていたということも知らなかった。もし阪神･淡路大震災で父と母が助かっていなければ、今の私はこの世に存在していなかっただろう。そのように考えると、自分の命を大切にしなければならないと思った。そして、自分の命を大切にするだけでなく、周囲の方の命も大切にしていきたい。

また、阪神・淡路大震災で得た教訓を、風化させてはならないと思った。阪神･淡路大震災が発生したことで、防災教育などを行うようになったが、その背景には多くの方の犠牲があったことを忘れてはならない。しかし、近年、風化しつつあると感じることがある。他校の友人に環境防災科での出来事を話した時だった。非常用持ち出し袋の話になったのだが、友人の家ではあまり対策をしていないと言っていた。そして実際に大きな地震を経験していないからどこまで対策をすればいいか分からないとも言っていた。このように阪神･淡路大震災を経験していない世代が増えていく中で、風化させないために私に何ができるだろうか。私ができることは今まで伺ったお話を語り継ぐことだと考える。私自身も阪神･淡路大震災を経験していない世代の１人だが、風化させないためには、未災者から未災者へ伝えていくことが必要であると考える。私は、今までお話をしてくれた方の思いも大切にしながら教訓を語り継いでいこうと思う。

３　環境防災科

（１） きっかけ

私が環境防災科に入ろうと思ったきっかけは２つある。

１つ目は､JR 垂水駅で舞子高校の先輩方が誰かのためを思い､募金活動をしている姿に憧れたからだ。当時小学生だった私には、募金活動に取り組む先輩方の姿が輝いて見えた。私も先輩方のように誰かの役に立てる人間になりたいと思った。

２つ目は、東日本大震災だ。私が小学校から帰ると、テレビには津波の映像が映っていた。これは本当に日本なのかと、何度も疑った。今でもあの映像を忘れることができない。当時の私は、何もすることができず、ただテレビを見て祈ることしかできなかった。だから私は、防災について学び、誰かが困っているときに助けられるようになりたいと思い、環境防災科に入学することに決めた。

（２）現在

現在、私は環境防災科で学ぶことができて、心から良かったと思っている。中学生までの私とは防災に関する考えが変わったと自分でも感じる。今まで自分から災害について調べることがなかったのだが、今では、当たり前のように調べるようになったぐらいに防災を意識するようになった。

環境防災科で３年間、防災について深く考え、また、お話を伺う中でたくさんの知識を身につけることができた。これらは貴重な経験だと思う。きっかけがなければこのような貴重な経験をすることはなかっただろう。この経験を活かし今まで学んできた防災・減災を、災害時に生き残ることができる術をわかりやすく周囲に発信していきたい。それが環境防災科に入学して防災を学んだ人の使命である、そう私は思うからだ。

４　ボランティア活動

私は環境防災科に入学し、様々なボランティア活動に参加させていただいた。出前授業や地域のお祭り、募金活動など多くの経験をすることができた。その中で２つのボランティアについてここで書こうと思う。

１つ目は、高校１年の夏に参加した、東北訪問である。東日本大震災のとき、テレビを見て、祈ることしかできなかった私が、東北を訪問することになるとは、あの頃の自分には想像もできなかっただろう。東北訪問では、簡単に言葉で表すことができないほど多くのことを学ばせて頂いた。その中で大川小学校でのお話が特に印象に残っている。大川小学校では、そこに通っていた子どもを亡くされた方からお話を伺った。「もし、学校の裏山に逃げていたら…。」「もし、判断が早ければ…。」と悔しそうに、お話をされている姿に、私自身も心を痛めた。それと同時に２度とこのようなことを起こさないように、語り継がなければならないと感じた。大川小学校でのお話以外にも、実際に被災された方からお話を伺ったり、津波の跡を見たりした。東北訪問に参加して、防災に関する知識を得るだけでなく、人間的にも成長できたと思う。これから先、この経験を無駄にせず、次に繋げていきたい。

２つ目は、２年生の時に参加した、こばと聴覚特別支援学校でのボランティア活動だ。このボランティア活動では、改めて考えるきっかけとなった。「普通の人」とはどういう人を指すのか。この質問に対し、過去の自分なら、「障害のない人」「目立ったものがない人」などと答えていただろう。だが、今の私は、「普通の人など存在しない」と答える。理由は、大きなくくりで見ると皆同じ世界で生きている人間であるからだ。障害がなくても出来ないことはたくさんあるし、完璧な人間など存在しないと、ボランティア活動を通して感じた。また障害のある方は災害時には「要援護者」となる。そのような方が安全に避難するにはどうすれば良いのか、避難した先でどのような対応をすれば良いのかなど改めて考えることが出来た。

他のボランティア活動でも多くのことを学ばせて頂いた。人とのコミュニケーションの取り方など、普段から活用できるものも学んだ。この経験を無駄にせず、今後のボランティア活動や生きていくうえで活かしていきたいと思う。

５　将来の夢

（１）　きっかけ

私の夢は保育士になることだ。現在の日本は保育士の数が足りず、待機児童も多い現状である。保育士が足りない理由として、責任の重さや事故への不安、賃金が希望と合わない、休暇が取りにくいなどが挙げられる。しかし、子どもの成長を身近に見守ることができ、自分自身が成長し続けられる良い仕事であると思う。私がそのような職業に就きたいと考えるようになったきっかけは２つある。

１つ目は、私が育ってきた環境にある。私には年の離れた弟がおり、近所には年下の子が多かった。そのため、遊び相手になってあげたり、お世話をしたりしていた。そのような環境で育ってきたということもあり、私は自然と小さな子どもと関わることが好きになった。そして、この経験を活かすことのできる職業はないかと調べていたときに、保育士という職業に出会った。そして保育士という職業を知るたびに、魅力にひかれ、保育士になりたいという思いが強くなった。

２つ目は、憧れの先生との出会いだ。私にとってその方は、きっかけであり、理想像でもある。その方との出会いは私が小学生の頃だった。私の憧れの先生は、子どもたちだけでなく保護者の方や他の先生方にも信頼されていた。そのような姿を見て、私も先生のように周りの人から信頼されて、誰かに夢を与えられる保育士になりたいと思った。

以上が、私が保育士を目指すようになったきっかけである。この２つのきっかけがなければ、保育士を目指すことはなかっただろう。そう考えると良い環境に恵まれたと思う。このような環境に感謝を忘れず、いつか立派な保育士となりたいと思う。

（２）　夢と防災

保育士という職業にとって防災は、必要不可欠なものである。保育士は子どもの命を預かり、成長を見守ることが仕事だ。日常はもちろんだが、非日常、つまり災害時も同じである。災害時、子どもたちの命を守るために、私にできることは何だろうか。私に出来ることは、今まで学んできたことを語り継ぐこと、つまり防災教育を行うことだと考える。しかし、小さな子どもに防災を教えることは難しい。専門用語を用いて説明してしまうと、子どもたちにとってとても難しく感じてしまうだろう。だから、子供たちでも理解できるような工夫が必要だ。例えば、ゲームや体を動かすことで覚えるなど、子供たちが楽しんで学び、災害時に活用できるように工夫したいと思う。また、子どもだけでなく、先生方にも防災教育を

行い、共通理解を行うことが子どもの命を守ることに繋がると思う。トラブルが発生した際に必要となる臨機応変に対応できる行動力と迅速に正しい判断ができるように知識を身につけなければならない。そのために私は環境防災科で学んだことを周囲の先生方にも講義のような形で防災教育を行いたいと考えている。

私は、今後も防災と関わり続けたい。私が防災教育として語り継いだことを、他の誰かが語り継ぎ、それが続いていけば良いと思う。そのようにすることで、社会の防災力を向上させ、貢献していきたいと考える。

６　南海トラフ巨大地震

南海トラフ巨大地震は、今後 30 年以内に 70～80％の確率で発生すると予測されている。被害想定によれば、南海トラフ巨大地震が発生すると、静岡県から宮城県にかけての一部では震度７となる可能性があり、その周辺の都道府県の広い地域では震度６弱から震度６強の強い揺れになると予測されている。また、関東地方から九州地方にかけて、太平洋沿岸で 10ｍを超える大津波の襲来が想定されている。人間は、このような自然現象を止めることはできない。私達にできることは、自然災害が発生したときのために、対策をしておくことである。現在は科学技術が発達したことで、ある程度の予測をすることができるようになった。しかし、今までの災害では「想定外だった」という言葉をよく耳にした。つまり、それはあくまでも予測であり、絶対ではないということである。だから私達は「想定」から「想定外」を考えておく必要がある。1 人ひとりが考え対策をすることで、被害を減らすことができる。被害を減らすために、私は率先して対策に取り組みたいと思う。そして、周囲の人に発信していくことこそが、減災につながるのではないかと私は考える。

７　最後に

「語り継ぐ」を執筆することで阪神･淡路大震災の教訓を風化させてはならないと改めて思った。「はじめに」で書いたように、風化させないためには、語り継ぐことが必要である。私は阪神・淡路大震災の教訓を語り継ぐために、卒業後も学び続けていきたいと思う。

現在、世界では新型コロナウイルスの影響を大きく受けている。常にマスクを装着し、こまめにアルコール消毒行わなくてはならなくなった。その他にも様々な影響を受け、私たちの生活は１年で大きく変化した。このことは新型コロナウイルスだけに限らず、様々な災害で起こりうることだろう。

私は「過去」の災害、そして「現在」起こっていることを「未来」に繋げたい。そして「未来」が自然などと上手く共存し、より良い社会になることを祈る。

語り継ぐ

山川　小次郎

１　はじめに

私は、2002 年生まれの 18 歳の高校生だ。そのため、1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災を経験していない。実際に経験した人にしかわからない当時の状況などについて災害を経験していないからこそ分かることもたくさんあった。そのような私が環境防災科に入学して３年間で学んできた災害の恐ろしさ、防災・減災の重要性ついて語り継いでいきたい。

２　阪神・淡路大震災

（１） 概要

発生年月日 1995 年 1 月 17 日午前５時 46 分
震源地　 淡路島北部
震源の深さ 16 ㎞
規模　　マグニチュード 7.3
人的被害
死者 6,434 名
行方不明者 ３名
負傷者 43,792 名
住宅被害
全壊 104,906 棟（186,175 世帯）
全壊・半壊・一部損害 計 639,686 棟
非住家被害 42,496 棟

出典「阪神・淡路大震災について（確定報）（平成 18 年５月 19 日、消防庁)」より

（２）震災当日の母の話

震災当時、母は神戸市西区に住んでいた。震災当日、母はまだ寝室で寝ていた。すると突然、大きな地鳴りとともに激しい揺れが襲ってきた。身の危険を感じた母はひとまず布団の中で揺れが収まるのを待った。そのときは、何が起きたかもわからず、ただひたすら恐怖だけを感じたという。揺れが収まってから母はリビングに移動した。祖父、祖母、叔父、叔母と合流した。リビングの横には、キッチンがあるが、そこには食器棚から飛び出してきたお皿やグラスが床一面に散乱していた。母はそれを見て、初めて地震が来たのだと分かった。幸いにも自宅が被害を受けることはなかった。自分の家は大丈夫だったが、一歩外に出ると、普段通りの街の姿はなかった。しかし、その時はこのような大規模な災害になるとは思っていなかった。近所の人が家の前に出てザワザワしていた。その時は情報がまだ入ってきておらず、被害がどのくらい出ているのかがわからなかったと話してくれた。

母は、幸いにも被害を受けることなく、生活に支障もそれほどきたしてはいなかったが、災害に対する備えを全くしていなかった。震災当時はそのようなことを気にしている余裕がなかったが、徐々に日常を取り戻していくとともに、備えをしておけば、不自由な暮らしから解放され無駄な心配をする必要ないと思った。この災害では、大きな被害を受けなかったが、次にくる災害ではわからない。備えておいて損はない。次の災害では今回の教訓を活かしたいと話してくれた。

（３）叔父の話

私の叔父は消防士である。阪神・淡路大震災当時も消防士として災害の最前線で懸命に活動をしていた。震災当日は、実家でまだ寝ていた。地震発生後、家族の安否を確認した後すぐに消防署に出勤した。消防署についた時には、既に近所の方が押し寄せていて、職員と住民どちらもパニックだった。すぐに防護服に着替え、出動した。街の様子は明らかに普段とは異なっており、至る所の住居が倒壊していた。消防士として市民を助けたい気持ちでやまやまだったが、救助するだけの機材・人手もなく、助けられたかもしれない命がいくつもあった。目の前で火災が起きていても水が出ずただ茫然と燃えていくのを見ることしかできなかった。救急車の数も足りず、救急車を必要とする人に、「自力で病院まで行ってください」とお願いすることしかできなかった。救助を求める人は何人もいたが、どうすることもできず、ただ時間だけが過ぎていった。その時に初めて消防士として挫折を感じた。目の前で助けを求めている人がいるが、それを見ていることしかできなかった。

（４）話を聞いて

私はこの話を聞いて、消防士の方は助けたい気持ちがあるのにも関わらず、助けられないというもどかしさや何もできないという無力感をとても強く感じたということを叔父は言っていた。普段から地域住民を守るために厳しい訓練をして災害に備えている人命救助のスペシャリストでも助けられないということから、改めて阪神・淡路大震災の脅威というものを感じた。また、絶対にこの震災を経験していない人たちに伝えないといけないとも思った。今は何もなく美しい町である神戸で、26 年前のあの日、この街並みを奪った阪神・淡路大震災を忘れてはいけないと思った。当時の神戸の様子、そこで出た被害、震災によって見えた課題、そこで生まれた教訓を伝えていかなければならないと思った。災害に備えることの大切さも学んだ。個人で備えるのはもちろん、町全体で備えることによって、救える命は必ずある。災害を起こさせないことはできないが、被害を少なくすることはできると、改めて思った。

３ 環境防災科

（１） きっかけ

私は元々、災害についてはあまり関心がなく自分とはかけ離れているものだと考えていた。東日本大震災が発生した時も、私には被害も影響も無かったため、他人事のように考えていた。阪神・淡路大震災についても、学校で毎年、追悼行事をしていたが、震災の中身に触れようとはしなかった。しかし、中学生の時に阪神・淡路大震災から 20 年という題の特集をテレビで見て、震災を知らない世代の増加や、震災の風化を目にした。そこで「震災を忘れてはいけない」と思い、震災について調べることにした。調べていくうちに、環境防災科についての記事を見つけて、興味を持つようになった。

（２） 環境防災科での３年間

環境防災科での３年間で、沢山の方々から、震災当時の話を聞かせていただいた。あらゆる分野の職業の方々に来ていただき、様々な目線から、自然災害やライフラインの講義を聞いた。そこには、震災ではあまり大きく取り上げられていない当時の状況を聞くことができた。また、阪神・淡路大震災で大きな被害が出た長田の街に足を運んで、震災当時の街の様子や、そこからどのようにして街が復興したのかなどを学ぶことができた。その他には、障害者福祉センターのスタッフの方に講義をしていただいた。障害者福祉センターは一見、災害と関係と考える人もいると思うが、それは違う。障害のある人は１人で行動することが難しい。その方たちを介護する福祉センターで災害が起きた場合、どうやって避難させるかなどの話を聞くことができたのは、とても良い経験になったと私は思っている。私は、この３年間で災害について沢山学ぶことができた。しかしそれはまだ、ほんの一握りでしかないと思っている。日本だけではなく、世界各地で自然災害は起きている。過去の災害を学ぶだけでなく、これから起きると言われている災害についても学ばなければいけない。環境防災科を卒業してからも、防災・減災はもちろん、それ以外のことについても学んでいきたい。

（３） 東日本大震災被災地訪問

私は高校１年の夏に、東日本大震災の被災地である宮城県を訪問した。そこでは、津波の被害を受けた場所を歩いて、津波が襲ってきた当時の映像で状況を見比べながら街歩きをした。被災した街の電柱には津波の高さが書かれていた。その高さは想像をはるかに上回るものであり、この規模の津波が近い将来襲ってくると考えると、とても恐怖を感じた。また、大川小学校も訪問した。小学校の一部は津波によって破壊され、本当に小学校なのかと思うほど、被害を受けていた。生徒 78 名中 74 名と教職員 13 名中 10 名が亡くなった大川小学校では、震災発生から津波到達までの間に避難できる時間があり、大津波警報も発令されていたが、中々避難できず、結局発生から 40 分ほど経ってから避難を始めた。しかし津波が襲来しほとんどの方々が津波に飲み込まれた。その津波で娘さんを亡くされた佐藤敏郎先生に当時の状況を教えていただいた。この大川小学校での出来事は、東日本大震災の中でも忘れてはいけない出来事だと思った。そのほかに訪れた地域は、その当時の時点では、震災から７年経っていたが、東北の街並みはまだ元の姿には戻っていなかった。都市部のあたりは復興が着々と進んでいて元通りの街になりつつあった。しかし都市部から離れた街では、瓦礫などは無かったが建物などはあまり建っておらず更地のままの状態だった。現地に訪問するまでは、震災から復興して新しく生まれ変わった東北の街だと思っていた。しかし、それは大都市のみであって実際のところあまり復興が進んでいなかったというのが現地に行って感じたことだ。メディアでもその部分はあまり取り上げられておらず、復興していない地域が忘れられつつあるということも感じた。しかしそれ、実際に被災地に行った者にしかわかることができないと感じた。この東日本大震災被災地訪問は私の人生で忘れられない経験になるだろう。

４　夢と防災

私の夢は警察官になることだ。私は環境防災科に入学するまで、警察と災害にあまり密接な関係はないと思っていた。しかし、環境防災科で兵庫県警の講義を受けた時に災害と密接な関係にあるということが分かった。警察というのは、本来は地域の治安維持や防犯対策のために活動しているが、そのほかにも地域の防災対策や災害発生時の行動が重要になってくる。このことは、阪神・淡路大震災や東日本大震災の教訓から生まれたものである。私が警察官になりたいと思ったきっかけは中学生のときである。そのときは、テレビで警察官の活躍を見て、憧れていて漠然としたことしかわかっていなかったが、高校生になってから警察官について深く掘り下げていくにつれて、さらに強い憧れを抱くようになった。環境防災科の授業で警察官の災害時の活動を知り、これまでの考え方と変わったのがきっかけである。警察官になって災害時に活躍できる人材になることが、警察官になった後の私の夢である。環境防災科の 3 年間で得た災害に対する知識や防災・減災の大切さを今後も勉強を続けていき、災害時に先頭に立って活動していきたい。

５　これからの災害

これからの日本はさらに災害が増えていくと考えている。その中でも危惧されているのが「南海トラフ巨大地震」である。今後 30 年以内に発生する確率が 70%を超えている。このままの防災対策でいくと最悪の場合、死者、行方不明者が約 32 万人になると想定されている。対策をすると被害は少なくできる。そのためには備えが必要である。私は災害時に３つのことを大事にしたい。

１つ目は、率先避難者になることだ。率先避難者とは、大人や教師の指示を待つのではなく、真っ先に逃げることである。率先避難者になることは非常に難しいことだと私は思う。災害時には、誰にでも「自分なら助かる」や「そんなたいしたことはない」という正常性バイアスが働き、避難をすることをためらってしまうことがある。そのような正常性バイアスが働いた人に対して、私が「早く逃げろ」と言うことによって、周囲にいる人を救うことができるかもしれない。勇気を出して行動することが重要になる。

２つ目は、その状況で最善を尽くすことだ。「ここまで逃げれば大丈夫だろう」という考えを捨てて、逃げられる場所まで全力で逃げることが重要と思う。恐らく、高齢者や障害者などの災害弱者の体力的な問題が発生することが考えられる。その場合に、私たち高校生が率先して引っ張っていくことが重要になる。

３つ目は、想定にとらわれないことだ。ハザードマップは人の命を救うことはあるが過去の災害を参考にして作成されていることに注意しなければならない。災害には、「想定外」が多く発生する。そのためハザードマップだけを信じるのではなく、想定外のことが起こりうるということを考えて行動することが重要である。

私はこの３つを災害時に大切にしたい。もしかすると、行動をしたが、空振りになるかもしれない。しかし、空振りだからといって気にする必要はないと思う。私は何回も空振りすることより、ひとつの見逃しのほうが人間にとっては痛手だと思う。だから空振りなどを気にするよりも行動を起こすほうが重要であると考える。

６　最後に

私は生まれてから、阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震などといった大きな災害を受けたことがない。そのため、これまでに得た知識は、自分が感じたものではなく、他人からの体験談ばかりである。現実では考えられないような災害。目を背けたくなるような話も中にはあった。しかしそれは、災害を体験した方が忘れてほしくないという思いで話していただいたものである。経験された方にしか分かることのできない被災地の裏側やメディアでは取り上げられることのなかった話をこの３年間でたくさん聞くことができた。防災を３年間学んできたからといって、私に人が救えるのか、自分の命が守れるのかといわれると、正直わからない。しかし可能性がないわけではない。防災は日々の積み重ねが大事である。３年間学んできたことを自分の中だけおいて置くのでは全く意味がないと思う。それを、私たち高校生は風化させないために語り継いでいかなければいけない。いまの災害を経験していない人は自分が無事だからそれでいいと考えている。もちろん、それも大事なことであると思う。しかし、それではいざ自分に災害が来た時に対応しきれないと思う。「まさか自分に災害が来るなんて」と、災害を体験した人は言う。そのようなままでは何度も同じことを繰り返してしまうと思う。そのような被害を少しでも軽減するためにも、その人たちに災害の怖さを分かってもらい、今以上に防災が日本中、世界中に広まるようにしていくことが重要だと思う。今の日本の防災力では更なる被害の拡大が予想され

ている。そのような大惨事を防ぐためにも、私が環境防災科で学んだことを周りに伝え少しでも人の役に立ち、今後起こりうる災害での被害を減らしたい。この「語り継ぐ」というものは簡単なことではない。語り継ぐ者と語り継がれる者の互いの意思疎通がなければ続かない。そこでやめてしまえば、震災の歴史は風化してしまい、未来の世代の人たちは過去の経験をこれからの防災に活かすチャンスすら得ることができない。したがって、私たちは語り継いでいく必要がある。風化を防ぐことはこれからの世代の命をつなぐことだ。

備えを大切に　～防災・減災のためにできること～

吉川　哲矢

１　はじめに

阪神・淡路大震災は当時、戦後最悪の被害をもたらした大災害であり、多くの方々の尊い命が失われた。この地震では様々な教訓が生まれ、今もその教訓は受け継がれている。しかし、震災を経験していない世代が日に日に増え続けており、風化が懸念される。経験を風化させてしまうと、その教訓は活かされず同じ過ちを繰り返してしまうことになる。経験を風化させないためにも私たちが当時の経験を伺い、語り継いでいく必要があると考える。そこで私は両親に当時のことについて話を聞き、語り継いでいく。この「語り継ぐ」を通して少しでも防災、減災に興味関心を持ってもらうことができるよう伝えていきたい。

２　阪神・淡路大震災概要

名称　兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）
発生年月日　1995 年（平成７年）１月 17 日午前５時 46 分
震源地　淡路島北部（北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分）
震源の深さ　16 ㎞
規模　マグニチュード 7.3
死者　6434 名
行方不明者　３名
負傷者　43792 名（重傷　10683 名、軽傷　33109 名）
避難　（ピーク時）
避難所箇所数　599 箇所（平成７年１月 26 日）
避難人数　236899 名（平成７年１月 24 日）　（神戸市ホームページより）

他にも長田区で火災の発生や東灘区では高速道路の倒壊、ポートアイランドでは液状化現象、西宮市では地すべりが発生し多数の被害が発生した。特に被害の大きかった須磨区から西宮市の範囲は、震災の帯とも呼ばれている。また、被災地では震災発生から１年間で 137 万人、多い時で１日２万人がボランティア活動を行った。1995 年は被災者を支援するボランティア団体や NPO 法人が数多く生まれ、後に「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。

３　母の話

母は看護師として、神戸市内の救急病院で働いていた。当時の家は北区鈴蘭台にあり、２階建ての家で祖父、祖母と共に３人で生活していた。

（１）前日

前日に震度１の地震が数回発生した。そのときは「揺れているな」としか思っておらず、地震が神戸で起こるとは思ってもいなかった。

（２）当日

地震の日は家にいて、母だけ遊びに行くために早く起きており地震が起きたときは１階のトイレにいた。両親は２階で寝ていた。最初は地震とは思わず、トラックがぶつかったのかなと思っていた。揺れが収まり２階に上がり両親の安否確認を行った。２人ともパニックになっており、両親は衣装ケースで頭を打って少しけがを負った。その後１階に行き状況確認すると、洗面台がひっくり返り、ブラウン管テレビが下に落ちていた。幸い食器棚は横開きの物であったので大丈夫だった。そして台所に行き懐中電灯で照らしていると、周りの家の懐中電灯も見え、周りの人も無事だと分かり一安心した。ラジオを付けたが混乱していてあまり聞き取ることができなかった。しかし、そこで初めて地震が起きたのだと分かった。電気もつかず夜が明けるまで１階の台所で座っていた。夜が明け、明るくなると外に出た。外に出ると、屋根瓦が落ちていた。暖房を入れたかったがつかないので、食べ物を買いに行った。電気はその日のうちに復旧した。テレビをつけるとその光景に驚き、この世の終わりだと思った。テレビを見て、病院に行かなければと思ったが、電車も止まっていて車もなかったので移動手段がなかった。電話も通じないので公衆電話で西宮の親戚などに電話を掛けた。無事は確認できたが公衆電話の行列ができており、長く話すことができなかった。そしてデマもたくさん流れていた。当日は情報収集や周りの

人の安否確認をしたくらいだった。

（３） その後

２日目は水が出なかったので給水所に行った。そして病院から安否確認の電話がかかり、病院に来れそうか聞かれた。手段がなかったので病院には行かず、近くのパン屋に行き奪い合うようにしてパンを買った。1 月 19 日は病院に向かった。谷上までタクシーに乗り、谷上から北神急行で新神戸まで向かった。新神戸から先は動いていなかった。新神戸から歩き三宮などの変わり果てた姿を見ながら病院はどうなっているのか心配しながら、1 時間以上歩き病院にたどり着いた。電気はついていたが水は出ず、できる範囲で処置を行った。その日から２週間病院で寝泊まりをした。病院の待合室は近所の人が寝に来ていた。待合室には下に絨毯が敷いてあり避難所のようになっていた。患者も次々と運ばれてきた。忘れられないのが 72 時間生き埋めになっていた人が運ばれてきたことと、それより短い時間生き埋めになっていた人が運ばれてきたことだった。72 時間生き埋めになった人は助かったが、それより短かった人は助からなかった。話を聞くと、72 時間生き埋めだった人は家が土壁で布団の上から土に埋もれていたので圧迫されずに済んだそうだった。短時間生き埋めになっていた人は土壁ではなく圧迫され、クラッシュ症候群で亡くなってしまった。当時の医療はそこまでの知識がなく、圧迫をとった数時間後に亡くなってしまった。亡くなる前に水が飲みたいと言っていたが飲ますことができず、最後の願いを聞いてあげればよかったと後悔している。

（４） 当時を振り返り

振り返ると、ビスケットや乾パン、飴やキャラメルなどすぐ食べられる物があればよかったと思う。そして、テレホンカードや小銭なども役に立った。１番役に立ったのがお風呂の残り湯だった。残り湯は、水洗トイレの水流しや簡易の手洗いに役立った。

４　父の話

当時父は垂水区で暮らしていた。家は平屋建てで当時、祖母と２人で生活しており、車関係の仕事をしていた。

（１）地震が来るまで

特に地震の前兆のようなものは無かった。神戸で大地震がくるなど考えてもおらず、普段と変わらぬ生活をしていた。

（２）当日

とにかく音が凄く、最初は飛行機が墜落したのかと思った。寝ていたが立ち上がることもできないほどの縦揺れだった。縦揺れが収まったと思うと、横揺れが始まった。15 秒くらいの揺れだったが５分くらい揺れていたように感じた。屋根瓦がすべて落ち、ブロック塀や食器棚も倒れ、家の食器が全て割れてしまった。家の中もぐちゃぐちゃになっていたが、タンスは天井にほぼくっついており倒れなかった。地震の対策は何もしていなかった。隣の家の人は寝ているところにタンスが倒れてきたが、間に隙間ができていて助かった。どうすればいいか分からず、避難はしなかった。家は半壊で罹災証明をもらった。その後、家の修理をした。壁は自らセメントなどで直し、屋根瓦が落ちたので、ブルーシートを買いに行ったがなかなか見つからず、最終的には西脇までオートバイで買いに行った。電気は止まることなかったが、水道は止まった。すぐに復旧したが最初は赤い水しか出なかった。ガスは垂水が一番遅く、半年近くかかった。震度１程度の揺れは２、３分おきに発生し、１日で 200、300 回ほど揺れた。道が大渋滞し、国道２号線も止まっていた。風呂は２週間ほど入れなかった。入りたかったが、冬で汗をかかずに済んだ。

（３）当時を振り返り

周りの家よりも自分の家が一番被害が大きかった。そして、強い余震がなかったことと雨が降らなかったことがよかった。もし強い余震や雨が降っていたら危なかったかもしれない。そして、カセットボンベの大切さを痛感した。

５　話を聞いて

私はこれまで両親から阪神・淡路大震災について、これほど詳しく話を聞いていなかったので今回の「語り継ぐ」を通して当時の話を聞くことができてよかった。そして今回、話をしてもらえたことに感謝したい。今回の話で改めて災害の恐ろしさ被害の大きさを痛感した。環境防災科での授業や講義では、ライフライン系や公安系のものが多かったが、今回は家での体験談であったので、より自分事のように感じ当時の状況が鮮明に伝わってきた。話を通して、被害が少ないといわれていた地域でも、話を聞いてい

るととても強い地震だったのだなと感じた。そして公衆電話の場所やかけ方なども確認し、テレホンカードは常に所持するよう心掛けたい。そして両親に再び辛い思いをしてほしくないという思いが込み上げてきたので、辛い思いをさせないように、私から積極的に備えをしていきたい。今回の話をきっかけに、家の防災対策や備蓄の確認、家族会議などを定期的に行っていき、これからの災害に備えていきたい。そしてこれからも阪神・淡路大震災についての話を定期的に聞いていき、将来の夢にも生かしていきたい。

６　環境防災科での学び

私は何か人の役に立ちたい、そして環境防災科での学びを生かして将来地域に貢献していきたいと思い環境防災科に入学した。環境防災科で学んだ３年間を通して本当に貴重な体験をさせていただいた。授業では様々な自然災害のメカニズム、過去の災害やその教訓、災害時の心のケアなどの勉強や出前授業をさせていただいた。講義では幅広い分野の方からお話を伺うことができ、ボランティア活動などを通じそこで学んだ知識を伝えることができた。そして何よりもボランティア活動の体験がとても大きかった。私は地域の祭りの運営や防災訓練、出前授業や募金活動など様々な貴重な活動に参加させていただいた。ボランティア活動では支援者としての在り方や自分からできることを見つけること、１人ひとりと向き合うことの大切さや向き合い方など様々な知識を教わった。そしてボランティアはしてあげる、ではなく、させていただくということが大切だと学ぶことができ、物の見方や考え方が変化し様々な視点からボランティア活動や防災を考えることができるようになった。環境防災科での３年間はとても濃い内容だった。防災の知識だけでなく支援者としての在り方、災害時の心理、プレゼンテーション能力など様々な技能を身につけることができ、１人の人間としてとても成長することができたと感じている。今では環境防災科に入学できたことを誇りに思い、入学して良かったと心の底から思っている。ここでの学びは一生の財産となった。そしてこれらの貴重な体験をここで終わらせず、これから発展させていき大人になっても環境防災科での学びを活かして、これからの人生を充実したものにしていきたい。

７　私にできること

（１） 今

私が今できることは、語り継ぐことと防災や災害に関する知識の勉強、復習をすることだ。今回の「語り継ぐ」だけでなく、近隣の人々との会話や周りの知人に過去の教訓などを伝えていくことを通して、幅広い世代へ防災や災害について興味を持ってもらえるきっかけになると考える。そして、語り継いでいくためには防災や災害の知識が必要になる。防災は誤った情報や知識を教えてしまうと取り返しのつかない事態に陥ってしまう。誤った情報を教えないためにももう一度知識の勉強や復習を行い、正しい情報を教えられるようにしていきたい。そして今一度家の危険な箇所を確認し、家具の固定や避難経路の確認、そして家の周辺だけでなく学校の周辺や通学路のハザードマップの確認を平常時から定期的に行い、どこで災害が発生しても落ち着いて避難行動がとれるように備えておきたい。

（２） 将来

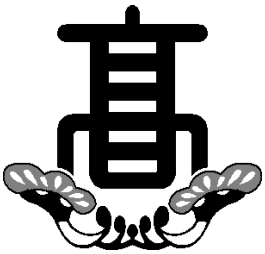
将来できる防災の取り組みは、自助、共助の大切さを伝える取り組みだ。私の夢は自治体の職員として地域防災やまちづくり関係に携わる仕事に就くことだ。きっかけは環境防災科での学びを活かし、地域をより良いものにしたい、地域に貢献していきたいと思うようになったことと地域防災リーダーを担当し、そこで学んだことをアウトプットしていきたいと思ったからだ。環境防災科での授業や講義、ボランティア活動などを通して自助、共助、公助が大切だと分かった。しかし公助には限界があり、南海トラフ巨大地震など被害が広域になる災害では公助が行き届かない。そのため、自助、共助の大切さ伝える取り組みをイベントや地域の防災訓練などで伝えていきたい。そして防災に関心を持ってもらえるような対策、まちづくりをしていきたい。これらの取り組みなどを様々な世代に知ってもらえるよう、地域新聞やSNS を通じて伝えていきたい。ここで注意したいことが、デマだ。SNS での伝え方はデマが懸念され、デマが拡散されると混乱が生じてしまう。混乱を生じさせないためにも自治体が正確な情報を発信できるような環境を作っていきたい。自治体の仕事は普段できないことは非常時においてもできない。また空振りは許されるが見逃しや失敗は許されない仕事である。取り返しのつかない事態に陥らないようにするためにも、情報収集を迅速に行い、判断を迫られた時には最悪を想定した行動や判断を決断し、情報発信をしていきたい。私が考える自治体の役割は、そこに住む人々の生活を支えることだと考える。生活を支えていくためにも、これらを駆使して最終的に災害に強いまち、災害に強いコミュニティにしていき、活躍していきたい。

８　これからの災害に備えて

近年、自然災害がもたらす被害は甚大になってきており、自然災害の頻度も増加傾向にある。また、日本社会も少子高齢化に伴う人口の減少などで、社会は脆弱になってきている。このような日本社会において災害が発生すると、被害の拡大につながりかねない。また、災害と同時に感染症の拡大等も懸念され、避難所へ行くべきかの是非も考えなければならない。このような社会において大切になるのが、若者の力だ。これからは私たちのような若者が高齢者を支えていかなければならない。若者が地域の高齢者を助けることや支援することが、減災にもつながってくると考える。そのため、少しでも多くの若者の防災意識を高めていくために、同世代の私たちから知人などに伝えていきたい。しかし、防災を教えることは簡単なことではない。なぜなら、防災は命に直結するからだ。誤った情報を教えてしまうと取り返しのつかない事態に陥ってしまう。根拠のない情報を教えない、正しい情報を正確に伝えるということを大切にして伝えていきたい。そして１人ひとりの備えも大切だ。被害が広範囲に及ぶ災害などが発生すると、物資などが行き届かなくなり公助も行き届かなくなる。そのため、１人ひとりが正しく備えることが求められている。自助のように自分の命は自分で守り、必要なものは自分で備え、自分には必要だと思うもの（眼鏡やコンタクトレンズなど）も備えることが大切になってくる。災害に備えるためにもまずは日常生活の見直しを行い、私たちにできることから取り組んでいくことが大切になってくると考える。そして災害が発生した時のシミュレーションを普段から行い、複数の災害に対する備えや避難所への避難経路や避難所の数を複数持つことも重要になってくる。災害時パニックに陥らないようにするためにも最大限の備えが必要だ。

９　最後に

今回の「語り継ぐ」を通して改めて阪神・淡路大震災について学ぶことができ、自分についてももう一度見つめなおすことができた。そして私が知らなかったことなどもいくつかあり、自分の知識不足についても実感することができた。災害時はライフラインや飲食など当たり前のような生活を送ることができない。現在も感染症の影響で生活様式が変化し慣れない日々、不安な日々が続いている。だからこそ１日１日を大切に、日々目標をもって悔いのないように生活していきたい。そして災害はいつどこで発生するか分からない。大切な人の命を守るためにも、環境防災科で学んだ３年間のことを生かしてこれからの人生を歩んでいきたい。これからも仕事だけでなく、ボランティア活動などを通して、積極的に活動していきたい。そして、これからも阪神・淡路大震災の体験談を様々な方から伺い語り継いでいき、これからやって来る自然災害に対する意識を高め、被害を減らすことができるよう努力していきたい。



兵庫県立舞子高等学校

〒655－0004　神戸市垂水区学が丘３丁目２番

Tel：078－783－5151　Fax：078－783－5152